

第190図 2号方形周溝墓

3号方形周溝墓 (第191・192図, PL. 51・52・139)

位置 Cl-25~27, Cm-24~27, Cn-24~27, Co-25・26グリッドにかけて検出された。2号方形周溝墓の南西約9mの所に位置している。

重複 新しい溝によって一部壊されている。

形状 長軸を南北にもち、方台部および周溝を含めた全形は、長方形を呈する。方台部は長辺14m、短辺8mで、全形は長辺13.9m、短辺11.8mを測る。

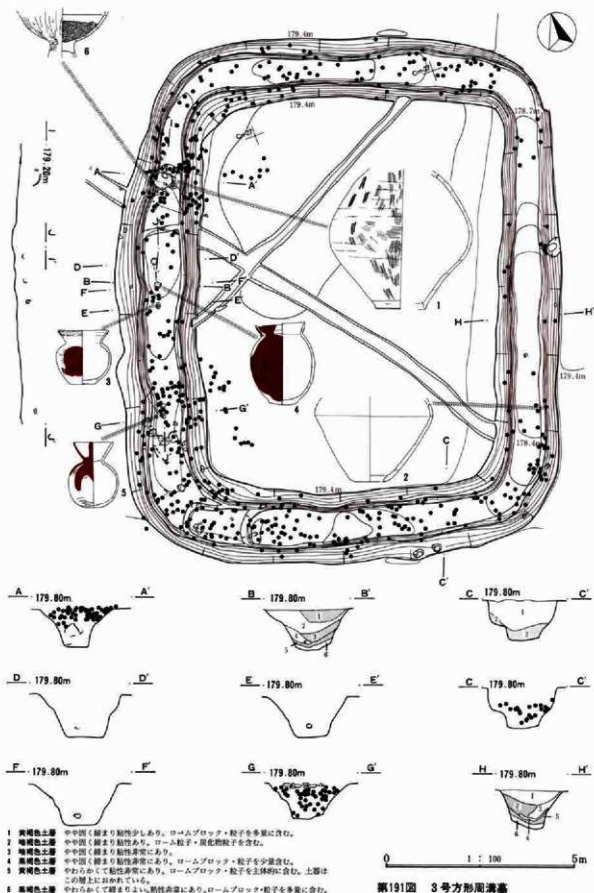
面積 方台部は79.5㎡、全形は149.1㎡である。

方位 N-21°-E。

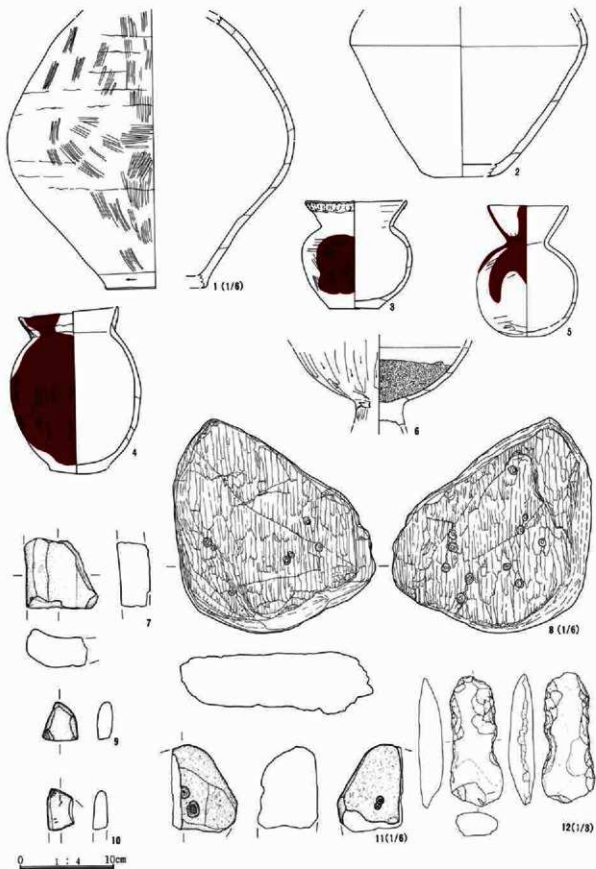
主体部 検出できなかった。

周溝 上幅120~220cm、下幅50~110cm、深さ90~110cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周している。

遺物 西溝から口縁部を欠損した壺が伏せられた状態で出土した。さらに小型土器も出土。また溝覆土中からは縄文前期から中期土器片1383点、弥生土器片46点、石器・剝片・礫等56点が出土している。



第191図 3号方形周溝墓



第192图 3号方形周溝墓出土遺物

1号方形周溝墓遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況			
192-1 139	甕	②44.0 ③16.4	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調はほぼ黄褐色	外 ミガキ、輪積み痕が残る。 内 荒れている。	西溝	胴上半から口縁 底面欠損			
192-2 139	甕	②16.8 ③8.0	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調はほぼ赤褐色	外 丁寧なミガキ。 内 ミガキ、割落している。	東溝	胴部1/2			
192-3 139	甕	②10.8 ③11.4③5.2	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調は明赤褐色	外 折り返し口縁、ナデ、赤色塗 彩。内 ナデ、ミガキ。	西溝中央	完形			
192-4 139	甕	②10.4 ③17.1③6.0	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調は明赤褐色	外 口縁部に輪積み痕、赤色塗 彩。内 ナデ。	西溝中央	完形			
192-5 139	甕	②8.3 ③13.8③4.0	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面に黄褐色 内面に褐灰色	外 ナデ、ミガキ、赤色塗 彩。内 ミガキ、輪積み痕が残る。	西溝	ほぼ完形			
192-6 139	高坏	②9.0	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面の色調はほぼ黄褐色	外 ナデ。 内 ミガキ、炭化物が付着。	西溝	坏部1/2			
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm, g)			特 徴	出土状況	
192-7 139	石皿 (編文)	部分	砂岩	全長	幅	厚	重量		
				(11.5)	(11.1)	4.7	(962)	片面に浅い磨面が認められる。	周溝内
192-8 139	多孔石 (編文)	完形	胡堂母石置片 岩	31.8	30.6	9.9	14,350	両面に16個の凹み穴が認められる。	周溝内
192-9 139	礫石	1/2	砂岩	(4.1)	(3.7)	1.5	(23)	使用面は3面認められる。	周溝内
192-10 139	礫石	2/3	砂岩	(4.4)	(2.8)	1.5	(22)	使用面は両面認められる。	周溝内
192-11 139	多孔石 (編文)	1/2	安山岩	(13.4)	(10.3)	9.2	(2,048)	両面に計4個の凹み穴が認められる。	周溝内
192-12 139	打製石片	完形	熱変成岩	10.1	4.2	2.0	94.6	楕型	周溝内

4号方形周溝墓 (第193・194図, PL. 53・54・140)

位置 D1-28, Dm-27~29, Dn-27~30, Do-27~29
グリッドにかけて検出された。5号方形周溝墓の南
約1mの所に位置している。

重複 新しい溝によって一部壊されている。

形状 長軸を南北にもち、方台部および周溝を含
めた全形は、ほぼ正方形を呈する。方台部は長辺9
m、短辺8.5mで、全形は長辺12.5m、短辺12mを測
る。

面積 方台部は81.6m²、全形は126.7m²である。

方位 N-11°-E。

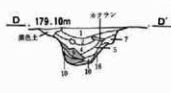
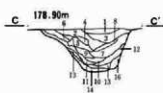
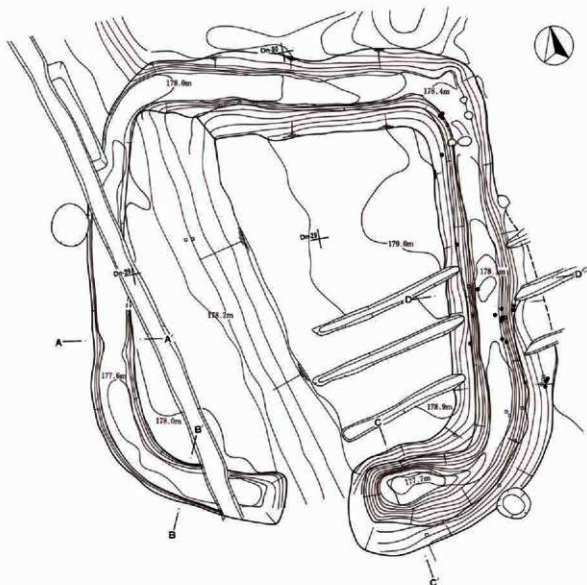
主体部 検出できなかった。

周溝 上幅60~270cm、下幅20~90cm、深さ25~110
cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周せず、
南溝中央で途切れている。

遺物 溝覆土中からは縄文中期土器片66点、弥生
土器片40点、礫50点等が出土している。

4号方形周溝墓遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況			
194-1 140	直口甕	②10.0 ③16.4③4.0	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面に黄褐色 内面褐灰色	外 ミガキ、底面は磨耗。 内 ミガキ。	周溝内	ほぼ完形			
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm, g)			特 徴	出土状況	
194-2 140	打製石片	完形	熱変成岩	9.9	3.8	1.6	59.5	短冊型。	周溝内
194-3 140	打製石片	刃部欠損	熱変成岩	(10.5)	5.2	2.4	(111.4)	楕型。	周溝内
194-4 140	礫石	1/3	砂岩	(3.5)	(4.6)	1.1	(20)	使用面は両面に認められる。	周溝内



- 1 黒褐色土層 やや固く締まり粘性あり。
- 2 黒褐色土層 やや固く締まり粘性あり。
- 3 黒褐色土層 ローム粒子を少量含む。
- 4・5 暗褐色土層 6～12 茶褐色土層 ローム粒子を含む。
- 13～16 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を含む。

0 1 : 100 5m

第193図 4号方形周溝墓



第194図 4号方形周溝墓出土遺物

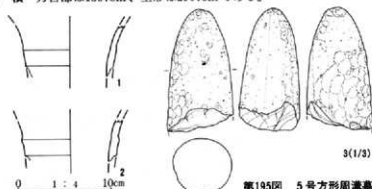
5号方形周溝墓 (第195・196図, PL.53・55・140)

位置 D1-30~33, Dm-30~33, Dn-30~34, Do-30~34, Dp-31・32グリッドにかけて検出された。10号方形周溝墓の南西約2.5mの所に位置している。

重複 新しい溝によって一部壊されている。

形状 長軸を東西にもち、方台部および周溝を含めた全形は、ほぼ正方形を呈する。方台部は長辺12.5m、短辺12mで、全形は長辺18m、短辺17mを測る。

面積 方台部は136.8㎡、全形は290.3㎡である。



第195図 5号方形周溝墓出土遺物

5号方形周溝墓遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	底・整形技法の特徴	出土状況	残存状況		
195-1 140		②5.3	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調はよい黄棕色	外 横ナデ。 内 ナデ。	周溝内	部分		
195-2 140		②4.4	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調はよい黄棕色	外 横ナデ。 内 ナデ。	周溝内	1・2は同一個体		
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)		特徴	出土状況	
195-3	磨製石斧	刃部欠損	輝岩	(9.6)	5.2 4.7	(316.1)	敲打段階	周溝内

6号方形周溝墓 (第197・198図, PL.56)

位置 Dh-33, Di-31~34, Dj-31~34, Dk-32・33グリッドにかけて検出された。10号方形周溝墓の東南約1.5mの所に位置している。

方位 N-68°-W。

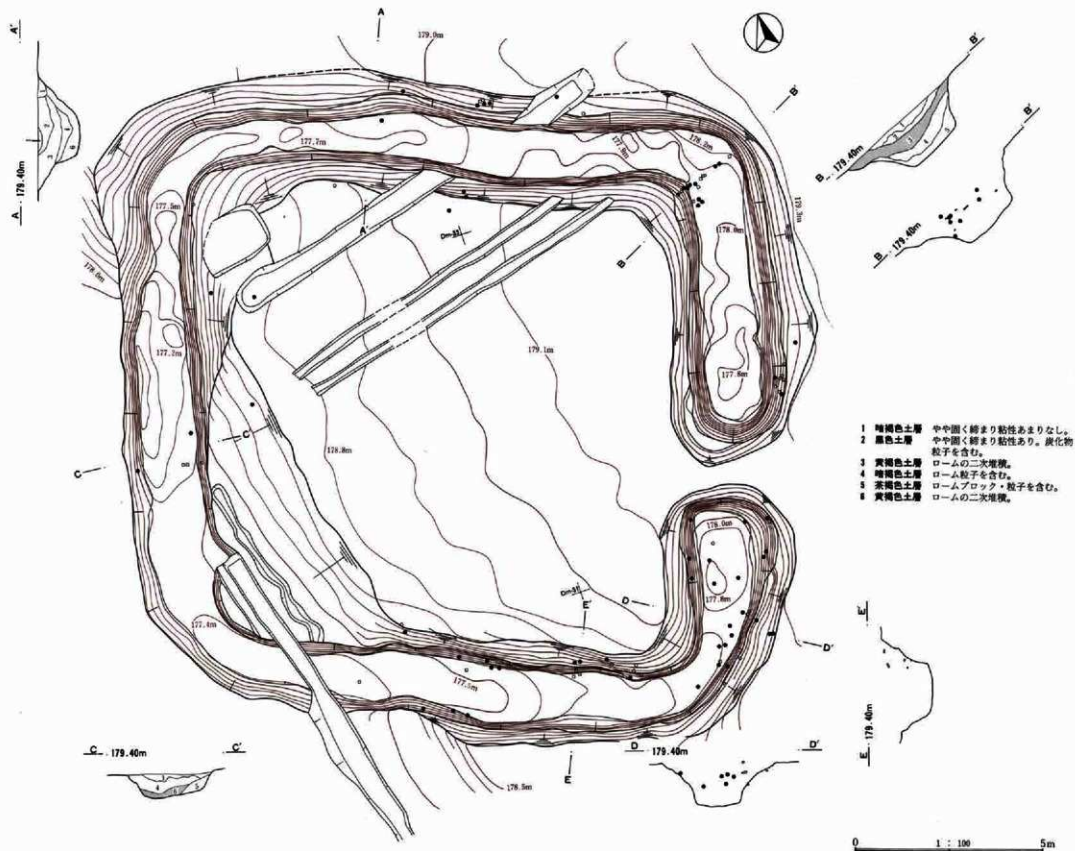
主体部 検出できなかった。

周溝 上幅150~380cm、下幅60~150cm、深さ65~120cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周せずに、東溝中央やや南側で途切れている。

遺物 溝覆土中からは縄文前期から中期土器片96点、弥生土器片40点、石器・剝片・礫等21点等が出土している。

重複 北西コーナーを13号墳周堀によって壊されている。

形状 長軸を南北にもち、方台部および周溝を含めた全形は、ほぼ正方形を呈する。方台部は長辺9



第196図 5号方形陶溝窯

m、短辺8.5mで、全形は長辺11.8m、短辺11.5mを測る。

面積 方台部は74.4㎡、全形は123.8㎡である。

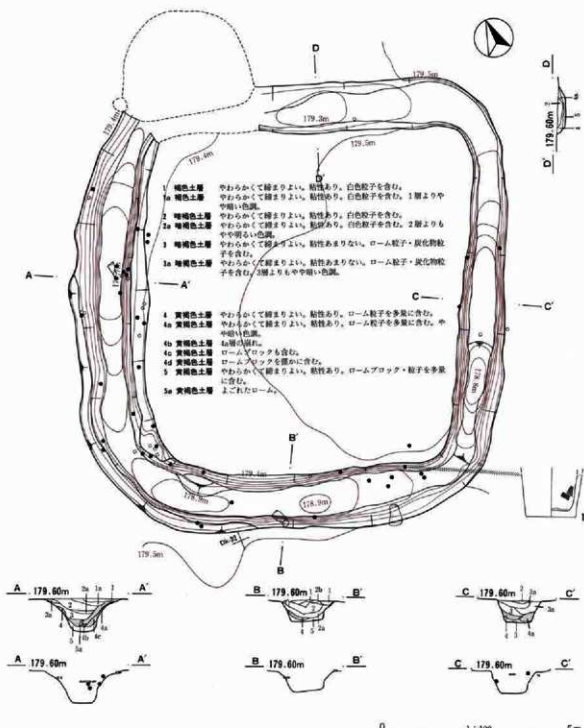
方位 N-26°-E。

主体部 検出できなかった。

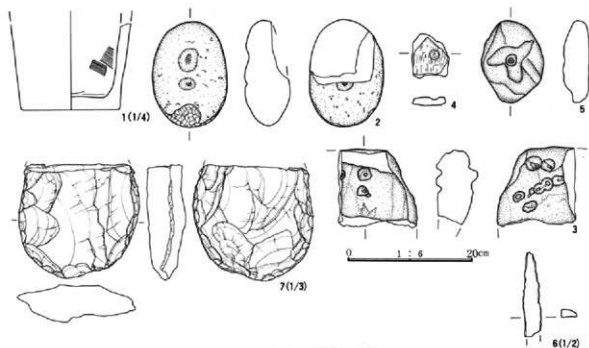
周溝 上幅80~200cm、下幅40~90cm、深さ22~90

cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周している。

遺物 溝覆土中からは縄文前期から中期土器片86点、弥生土器片41点、石器・剥片・鏢33点等が出土している。



第197図 6号方形周溝墓



第198図 6号方形周溝墓出土遺物

6号方形周溝墓遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
198-1 140	深鉢(縄文 中期前半)	②9.1 ③10.4	①中粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調は赤褐色	外 ナデ、ミガキ、底面は磨耗。 内 横方向の調整。	南溝	底部
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
198-2 140	凹石 (縄文)	2/3	安山岩	16.0 11.2 7.0 (500)	周面に計3個の浅い凹みが認められる。 先端に敲打痕。	周溝内
198-3 140	石皿 (縄文)	1/3	砂岩	(12.2) (12.5) 6.5 (1,243)	周面に計10個の凹み穴が認められる。 片面に浅い磨面が認められる。	周溝内
198-4 140	多孔石 (縄文)	部分	網罟母石黒 緑泥片岩	(7.0) (6.1) (1.3) (87)	片面に1個の凹み穴が認められる。 焼けている。	周溝内
198-5 140	凹石 (縄文)	完形	砂岩	13.2 10.1 4.2 621	片面に1個の浅い凹みが認められる。	周溝内
198-6 140	鉄製品	部分		(4.5) 0.9 0.4 (2.9)		周溝内
198-7 140	打製石斧	刃部	粘板岩	(12.6) 13.6 4.4 (274)	裏面刃部に磨滅が見られる。	周溝内

7号方形周溝墓 (第199図、PL 56)

位置 Dh-29~31、Di-29~31、Dj-29~31グリッドにかけて検出された。6号方形周溝墓の東南約1.5mの所に位置している。

重複 9号墳の周堀によって西溝を壊されている。

形状 長軸を東西にもち、方台部および周溝を含めた全形は、方形を呈する。方台部は推定長辺9.8m、短辺8.8mで、全形は推定長辺13m、短辺11.2mを測る。

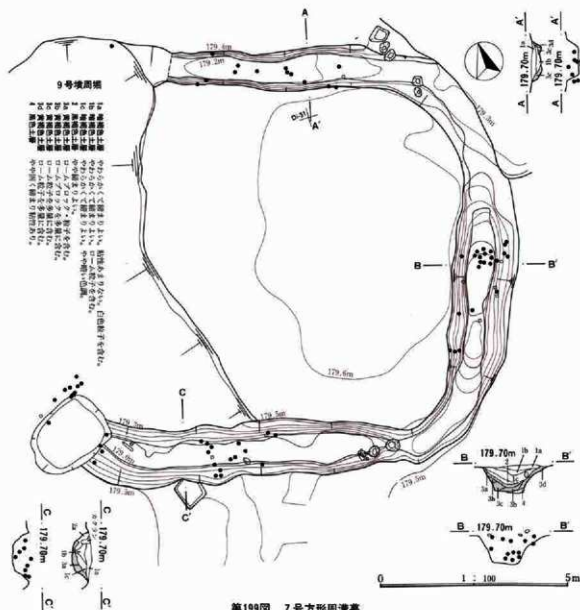
面積 方台部は83㎡、全形は131㎡である。

方位 N-70°-W。

主体部 検出できなかった。

周溝 上幅80~190cm、下幅30~140cm、深さ30~80cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周していたと考えられる。

遺物 溝覆土中からは縄文前期から中期土器片19点、弥生土器片43点、石器・銅片8点等が出土している。



第199図 7号方形周溝墓

8号方形周溝墓 (第200図、PL.57・140)

位置 Dg・25・26、Dh・25・26グリッドにかけて検出された。9号方形周溝墓の東約12mの所に位置している。

重複 5号墳周溝によって西溝を壊されている。

形状 方台部は現状で長辺6.5m、短辺5mで、全形は長辺9m、短辺6.5mを測る。

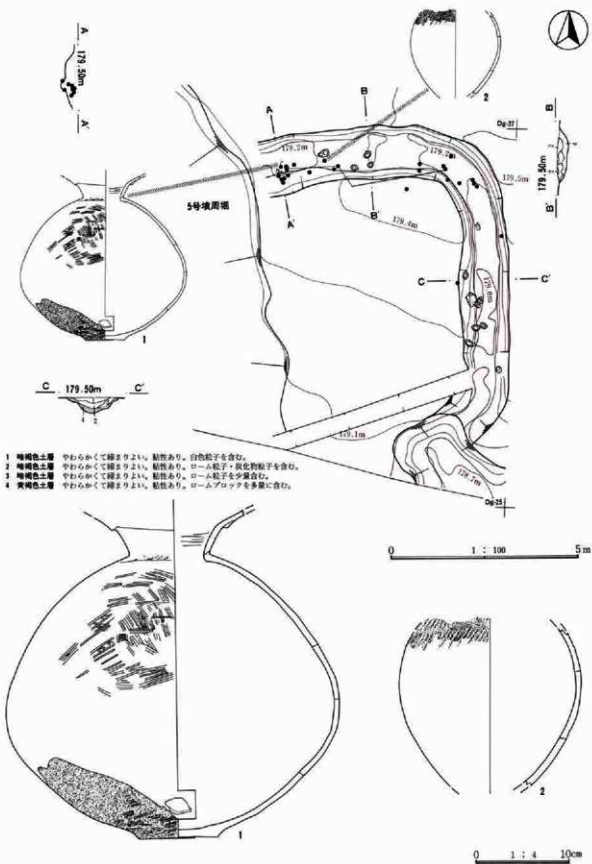
面積 現状での方台部は32.9㎡、全形は54㎡であ

る。

主体部 検出できなかった。

周溝 上幅110～150cm、下幅30～100cm、深さ25～40cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周していたものか判然としない。

遺物 北溝底面から壺が出土している。また覆土中からは縄文前期から中期土器片16点、弥生土器片17点、礫・剥片等4点が出土している。



第200図 8号方形周溝墓

8号方形周溝墓遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
200-1 140	甕	②34.5 ③8.4	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面にふい赤褐色 内面灰褐色	二重口縁。胴部外面ハケズ、ミガキ。	北溝	口縁部一部欠損 胴下部に穿孔
200-2 140	甕	②16.6	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調にふい黄褐色	内面ナデ。胴部外面ミガキ。縄文施文、胴体はシほ横紋がし。	北溝	胴部片

8号方形周溝墓 (第201・202図, PL.57・140)

位置 Dj-25・26、Dk-25~27、Dl-26・27、Dm-26・27グリッドにかけて検出された。4号方形周溝墓の東南約1mの所に位置している。

重複 5号墳周堀によって北東コーナーを壊されている。

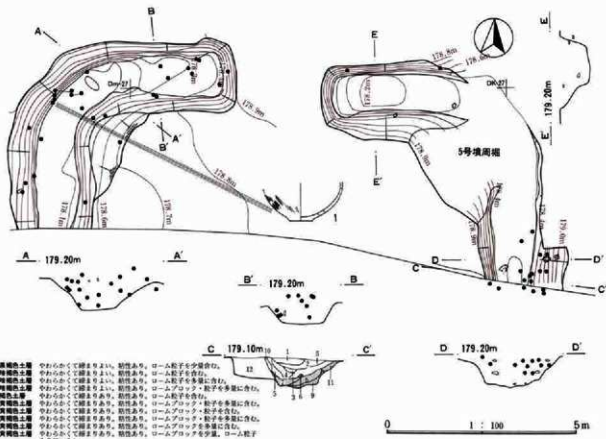
形状 路線外に遺構が延びているために完掘することができなかった。現状では方台部は長辺10.2m、短辺2.9mで、全形は長辺14.5m、短辺5.3mを測る。

面積 現状での方台部は30.1㎡、全形は67.6㎡である。

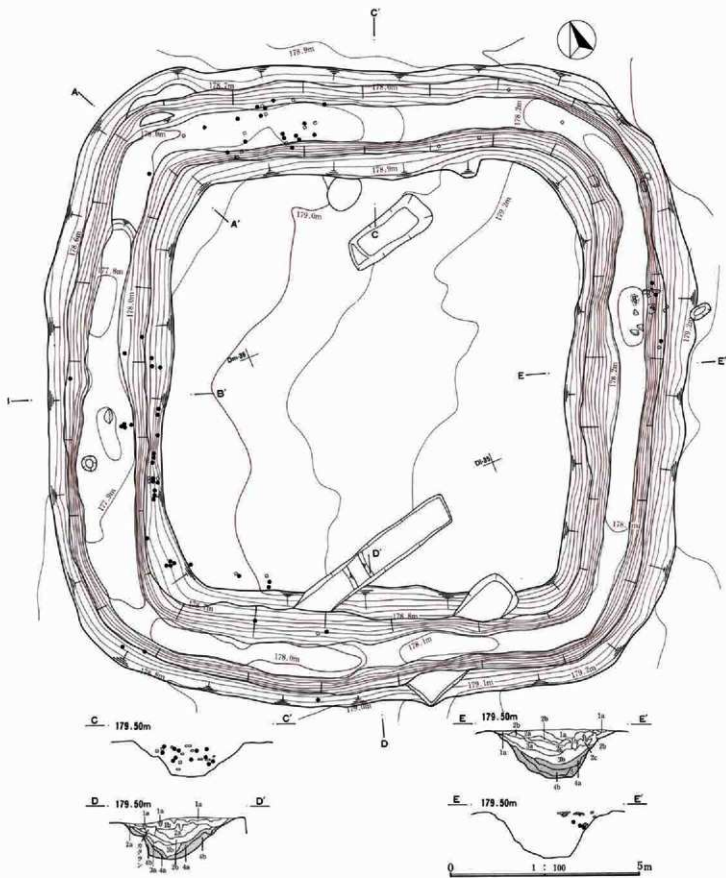
主体部 検出できなかった。

周溝 上幅250~330cm、下幅45~160cm、深さ85~130cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は北溝中央で途切れている。

遺物 溝覆土中からは縄文前期から中期土器片36点、弥生土器片61点、礎・剝片等36点が出土している。



第201図 8号方形周溝墓



第204图 10号方形周溝墓

11号方形周溝墓 (第205図, PL. 59)

位置 Dm-38~40, Dn-38~40, Do-38~40グリッドにかけて検出された。12号方形周溝墓の北西約5mの所に位置している。

重複 11号墳周堀によって南溝を壊されている。
形状 長軸を東西にもち、方台部および周溝を含めた全形は、ほぼ正方形を呈する。方台部は長辺7.7m、短辺7.5mで、全形は長辺10m、短辺9.5mを測る。

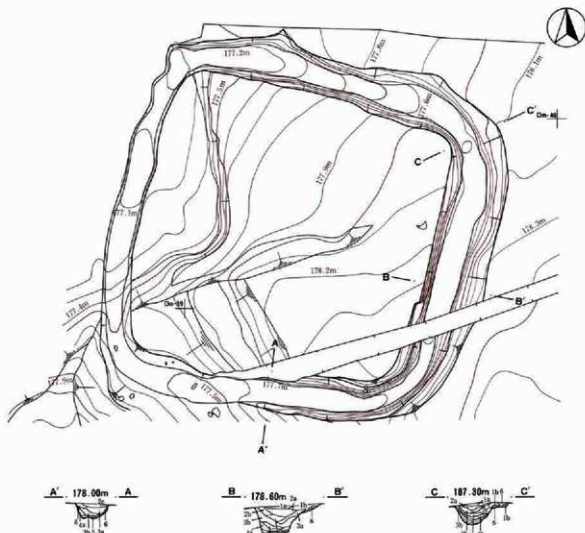
面積 方台部は55.8㎡、全形は89.6㎡である。

方位 N-80°-W。

主体部 検出できなかった。

周溝 上幅50~160cm、下幅30~75cm、深さ40~70cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周している。

遺物 溝覆土中からは縄文土器片2点、弥生土器片2点等が出土しているだけである。



- 1a. 溝底土層 やわらかくて硬まりない。砂質あり。白色砂子を含有。
- 1b. 溝底土層 やわらかくて硬まりない。砂質あり。白色砂子を含有。
- 2a. 溝壁土層 1a層上りも同じ色調。
- 2b. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2c. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2d. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2e. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2f. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2g. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2h. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2i. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2j. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2k. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2l. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2m. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2n. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2o. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2p. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2q. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2r. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2s. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2t. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2u. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2v. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2w. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2x. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2y. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 2z. 溝壁土層 やや中堅り砂質あり。白色砂子・炭化植物子を含有。
- 3. 溝壁土層 固く硬まり砂質あり。3a-3cを多量に含有。

0 1 : 100 5m

第205図 11号方形周溝墓

12号方形周溝墓 (第206~208図, PL. 59 - 140)

位置 Dh-38・39、Di-36~40、Dj-36~40、Dk-37~40、Dl-37~39グリッドにかけて検出された。10号方形周溝墓の北東約60cmの所に位置している。

重複 Y-31号住居跡を壊している。

形状 長軸を東西にもち、方台部および周溝を含めた全形は、ほぼ正方形を呈する。方台部は長辺12.3m、短辺11.5mで、全形は長辺17.7m、短辺17.5mを測る。

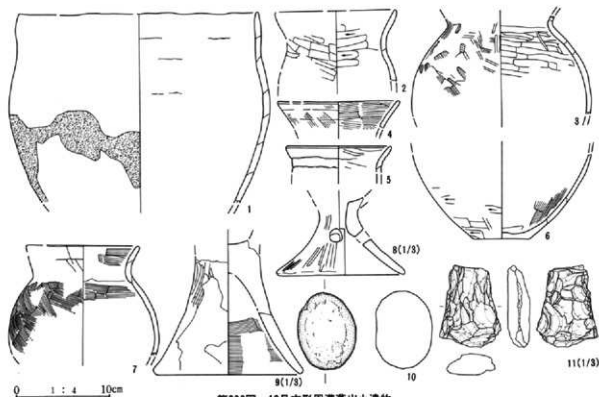
面積 方台部は128.6㎡、全形は283.9㎡である。

方位 N-69°-W。

主体部 検出できなかった。

周溝 上幅260~390cm、下幅45~190cm、深さ80~135cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周している。

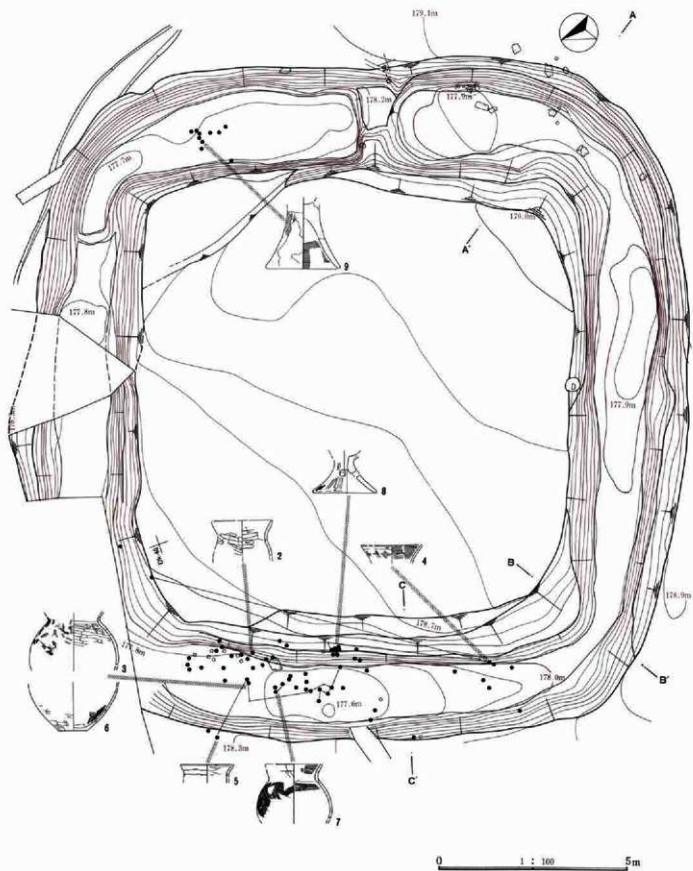
遺物 西溝覆土中から第206図の土器が出土している。また縄文前期から中期の土器片110点、弥生土器片165点、礫・刺片等39点も出土している。



第206図 12号方形周溝墓出土遺物

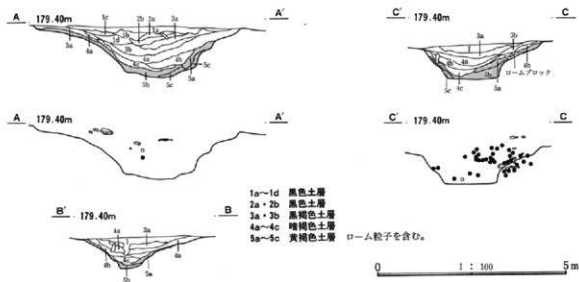
12号方形周溝墓遺物観察表 (①口縁 ②器底 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
206-1 140	甕	①25.4 ②20.1	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面の色調はにぶい褐色 内面はにぶい黄褐色	外 ミガキ、炭化物付着。 内 ナデ、ミガキ、輪痕も残る。	周溝内	口縁部1/3
206-2 140	甕	①12.8 ②7.5	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調はにぶい褐色	外 ミガキ。 内 ハケメ、ミガキ。	西溝	口縁部1/3
206-3 140	甕	③10.6	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調はにぶい黄褐色	外 ハケメ、ミガキ。 内 ハケメ。	西溝	胴部片
206-4 140	甕	①12.9 ②2.9	①細粒の砂を混入 ②良 ③内外面の色調はにぶい褐色	外 ハケメ、ナデ。 内 ハケメ。	西溝	口縁部1/2



第207図 12号方形周溝墓

(1) 方形周溝墓



第208図 12号方形周溝墓

12号方形周溝墓遺物観察表 (①口徑 ②高さ ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
			①胎土	②焼成	③色調			
206-5 140	壺	①11.4	①細粒の砂を混入	②良	③内外面の色調はよい藍色	外 口縁部に輪横み痕、ナデ。 内 ナデ。	西溝	口縁部3/4
		②2.8						
206-6 140	壺	①9.0	①細粒の砂を混入	②良	③外面色調は褐色色 内面はよい黄褐色	外 ナデ、ミガキ、底面は磨耗。 内 ハケメ、ミガキ。	西溝	底部全周
		②5.8						
206-7 140	壺	①15.0	①細粒の砂を混入	②良	③内外面の色調はよい藍色	外 口縁部に輪横み痕、ナデ、ハケメ。 内 ナデ、ハケメ。	西溝	口縁部1/2
		②11.5						
206-8 140	甗台	①6.2	①細粒の砂を混入	②良	③内外面の色調はよい黄褐色	外 ミガキ、脚部に円孔3個。 内 ナデ。	西溝	脚部全周
		②10.3						
206-9 140	高坏	①10.6	①細粒の砂を混入	②良	③内外面の色調は明赤褐色	外 ミガキ。 内 ハケメ、ミガキ。	東溝	脚部1/2
		②11.5						
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況
				全長	幅	厚 重量		
206-10 140	磨石 (縄文)	完形	安山岩	11.8	9.0	8.2 405	全面に磨耗痕が認められる。	周溝内
206-11	打製石斧	基部・刃部 欠損	熱変成岩	(6.4)	4.8	1.7 (58.0)	撥型。	周溝内

13号方形周溝墓 (第209図、PL-60)

位置 Dn-36・37、Do-36・37グリッドにかけて検出された。10号方形周溝墓の北西約1.5mの所に位置している。

重複 11号墳周堀によって北溝を壊されている。

形状 長軸を南北にもち、方台部および周溝を含めた全形は、ほぼ正方形を呈すると考えられる。方台部は現状で長辺4.5m、短辺4mで、全形は長辺(5.5)

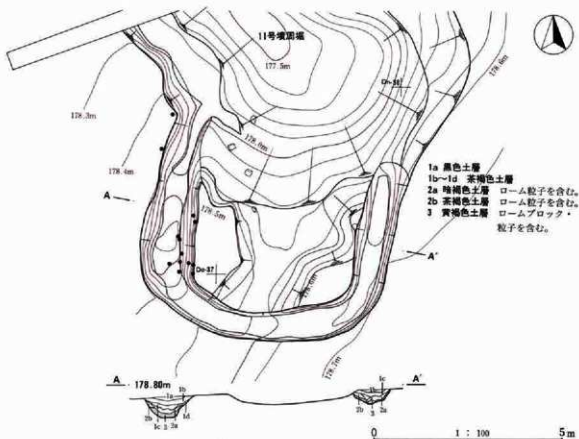
m、短辺6.5mを測る。

面積 現状では方台部は12.4m²、全形は25.5m²である。

主体部 検出できなかった。

周溝 上幅70~140cm、下幅20~70cm、深さ40~55cmを測る。断面はU字形を呈する。

遺物 溝覆土中からは縄文中期土器片1点、弥生土器片4点、磯・刺片等3点出土している。



第209図 13号方形周溝墓

14号方形周溝墓 (第210図、PL.68)

位置 Da-32・33、Db-31~34、Dc-31~34、Dd-32・33グリッドにかけて検出された。6号方形周溝墓の東約21.5mの所に位置している。

重複 Y-27・38号住居跡を壊し、3号墳周堀によって西溝を壊されている。

形状 長軸を東西にもち、方台部および周溝を含めた全形は、正方形を呈する。方台部は一辺9m、全形は長辺12.5m、短辺12.2mを測る。

面積 方台部は82.9㎡、全形は136.6㎡である。

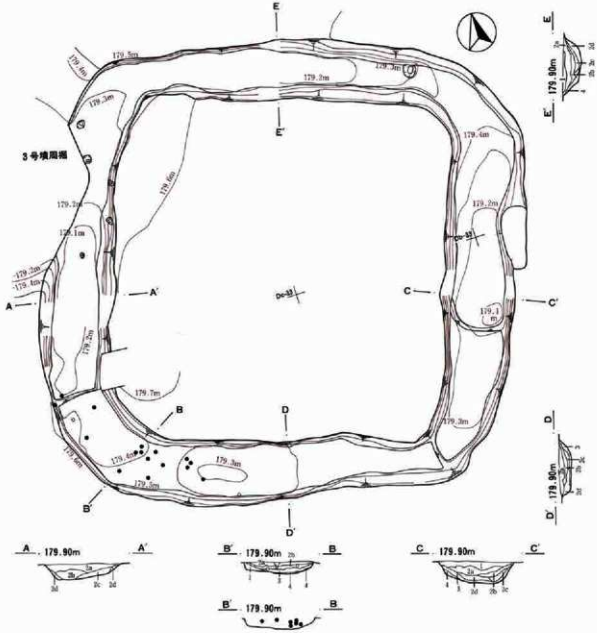
方位 N-73°-W。

主体部 検出できなかった。

周溝 上幅100~210cm、下幅60~140cm、深さ30~55cmを測る。断面はU字形を呈する。溝は全周している。

遺物 溝覆土中からは縄文前期から中期土器片8点、弥生土器片15点、鏃・剝片等3点が出土している。

(1) 方形周溝基



- 1 黒褐色土層 白色粒子を含む。
- 2a-2d 暗褐色土層
- 3 暗褐色土層 ロームブロックを含む。
- 4 黄褐色土層 ロームの流れ込み。

0 1 : 100 5 m

第210図 14号方形周溝基

4章 古墳・奈良・平安
時代の遺構と遺物

(2) 古墳



1号墳

〔2〕

古墳

1935(昭和10)年に実施された古墳調査(『上毛古墳総覧』として昭和13年刊行)によると、吉井町の古墳総数は417基(旧吉井町161基・旧多胡村187基・旧入野村63基・旧岩平村6基)となっている。

安坪古墳群は、鯛川右岸段丘上、天引川東岸の段丘縁辺および平坦部一帯に分布する古墳群である。『上毛古墳総覧』によると、大字長根字安坪・西場脇・中原・天神森・大谷・西原にわたって44基確認されている。すなわち、西場脇30基、安坪3基、中原1基、天神森1基、大谷1基、西原8基の計44基である。そして、1961(昭和36)年の遺跡台帳作成時には、西場脇18基、安坪3基、中原1基、天神森2基、大谷1基、西原8基の計33基が報告され、1971(昭和46)年の調査では西場脇18基、安坪2基、中原1基、天神森2基、大谷1基、西原8基の計32基となっていた。

今回の調査時点で墳丘の確認された古墳は、西場脇18基、安坪2基、中原2基、大谷1基、西原5基の計28基である。これら安坪古墳群の中で調査対象となったのが、『上毛古墳総覧』旧多野郡吉井町第13号墳(調査時の1号墳)、同20号墳(調査時の3号墳)、同22号墳(調査時の2号墳)の計3基である。

しかし調査の結果は、すでに墳丘が削平されていてその存在が確認されなかった古墳総数は10基を数えた。このことは安坪古墳群の総数は、最低でも54基存在していたことになる。また、『上毛古墳総覧』旧多野郡吉井町第13号墳(調査時の4号墳)と同16号墳(調査時の5号墳)の周堀の一部が調査された。

1号墳(第211~213図、PL.83~140)

位置 Cn-22~24、Co-22~25、Cp-22~24グリッドにかけて検出された。6号墳周堀に接している。

重複 3号方形周溝墓の南西コーナを壊して周堀が構築されている。

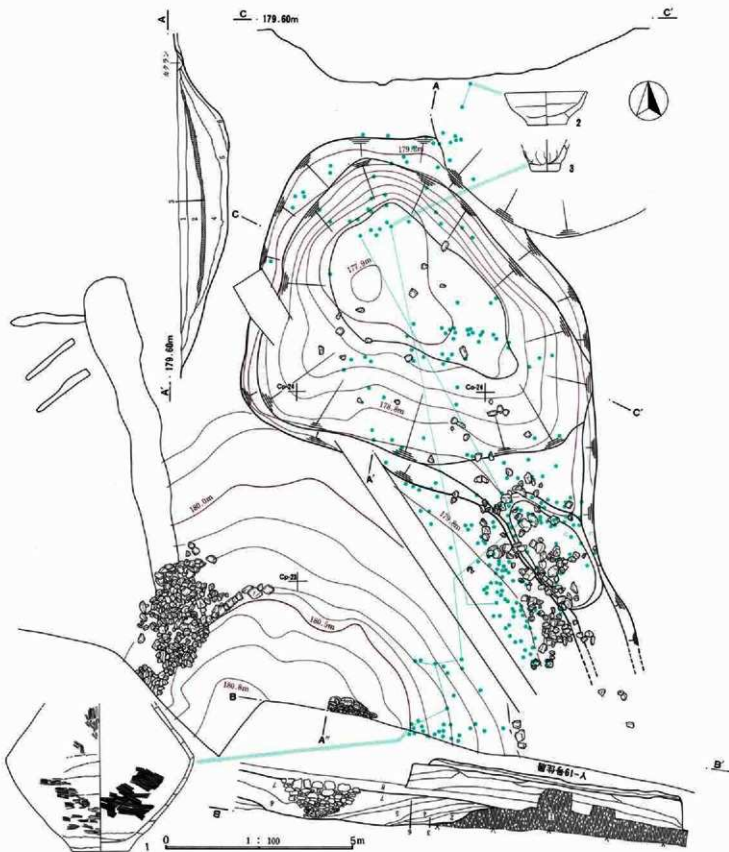
また、周堀の内側や墳丘下からは、縄文時代中期のJ-3・5・8号住居跡、弥生時代後期のY-7・9・19号住居跡が検出されている。

周堀 北東部分が検出されている。規模は上幅1.5~9m、下幅1~3.3m、深さ1.4mであるが、墳丘の東側になると周堀は浅く、小規模になっている。覆土は6層に分かれた。第6層は壁の崩落土、第5層は茶褐色土層、第4層は黒褐色土層で周堀中央で約50cmの堆積が認められた。そして底面から60~90cmのところにはAs-Bの純層が堆積している。層厚は約10cm程である。第2層にもAs-Bが含まれている。第1層にはAs-Aが含まれていた。

墳丘 調査対象になったのは墳丘の1/3程である。現状で東西9.4m、南北4.5m、高さ90cm程を調査できた。墳丘の斜面には盛土の崩壊を防ぐために葦石が施されている。しかし、確認できたのは墳丘西側部分であり、そのうちの殆どが葦石根石のみか、その上に2段ほど積み上げた部分までである。使用石材は、結晶片岩の川原石で、拳大から人頭大ほどまで様々である。この葦石の根石から直接周堀へとながるのではなく、幅約2.5~4mのテラス面が巡る外側に周堀が掘削されている。

墳丘盛土は第8層(旧地表)上に造営され、第3層・第6層がロームを多量に含んでいた。主体部 調査することはできなかったが、石室奥壁の壁体の補強としてその背後になされる裏込めが崩壊しないようにその周囲をさらに石垣状に補強する裏込め被覆が検出された。裏込め被覆に使用されている石材は、下部で大きく上部にいくにしたがって小ぶりになっている。

遺物 周堀内から土師器の口縁部片27点、胴部片705点、底部片28点、須恵器片58点が出土している。この他に墳丘下の黒色土層からは縄文早期土器片2点、前期土器片21点、中期土器片1,214点、弥生中期



第211号墳全体図

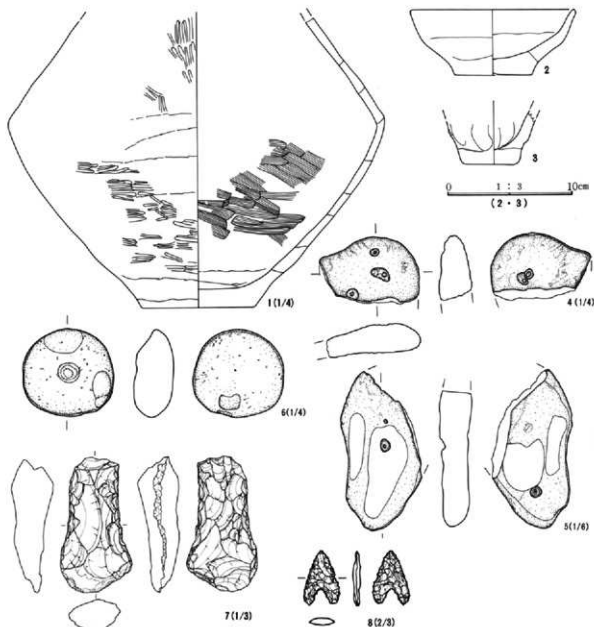


第212図 1号墳

土器片4点、後期土器片256点、漆・剥片83点が出土している。

時期 当古墳の築造は6世紀代と考えられる。

備考 当古墳は、「上毛古墳総覧」旧多野郡吉井町第12号墳に該当する。



1号墳遺物類群表 (①口徑 ②器高 ③底径)

第213図 1号墳出土遺物

図番 PL	土器種別 器種	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
213-1	弥生土器	②30.6	①細粒の砂を混入	胴部外面ミガキ、内面ハケメ、底面ミガキ。	墳丘下	1/3残存
140	壺	②12.0	②良 ③にぶい橙色			
213-2	土師器	①13.0	①細粒の砂を混入	底面へラ削り、体部下半ナデ、口縁部磨ナデ、内面ナデ。	周堀外	1/3残存
140	杯	②5.2③6.2	②酸化焙 ③橙色			
213-3	土師器	②4.3	①細粒の砂を混入	底面、体部ナデ。	周堀内	口縁一部欠損
140	小型	③4.2	②酸化焙 ③橙色	内面ナデ、へらの工具痕。		
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm, g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
213-4	多孔石	1/3	砂岩	(10.5) 15.0 5.0 (837)	両面に計5個の凹み穴が認められる。	周堀内
140						
213-5	多孔石	2/3	砂岩	(24.7) 11.8 5.0 (1,780)	両面に計2個の凹み穴と磨耗痕が認められる。	周堀内
140						
213-6	凹石	完形	安山岩	9.3 9.5 4.1 439	両面に計2個の浅い凹み。	周堀内
140						
213-7	打製石斧	完形	熱変成岩	10.5 5.6 3.2 161	刃部に磨減が見られる。	周堀内
140	石鏃	完形	黒曜石	2.2 1.5 0.3 1	基部の執りは逆V字状を呈す。	周堀内

2号墳(第214~221図, PL. 64~67-140)

位置 周堀の東端をCo-35グリッド、西端をCt-34グリッド、北端をCr-37グリッド、南端をCr-31グリッドにかけて検出された。西隣に3号墳、東南約8mに8号墳周堀が接している。

重複 周堀北西部でY-23号住居跡、南部でY-22号住居跡を壊している。また、墳丘下からは土坑も検出されている。

周堀 墳丘の北東部から南部にかけて検出された。墳丘東南方向に周堀が廻らないのは、8号墳周堀が存在していたためであろう。

周堀はCq-36グリッド、Cs-33グリッドにおいて途切れている。北東部の規模は上幅1.2~5m、下幅0.5~1.6m、深さ0.5~0.9mである。北部から南部にかけての周堀の規模は、上幅4~5.6m、下幅0.5~2m、深さ0.8~1.1mである。周堀上端での外径は径26m、内径は16.5mである。

周堀覆土は大別5層、細分すると14層に分かれた。2層(a~d)はAs-B層を含み、2層が純層である。底面から50~70cmの所に堆積していた。

墳丘 規模は径約13mである。墳丘盛土は周堀から約2~3mのテラス面においてそれより内側に行われている。テラス面は周堀と一体となって視覚的には二段築成の古墳に見える効果を出している。

墳丘の盛土は、当時の地表面の上に直接行われている。そのため土は周堀を掘削することによって得られたものである。ロームブロックの混入の度合いから3種類に大別できる。

葦石は石室入口左右に遺存していた。また、墳丘西部の周堀からは、葦石と思われる礫が壁面から底面にかけて出土している。

主体部(第216~217図) 主体部は、いわゆる自然石乱石積の横穴式両袖型石室である。すでに天井石は一部を除いて失われていたが、残りの部分は遺存状況が良好で、また壁体を補強する裏込め構造や、石室床面下の基礎構造も良好に残っていた。

閉塞施設 石室の閉塞は、ほぼ羨道部全体にわたって、中小の礫を詰め込んでいる。羨道床面から約40

cm積み上げて一旦平坦面をつくり、さらにこの上に山形に40cm盛り上げている。

石室 規模は次のとおりの両袖型石室である。

全長	6.1m	開口方位	N-30°-W
玄室長	3.5m	羨道長	2.6m
玄室奥幅	1.5m	羨道中幅	1.36m
玄室前幅	1.34m		
玄室最大幅	1.8m		

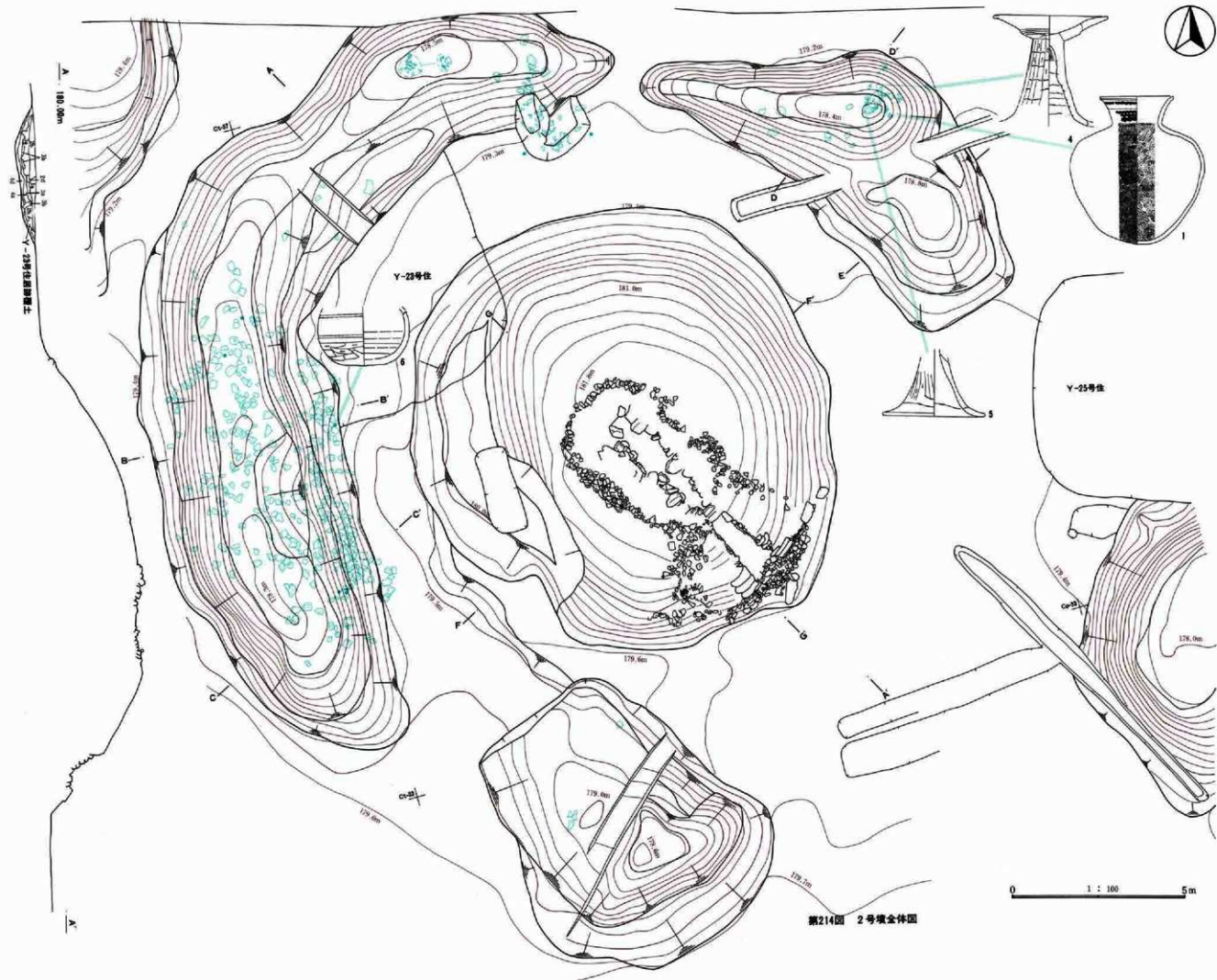
天井石は抜き取られていた。壁体で使用されている石材は天引川を供給源とする結晶片岩と砂岩である。基本的に鯖川流域からの使用石材は見られない。

羨道部は、狭長な長方形を呈している。羨道いっばいに閉塞石が詰められていた。これを除去すると、石室底面より15cm前後の高さまで径20cm大の比較的扁平な礫を敷き詰めて床面としている。天井石が一部残存していた。

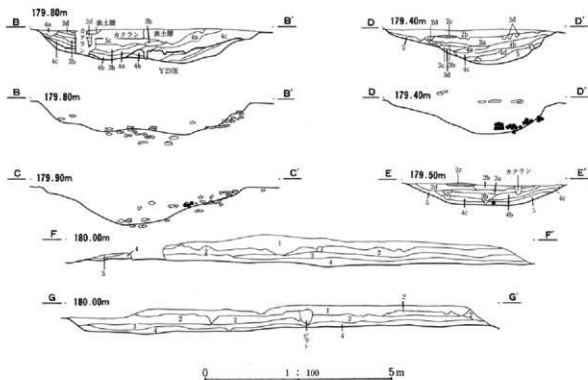
入口部の左右には同形同大(長辺60cm、短辺20cm)の結晶片岩と砂岩の石を配し、澳門石としている。入口前から見て石室使用時に露出していた面である。羨道最奥部の袖石にあたる石材は、縦位に据え玄門石としての機能を有するものである。澳門石と玄門石の間に挟まる部分の壁体の積み方は、すべて横方向に長くなる重箱積みである。また、石材相互の境目は棒状の小礫ですべて充填されている。壁体は、床面から高さ約0.7~1.3mまで残っていた。

玄室部は長さ3.5m、幅1.34~1.8mの長方形プランである。床面は羨道部と同様に扁平な小礫を雑然と敷き詰めたもので、その高さはほぼ羨道部と同じである。壁体の構成は、左壁では第一段に大ぶりの石5個を配して基底部分とし、その上に小さめの石を4段に重箱積みになっている。横の目地はほぼ水平に通っている。右壁は第一段に大ぶりの石4個を配して基底部分とし、その上に小さめの石を3~4段に重箱積みしている。

奥壁是一片110cmの正方形を呈する砂岩を据えているが、横幅がたりなかったため左右壁体間を小礫で充填している。高さは左壁の最高位より低いことから、この上に2~3段積み上げられていたもの



第214图 2号墳全体图



(A-A'・B-B'・D-D'・E-E')

- 1a 茶褐色砂質土層 粒子粗くザラザラしている。
 1b 茶褐色砂質土層 粒子細かい。1a層よりも暗い色調。
 2a 灰黒色砂質土層 As・Bを含む。
 2b 黒色砂質土層 As・Bを多量に含む。
 2c 灰褐色砂質土層 As・Bの純層。
 2d 黒色砂質土層 As・Bを含む。
 3a 暗褐色土層 粒子は比較的細かい。
 3b 暗褐色土層 3a層よりも黒い色調。
 3c 暗褐色土層
 4a 黒色土層 締まりよい。粘性あり。
 4b 黒色土層 ローム粒子を含む。
 4c 黒色土層 ローム粒子を多量に含む。
 4d 黄褐色土層 黒色土とロームの混土。
 5 黄褐色土層 ローム主体の層。

2号墳墳丘下(F-F'・G-G')

- 1 黒褐色土層 やわらかくて締まりあり。粘性あり。
 2 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。
 3 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。
 4 褐色土層 固く締まりよい。粘性あり。

第215図 2号墳

であろう。

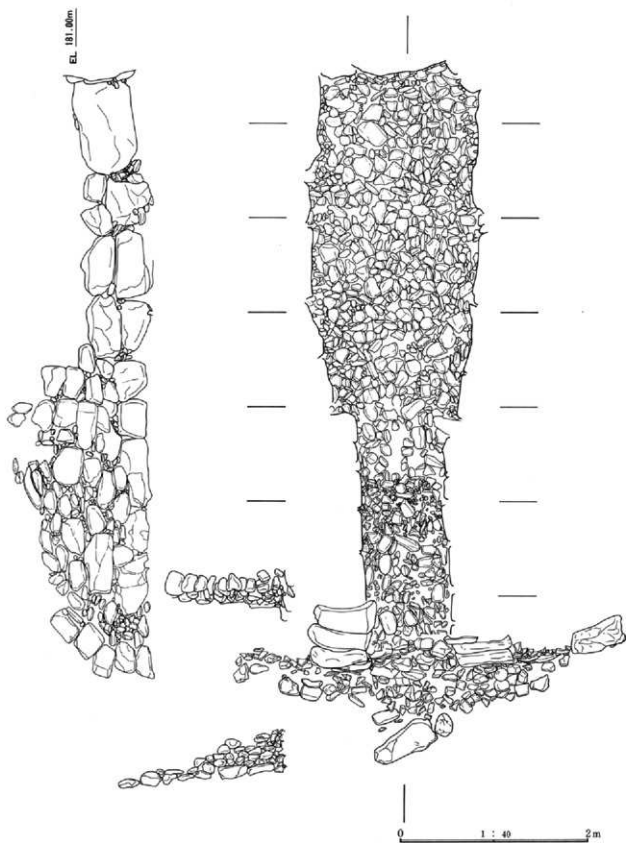
石室副葬品 (第218・220・221図) 耳環3点、ガラス玉8点、鉄鎌2点である。耳環1点は奥壁下から、2点は北西部から出土し、ガラス玉は右壁下から、鉄鎌は左壁よりから出土している。骨片と歯は中央部やや左壁よりから検出された。

下部構造 (第219図) 石室の構築面は、当時の地表面に準大から小児の頭大ほどの隙を敷き詰めて基礎地行を行っている。その範囲は、長さ8m、玄室側幅4.2m、羨道側幅3.3mである。奥壁方向では半円状を呈して。

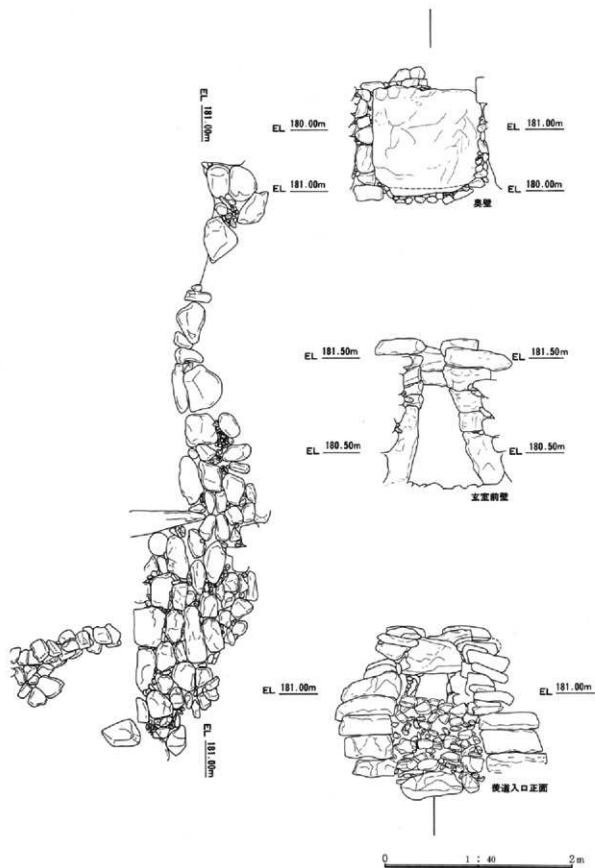
遺物 石室副葬品以外の遺物では、北東部周囲底面から須恵器の大甕と高杯が出土している。この他に土師器の口縁部片62点、胴部片511点、底部片26点、須恵器片62点が出土している。また、縄文前期土器片5点、中期前半の土器片126点、中期後半の土器片44点、弥生中期の土器片2点、後期の土器片156点、礫・剥片65点が墳丘下から出土している。

時期 当古墳の築造は6世紀後半と考えられる。

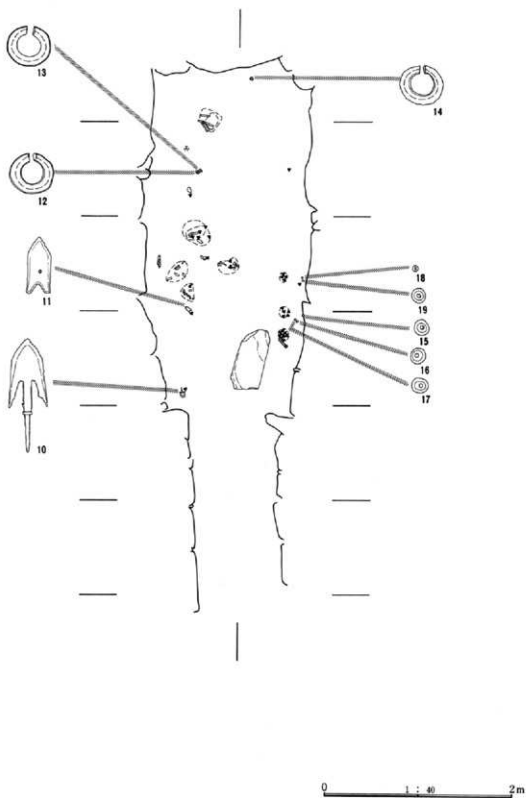
備考 当古墳は、上毛古墳総覧旧多野郡吉井町第11号墳に該当する。



第216図 2号墳石室



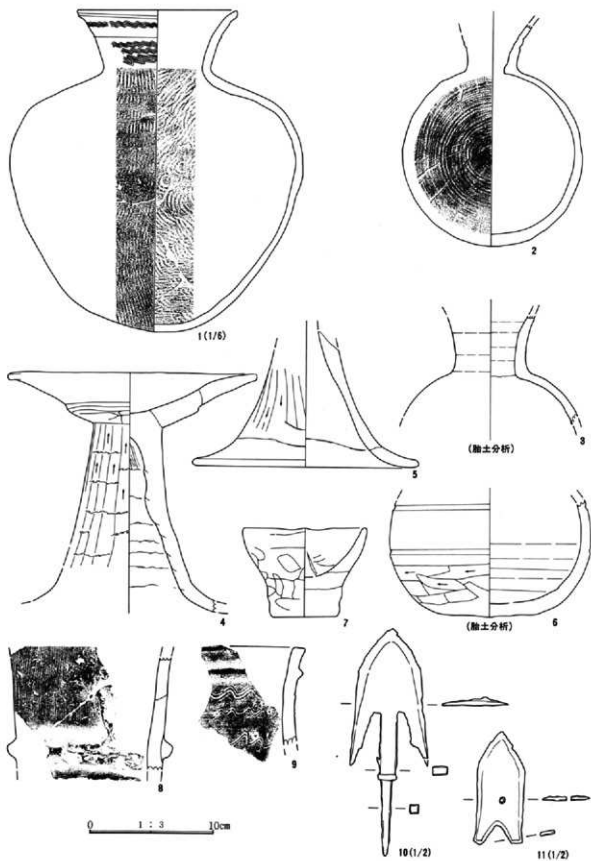
第217图 2号墳石室



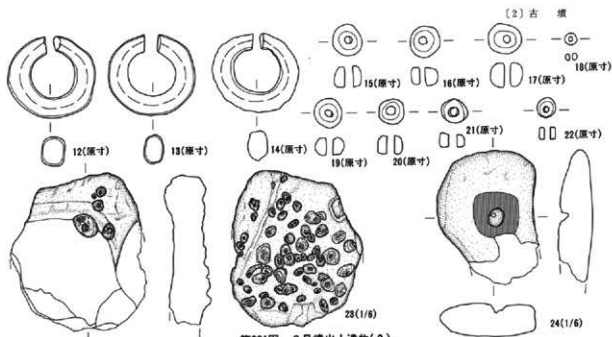
第218図 2号墳石室内遺物出土状況



第219図 2号墳跡地形



第220図 2号墳出土遺物(1)



第221図 2号墳出土遺物(2)

2号墳遺物観察表 (①口径 ②口径 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
220-1 140	須恵器 甕	①25.5 ②51.6	①粗 片岩粒を含む ②還元焰 ③灰色	口縁部に柳葉状文。胴部平行円錐。内面背面直文。	北東部周堀	胴部1/4欠損
220-2 140	須恵器 埴瓶	②17.5	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。	前庭部	口縁部欠損
220-3 140	須恵器 埴瓶	②8.5	①細 白色鉱物粒を含む ②還元焰 ③赤灰色	右回転クロコ整形。	周堀内	口縁～体部上半1/2
220-4 140	土師器 高坏	①19.9 ②18.8	①細粒の砂片岩粒を少量含む ②還元焰 ③褐色	胴部外面へうけ削り、内面輪積み痕跡著、坏部ナデ。	周堀内	坏・胴部欠損
220-5 140	土師器 高坏	①10.7 ②18.0	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③褐色	胴部外面へうけ削り、ナデ、内面丁寧なナデ。	周堀内	胴部
220-6 140	須恵器 平瓶	②9.3	①細 黒色鉱物粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。体部下半回転へうけ削り。	周堀内	体部1/2
220-7 140	土師器 坏	①9.6 ②7.0③5.0	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③よい褐色	底面・体部ナデ。内面ナデ、へうの工具痕。	墳丘下	2/3残存
220-8 140	内陶埴輪	②11.9	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③よい赤褐色	外面縦ハケ。内面縦ハケ、ナデ。	墳丘	破片
220-9 140	須恵器 甕	②7.8	①粗 白色鉱物粒を含む ②還元焰 ③白色	口縁部に柳葉状文。	周堀内	部分

図番 P.L.	器種	遺存状況	色調	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況	
				全長	幅	重量			
220-10 140	鉄鍔	一部欠損		12.0	4.0	0.4	(27.4)	有茎五角形鍔。	玄室内
220-11 140	鉄鍔	一部欠損		6.0	2.5	0.2	(10.3)	無茎五角形鍔。鍔身に穿孔が認められる。	玄室内
221-12	耳環	完形	紺青色	径 2.4	0.8	12.6	径1mmの楕円形の銅線に金の薄板を巻き、2.5mm径の穴1目を付けた後に削り出し、	玄室内	
221-13	耳環	完形	紺青色	径 2.3	0.7	11.7	径1mmの楕円形の銅線に金の薄板を巻き、2.5mm径の穴1目を付けた後に削り出し、	玄室内	
221-14	耳環	完形	紺青色	径 2.4	0.7	12.5	径1mmの楕円形の銅線に金の薄板を巻き、2.5mm径の穴1目を付けた後に削り出し、	玄室内	
221-15	ガラス玉	完形	紺青色	径 0.8	0.6	0.5	管切法による製作、両断面は加熱・研磨処理。	玄室内	
221-16	ガラス玉	完形	紺青色	径 0.8	0.4	0.4	管切法による製作、両断面は加熱・研磨処理。	玄室内	
221-17	ガラス玉	完形	紺青色	径 0.9	0.6	0.6	管切法による製作、両断面は加熱・研磨処理。	玄室内	
221-18	ガラス玉	完形	紺青色	径 0.3	0.2	0.02	管切法による製作、両断面は加熱・研磨処理。	玄室内	
221-19	ガラス玉	完形	コバルトブルー	径 0.7	0.5	0.3	管切法による製作、両断面は加熱・研磨処理。	玄室内	
221-20	ガラス玉	完形	紺青色	径 0.7	0.5	0.3	管切法による製作、両断面は加熱・研磨処理。	玄室内	
221-21	ガラス玉	完形	紺青色	径 0.7	0.4	0.2	管切法による製作、両断面は加熱・研磨処理。	玄室内	
221-22	ガラス玉	完形	青竹色	径 0.5	0.3	0.2	管切法による製作、両断面は加熱・研磨処理。	玄室内	
221-23 140	石皿	1/3	石材 安山岩	(24.5)	21.0	5.0	(3,895)	裏面に多数の凹み穴が認められる。	墳丘下
221-24 140	多孔石	2/3	石材 砂岩	(21.1)	15.2	5.3	(2,054)	片面に1個の凹み穴と磨耗痕が認められる。	周堀内

3号墳(第222~224図, PL.88~91-141)

位置 周堀の北東端をCt-37グリッド、南西端をDe-33グリッドにおいて検出された。東隣に2号墳、北西約4mに12号墳周堀が接している。

重複 周堀南西部でY-30号住居跡、14号方形周溝基を覆っている。また、墳丘下からは土坑も検出されている。

周堀 墳丘の北東部と南西部で検出された。北東部の周堀は完掘できなかつたが、現状での規模は上幅1.3~7m、下幅3.5m、深さ0.2~0.9mである。南西部の周堀は上幅2~8.5m、下幅2.5~4.2m、深さ0.4~0.8mである。2号墳・12号墳周堀に規制されてその間隙に掘り込まれている。周堀上端での外径は推定径33m、内径は17mである。

周堀覆土は大別4層、細分すると12層に分かれた。底面から25~70cmのところはAs-Bの純層が堆積している。層厚は5~15cmである。

墳丘 規模は径約11mである。墳丘盛土は周堀から約2.5~3.7mのテラス面においてそれより内側に行われている。テラス面は周堀と一体となって視覚的には二段築成の古墳に見える効果を出している。

墳丘の盛土は、当時の地表面の上に直接行われている。そのための土は周堀を掘削することによって得られたものである。ロームブロックの混入の度合いから3種類に大別できる。

主体部(第224・225図) 主体部は、いわゆる自然石乱石積の横穴式両袖型石室である。羨道部天井石は残存していたが、玄室天井石は失われていた。残りの部分は遺存状況が良好で、また壁体を補強する裏込め構造や、石室床面下の基礎構造も良好に残っていた。

閉塞施設 石室の閉塞は、ほぼ羨道部全体にわたって、中小の礫を詰め込んでいる。

石室 全長 6.4m 開口方N-18°-W

玄室長 3.5m 羨道長 2.9m

玄室奥幅 2.3m 羨道中幅 0.92m

玄室前幅 1.5m

玄室最大幅 2.3m

天井石は羨道部を除いて抜き取られていた。壁体で使用されている石材は天引川を供給源とする結晶片岩と砂岩である。基本的に銅川流域からの使用石材は見られない。羨道部は狭長な長方形を呈している。羨道いっばいに閉塞石が詰められていた。これを除去すると、石室底面より15cm前後の高さまで径20cm大の比較的扁平な礫を敷き詰めて床面としている。

入口部の右には同形同大(長辺150cm、短辺40cm)の砂岩の石を配し、羨門石としている。入口前から見て石室使用時に露出していた面である。

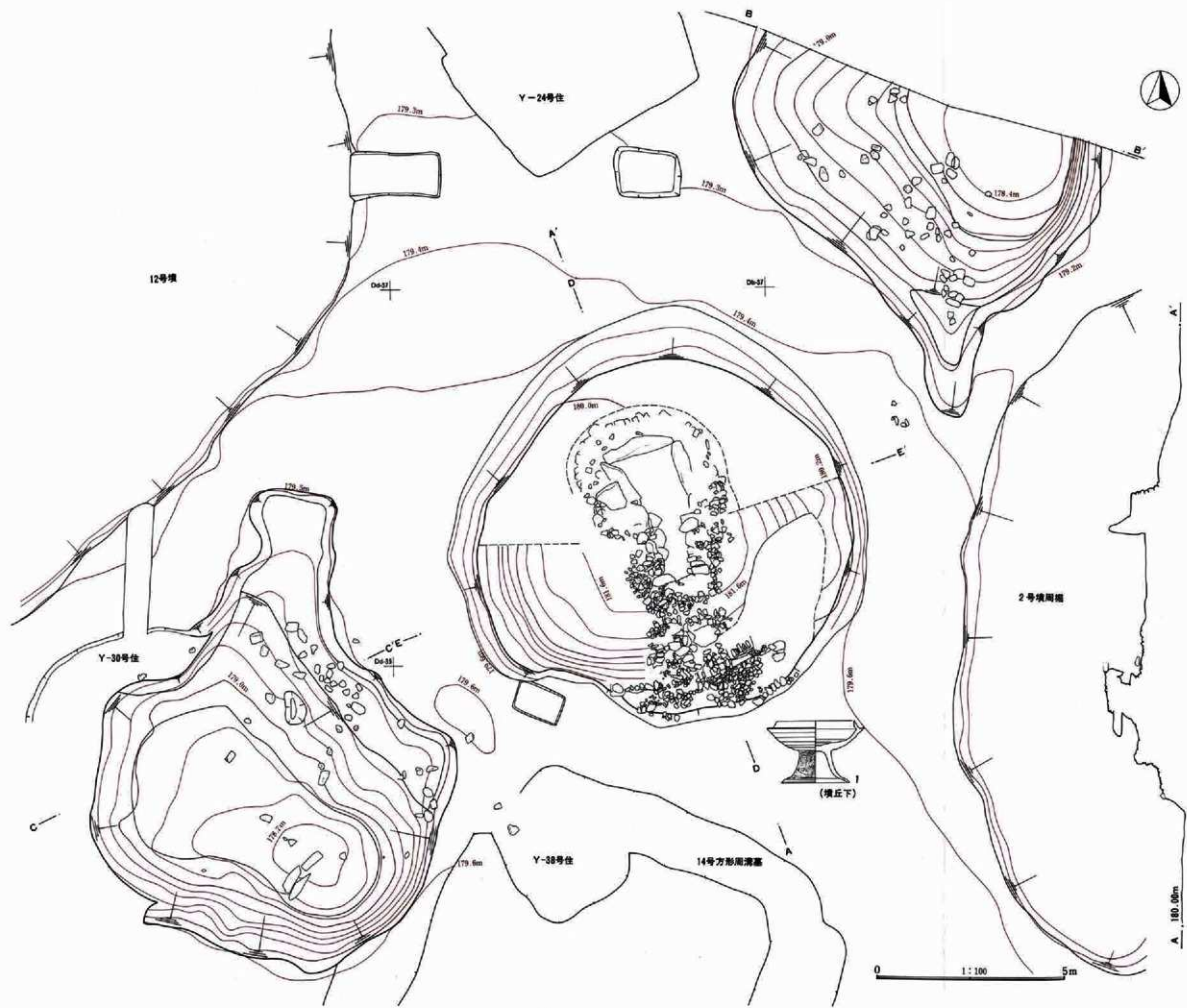
羨道最奥部の袖石にあたる石材は、縦位に据え玄門石としての機能を有するものである。羨門石と玄門石の間に挟まる部分の壁体の積み方は、すべて横方向に長くなる重箱積みである。石材相互の境目には棒状の小礫ですべて充填されている。羨道部の壁体は、床面より高さ約0.5~1.0mまで残っていた。

玄室部は長さ3.5m、幅1.5~2.3mの長方形プランである。床面は羨道部と同様に扁平な小礫を雑然と敷き詰めたもので、その高さはほぼ羨道部と同じである。壁体の構成は、左壁では第一段に大ぶりの石2個を配して基底部分とし、その上に小さめの石を3~4段に重箱積みになっていたものと考えられる。横の目地はほぼ水平に通っている。右壁では第一段に大ぶりの石3個を配して基底部分とし、その上に小さめの石を5段に重箱積みになっていたものである。横の目地はほぼ水平に通っている。使用石材は砂岩が多い。床面から高さ1.7mを測る。

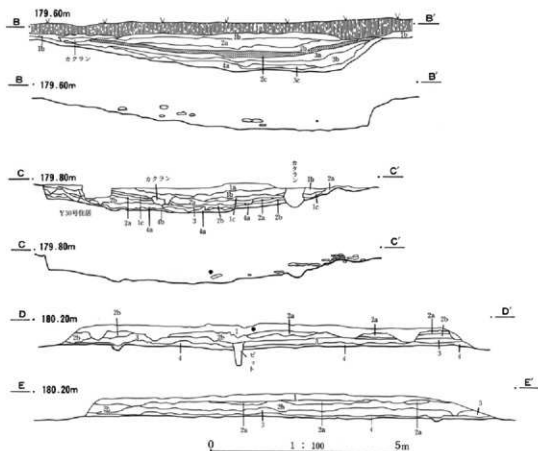
奥壁は板状を呈する砂岩の巨石(長辺1.7~2.0m、短辺1.2m)を据えている。高さは右壁の最高位より低いことから、この上に2~3段積み上げられていたものであろう。羨道の天井石から玄室で一段高くなる天井構造である。

石室内副葬品(第226・228図) 耳環4点である。このうち3点は右壁下から、1点は左壁よりから出土し、骨片と歯は中央部や左壁よりから検出された。また、鉄鏃は羨道部から出土している。

下部構造(第227図) 石室の構築面は、当時の地表



第222图 3号坟全图



(B-B')

- 1a 耕作土層 1b As-Aを含む。
 2a 黒褐色砂質土層 As-Bを含む。
 2b 黒褐色砂質土層 As-Bを含む。2a層よりも黒い色調。
 2c As-Bの純層
 3a 黒褐色土層 粒子細かく密で粘性あり。
 3b 黒褐色土層 粒子細かく密で粘性あり。
 3c 増褐色土層
 4a 黄褐色土層

(C-C')

- 1e 赤褐色砂質土層 As-Bを含む。
 1b 黒色砂質土層 As-Bを含む。
 1c 灰白色砂質土層 As-Bを含む。
 1d 黒色砂質土層
 2a 黒褐色土層 粒子細かく密で粘性あり。
 2b 増褐色土層
 3 黄褐色土層 粒子は比較的細かい。
 4a 黄褐色土層
 4b 増褐色土層

(D-D'・E-E')

- 1 黒褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性あり。
 2a 増褐色土層 やや固く締まり粘性あり。
 2b 増褐色土層 やや固く締まり粘性あり。
 3 増褐色土層 やや固く締まり粘性あり。
 4 褐色土層 固く締まり粘性非常にあり。

第223図 3号墳

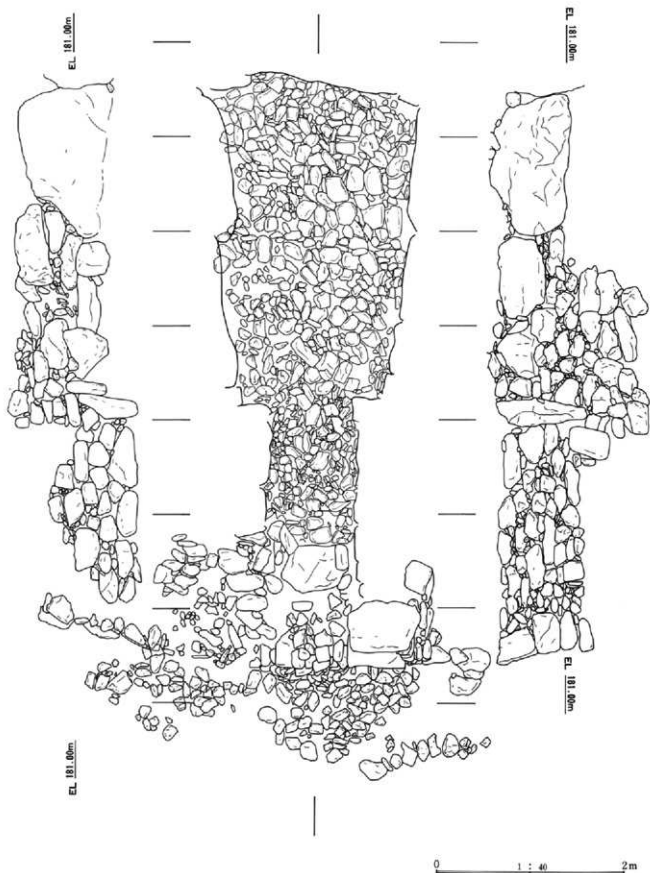
面に拳大から小児の頭大ほどの礫を敷き詰めて基礎地行を行っている。その範囲は、長さ7.4m、玄室側幅4.2m、羨道側幅2.5mである。奥壁方向では半円状を呈している。

遺物 石室副葬品以外の遺物では、周囲内からは土師器の口縁部片15点、胴部片601点、底部片14点、須恵器片46点が出土している。この他に縄文前期土器

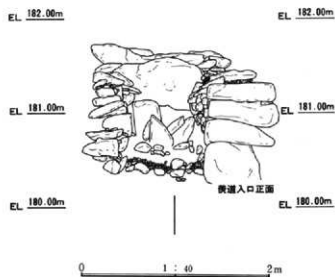
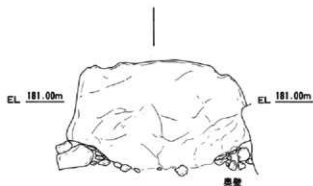
片4点、中期前半の土器片55点、中期後半の土器片38点、弥生中期の土器片8点、後期の土器片202点、礫・剥片44点が墳丘下から出土している。

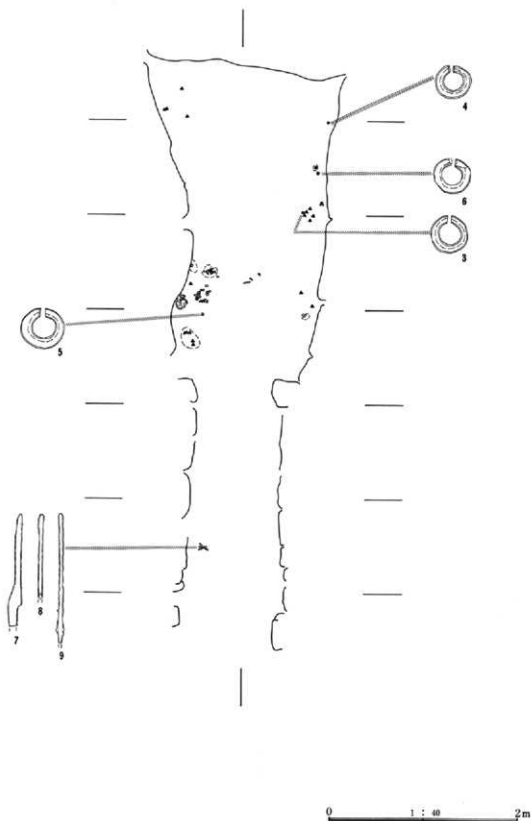
時期 当古墳は6世紀後半の築造と考えられる。

備考 当古墳は、上毛古墳総覧旧多野郡吉井町第20号墳に該当する。

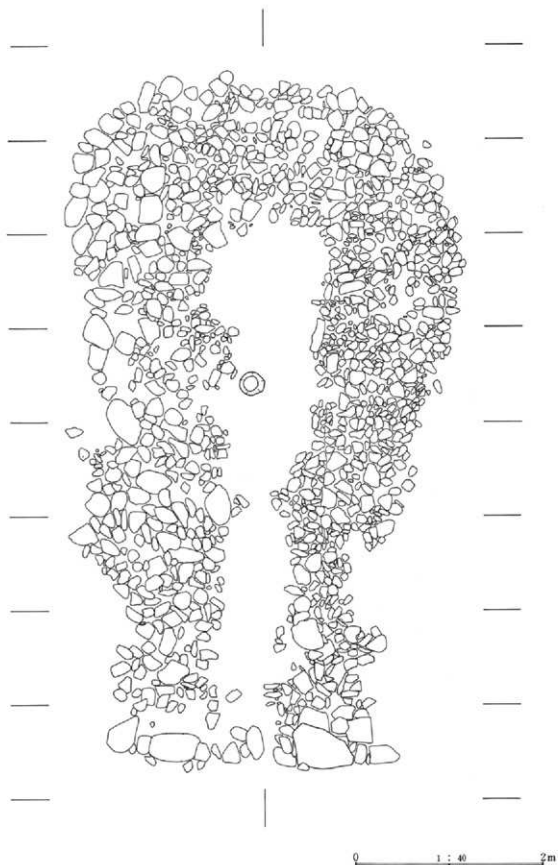


第224図 3号墳石室

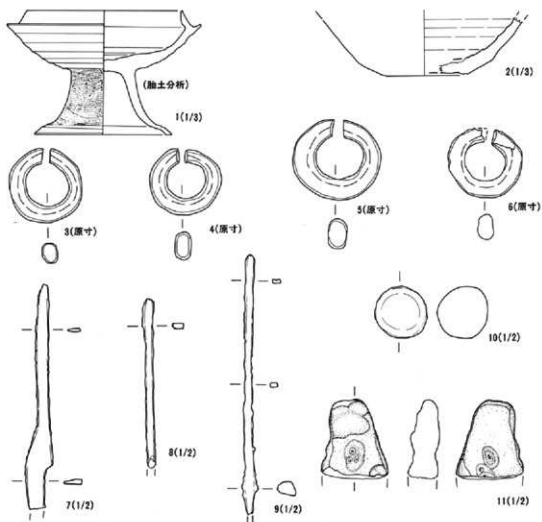




第226図 3号墳石室内遺物出土状況



第227图 3号墳埋地形



第228図 3号墳出土遺物

1号墳遺物類表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②地成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
228-1 141	須恵器 高坏	①12.2 ②9.8③10.9	①胎 白色黏物粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 脚部外面にカキ目調整。	墳丘下	口縁・脚一部欠損
228-2 141	須恵器 壺	②4.8 ③6.0	①胎 白色黏物粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。	周堀内	部分
図番 P.L.	器種	遺存状況	石材	計測値 全長 幅 厚 (cm, g)	特 徴	出土状況
228-3	耳環	完形		径 1.9 0.5 6.0	径5mmの楕円形の銅棒に金の薄板を被せ、2.5mm径の穴を目を穿つ取状に仕上げたもの。	玄室内
228-4	耳環	完形		径 1.9 0.7 11.9	径7mmの楕円形の銅棒に金の薄板を被せ、2.5mm径の穴を目を穿つ取状に仕上げたもの。	玄室内
228-5	耳環	完形		径 2.3 0.8 6.4	径8mmの楕円形の銅棒に金の薄板を被せ、1.5mm径の穴を目を穿つ取状に仕上げたもの。	玄室内
228-6	耳環	一部欠損		径 1.9 0.6 (5.0)	径6mmの楕円形の銅棒に金の薄板を被せ、2.5mm径の穴を目を穿つ取状に仕上げたもの。	玄室内
228-7 141	刀子	一部欠損		(12.0) 1.4 0.3 (10.0)	鉄平造。棟幅2mm。	羨道内
228-8 141	鉄鏃	一部欠損		(9.0) 0.4 0.3 (6.0)	長頸鏃。鏃身部・基部欠損。	前庭部
228-9 141	鉄鏃	一部欠損		(13.8) 0.8 0.8 (7.9)	長頸鏃。基部先端欠損。	羨道内
228-10 141	丸石	完形	不明	2.8 2.8 2.7 23.7		墳丘下
228-11 141	凹石	1/2	砂岩	(8.4) 7.1 3.1 (187)	両面に計2個の凹みが認められる。	墳丘下

4号墳 (第229図)

位置 Cs・Ct-23、Da-23グリッドにかけて検出された。6号墳周堀に接している。

重複 H-30号住居跡を壊して周堀が構築されている。

周堀 発掘区からは周堀の一部が検出されただけである。周堀の覆土は5(3~7)層に分かれ、底面から20~50cmのところにAs-Bの純層が堆積している。

また、周堀の南東約10mのところに墳丘が現存しているが、現状での墳丘の径は約16mある。調査対象区域外のために調査はしていない。

遺物 周堀内から縄文中期前半の土器片5点、中期後半の土器片23点、弥生後期の土器片9点、須恵器片9点、鏝6点が出土している。

5号墳 (第230図、PL.72)

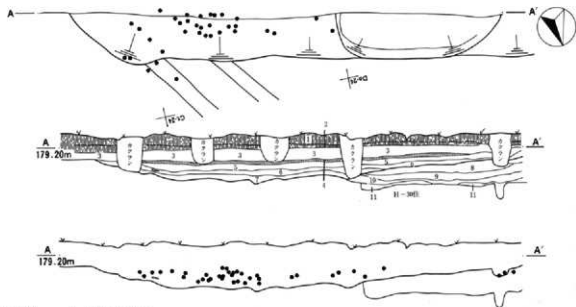
位置 Dh-25~27、Di-25~27、Dj-25~27、Dk-26・27グリッドにかけて検出された。7号墳の南西、9号墳の南に位置している。

重複 8号方形周溝墓、9号方形周溝墓を壊して構築されている。

周堀 発掘区からは周堀の一部が検出されただけである。規模は上幅5.6~9.3m、下幅1~2m、深さ65cmである。覆土は大別4層、細分して9層に分かれた。底面から約20cmのところにAs-Bの純層が堆積している。

また、周堀の南西約5mのところに墳丘が現存しているが、現状での墳丘の径は約8~10mある。調査対象区域外にあるために調査はしていない。

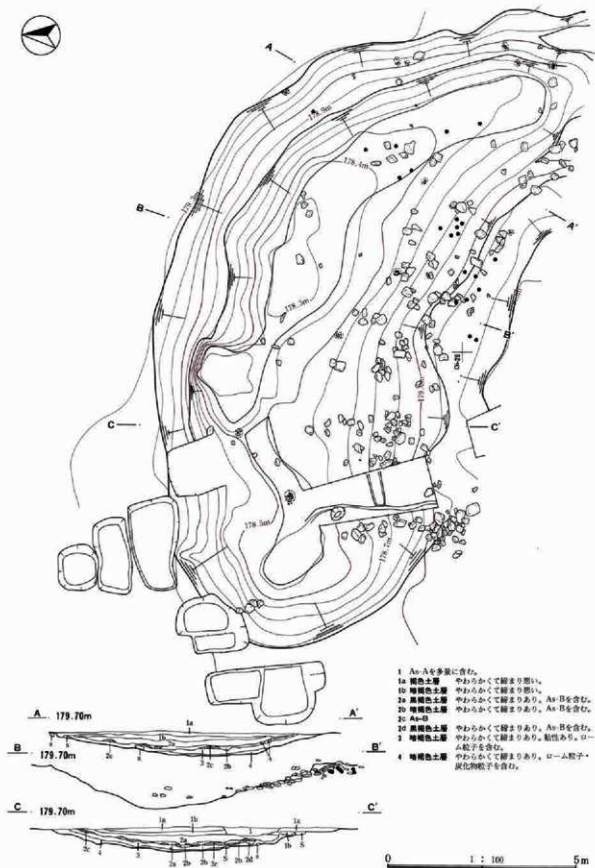
遺物 周堀内からは縄文中期前半の土器片23点、中期後半の土器片8点、弥生中期の土器片7点、弥生後期の土器片20点、土師器片55点、須恵器片15点が出土している。さらに葦石の崩落したものが、周堀の南縁から出土している。



- 1 耕作土 As-Aを多量に含む。
- 2 暗褐色土層 As-Aを少量含む。
- 3 黒褐色土層 やわらかくて締まりあり。As-Bを含む。
- 4 As-B
- 5 黒褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ローム粒子を少量含む。
- 6 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ローム粒子を含む。
- 7 黄褐色土層 やわらかくて粘性非常にあり。ロームを多量に含む。
- 8~11層 H-30号住居跡覆土。

0 1 : 100 5m

第229図 4号墳



- 1 As-Aを多量に含む。
- 1a 褐色土層 やわらかくて締まり悪い。
- 1b 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。
- 2a 黒褐色土層 やわらかくて締まりあり。As-Bを含む。
- 2b 暗褐色土層 やわらかくて締まりあり。As-Bを含む。
- 3c As-B
- 3d 黒褐色土層 やわらかくて締まりあり。As-Bを含む。
- 4 暗褐色土層 やわらかくて締まりあり。粘性あり。ローム粒子を含む。
- 4 暗褐色土層 やわらかくて締まりあり。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

第230図 5号墳

6号墳 (第231~233図、PL. 72・141)

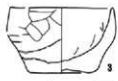
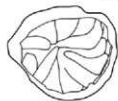
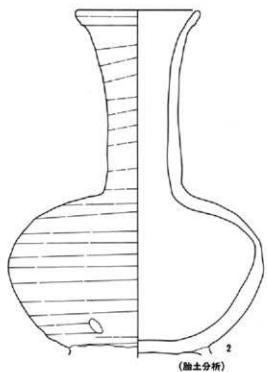
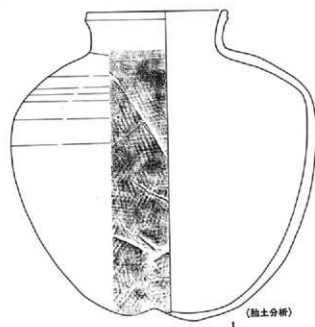
位置 Co-25・26、Cp-25・26、Cq-25・26、Cr-23、Cs-23・24グリッドにかけて検出された。1号墳の北西、4号墳周囲と接している。

重複 Y-13号住居跡を壊して構築されている。また、H-29号住居跡(6世紀後半)よりも新しいと考えられる。

周堀 周堀内縁での径は約14mである。周堀は北東部分で上幅4.5~6.3m、下幅1.8~3.8m、深さ1m、南西部分では上幅2.8~4m、下幅1~1.7m、深さ70cmである。覆土は大別6層、細分して7層に分かれた。2b層がAs-Bの純層である。底面から約70cmのところに堆積していた。墳丘は削平されているために検出できなかった。

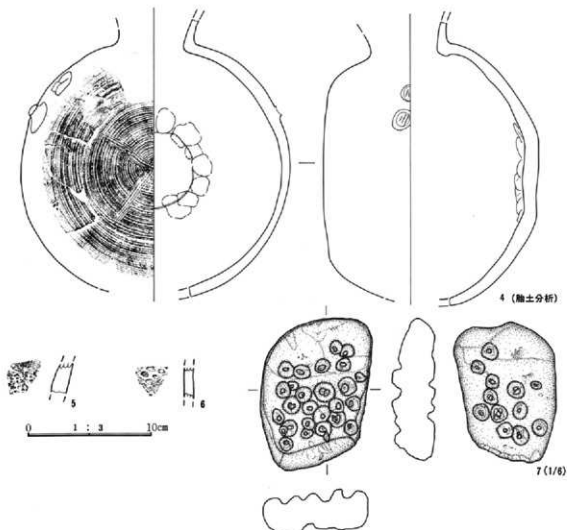
遺物 北東の周堀内から須恵器の大甕、長頸壺、提瓶等が出土している。また、縄文早期の押型文土器片2点が南西部分の周堀から出土している。この他に縄文前期中葉の土器片2点、中期前半の土器片23点、中期後半の土器片207点、弥生後期の土器片68点、土師器・須恵器片92点、鏝・剝片16点が出土している。

時期 当古墳の築造は6世紀代と考えられる。



0 1:3 10cm

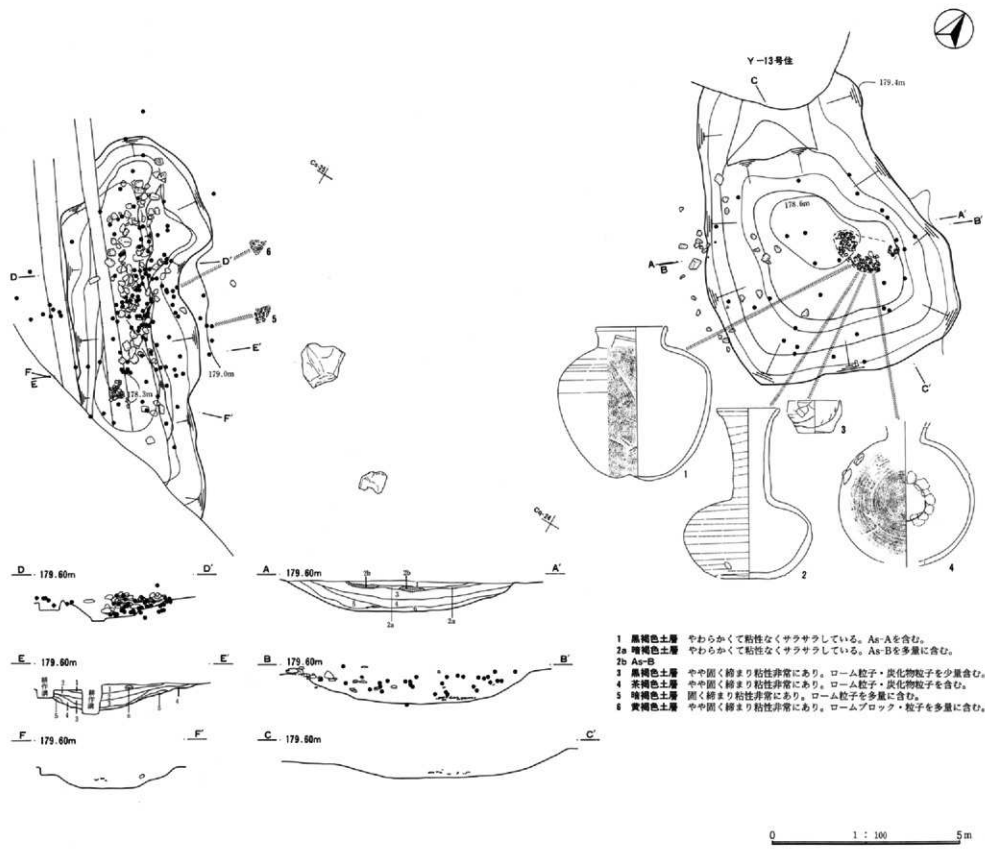
第231図 6号墳出土遺物(1)



第232図 6号墳出土遺物(2)

6号墳遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
231-1	須恵器 短頸壺	①10.0 ②24.5	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形、外面体部下半平行叩き。	北東部周堀内	口縁一部欠損
231-2	須恵器 長頸壺	①9.6 ②27.5	①細 白色鉱物粒を含む ②還元焰 ③暗灰色	左回転クロコ整形、体部下回転へう削り。	北東部周堀内	ほぼ完形
231-3	土師器 鉢	①8.0 ②5.2③5.4	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③明赤褐色	外面に指頭痕。	北東部周堀内	口縁部欠損
232-4	須恵器 果瓶	②22.4	①細 片岩粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。	北東部周堀内	口縁部欠損
図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様 (その他)	出土状況	
232-5	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	内面は丁寧な調整。器厚9~11mm。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文早期槽内押型文。	南西部周堀内	
232-6	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	内面は丁寧な調整。器厚8mm。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	縄文早期槽内押型文。	南西部周堀内	
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
232-7	多孔石 (縄文)	完形	砂岩	22.4 16.8 6.5 3,276	両面に計40個の深い凹み穴が認められる。	周堀内



第233図 6号墳

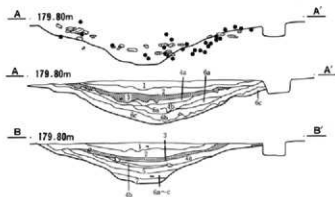
7号墳 (第234・235図, PL. 73・141)

位置 Dd~Dg-29, Dd~Dh-28, Dg+Dh-27グリッドにかけて検出された。5号墳周堀、14号墳周堀と接している。8号方形周溝墓南端から検出された溝も、この周堀に連続するものと考えられる。

重複 Y-11号住居跡、8号方形周溝墓を壊している。またY-8・15号住居跡は墳丘下に存在していたものであろう。

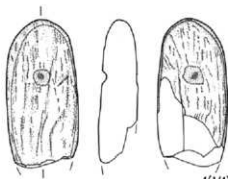
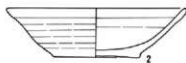
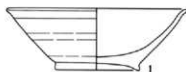
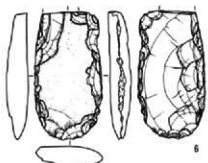
周堀 周堀内縁での径は約17mである。周堀は上幅2.8~6.3m、下幅0.8~2.1m、深さ1.1mである。覆土は大別7層に、細分すると10層に分かれた。3層がAs-Bの純層である。底面から60cmのところに堆積していた。墳丘は削平されているために検出できなかった。

遺物 周堀内からは縄文前期中葉の土器片4点、前期後半の土器片3点、中期前半の土器片23点、中期後半の土器片25点、弥生中期の土器片21点、弥生後期の土器片361点、土師器片45点、須恵器片38点、礫・剥片16点が出土している。

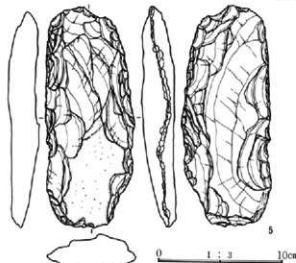


- 1 堆積色土層 やわらかくて粘性なくサラサラしている。
- 2 黒褐色土層 やわらかくて粘性なくサラサラしている。As-Bを含む。
- 3 As-B
- 4a 黒褐色土層 やわらかくて粘性あり、ローム粒子を含む。
- 4b 黒褐色土層 やわらかくて粘性あり、ローム粒子を含む。4a層よりもやや暗い色調。
- 5 堆積色土層 やわらかくて粘性あり、ローム粒子を含む。
- 4a+5a 堆積色土層 やわらかくて粘り強い、粘性あり、ロームブロック粒子を含む。
- 7 黄褐色土層 ロームを多量に炭化物粒子を少量含む。

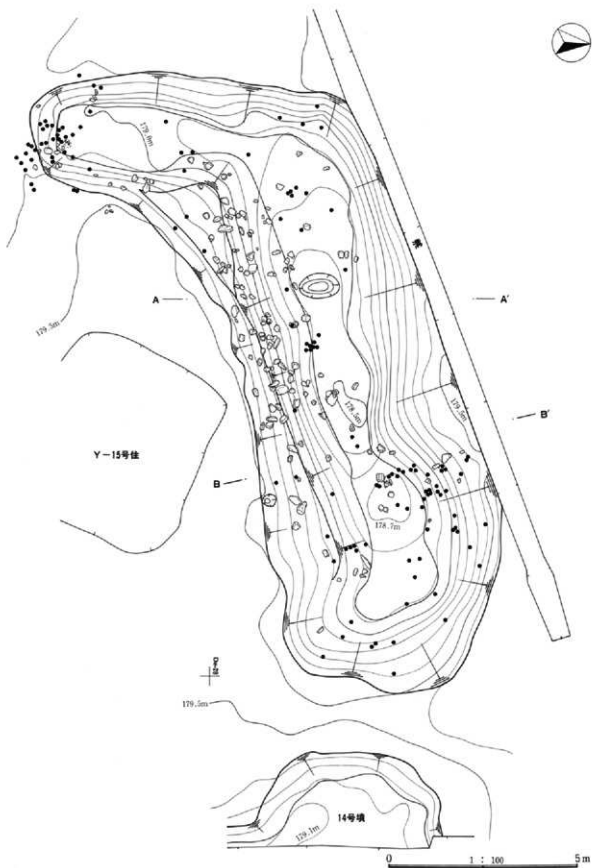
0 1 : 100 5m



4(1/4)



第234図 7号墳と出土遺物



第235図 7号墳

7号墳遺物整理表 (①口径 ②器高 ③底径)

国番 PL	土器種別 器種	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況			
234-1 141	須恵器 埴	①14.4 ②4.8③6.5	①細 ②還元焼 ③灰黄色	右回転コクロ整形。 高台貼付。	周堀内	1/3			
234-2 141	須恵器 杯	①14.2 ②3.8③6.6	①細 褐色磁物粒を含む ②還元焼 ③灰色	右回転コクロ整形。 底面回転糸切り。	周堀内	2/3			
234-3 141	須恵器 埴	②2.5 ③6.3	①粗 褐色磁物粒を含む ②還元焼 ③灰色	右回転コクロ整形。 高台貼付。	周堀内	口縁〜体部上半 欠損			
国番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm, g)			特 徴	出土状況	
234-4 141	凹石 (縄文)	3/4	点紋緑泥片岩	全長 (15.6)	幅 7.5	厚 3.9	重量 (769)	両面に計2個の凹みが認められる。	周堀内
234-5	打製石斧 (縄文)	完形	輝岩	17.2	7.0	2.6	360	短冊型。	周堀内
234-6	打製石斧 (縄文)	基部欠損	熱変成岩	(10.0)	5.3	1.7	(113)	短冊型。	周堀内

8号墳 (第236〜239図, PL.74-141)

位置 CJ-31・32グリッドを東端、Cp-30グリッドを西端、Co-27グリッドを南端、Cn-33グリッドを北端として検出された。2号墳の東南に接している。

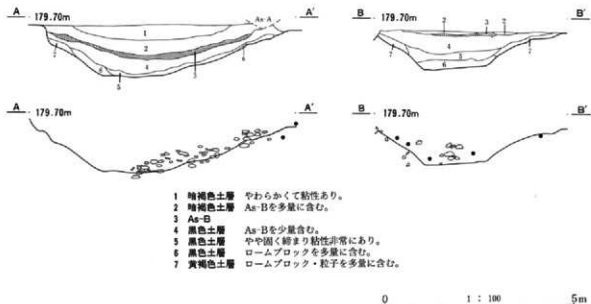
重複 Y-6・25・33・37号住居跡を横し、J-12号住居跡、Y-32号住居跡は墳丘下に存在したものであろう。H-51号住居跡(6世紀前半)と接している。

周堀 周堀内縁での径は約17mである。周堀は北・東部で上幅1.7〜8m、下幅0.6〜2.7m、深さ1〜1.4m、南部では上幅1.2〜6.6m、下幅0.4〜4.8mで

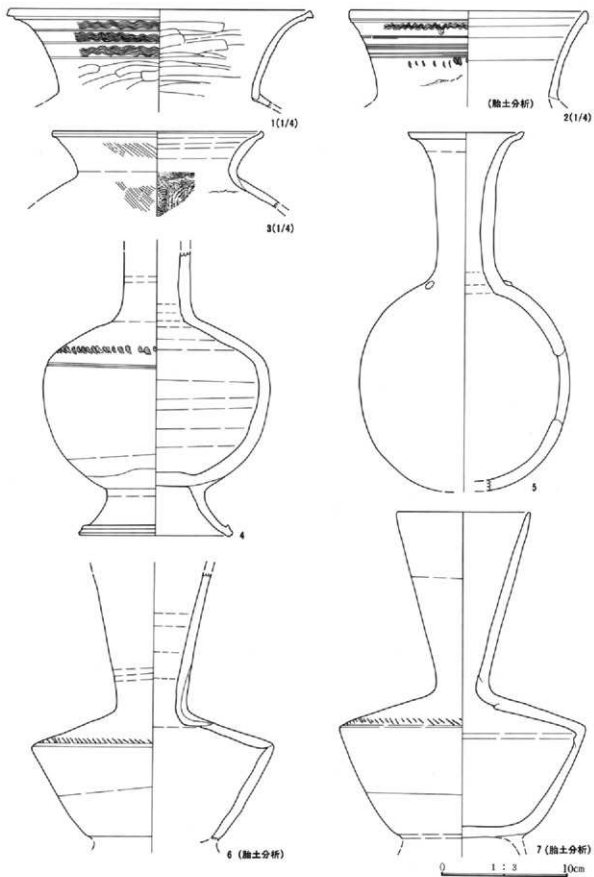
ある。覆土は7層に分かれた。3層がAs-Bの純層である。底面から40〜90cmのところに堆積していた。墳丘は削平されているために検出できなかった。

遺物 周堀内からは須恵器の甕や長頸壺の完形品が出土している。また、周堀全域にわたって礫の分布が認められるが、これらは葦石の崩落したものであろう。この他に、縄文中期前半の土器片107点、中期後半の土器片139点、弥生中期の土器片5点、弥生後期の土器片221点、土師器片690点、須恵器片243点、礫・剥片87点が出土している。

時期 当古墳の築造は6世紀後半と考えられる。



第236図 8号墳

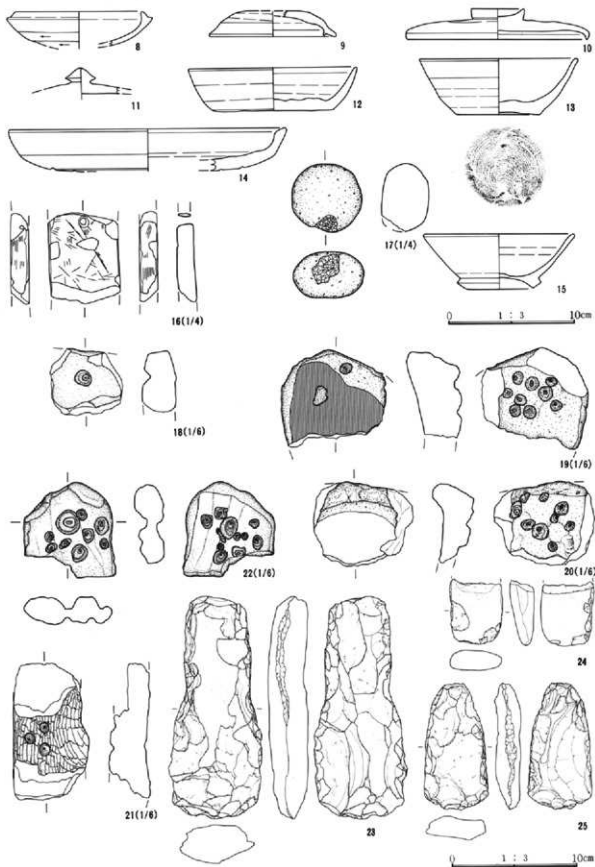


第237図 8号墳出土遺物(1)



第238号 8号 壕

0 1:100 5m



第239図 8号墳出土遺物(2)

8号墳遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況	
			①胎土	②焼成	③色調				
237-1 141	須恵器 壺	①47.6 ②15.4	①細 黒色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	口縁部に節線被伏文。 内面は青濁被文。	周堀内	口縁部1/3	
237-2 141	須恵器 壺	①37.1 ②14.0	①細 白色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	口縁部に節線被伏文、列点刺突を施す。	周堀内	部分	
237-3 141	須恵器 壺	①22.2 ②8.1	①細 黒色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	外面は平行印ち。 内面は青濁被文。	周堀内	部分	
237-4 141	須恵器 短頸壺	②22.5 ③11.6	①細	②還元焰	③褐灰色	右回転クロコ整形、体部下回転へう削り、肩部に列点刺突。	北西部周堀内	一部欠損	
237-5 141	須恵器 埴輪	②9.2 ③28.4	①細 黒色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形。	南西部周堀内	2/3残存	
237-6 141	須恵器 長頸壺	①10.4 ②25.8	①粗 白色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形、体部回転へう削り、肩部に列点刺突。	北西部周堀内	口縁部欠損	
237-7 141	須恵器 長頸壺	③21.3	①粗 白色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形、体部下回転へう削り、肩部に列点刺突。	北西部周堀内	一部欠損	
239-8 141	須恵器 坏	①10.0 ②2.7	①細 白色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	左回転クロコ整形。 底面回転へう削り。	北東部周堀内	1/3	
239-9 141	須恵器 蓋	②2.1 ③10.0	①細 白色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形。 天井部回転へう削り。	北東部周堀内	1/3	
239-10 141	須恵器 蓋	横み4.2 ②4.4③14.3	①粗 片岩粒を含む	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形。 天井部回転へう削り。	北東部周堀内	2/3	
239-11 141	須恵器 蓋	横み2.3 ②2.1	①細 白色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形。 天井部回転へう削り。	周堀内	天井部	
239-12 141	須恵器 坏	①13.3 ②3.4③9.4	①粗 片岩粒を含む	②還元焰	③灰白色	右回転クロコ整形。 底面回転へう削り。	北東部周堀内	口縁部欠損	
239-13 141	須恵器 坏	①12.5 ②4.4③6.4	①細 白色鉱物粒を含む	②還元焰	③灰黄色	右回転クロコ整形。 底面回転へう削り。	北東部周堀内	口縁部欠損	
239-14 141	須恵器 高坏	①22.0 ②3.3	①細	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形。 底面回転へう削り。	周堀内	部分	
239-15 141	須恵器 埴輪	①11.8 ②4.3③5.3	①粗 片岩粒を含む	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形。 高台貼付。	周堀内	1/2	
図番 P.L.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況	
				全長	幅	厚			重量
239-16 141	温石	3/4	赤色珪質板岩	(9.5)	7.4	2.0	(286)	両面・側面研削。微細な削り痕。 直径1cmの穿孔。	周堀内
239-17 141	磨石 (縄文)	完形	安山岩	7.2	7.4	5.0	413	縦打痕が認められる。	周堀内
239-18 141	多孔石 (縄文)	部分	砂岩	(10.5)	(11.5)	5.4	(922)	片面に1個の凹み穴が認められる。	周堀内
239-19 141	石皿 (縄文)	1/4	砂岩	(14.1)	(16.8)	8.2	(3,311)	表面の窪みは浅い。凹み穴1個。 裏面に10個の凹み穴が認められる。	周堀内
239-20 141	石皿 (縄文)	部分	砂岩	(13.0)	(14.5)	4.5	(1,251)	表面の窪みは深い。部分的に欠けている。 裏面に10個の凹み穴が認められる。	周堀内
239-21 141	多孔石 (縄文)	部分	点紋輝石片岩	(21.5)	(12.0)	6.0	(2,265)	両面に計4個の凹み穴が認められる。 部分的に欠けている。	周堀内
239-22 141	多孔石 (縄文)	2/3	砂岩	(15.0)	14.0	4.6	(887)	両面に計24個の凹み穴が認められる。	周堀内
239-23 141	打製石斧 (縄文)	完形	熱変成岩	17.3	7.3	3.1	439	撥型。	周堀内
239-24 141	磨製石斧 (縄文)	刃部	輝岩	(5.6)	4.2	1.9	(69)		周堀内
239-25 141	打製石斧 (縄文)	完形	熱変成岩	9.8	5.0	1.9	108	撥型。	周堀内

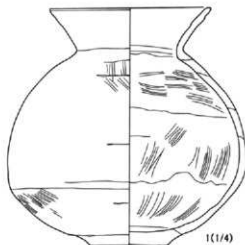
9号墳(第240・241図, PL. 74・141)

位置 Di-29~31, Dj-29~31, Dk-30・31, Dl-28~30, Dm-29・30グリッドにかけて検出された。5号墳の北側、10号墳周堀の南西に位置している。

重複 4号方形周溝墓の北東部分と7号方形周溝墓西溝を壊している。また、J-7号住居跡は墳丘下に存在したものであろう。

周堀 北東部で上幅2.4~7.2m、下幅1~1.9m、深さ70cm、南西部では上幅1.4~6m、下幅0.4~1.4m、深さ70cmである。覆土は大別4層、細分して7層に分かれた。2c層がAs-Bの純層である。底面から40cmのところまで堆積していた。墳丘は削平されているために検出できなかった。

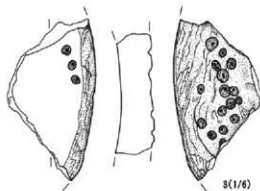
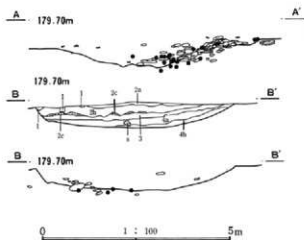
遺物 周堀内からは縄文前期の土器片8点、中期前半の土器片14点、中期後半の土器片44点、弥生中期の土器片32点、弥生後期の土器片64点、土師器片119点、須恵器片24点、鏝・剣片17点が出土している。



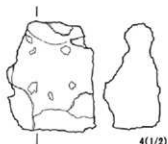
1(1/4)



(胎土分析) 2(1/4)



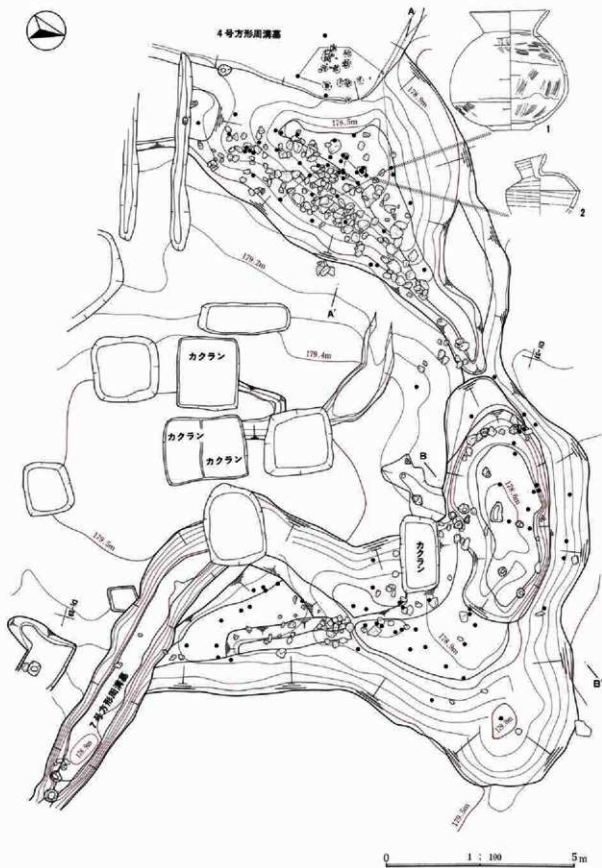
3(1/6)



4(1/2)

- 1 茶褐色土層 As-Aを含む。
 2a 暗褐色土層 粘性ない。As-Bを多量に含む。
 2b 黒色土層 粘性ない。As-Bを多量に含む。
 2c As-B
 3 黒色土層 締まりよく粘性非常にあり。
 4a 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
 4b 黄褐色土層 やわらかくて締まりあり。ローム粒子を多量に含む。

第240図 9号墳と出土遺物



第241図 9号墳

9号墳遺物観察表 (①口徑 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
240-1 141	土師器 壺	①17.0 ②24.8③8.4	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焙 ③赤褐色	胴部外面ミガキ、内面ミガキ。 輪積み痕が残る。	周堀内 2/3残存	4号方形周溝と9号 遺構内から検出
240-2 141	須恵器 平瓶	①7.0 ②11.4	①細 片岩粒を含む ②還元焙 ③黄灰色	右回転ロクロ整形、体部下半は回 転ヘラ削り。	周堀内	2/3残存
図番 P.L.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm, g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
240-3 141	石皿 (縄文)	1/4	点紋緑泥片岩	(26.0) (12.0) 5.0 (2,911)	表面の窪みは浅い。2個の凹み穴。 裏面には15個の凹み穴、部分的に焼けている。	周堀内
240-4 141	鉄滓			4.7 5.7 3.0 106		周堀内

10号墳 (第242・243図、PL.74・142)

位置 De-32・33、Df-32・33、Dg-30~32、Dh-30~32
グリッドにかけて検出された。3号墳の南西に接し、
7号墳周堀の北に位置している。

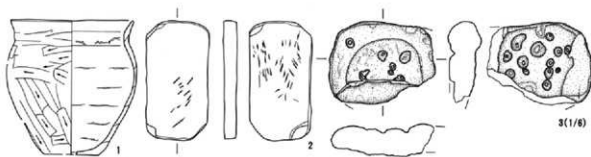
重複 Y-27・28号住居跡を壊している。また、J-10号
住居跡も墳丘下に存在していたものであろう。

周堀 北東部で上幅2.8~4.2m、下幅0.8~1.5m、
深さ85cm、南西部では上幅3.6~7.3m、下幅0.8~
1.6m、深さ1.3mである。覆土は6層に分かれた。

1層がAs-Bを多量に含んでいた。墳丘は削平されて

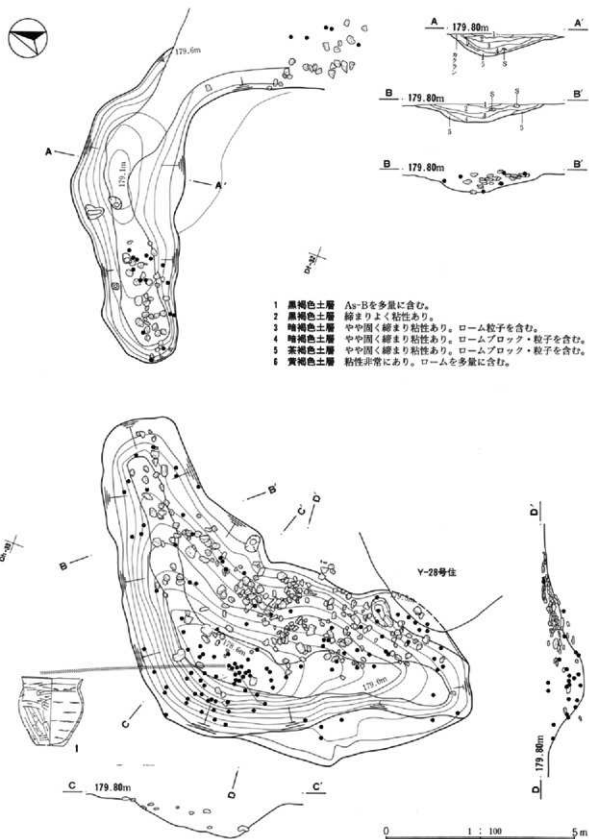
いるために検出できなかった。

遺物 周堀内からは縄文早期の土器片1点、前期の
土器片15点、中期後半の土器片31点、弥生中期の土
器片21点、弥生後期の土器片200点、土師器片192点、
須恵器片7点、鏝・剥片11点が出土している。



10号墳遺物観察表 (①口徑 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
242-1 142	土師器 小型壺	①12.8 ②14.0③6.0	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焙 ③に赤褐色	底面・胴部外面ヘラ削り、口縁部 横ナデ、内面ナデ。	周堀内 2/3残存	外面に煤が付着 している。
図番 P.L.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm, g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
242-2 142	磁石	完形	砂岩	12.5 6.5 1.4 210	小口を除く使用面は4面。	周堀内
242-3 142	多孔石 (縄文)	1/2	砂岩	(13.0) 16.7 5.0 (1,189)	両面に計22個の凹み穴が認められる。 全体的に焼けている。	周堀内



第243図 10号墳

11号墳 (第244～246図, PL. 75-142)

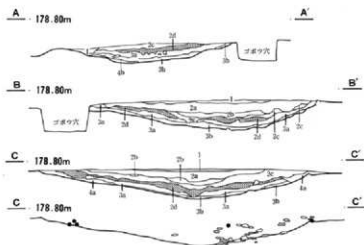
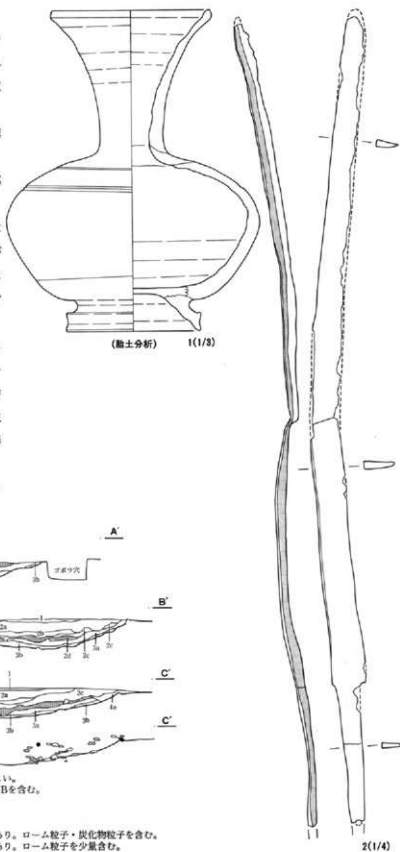
位置 Dm-37・38, Dn-36～38, Do-35～38, Dp-35・36, Dq-35・36, Dr-35・36グリッドにかけて検出された。調査区の西端、12号墳の西約26mのところに位置している。

重複 11号方形周溝墓、13号方形周溝墓を壊して構築されている。

周堀 周堀内縁の径は約14mである。周堀は北東部で上幅2～7.8m、下幅1～2.3m、深さ50～80cm、南西部では上幅2～4.3m、下幅1mである。覆土は大別4層に分かれ、細分すると9層になる。2d層がAs-Bの純層である。底面から約10～20cmのところに堆積している。墳丘は削平されているために検出できなかった。

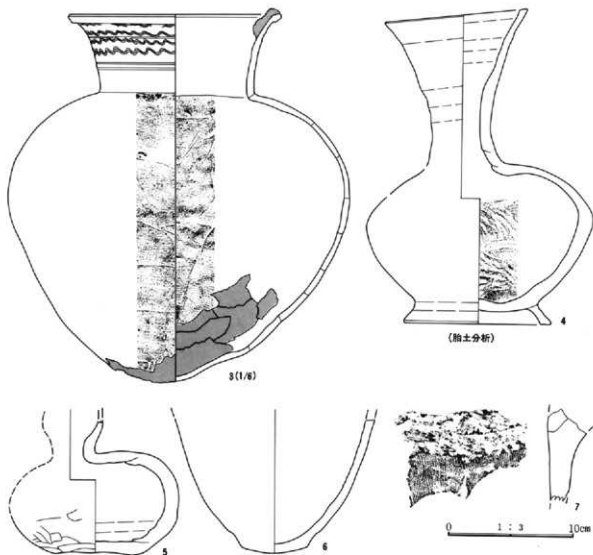
遺物 周堀内からは須恵器の大甕、長頸壺が出土している。また、太刀 (第244図2) は、バックフォーで掘削中に出土したものである。この他に、縄文中期前半の土器片18点、中期後半の土器片8点、弥生中期の土器片13点、弥生後期の土器片12点、土師器片79点、須恵器片14点、礫・剥片が出土している。

時期 当古墳の築造は6世紀後半～7世紀と考えられる。



- 1 暗褐色土層 砂質土。固く締まりよい。
 2a 黒褐色土層 固く締まりよい。As・Bを含む。
 2b 黒色土層 As・Bを少量含む。
 2c 黒褐色土層 As・Bを少量含む。
 2d As・B
 3e 黒色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
 3f 黒色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子を少量含む。
 4a 茶褐色土層 やわらかくて粘性あり。ローム粒子を少量含む。
 4b 茶褐色土層 やわらかくて粘性あり。ロームブロックを少量含む。

第244図 11号墳と出土遺物(1)



第245図 11号墳出土遺物(2)

11号墳遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
244-1	須恵器 142 長頸壺	①12.4 ②25.5③10.4	①粗 白色灰物粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ型形、体部下回転 ヘラ削り。肩部に2条の沈線。	周箱内	ほぼ完形
244-2	刀 142	長80.7g 幅3.2 厚0.8	重量 718g	平造大刀。裨幅8mmの平縁で、 縁区2mm、刃区3mm。	周箱周辺	一部欠損
245-3	須恵器 142 壺	①33.5 ②68.5	①細 白色灰物粒を含む ②還元焰 ③灰色	外面口縁部に柳編波状文。 内面青海波文。	周箱内	ほぼ完形
245-4	須恵器 142 長頸壺	①11.2 ②23.9③11.4	①細 白色灰物粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ型形。 内面青海波文。	周箱内	ほぼ完形
245-5	須恵器 142 平底	②10.7 ③6.1	①細 黒色灰物粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ型形、外面体部下 回転ヘラ削り。	周箱内	一部欠損
245-6	土師器 142 壺	②14.1 ③6.1	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面・胴部外面ヘラ削り、内面ナ ゲ。輪縁のみ残る。	周箱内	底部1/2
245-7	円筒埴輪 142	厚2.2~4.2	①粗粒の砂を混入 ②酸化焰 ③赤褐色	外面は襷刷毛。 内面は横刷毛。	周箱内	部分

12号墳 (第247～249回, PL. 75-142)

位置 Dd-37グリッドを東端、Df-35グリッドを南端、Dh-37を西端に検出された。北側は路線外のために調査することはできなかった。3号墳、13号墳に接している。

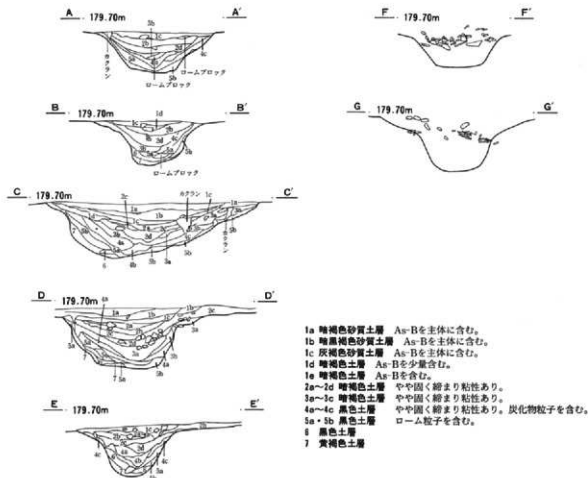
重複 Y-31号住居跡を壊して構築されている。

周塹 周塹内縁の径は約17mであり、現状では全周している。上幅1.3～6.2m、下幅0.7～3.2m、深さ1.1～1.6mである。周塹は南側が広く、西側が狭い。覆土は大別7層に分かれ、細分すると19層になる。1a～1c層がAs-B主体の層である。底面から約80

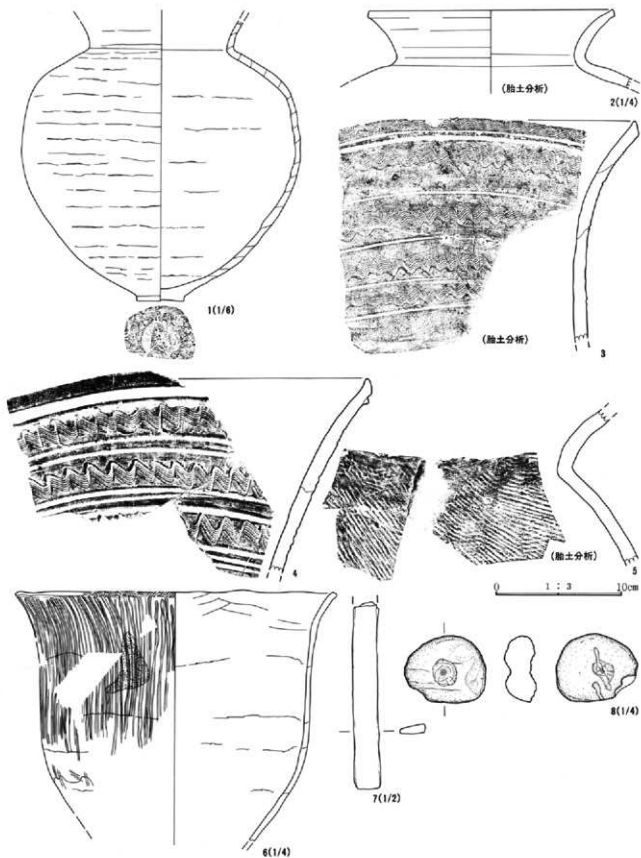
～120cmのところに堆積している。墳丘は削平されているために検出できなかった。

遺物 周塹内からは縄文中期前半の土器片32点、中期後半の土器片4点、弥生中期の土器片3点、弥生後期の土器片245点、土師器片205点、須恵器片51点と多量の礫が出土している。礫は周塹全域から出土しており、葦石の崩落したものであろう。とりわけ、南西部の周塹上層から出土している。

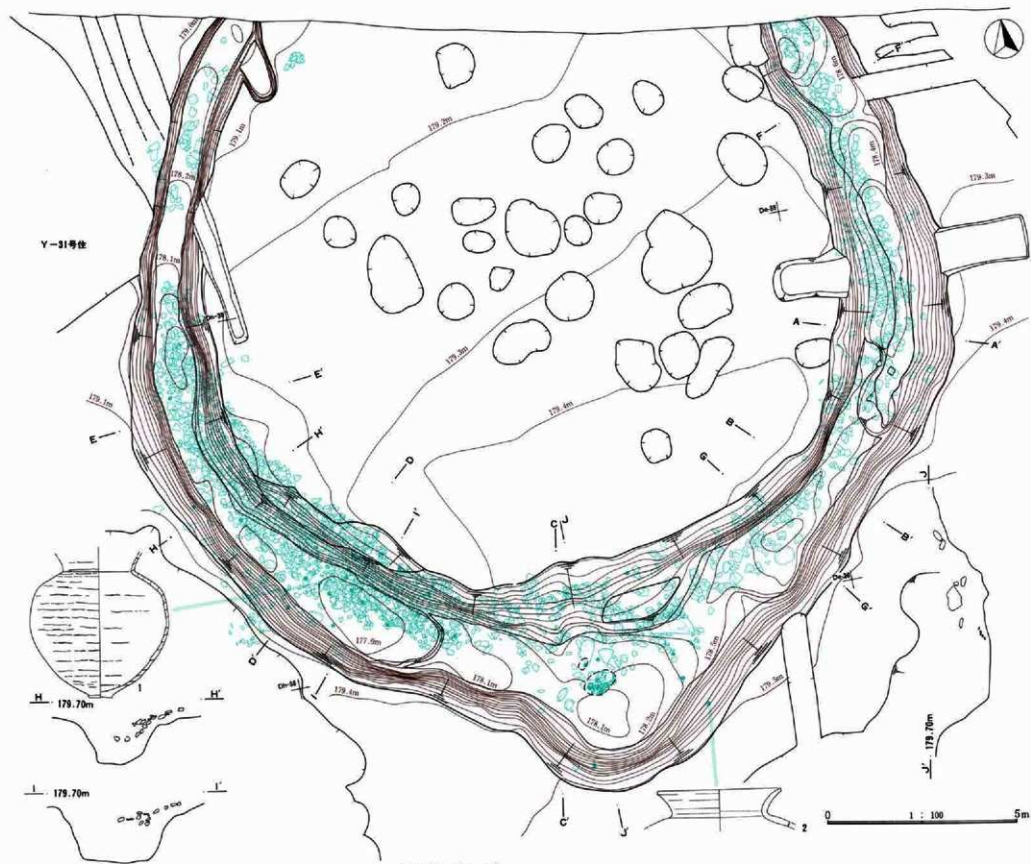
時期 当古墳の築造は6世紀後半と考えられる。



第247回 12号墳



第248図 12号墳出土遺物



第249图 12号墩

12号墳遺物観察表 (①口徑 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
248-1 142	土師器 壺	②44.5 ③7.4	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②還元焰 ③褐色	胴部内外面は剥落し、輪びみ痕が顕著に残る。	周堀内	1/2残存 底面木葉痕
248-2 142	須恵器 壺	①26.0 ②26.3	①細 黒色鉱物粒を含む ②還元焰 ③灰色	外面は平行叩き。 内面は青釉文。	周堀内	口縁部1/4
248-3 142	須恵器 壺	厚1.0	①細 片岩粒を含む ②還元焰 ③灰色	口縁部に衝線状文。	周堀内	部分
248-4 142	須恵器 壺	厚1.0~1.2	①細 黒色鉱物粒を含む ②還元焰 ③灰色	口縁部に衝線状文。	周堀内	部分
248-5 142	須恵器 壺	厚1.0~1.3	①細 黒色鉱物粒を含む ②還元焰 ③灰色	外面は平行叩き。 内面は青釉文。	周堀内	部分
248-6 142	弥生土師 壺	①24.3 ②26.3	①細粒の砂を混入 ②非常に良 ③暗茶褐色	口唇部に縄文。口縁から胴上半にかけて肩位の条痕、ミゴキ。	周堀内	口縁部1/4 外面に煤が付着
248-7 142	鉄製品	長10.3 幅1.4 厚0.5	重量25.8g		周堀内	覆土
図番 P.L.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)	特 徴	出土状況
248-8 142	西石 (縄文)	ほぼ完形	砂岩	全長 7.0 8.3 幅 3.0 重量 (230)	両面に計2個の凹みが認められる。	周堀内

13号墳 (第250-251図、P.L.76)

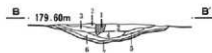
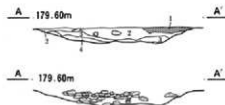
位置 Dg-35、Dh-36、Di-36、Dj-35・36グリッドにかけて検出された。12号墳の南西に接している。

重複 6号方形周溝墓、10号方形周溝墓を壊して構築されている。また、Y-12号住居跡とH-28号住居跡(7世紀前半)は墳丘下に存在していたものと考えられる。

周堀 上幅1~5.7m、下幅0.6~3m、深き50cmである。周堀は北東部は細長く、西部は幅広である。覆土は7層に分かれ、1層がAs-Bの純層である。底

面から約30cmのところに堆積している。墳丘は削平されているために検出できなかった。

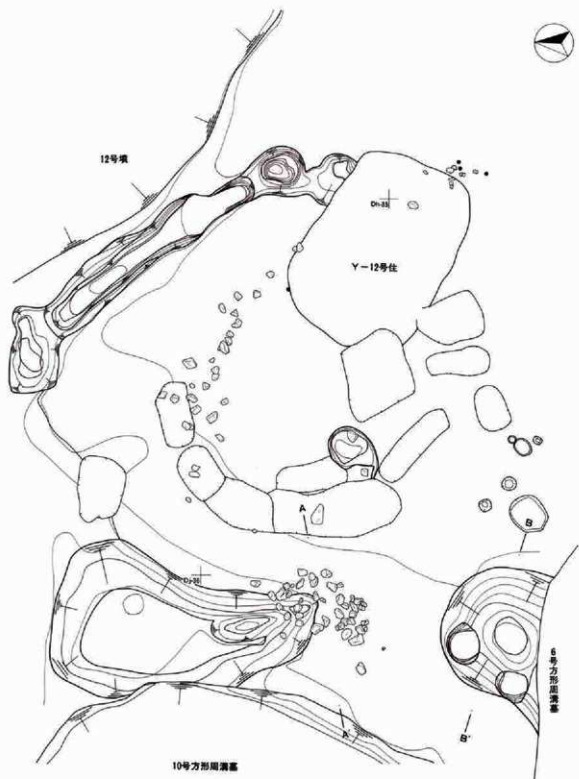
遺物 周堀内からは縄文前期中葉の土器片1点、弥生中期の土器片16点、弥生後期の土器片1点、土師器片13点、鏃・刺片3点が出土している。



- 1 黒色砂質土層 As-B。
- 2 灰黒色砂質土層 1層より粒子が細かい。
- 3 茶褐色土層 黄色粒子を含む。
- 4 暗褐色土層 黄色粒子を含む。
- 5 暗褐色土層 4層よりも明るい色調。
- 6 黒褐色土層 やや固く総まり粘性あり。
- 7 暗褐色土層 粘性あり。ローム粒子を含む。

0 1 : 100 5m

第250図 13号墳



第251図 13号墳

14号墳 (第252・254図, PL. 76)

位置 Ct-28・29, Da-28~30, Db-29~31, Dc-28~31, Dd-27~29グリッドにかけて検出された。7号墳、15号墳に挟まれている。

重複 Y-8号住居跡、Y-14号住居跡、Y-35号住居跡を壊している。

周堀 周堀内縁の径は約15mである。周堀は上幅1~10.5m、下幅0.4~6m、深さ0.7~1.2mである。北部で幅広で深く、覆土は大別5層に分かれ、細分すると12層に分かれた。1c層がAs-Bの純層である。底面から約50~70cmのところに堆積している。墳丘は削平されているために検出できなかった。

遺物 周堀内からは縄文前期中葉の土器片12点、前期後半の土器片1点、中期前半の土器片25点、中期後半の土器片5点、弥生中期の土器片4点、弥生後期の土器片92点、土師器片76点、須恵器片10点、礫・剥片14点が出土している。

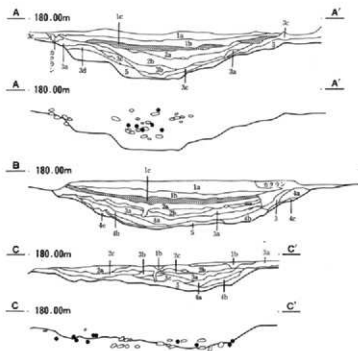
15号墳 (第253・255図, PL. 78・142)

位置 Cp-29・30, Cq-29・30, Cr-29・30, Cs-29・30, Ct-29~31グリッドにかけて検出された。2号墳、8号墳、14号墳に囲まれている。

重複 Y-26号住居跡を壊している。

周堀 周堀内縁の規模は約14mであり、上幅2.5~3.6m、下幅1~2m、深さ70cmである。周堀は東部と西部にわかれている。覆土は大別5層に分かれ、細分すると7層に分かれた。1層がAs-B主体の層である。底面から約60cmのところに堆積している。墳丘は削平されているために検出できなかった。

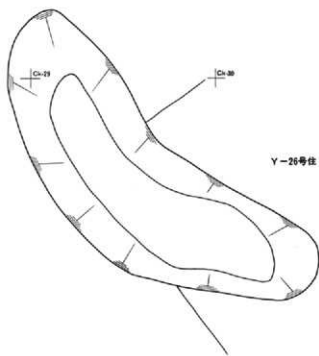
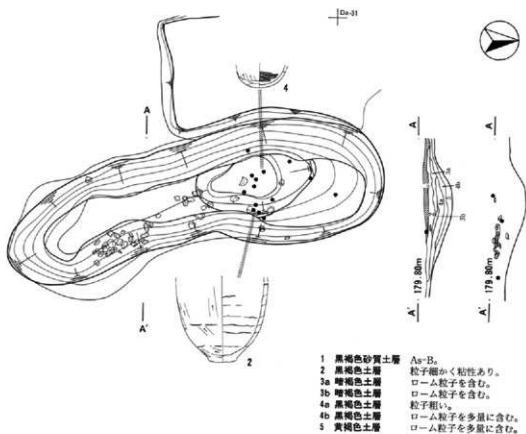
遺物 周堀内からは縄文前期中葉の土器片2点、弥生後期の土器片4点、土師器片41点が出土している。



- | | | |
|----|---------|------------------|
| 1a | 暗褐色砂質土層 | As-Bを含む。 |
| 1b | 暗褐色砂質土層 | As-Bを含む。 |
| 1c | As-B | |
| 2a | 暗褐色土層 | 粒子細かく粘性あり。 |
| 2b | 暗褐色土層 | 2a層よりやや明るい色調。 |
| 3a | 暗褐色土層 | ローム粒子を含む。 |
| 3b | 暗褐色土層 | 3a層よりローム粒子を多く含む。 |
| 3c | 暗褐色土層 | 粒子細かく粘性あり。 |
| 3d | 暗褐色土層 | 粒子細かく粘性あり。 |
| 4a | 黒褐色土層 | 粒子細かく粘性あり。 |
| 4b | 黒褐色土層 | ロームブロックを含む。 |
| 4c | 黒褐色土層 | ロームブロックを含む。 |
| 5 | 黄褐色土層 | ローム主体の層。 |

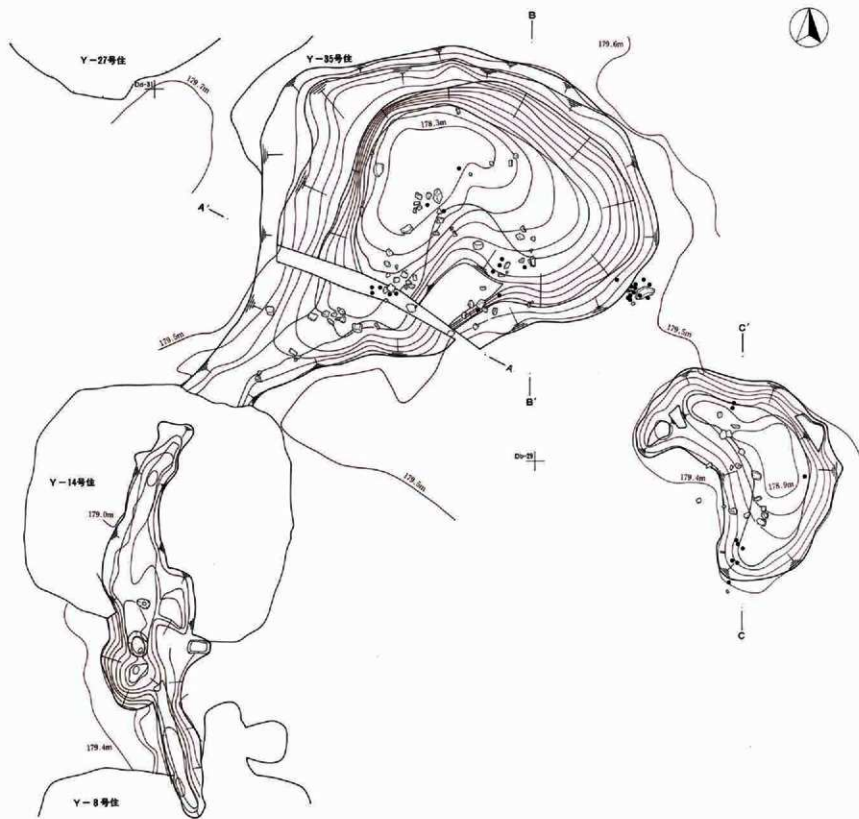
0 1 : 100 5m

第252図 14号墳



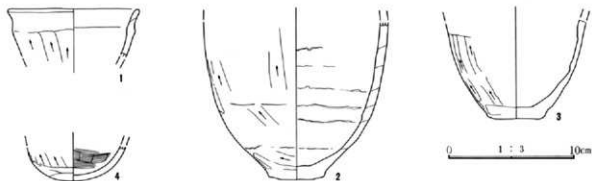
0 1:100 5m

第253図 15号墳



第254图 14号墳

0 1 : 100 5m



第255図 15号墳出土遺物

15号墳遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L	土器種別 器種	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
255-1 142	土師器 小型甕	①14.0 ②5.0	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	周堀内	口縁部1/4
255-2 142	土師器 甕	②3.5	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面・胴部外面へラ削り、内面ナ デ、輪痕み痕が顕著に残る。	周堀内	胴下半部
255-3 142	土師器 甕	②16.5 ③6.0	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面・胴部外面へラ削り。 内面ナデ。	周堀内	底部1/2
255-4 142	土師器 甕	②10.4 ③6.0	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へラ削り。 内面ナデ。	周堀内	底部

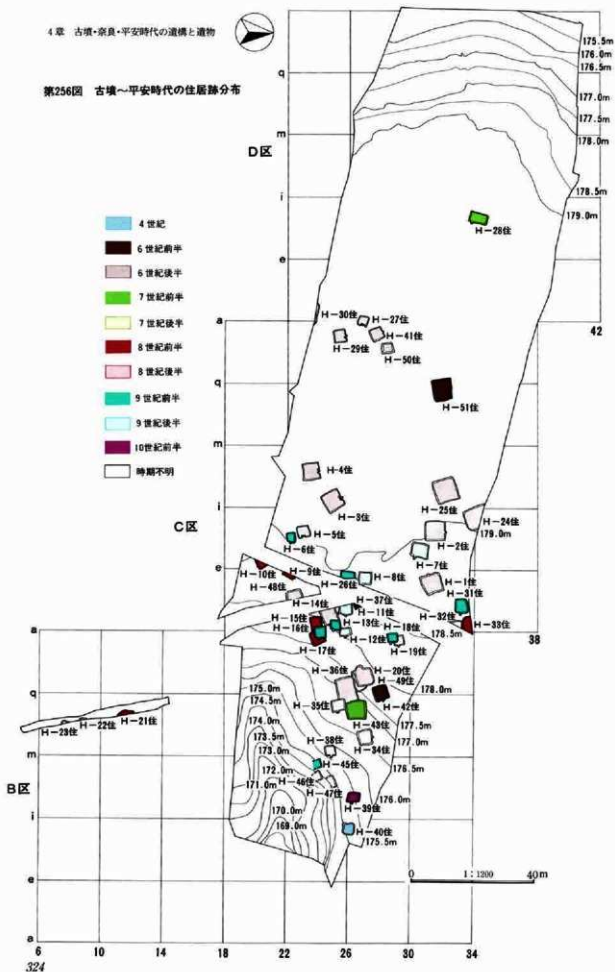
4章 古墳・奈良・平安
時代の遺構と遺物

- (3) 竪穴住居跡
- (4) 掘立柱建物跡



掘立柱建物跡の調査

第256図 古墳～平安時代の住居跡分布



H-1号住居跡 (第257~260図, PL. 78・79・142・143)

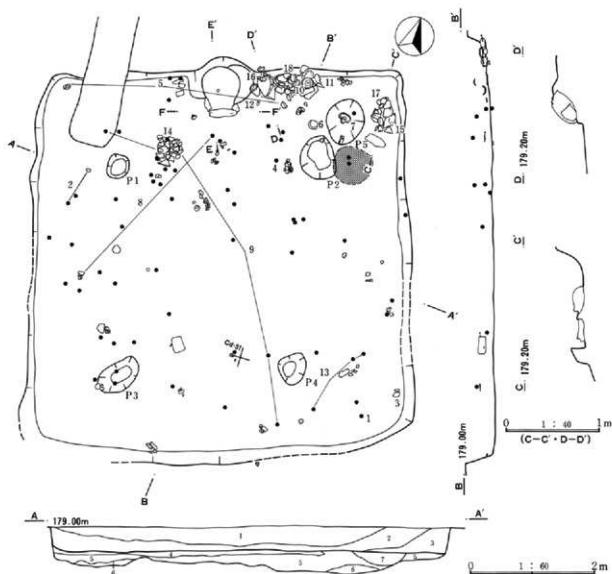
位置 Cc-30・31, Cd-30・31グリッドにかけて検出された。H-2号住居跡の東約10mの所に位置している。新しい土坑によって一部壊されている。

形状 長辺6.4m、短辺6.1mのほぼ正方形。

方位 N-19°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は7層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約30~45cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。



- 1 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に、白色粒子・焼土粒子も含む。
- 2 黒褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ローム粒子・白色粒子・焼土粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 やわらかくて締まりよくない。ローム粒子を多量に、白色粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 粘束。固く締まり粘性非常にあり。ロームと黒色土の混合土。焼土ブロックも含む。

- 5 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 6 黄褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性非常にあり。ロームを主体に含む。
- 7 黒褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームブロックを多量に含む。

第257図 H-1号住居跡

床 面 貼床でほぼ平坦である。面積は約33.9㎡。

掘り方 凹凸が非常にある。東部分に大きな窪地があり、貼床下から少量の土器片が出土している。

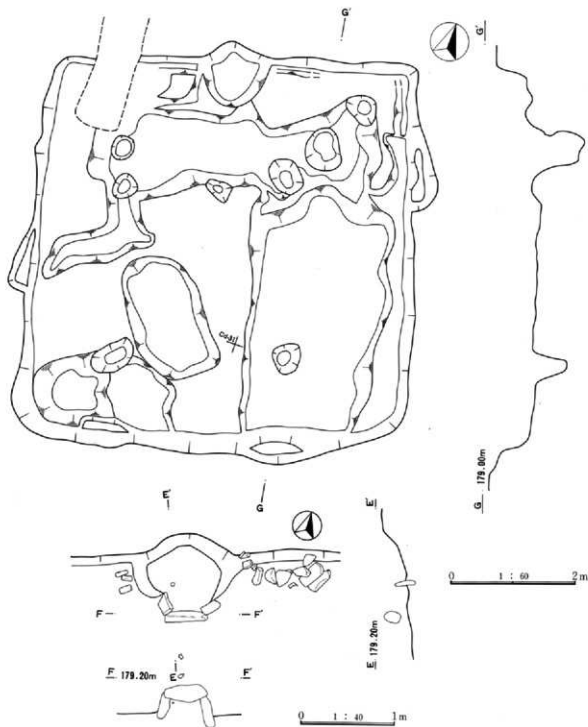
周 溝 検出できなかった。

竈 北壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。袖部は約70cm残

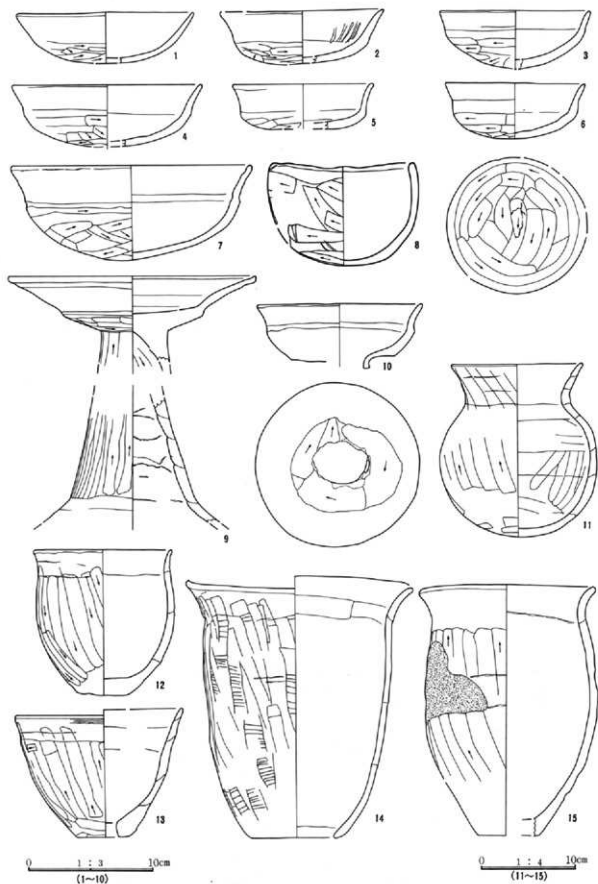
存。規模は煙道方向95cm、両袖方向110cmである。

柱 穴 4個の柱穴が検出された。P 1は深さ46cm、P 2深さ62cm、P 3深さ69cm、P 4深さ52cmである。

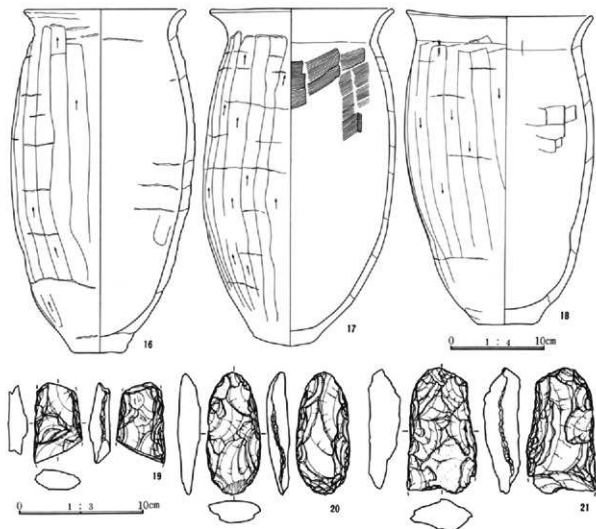
貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P 5は長径75cm、短径60cm、深さ93cmである。南側に焼土の堆積が認められた。



第258図 H-1号住居跡掘り方とカマド



第259图 H-1号住居跡出土遺物(1)



第260図 H-1号住居跡出土遺物(2)

遺物 竈や貯蔵穴周辺から土師器の坏や甕が出土し、覆土から土師器片256点、須恵器片7点、その他に縄文前期土器片9点、中期土器片114点、弥生後期

土器片115点、礫・剥片33点が出土している。

時期 6世紀後半。

H-1号住居跡遺物観覧表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種類 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	現存状況
259-1 142	土師器 坏	①14.0 ②4.0	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南東隅	1/4残存
259-2 142	土師器 坏	①15.1 ②4.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状へら磨き。	北西隅	口縁部欠損
259-3 142	土師器 坏	①12.0 ②4.6	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面は丁寧なナデ。	南東隅	1/4残存
259-4 142	土師器 坏	①15.1 ②5.0	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③灰褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	P 2 脇	1/3残存
259-5 142	土師器 坏	①11.2 ②3.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	北壁寄り	1/3残存
259-6 142	土師器 坏	①11.0 ②4.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面は丁寧なナデ。	貯蔵穴脇 口縁一次掘	口縁部の欠損は使用時のものと考えられる
259-7 142	土師器 坏	①19.2 ②7.4	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	貯蔵穴内 口縁部内面一部	口縁部内面一部 荒れている

H-1号住居跡遺物観察表(①口徑 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
259-8 142	土師器 小型甕	①11.2 ②8.0	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③灰褐色	底面・胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	北西部	口縁部1/2
259-9 142	土師器 高坏	①19.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	坏底面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。胴部内面に輪積み痕。	北西部他	胴部一部欠損
259-10 142	土師器 高坏	①13.0 ②5.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	坏底面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北壁付近	胴部欠損
259-11 142	土師器 小型甕	①13.7 ②18.2	①中粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③よい褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北壁付近	口縁部荒れている 完形
259-12 142	土師器 小型甕	①14.6 ②15.4 ③5.6	①粗砂と3~5mmの片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③よい褐色	底面へラ削り、胴部へラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	カマド付近	完形
259-13 142	土師器 小型甕	①17.8 ②13.5 ③5.5	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③よい褐色	底面ナデ、胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	南東隅	内面に保付着 口縁一部欠損
259-14 142	土師器 甕	①24.2 ②27.7 ③8.6	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。内面は丁寧なナデ。	北西部	完形
259-15 143	土師器 甕	①18.4 ②26.5 ③6.5	①粗砂と3~5mmの片岩粒を含む ②酸化焰 ③よい赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北東隅	外面に保付着 底部欠損
260-16 143	土師器 甕	①17.0 ②36.6 ③5.5	①粗砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③暗赤褐色	底面ナデ、胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	カマド付近	内外面に輪積み 痕が残る
260-17 143	土師器 甕	①19.4 ②36.0 ③6.5	①中粒の砂と3~5mmの片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③明黄褐色	底面へラ削り、胴部へラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	北東隅	外面に保付着 口縁一部欠
260-18 143	土師器 甕	①19.4 ②32.7 ③6.4	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③赤暗褐色	底面ナデ、胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	北壁付近	ほぼ完形
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)	特 徴	出土状況
260-19 143	打製石斧	刃部欠損	熱変成岩	(6.3) 3.8 1.7 (41.4)	正面下端に使用による磨痕残る。短冊型。	覆土
260-20 143	打製石斧	完形	熱変成岩	9.5 4.2 1.7 77.2	側面に、手ざれと見られる跡がある。	覆土
260-21 143	打製石斧	刃部欠損	熱変成岩	(9.8) 5.5 2.7 (144.5)	短冊型。	覆土

H-2号住居跡(第261~263図、PL.88・143)

位置 Cf-30~32、Cg-30~32、Ch-30~32グリッドにかけて検出された。H-25号住居跡の東約5.5mの所に位置している。Y-3号住居跡とY-10号住居跡を壊している。

形状 長辺6.8m、短辺6.4mのほぼ正方形を呈している。

方位 N-2°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約40~50cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。面積は約34.3㎡。
掘り方 凹凸が非常にある。貼床下から少量の土器片が出土している。

周溝 検出できなかった。

竪穴 北壁中央部やや東寄りに位置し、燃焼部の大部分は壁面から床面にかけて構築されている。袖部は約70cm残存。規模は煙道方向100cm、両袖方向80cmである。

柱穴 5個の柱穴が検出された。P1は深さ38cm、P2深さ59cm、P3深さ42cm、P4深さ33cm、P5深さ39cmである。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P6は長径92cm、短径60cm、深さ73cmである。

遺物 床面南半分から土師器の坏や甕が多量に出土し、土師器片422点、須恵器片4点、この他に縄文前期土器片2点、中期土器片99点、弥生後期土器片307点、鏃・刺片20点が出土している。

時期 6世紀後半。



- 1 赤褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームブロック・砂子、焼土粒子・白色粒子を多量に含む。
- 2 黒褐色土層 やわらかくて粘性非常にあり。ロームブロック・砂子、焼土粒子・炭化物粒を含む。
- 3 暗褐色土層 固く締まり粘性非常にあり。ロームブロック・砂子を多量に含む。
- 4 黄褐色土層 固く締まり粘性非常にあり。ローム主体、わずかに黒色土を含む。

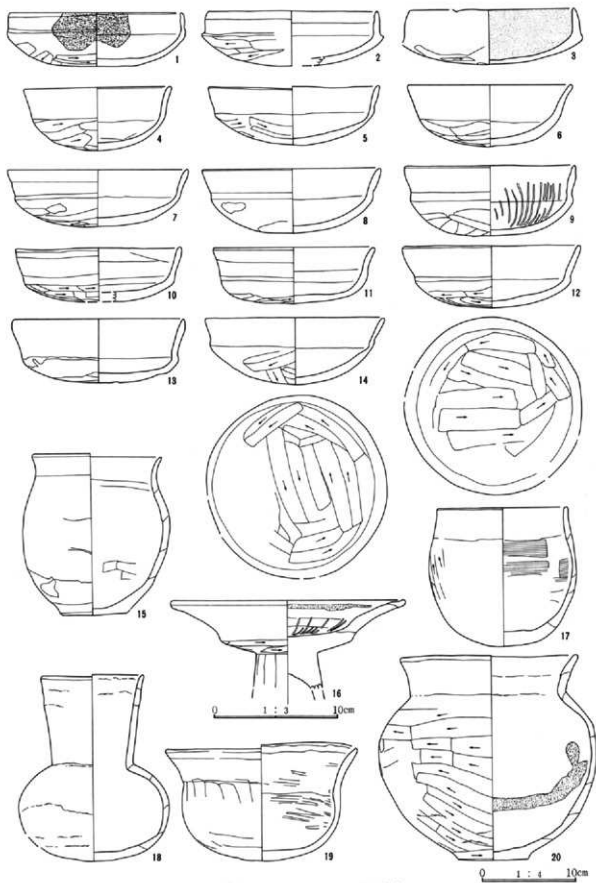
カマド (D-D')

- 1 赤褐色土層 焼土を含む。
- 2 黄褐色土層 焼土を含む。
- 3 暗褐色土層 1・2層に比べて焼土を多く含む。
- 4 黄褐色土層 炭化物粒子・焼土粒子を含む。
- 5 黄褐色土層 4層よりも暗い色調。
- 6 赤褐色土層 焼土を多量に含む。
- 7 黄褐色土層 焼土粒子・ローム粒子を含む。
- 8 焼土ブロック



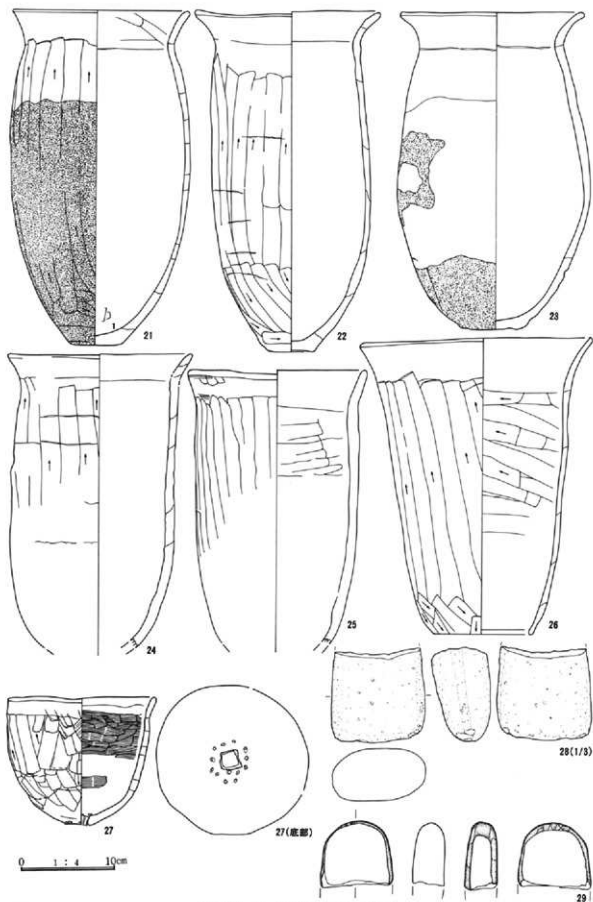
0 1 : 40 1m
(D-D'・E-E')

第261図 H-2号住層跡



第262图 H-2号住居跡出土物(1)

(15-17-20)



H-2号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
			全長	幅	厚			
262-1 143	土師器 坏	①14.0 ②4.3	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③にぶい黄褐色	底面へう削り、口縁部ナデ。内面 ナデ、内面は平坦。	南東隅	3/4残存		
262-2 143	土師器 坏	①13.4 ②4.3	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③にぶい棕色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、縁は明瞭。	中央部	3/4残存		
262-3 143	土師器 坏	①13.2 ②4.3	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③灰褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、内面黒漆か。	中央部	3/4残存		
262-4 143	土師器 坏	①11.6 ②5.0	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③にぶい赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へうの工具痕あり。	P5付近	ほぼ完形		
262-5 143	土師器 坏	①13.7 ②4.6	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	中央部	ほぼ完形		
262-6 143	土師器 坏	①13.0 ②4.9	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②焼成胎 ③明赤褐色	底面へう削り、ナデ、口縁部横 ナデ。内面ナデ。	南部	3/4残存		
262-7 143	土師器 坏	①14.2 ②4.5	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。内 面ナデ。底面は吸炭による黒褐色。	中央部	完形		
262-8 143	土師器 坏	①14.1 ②5.1	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	底面全体の表面剥離のため、整形 不明。口縁部横ナデ、内面剥落。	中央部	ほぼ完形		
262-9 143	土師器 坏	①13.5 ②5.5	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。底面は吸炭による黒褐色。	中央部	完形		
262-10 143	土師器 坏	①13.0 ②4.2	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南東隅	1/3残存		
262-11 143	土師器 坏	①12.8 ②4.4	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③にぶい黄褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁寄り	ほぼ完形		
262-12 143	土師器 坏	①14.1 ②4.8	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、新高。	中央部	完形		
262-13 143	土師器 坏	①13.6 ②5.1	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	中央部	ほぼ完形		
262-14 143	土師器 坏	①14.0 ②5.3	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、剥落。	南東部	完形		
262-15 143	土師器 小型甕	①13.8 ②17.2 ③6.8	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②焼成胎 ③褐色	胴部外面弱いへう削り、口縁部横 ナデ。内面ナデ。	中央部	内面に傷が付着 ほぼ完形		
262-16 143	土師器 高坏	①18.4 ②18.4	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③明赤褐色	胴外面へう磨き、内面輪積み痕。 坏底部へう削り、口縁へ内面横ナデ。	中央部	坏内面底面に黒 かなへう磨き		
262-17 143	土師器 小型甕	①14.0 ②14.7	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②焼成胎 ③にぶい棕色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面は丁寧ナデ。	北西部	内面に残存は黒 褐色で裏面密		
262-18 143	土師器 小型甕	①10.7 ②19.7	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②焼成胎 ③褐色	胴部外面ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、輪積み痕が残る。	中央部	ほぼ完形		
262-19 143	土師器 鉢	①20.3 ②12.3 ③4.3	①細粒の砂を混入 ②焼成胎 ③褐色	胴部外面浅いへう削り、口縁部横 ナデ。内面ナデ、ミガキ。	南壁寄り	器表面密 完形		
262-20 143	土師器 甕	①18.6 ②21.6 ③7.5	①細粒の砂と片岩粒を含む ②焼成胎 ③明赤褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	南壁寄り	内面に灰化物が 付着 ほぼ完形		
263-21 143	土師器 甕	①18.6 ②35.7 ③5.6	①細粒の砂と片岩粒を含む ②焼成胎 ③にぶい黄褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、 口縁部横ナデ。内面ナデ。	南壁寄り	器表面密 胴部外面に灰付着 ほぼ完形		
263-22 143	土師器 甕	①19.4 ②36.2 ③4.6	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②焼成胎 ③明赤褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、 口縁部横ナデ。内面ナデ。	中央部	胴部外面に灰が 付着 ほぼ完形		
263-23 143	土師器 甕	①19.3 ②33.8 ③6.8	①粗砂と3~5mmの片岩粒を多量に含む ②焼成胎 ③褐色	胴部外面弱いへう削り、口縁部横 ナデ。内面ナデ。	南壁寄り	胴部外面に灰付 着 ほぼ完形		
263-24 143	土師器 甕	①19.5 ②27.0	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②焼成胎 ③にぶい褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	北西部	底部欠損		
263-25 143	土師器 甕	①18.7 ②31.5 ③10.2	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②焼成胎 ③にぶい棕色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、輪積み痕が残る。	東壁寄り	底部欠損		
263-26 143	土師器 甕	①24.7 ②31.5 ③10.2	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②焼成胎 ③褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面丁寧ナデ。	南東部	内面の器表面密 口縁・胴一部欠		
263-27 143	土師器 小型甕	①15.5 ②13.4 ③2.5	①細粒の砂と片岩粒を含む ②焼成胎 ③にぶい赤褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、一部に輪積み痕。	中央部	底面へう削り後 小穴		
図番 P.L	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況
263-28 143	磨製石斧	刃部	輝岩	(7.3)	7.4	4.4 (434.3)		覆土
263-29 143	磨石	1/2	安山岩	(6.8)	7.3	3.2 (259)	全面に剥離痕と一部磨打痕が認められる。	覆土

H-3号住居跡(第264~266図、PL. 81・144)

位置 Ch-24・25、Ci-24・25、Cj-24・25グリッドにかけて検出された。H-4号住居跡の北東約5mの所に位置している。

形状 長辺6.4m、短辺6.3mの正方形を呈している。

方位 N-30°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

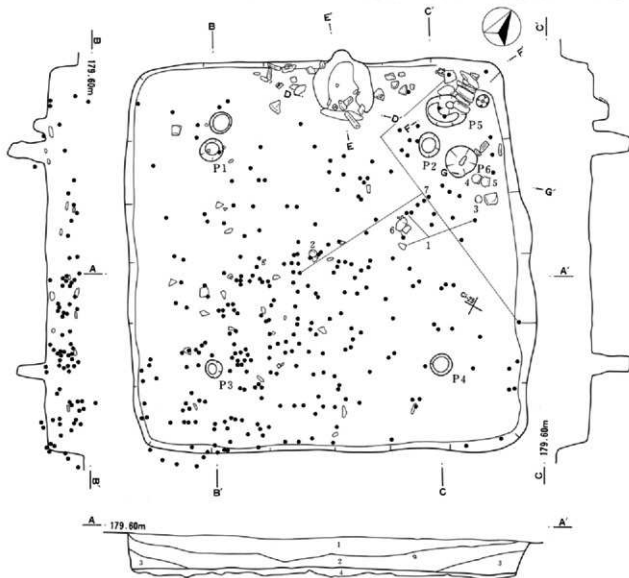
壁高 住居跡確認面より約44~58cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼土ではほぼ平坦である。面積は約35.1㎡。

掘り方 住居西部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 北壁中央部に位置している。燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。袖部は約70cm残存。規模は煙道方向110cm、両袖方向90cmである。

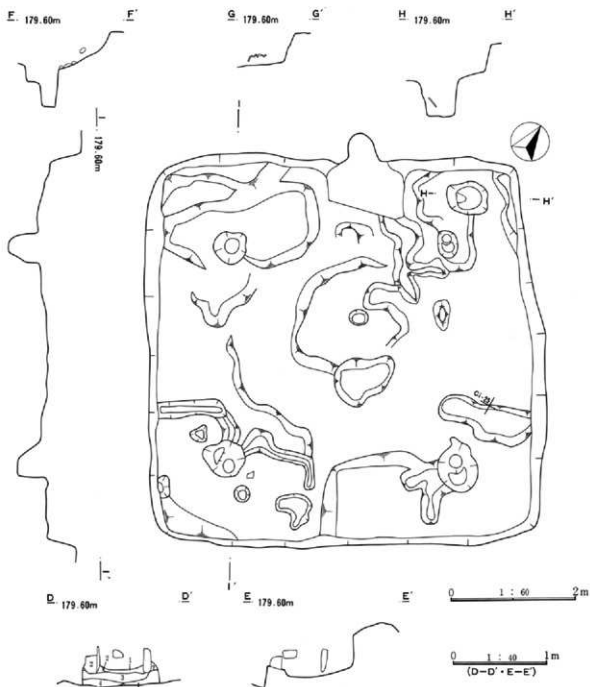


- 1 黒褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化物粒子を少量含む。
- 3 黄褐色土層 やわらかくて粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 4 黄褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームと黒色土の混合土。

第264図 H-3号住居跡

柱 穴 4個の柱穴が検出された。P 1は深さ60cm、P 2深さ64cm、P 3深さ46cm、P 4深さ62cmである。
貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P 5は長径64cm、短径52cm、深さ58cmである。

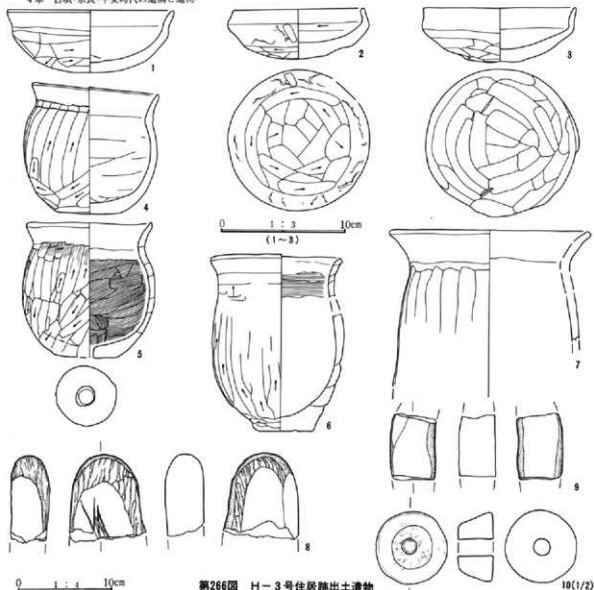
遺 物 電や貯蔵穴周辺から土師器の坏や甕が多く出土している。また覆土中からは縄文中期土器片499点、弥生後期土器片148点、礫・剝片22点も出土した。多量の縄文土器片の存在は、周辺に中期の列石が存



- 1 赤褐色土層 焼土層。やや固く粘性はなくサラサラしている。
- 2 茶褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性あり。ロームブロック・粒子、焼土粒子を多量に含む。
- 3 黒色土層 粘床覆土。やわらかくて締まりよい。粘性少しあり。ロームブロックを多量に含む。
- 4 黄褐色土層 粘床覆土。やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ロームと黒色土の混合土。

第265図 H-3号住居跡掘り方とカマド

4章 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第266図 H-3号住居跡出土遺物

10(1/2)

在していたためであろう。

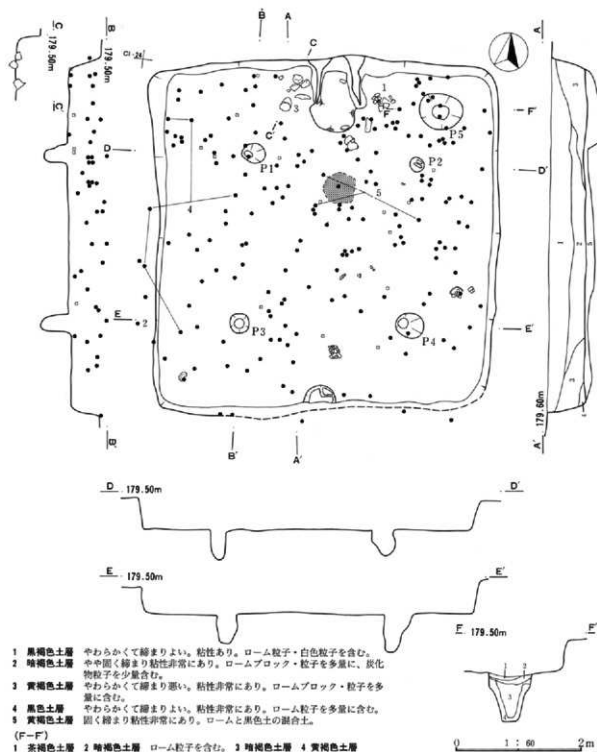
時期 6世紀後半。

H-3号住居跡遺物数量表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況	
			全長	幅	厚				
266-1 144	土師器 杯	①13.2 ②6.0	①細粒の砂を含む	②酸化焰	③褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕あり。	東部寄り	1/2	
266-2 144	土師器 杯	①10.2 ②3.9	①細粒の砂を含む	②酸化焰	③灰褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕あり。	中央部	完形 口縁部に使時欠損	
266-3 144	土師器 杯	①12.0 ②4.3	①細粒の砂を含む	②酸化焰	③褐色	底面へら削り、ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	P 6付近	ほぼ完形	
266-4 144	土師器 小型壺	①13.3 ②13.4 ③6.5	①細粒の砂を含む	②酸化焰	③褐色	底面・胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデで器表面密着。	P 6付近	完形	
266-5 144	土師器 小型壺	①13.2 ②14.3 ③6.4	①細粒の砂を含む	②酸化焰	③褐色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデで器表面密着。	P 6付近	底部に小穴を開け 瓶としている	
266-6 144	土師器 小型壺	①14.0 ②18.7 ③6.5	①中粒の砂と片岩粒を含む	②酸化焰	③灰褐色	底面・胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	東部寄り	内面に障が付着 完形	
266-7 144	土師器 壺	①20.9 ②16.7	①粗砂と3~5mmの片岩粒を多量に含む	②酸化焰	③黒褐色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	東縁付近	器面荒れている 胴下半欠損	
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況	
266-8 144	砥石	1/2	緑葉緑泥片岩	(9.0)	7.5	4.0	(525)	使用面は3面。1面に細い条痕が認められる。	覆土

H-1号住居跡遺物観察表 (①口徑 ②器高 ③底径)

図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特 徴	出土状況	
				全長	幅	厚			
266-9 144	磨石	2/3	安山岩	(6.8)	4.8	3.9	(264)	両面に磨耗痕が認められる。	覆土
266-10 144	紡錘車	完形	蛇紋岩	径3.7	孔径0.8	1.8	39.1	表面全体に目の細かい削り痕が残る。 線刻が施されている。	覆土



H-4号住居跡 (第267~269図, PL. 82-144)

位置 Cj-23・24, Ck-22~24グリッドにかけて検出された。H-3号住居跡の南西約5mの所に位置している。

形状 長辺5.6m、短辺5.4mの正方形を呈している。

方位 N-8°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約42~60cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。面積は約30.2㎡。

掘り方 住居西部で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

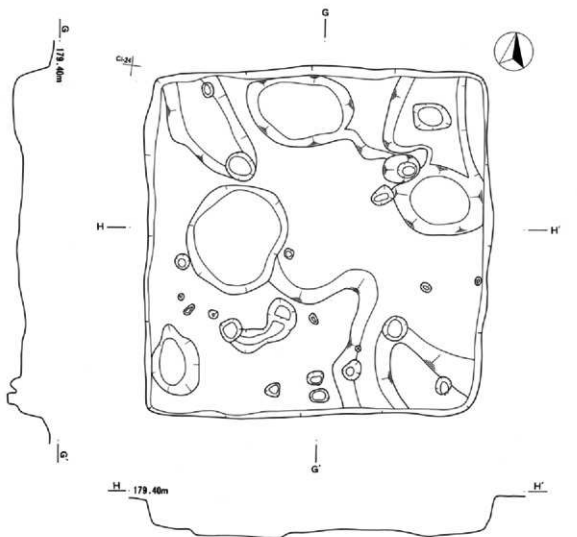
竈 北壁中央部に位置し、燃焼部を住居内に持ち袖を有する。袖部は約80cm残存している。規模は煙道方向120cm、両袖方向80cmである。

柱穴 4個の柱穴が検出された。P1は深さ60cm、P2深さ55cm、P3深さ46cm、P4深さ40cmである。

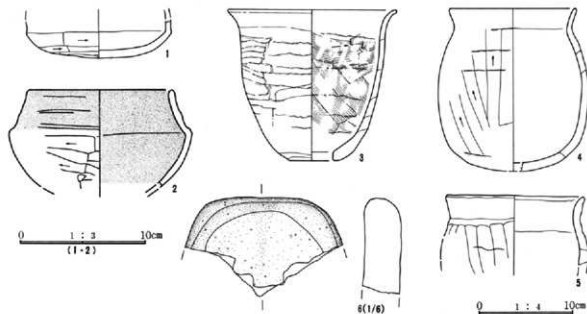
貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P5は長径70cm、短径58cm、深さ72cmである。

遺物 竈西側から土師器の坏や甕が出土し、土師器片220点、この他に縄文中期土器片314点、弥生後期土器片116点、礫・剝片10点が出土している。

時期 6世紀後半。



第268図 H-4号住居跡掘り方



第269図 H-4号住居跡出土遺物

H-4号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況	
			胎土	焼成	色調				
269-1	土師器	②2.8	①細粒の砂と片岩粒を少量含む	②酸化焰	③明赤褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。	カマド付	2/3	
144	坏	②7.6	①酸化焰	②明赤褐色		内面ナデ。			
269-2	土師器	①11.4	①細粒の砂を混入	②酸化焰	③黒褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。	覆土	1/4残存	
144	坏	②7.6	①酸化焰	②黒褐色		内面ナデ、口縁・内面に黒漆か。			
269-3	土師器	①17.8	①細粒の砂を混入	②酸化焰	③褐色	底面へら削り、胴部外面ナデ。	カマド付近	胴部外面輪積み	
144	小型甕	②16.0 ③5.0	①酸化焰	②褐色		口縁部横ナデ。内面丁寧ナデ。	ほぼ充形	痕跡著に残る	
269-4	土師器	①13.3	①細粒の砂を混入	②酸化焰	③褐色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。	西壁寄り	口縁部1/3	
144	小型甕	②17.2	①酸化焰	②褐色		内面丁寧ナデ。		胴部外面に輪積み痕	
269-5	土師器	①14.0	①中粒の砂と片岩粒を含む	②酸化焰	③灰褐色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。	中央部	口縁部1/3	
144	小型甕	②7.2	①酸化焰	②灰褐色		内面ナデ。			
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況	
				全長	幅	厚			重量
269-6	台石	1/3	安山岩	(25.4)	(15.5)	6.0	(3,679)	表面が焼けている。	覆土

H-5号住居跡(第270~273図、PL.83・84・144)

位置 Cg-22・23グリッドにかけて検出された。H-6号住居跡の北約1mの所に位置している。

形状 長辺4m、短辺3.9mの正方形を呈している。

方位 N-80°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約30~50cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。面積は約13.9㎡。

掘り方 住居中央部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

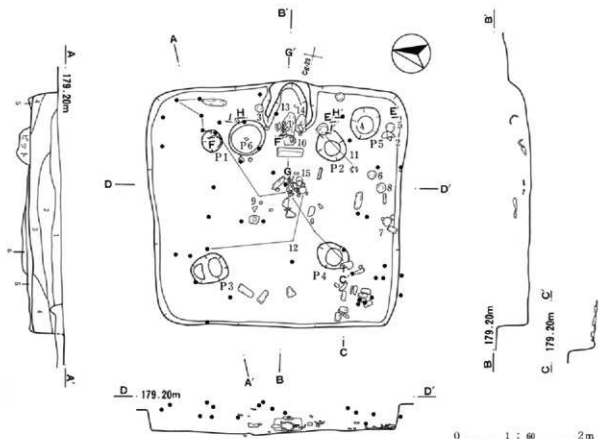
竈 東壁中央に位置し、燃焼部を住居内に持ち袖を有する。袖部は約80cm残存している。規模は煙道方向120cm、両袖方向90cmである。

柱穴 4個の柱穴が検出された。P1は深さ21cm、P2深さ17cm、P3深さ41cm、P4深さ19cmである。

貯蔵穴 床面南東隅から検出された。P5は長径56cm、短径48cm、深さ58cmである。

遺物 竈上や南壁周辺から土師器の坏や甕が出土し、土師器片76点、須恵器片1点、この他に縄文中期土器片242点、弥生後期土器片39点、磯・剣片19点が出土している。

時期 6世紀後半。

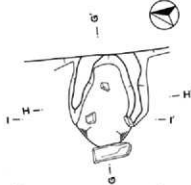


- 1 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性非常にあり。ROOM
ブロック・粘土。白色粘土を多量に含む。
- 2 黒褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ROOM
ブロック・粘土。白色粘土を多量に含む。
- 3 黒褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ROOM
粘土・白色粘土を多量に。炭化物粘土を少量含む。
- 4 黄褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性非常にあり。ROOM
ブロック・粘土を多量に含む。
- 5 黄褐色土層 堅硬。やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。
ROOMブロックと原土上の混合土。
- 6 褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ROOM
ブロック・粘土を含む。

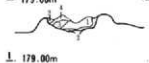
野庭文 (E-E)

- 1 黒褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性非常にあり。
ROOM粘土を含む。
- 2 黒褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。
ROOMブロック・粘土を含む。
- 3 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。
ROOMブロック・粘土を多量に含む。
- 4 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。
ROOM粘土を多量に含む。
- 5 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。
ROOMブロック・粘土を多量に含む。

179.00m



179.00m



179.00m



179.00m

P6 (F-F)

- 1 黒褐色土層 やわらかくて締まり粘性あり。ROOM
ブロック・粘土を多量に含む。
- 2 黄褐色土層 やわらかくて粘性非常にあり。ロ
ームブロック・粘土を多量に含む。

179.00m

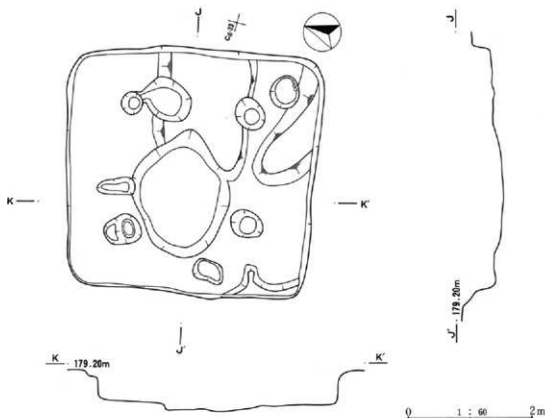


カマド (G-G'・H-H')

- 1 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性少しあり。ROOM粘土・焼土粘土を多量
に含む。
- 2 赤褐色土層 赤土層。
- 3 赤褐色土層 深く締まり粘性あり。焼土粘土・ROOM粘土を多量に含む。
- 4 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性少しあり。焼土粘土・ROOM粘土を多量
に含む。

1:40 1m

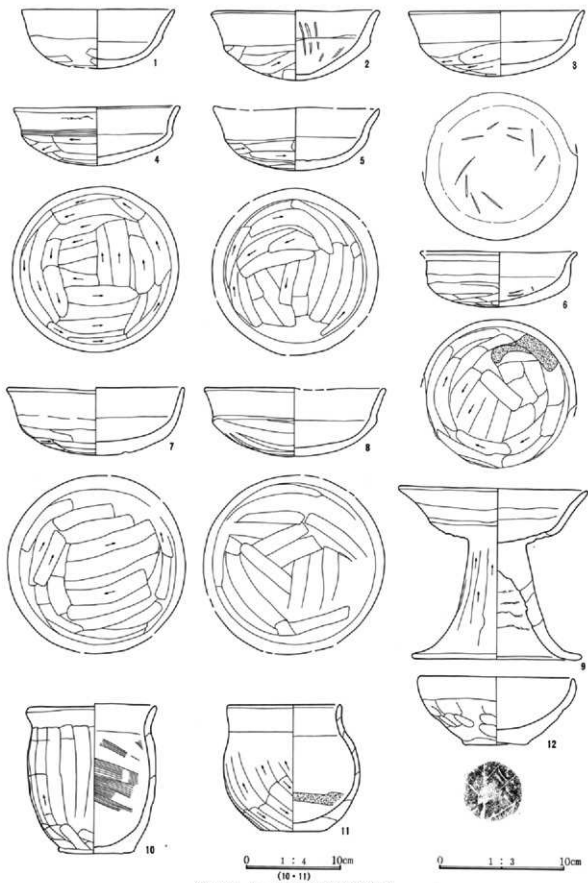
第270図 H-E' 5号住居跡



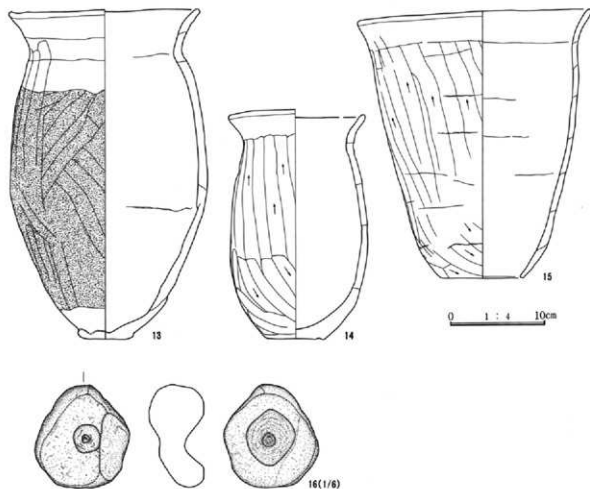
第271図 H-5号住居跡掘り方

H-5号住居跡遺物調査表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種類	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
272-1 144	土師器 坏	①12.2 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、器表面密。	カマド内	3/4残存
272-2 144	土師器 坏	①13.2 ②5.5	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へうの工具痕。	P 5 付近	完形
272-3 144	土師器 坏	①13.9 ②5.1	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド付 近	完形
272-4 144	土師器 坏	①13.3 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③におい赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド付 近	完形 内面に煤 が付着している
272-5 144	土師器 坏	①13.1 ②4.9	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、荒れている。	P 5 付近	完形
272-6 144	土師器 坏	①12.3 ②4.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へうの工具痕。	南壁付近 口縁部外側	口縁部意図的欠 損 外面に煤付着
272-7 144	土師器 坏	①14.0 ②5.3	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③におい赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁付近	完形 外面に煤 が付着している
272-8 144	土師器 坏	①14.3 ②5.4	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁付近	完形
272-9 144	土師器 高坏	①15.0 ②13.5 ③13.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	脚部外面へう削り、脚部内面ナデ、 輪積み痕、坏部外面荒れている。	中央部	坏部1/2 坏部内面ナデ
272-10 144	土師器 小型婁	①13.6 ②15.8 ③8.0	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③におい褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、 口縁部横ナデ。内面丁寧ナデ。	カマド内	完形 内面に煤 が付着している
272-11 144	土師器 小型婁	①11.8 ②13.4 ③7.0	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、 口縁部横ナデ。内面ナデ。	P 2 付近 口縁部外側	内面に煤が付着 している
272-12 144	土師器 坏	①12.2 ②5.4 ③4.8	①中粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③におい赤褐色	底面木炭痕、胴部外面ナデ、 口縁部横ナデ。内面ナデ。	中央部	ほぼ完形
273-13 144	土師器 壺	①19.8 ②35.1 ③6.0	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③におい黄褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、 口縁部横ナデ。内面ナデ。	カマド内 胴一部欠損	外面に煤が付着 している



第272図 H-5号位層跡出土遺物(1)



第273図 H-5号住居跡出土遺物(2)

H-5号住居跡遺物観断面表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況	
			胎土	焼成	色調				
273-14	土師器	①14.5	①細粒の砂と片岩粒を少量含む	②底面ナダ、胴部外面へラ削り、 口縁部横ナダ。内面丁寧ナダ。	カマド内	ほぼ完形			
144	壺	②24.4 ③6.0	②酸化焰 ③にぶい黄褐色						
273-15	土師器	①24.5	①中粒の砂と片岩粒を多量に含む	胴部外面へラ削り、口縁部横ナダ。 内面丁寧ナダ。	中央部	口縁一部欠損			
144	甗	②28.3 ③8.8	②酸化焰 ③にぶい褐色						
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特 徴	出土状況	
				全長	幅	厚			重量
273-16	西石	完形	砂岩	16.3	14.5	8.7	2,052	両面に大きな凹み穴が認められる。1個の凹み穴は長さ8cm、短径7cm、深さ3cmを計る。	覆土
144									

H-6号住居跡(第274図、PL-85・144)

位置 Cf-21・22、Cg-21・22グリッドにかけて検出された。H-5号住居跡の南約1mの所に位置している。

形状 長辺3m、短辺2.7mの長方形を呈している。

方位 N-95°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約20~28cmで床面に達する。

床面 ほぼ平坦で軟弱である。面積は約7.1㎡。周溝 検出できなかった。

竈 東壁中央やや南に位置し、燃焼部の大部分

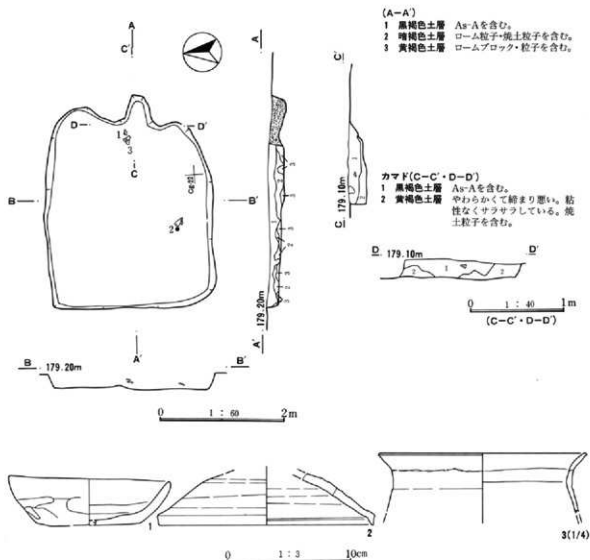
は壁面から外側に位置している。規模は煙道方向60cm、両袖方向40cmである。

柱 穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺 物 遺物はほとんど出土していない。

時 期 9世紀前半。



第274図 H-6号住居跡と出土遺物

H-6号住居跡遺物観測表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器 種	法 量 (cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
274-1	土師器	①12.8	①細粒の砂を混入	底面・体部下平ナデ、口縁部横ナデ。内面ナデ。	カムド付近	2/3残存
144	坏	②3.6 ③8.2	②酸化焰 ③にぶい黄褐色			
274-2	須恵器	②4.1	①細 片岩粒を少量含む	ロクロ整形。	南西部	1/2残存
144	蓋	②16.9	②還元焰 ③灰白色	天井部回転ヘラ削り。		
274-3	土師器	①22.0	①細粒の砂を混入	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。	カムド付近	口縁部1/4 外面に輪轆み痕が残る
144	壺	②6.2	②酸化焰 ③にぶい橙色	内面ナデ。		

H-7号住居跡 (第275・276図、PL. 85・144)

位置 Ce-29・30、Cf-29・30グリッドにかけて検出された。H-2号住居跡の東南約1mの所に位置している。

形状 長辺5.6m、短辺4.5mの長方形を呈している。住居跡中央部には水道管が埋設されていた。

方位 N-101°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築されている。

壁高 住居跡確認面より約20~40cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 凹凸がある。面積は約22.3㎡。

周溝 検出できなかった。

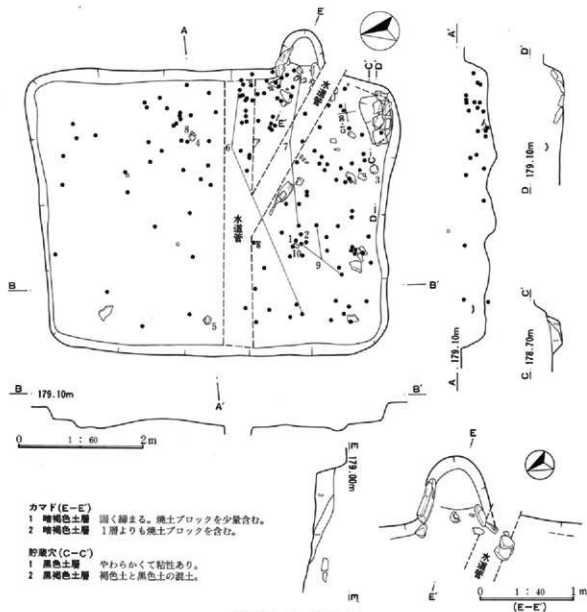
竈 南東コーナー近くに位置し、燃焼部の大部分は壁面から外側に構築されている。規模は煙道方向85cm、両袖方向75cmである。袖石が残っている。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 南東コーナーにある。

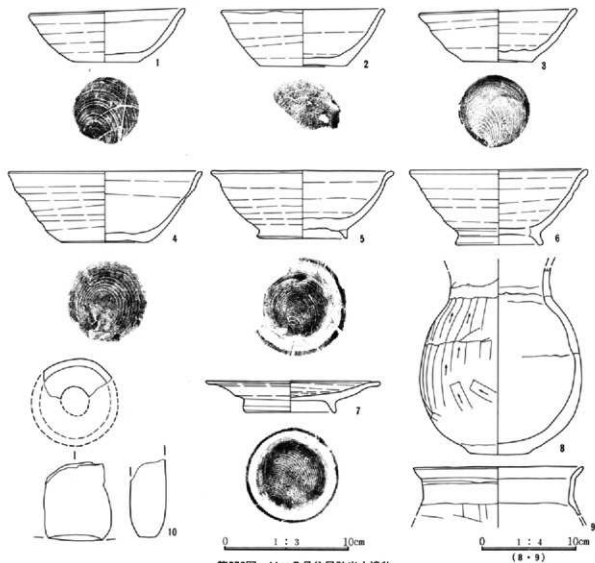
遺物 住居の南側に集中し、土器片465点、須恵器片79点、この他に縄文中期土器片37点、弥生後期土器片25点、礫・剥片12点が出土している。

時期 9世紀後半。



第275図 H-7号住居跡

4章 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第276図 H-7号住居跡出土遺物

H-7号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
276-1 144	須恵器 坏	①12.5 ②4.0 ③5.2	①細 黒色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。 底面回転糸切り。	南西部	完形
276-2 144	須恵器 坏	①12.9 ②4.5 ③6.5	①細 ②還元焰 ③にぶい赤褐色	右回転クロコ整形。 底面回転糸切り。	南西部	1/3残存
276-3 144	須恵器 坏	①12.3 ②4.1 ③6.4	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。 底面回転糸切り。	南壁付近	完形
276-4 144	須恵器 埴	①15.5 ②5.6 ③6.7	①細 片岩粒を少量含む ②還元焰 ③赤褐色	右回転クロコ整形。 高台銅離。	東部寄り	3/4残存
276-5 144	須恵器 埴	①14.4 ②5.4 ③6.8	①細 片岩粒を少量含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。 高台貼付。	西壁付近	3/4残存
276-6 144	須恵器 埴	①14.2 ②5.9 ③6.5	①細 片岩粒を少量含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。 高台貼付。	東壁付近	1/3残存
276-7 144	須恵器 皿	①13.8 ②2.4 ③7.2	①細 黒色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。 高台貼付。	カマド内	完形
276-8 144	土師器 壺	①19.7 ③6.5	①中粒の砂と褐色粒を含む ②還元焰 ③にぶい橙褐色	胴部外面へうすり、底面磨耗。 内面ナデ。輪積み痕が残る。	覆土	口縁部意図的欠損
276-9 144	土師器 壺	①18.0 ③5.6	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③橙褐色	胴部外面へうすり、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南西部	口縁部1/2
276-10 144	羽口	長16.2 厚3.0	①細粒の砂と片岩粒を含む ③橙褐色		南西部	部分

H-8号住居跡(第277~279図、PL.86・87・144-145)

位置 Cd-26・27グリッドにかけて検出された。H-26号住居跡の北約1mの所に位置している。

形状 長辺4.3m、短辺3.9mの方形を呈している。

方位 N-80°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は8層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約20~36cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床ではほぼ平坦である。面積は約15.5㎡。

掘り方 凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

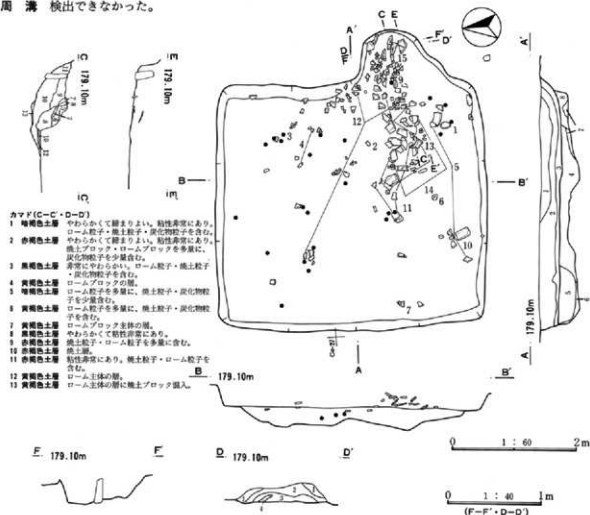
竈 東壁の南に位置し、燃焼部の大部分は壁面から外側に構築されている。燃焼部には4個の石が配されている。規模は煙道方向130cm、両袖方向110cmである。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 竈内と竈南側に集中し、土師器片965点、須恵器片103点、この他に縄文中期土器片74点、弥生中期土器片11点、後期土器片76点、鏝・剥片7点が出土している。

時期 9世紀後半。



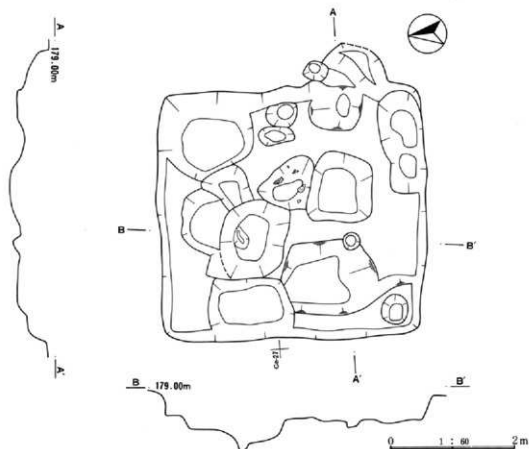
カマド(C-C'・D-D')

- 1 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性赤帯にあり、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 2 赤褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性赤帯にあり、焼土ブロック・ロームブロックを多量に、炭化物粒子を少量含む。
- 3 黒褐色土層 非常にやわらかい。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 ロームブロックの層。
- 5 黄褐色土層 ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。
- 6 黄褐色土層 ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 7 黄褐色土層 ロームブロック主体の層。
- 8 黒褐色土層 やわらかくて粘り気味にあり。
- 9 赤褐色土層 焼土粒子・ローム粒子を多量に含む。
- 10 赤褐色土層 焼土層。
- 11 赤褐色土層 粘性赤帯にあり、焼土粒子・ローム粒子を含む。
- 12 黄褐色土層 ローム主体の層。
- 13 黄褐色土層 ローム主体の層に焼土ブロック混入。

(A-A')

- 1 黄褐色土層 ローム粒子を含む。
- 2 黒褐色土層 締まりよい。ローム粒子を含む。
- 3 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 やわらかくて粘り気味にあり、ロームブロック・粒子・焼土粒子を多量に含む。
- 5 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性赤帯にあり、ロームブロック・粒子を多量に、焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 6 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性赤帯にあり、ロームブロック・粒子を含む。
- 7 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性赤帯にあり、ローム主体の層。
- 8 赤褐色土層 やわらかくて粘り気味にあり、焼土を多量に含む。

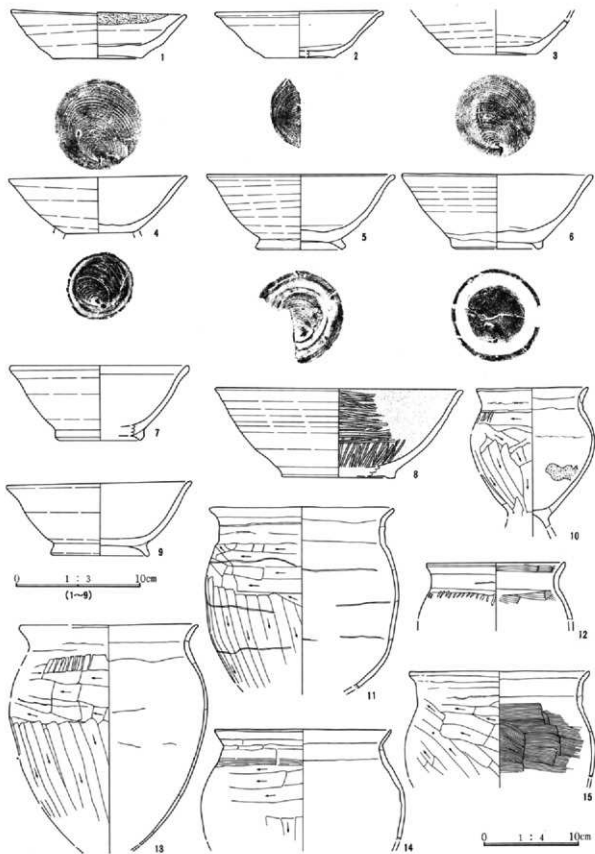
第277図 H-8号住居跡



第278図 H-8号住居跡掘り方

H-8号住居跡遺物観察表 (①口縁 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種類 器種	法量 (cm)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
279-1 144	須恵器 坏	①13.8 ②3.6 ③7.2	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転余きり。	南壁寄り	完形
279-2 144	須恵器 坏	①13.4 ②3.6 ③5.6	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転余きり。	カマド前	1/4残存
279-3 144	須恵器 坏	②2.7 ③6.4	①細 褐色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転余きり。	北東部	口縁部欠損
279-4 144	須恵器 埴	①14.2 ②4.4	①粗 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台割落。	北東部	3/4残存
279-5 144	須恵器 埴	①14.8 ②5.9 ③6.5	①粗 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	南部寄り	1/2残存
279-6 144	須恵器 埴	①15.0 ②5.9 ③6.7	①粗 片岩粒を含む ②還元焰 ③灰白色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	南部寄り	3/4残存
279-7 144	須恵器 埴	①14.3 ②5.9 ③6.5	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	西壁付近	1/3残存
279-8 144	須恵器 埴	①19.6 ②7.0 ③9.0	①細 褐色粒子を含む ②還元焰 ③褐色(外面)	右回転ロクロ整形。 高台割落、内面黒色、ミガキ。	覆土	1/4残存
279-9 144	須恵器 埴	①14.6 ②5.7 ③7.6	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	カマド内	3/4残存
279-10 144	土師器 台付甕	①12.0 ②14.7	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面丁撃なナデ。	西部 脚部欠損	内外面に傷が付 着している
279-11 144	土師器 甕	①19.7 ②19.5	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③にぶい褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面丁撃なナデ。	南部寄り 底部欠損	外面に輪痕み或 が残る
279-12 144	土師器 甕	①14.5 ②6.9	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド内	口縁全周



第279图 H-8号住居跡出土遺物

H-8号住居跡遺物観察表 (①口縁 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
279-13 145	土師器 壺	①18.8 ②23.3	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	東部寄り	底面欠損
279-14 145	土師器 壺	①18.9 ②11.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面丁寧なナデ。	東部寄り	口縁部1/3
279-15 145	土師器 壺	①19.0 ②11.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド内	口縁部1/4

H-9号住居跡 (第280・281図、PL.87・145)

位置 Cd-21・22グリッドにかけて検出された。H-10号住居跡の北東約5.5mの所に位置している。

形状 完掘できなかったために不明であるが、一辺3.8mである。

方位 N-24'-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。

壁高 住居跡確認より約50cmで床面に達する。

床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。現状での面積は約3.5m²。

掘り方 凹凸は余り認められない。

周溝 検出できなかった。

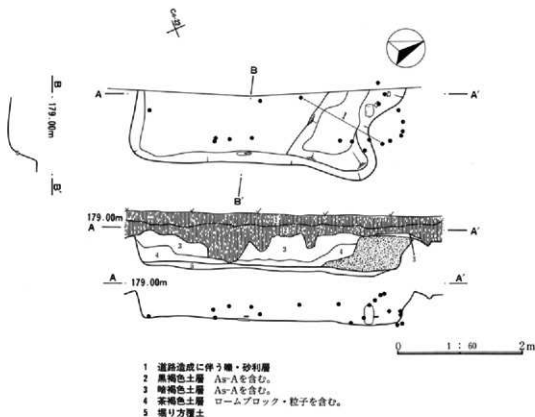
竈 北壁から僅かに竈の一部が検出された。燃焼部の大部分は壁面から外側に構築されている。規模は煙道方向80cmである。袖石1個が検出された。

柱穴 検出できなかった。

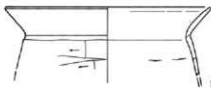
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片67点、須恵器片4点、この他に縄文中期土器片8点、弥生中期土器片1点、後期土器片4点、礫・剝片4点が出土している。

時期 8世紀前半。



第280図 H-9号住居跡



第281図 H-9号住居跡出土遺物

H-9号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
281-1 145	土師器 壺	①22.0 ②7.2	①胎土の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい棕色	割部外面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	北東部	口縁部片

H-10号住居跡 (第282・283図、PL.87・145)

位置 Ce-19・20グリッドにかけて検出された。H-9号住居跡の南西約5.5mの所に位置している。

形状 完掘できなかったために不明である。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約30cmで床面に達する。

床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。現状での面積は約

5.5㎡。

掘り方 凹凸は余り認められない。

周溝 検出できなかった。

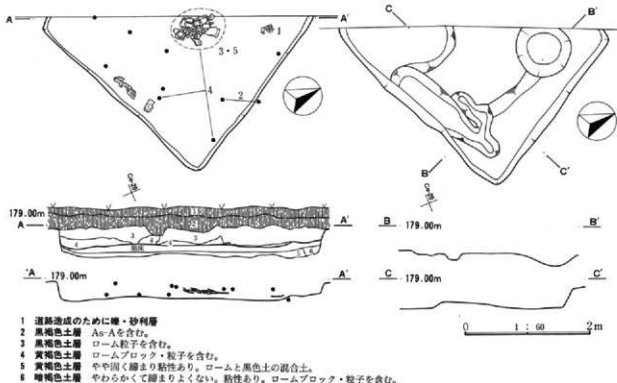
竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

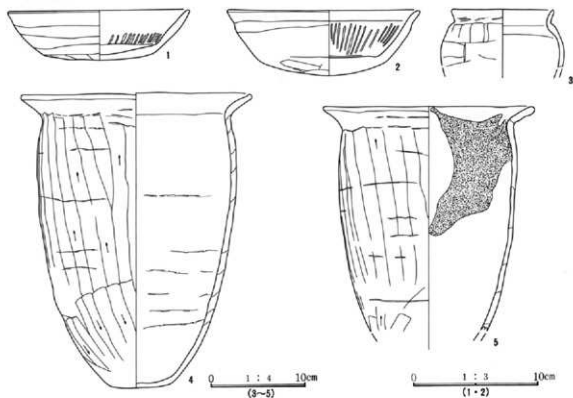
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片36点、須恵器片5点、その他縄文中期後半土器片7点、弥生後期土器片1点が出土している。

時期 8世紀前半。



第282図 H-10号住居跡と掘り方



第283図 H-10号住居跡出土遺物

H-10号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
283-1 145	土師器 坏	①14.4 ②9.9 ③8.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焙 ③棕色	底面へう削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。内面ナデ。暗文。	北壁寄り	口縁一部欠損
283-2 145	土師器 坏	①15.1 ②6.1	①中粒の砂を混入 ②酸化焙 ③にぶい棕色	底面へう削り後ナデ、体部下半ナデ、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北壁寄り	3/4残存 暗文
283-3 145	土師器 小罎	①10.8 ②6.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焙 ③にぶい赤褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	中央部	口縁部1/4
283-4 145	土師器 罎	①24.5 ②31.5 ③6.5	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焙 ③褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	東壁寄り	ほぼ完形 内外面に灰化物が付着
283-5 145	土師器 罎	①22.0 ②25.0	①細粒の砂と褐色粒子を含む ②酸化焙 ③にぶい褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。内面ナデ、外面に輪積み痕。	中央部	底部欠損 内面に傷が付着

H-11号住居跡 (第284・285図、PL. 88・145)

位置 Ca-25、Cb-25・26グリッドにかけて検出された。H-37号住居跡と接している。

形状 完掘できなかつたために不明であるが、一辺4.2mを測る。方位 N-83°E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約22~42cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。現状での面積は約11.6㎡。

掘り方 床面東部分(電前)で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

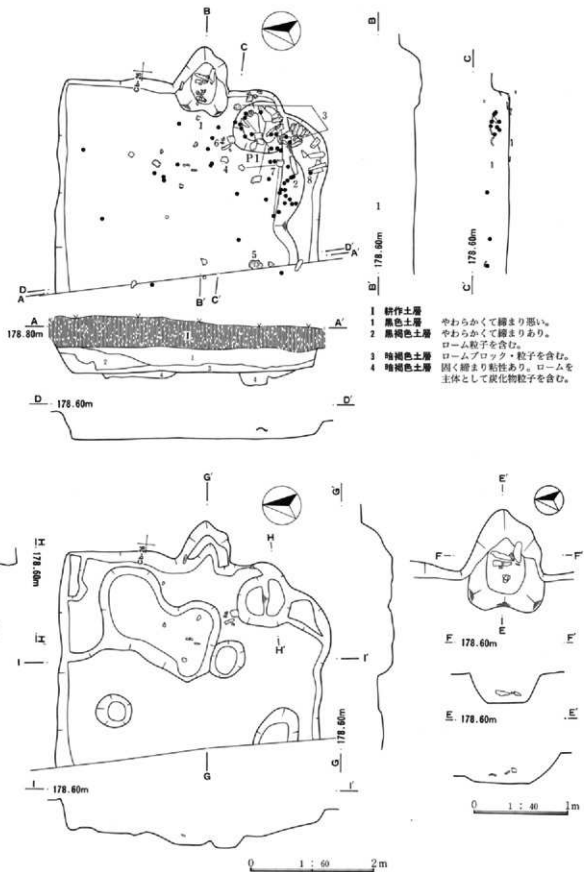
竈 東壁中央に位置し、燃焼部の大部分を壁面から外側に構築している。規模は煙道方向100cm、両袖方向80cmである。

柱穴 検出できなかった。

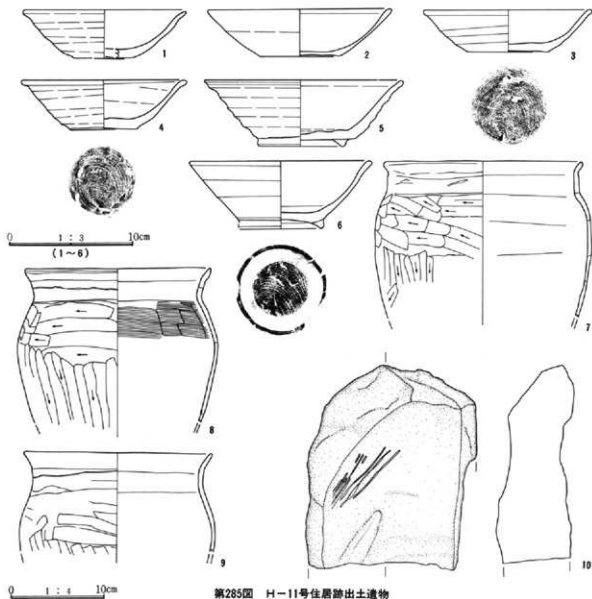
貯蔵穴 床面南東隅から検出された。P1は長径90cm、短径80cm、深さ41cmである。

遺物 竈内や南壁周辺から出土し、土師器片486点、須恵器片79点、この他に縄文前期土器片3点、中期土器片15点、弥生後期土器片12点、礫・刺片19点が出土している。

時期 9世紀後半。



第284図 H-11号住居跡と掘り方



第285図 H-11号住居跡出土遺物

H-11号住居跡出土物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
285-1 145	須恵器 坏	①12.8 ②3.8 ③4.4	①細 褐色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転永切り。	貯蔵穴内	1/2残存
285-2 145	須恵器 坏	①14.6 ②4.2 ③6.2	①細 白色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転永切り。	東壁付近	1/2残存
285-3 145	須恵器 坏	①13.2 ②3.3 ③6.4	①細 黒色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転永切り。	貯蔵穴付 近	3/4残存
285-4 145	須恵器 坏	①13.2 ②3.9 ③5.2	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転永切り。	貯蔵穴付 近	ほぼ完形
285-5 145	須恵器 埴	①15.6 ②5.2 ③6.6	①粗 褐色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	東壁付近	ほぼ完形
285-6 145	須恵器 埴	①14.5 ②5.3 ③6.5	①細 ②還元焰 ③黒褐色	右回転ロクロ整形。 高台貼付、内外面吸込。	貯蔵穴付 近	3/4残存
285-7 145	土師器 甕	①20.8 ②16.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙褐色	割部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	貯蔵穴付 近	口縁部1/4

H-11号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
285-8 145	土師器 壺	①19.6 ②16.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	東壁付近	口縁-胴上平1/2
285-9 145	土師器 壺	①20.0 ②10.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	貯蔵穴付 近	口縁部1/2 外面 に輪痕のみ残る
図番 PL	面積	遺存状況	石材	計測値 (cm, g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
285-10 145	砥石	2/3	砂岩	(29.8) 17.5 8.0 (3,283)	片面に太い糸痕が認められる。前面赤化して いる。	覆土

H-12号住居跡 (第286・287図, PL.89・145)

位置 Bt-25・26, Ca-25・26グリッドにかけて検出された。H-13号住居跡と接している。

形状 長辺3.8m、短辺2.7mの長方形を呈している。

方位 N-85°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約8~30cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。面積は約9.1㎡。

掘り方 床面南部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

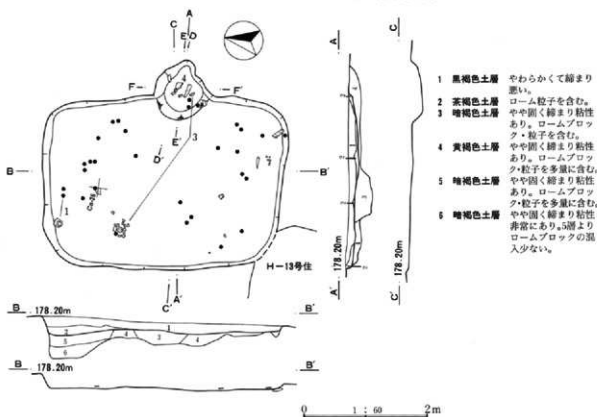
竪穴 東壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁面から外側に構築されている。規模は煙道方向96cm、両袖方向90cmである。

柱穴 検出できなかった。

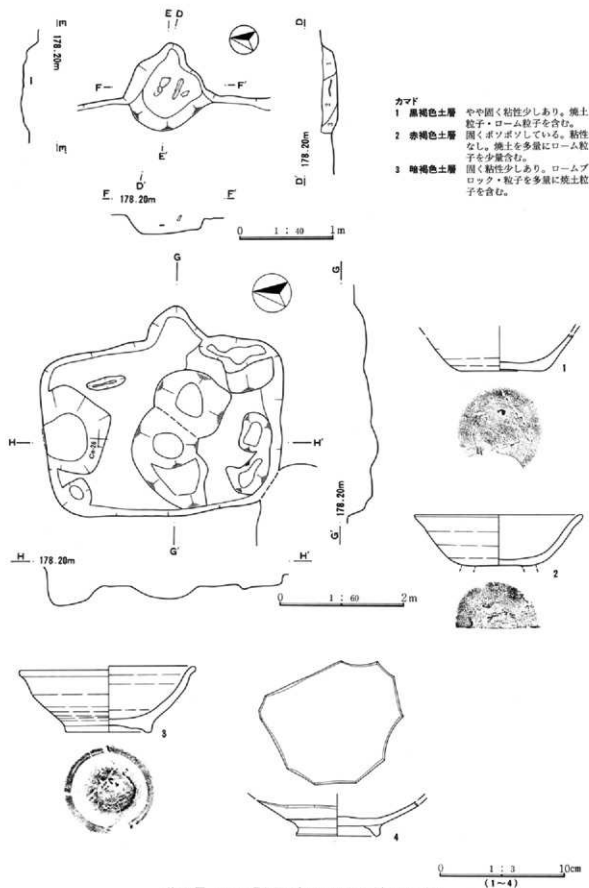
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 竪穴内や覆土から土師器片147点、須恵器片31点、この他に縄文中期土器片12点、弥生中期土器片3点、後期土器片5点、礫・剥片3点が出土している。

時期 9世紀後半。



第286図 H-12号住居跡



第287図 H-12号住居跡(カマド・掘り方)と出土遺物

H-12号住居跡遺物観察表 (①口徑 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
287-1 145	須恵器 環	②2.3 ③6.6	①細 褐色粒子を含む ②酸化焙 ③灰褐色	右回転ロクロ整形。 前面回転糸切り。	北西部	口縁部欠損
287-2 145	須恵器 埴	①13.2 ②4.0	①細 褐色粒子を含む ②還元焙 ③黄灰色	右回転ロクロ整形。 高台削落。	覆土	1/2残存
287-3 145	須恵器 埴	①14.0 ②5.2 ③6.7	①粗 褐色粒子を含む ②還元焙 ③黄灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	カマド内	3/4残存
287-4 145	須恵器 埴	②2.7 ③6.4	①細 褐色粒子を含む ②酸化焙 ③におい褐色	回転ロクロ整形。 高台貼付。	カマド内	口縁部意図的欠損

H-13号住居跡 (第288-290回, PL.80・145)

位置 Bt-24・25、Ca-24・25グリッドにかけて検出された。H-12号住居跡と接し、H-14号住居跡と重複している。

形状 長辺3.2m、短辺3mの方形を呈している。

方位 N-90°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約20cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。面積は約8.8㎡。

掘り方 床面中央部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

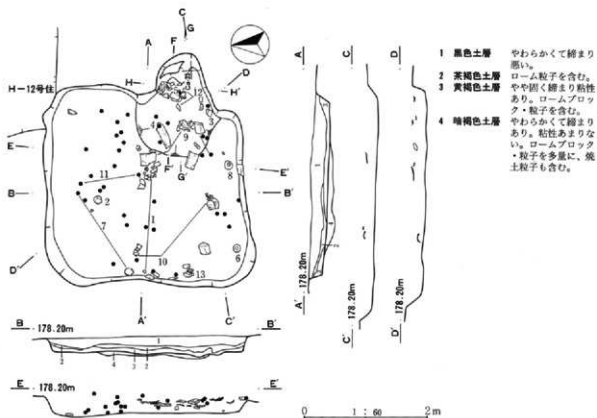
竈 東壁南に位置し、燃焼部の大部分は壁面から外側に構築されている。規模は煙道方向160cm、両袖方向90cmである。

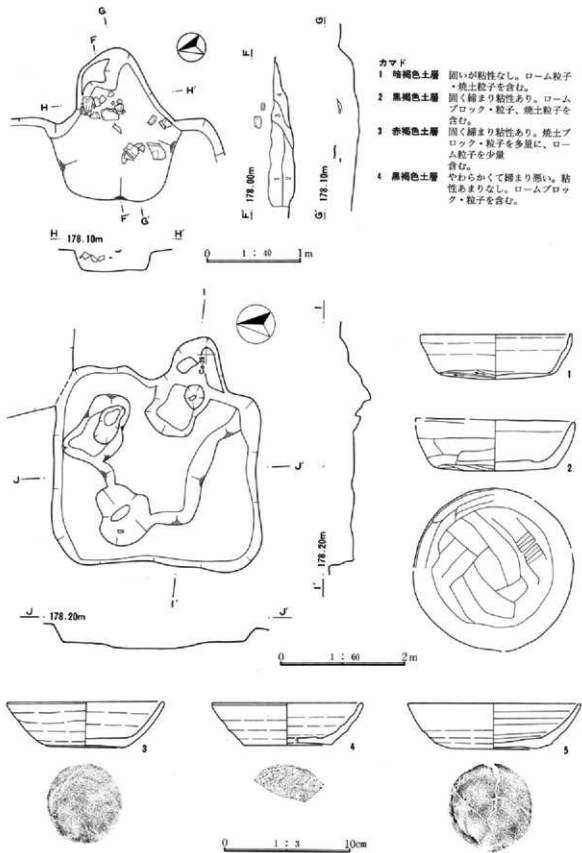
柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

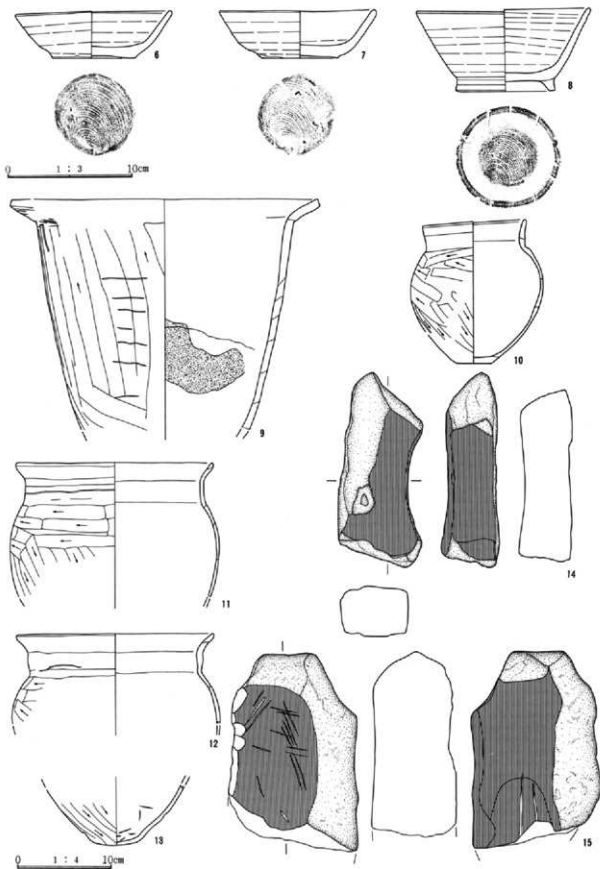
遺物 竈内や覆土から土師器片338点、須恵器片39点、この他に縄文前期土器片1点、中期24点、弥生後期2点、礫・剥片等が出土している。

時期 9世紀前半。





第289図 13号住居跡(カマド・掘り方)と出土遺物



第290図 H-13号住居跡出土遺物

H-13号住居跡遺物観察表 (①口縁 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況			
289-1 145	土師器 坏	①12.0 ②3.5 ③9.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	中央部	3/4残存			
289-2 145	土師器 坏	①12.6 ②4.1 ③9.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・体部下平へラ削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ、へらの工具痕。	北部寄り	完形			
289-3 145	須恵器 坏	①12.5 ②3.5 ③6.0	①細 ②酸化焰 ③明赤褐色	口クロ整形。 底面は右回転糸切り。	カマド内	口縁一部欠損 内所に灰化物が付着			
289-4 145	須恵器 坏	①12.0 ②3.3 ③7.0	①粗 白色粒子を多量に含む ②還元焰 ③灰色	右回転口クロ整形。 底面は回転糸切り。	カマド内	1/4残存			
289-5 145	須恵器 坏	①13.7 ②3.4 ③6.6	①細 ②酸化焰 ③にぶい褐色	口クロ整形。 底面は回転糸切り。	カマド内	口縁一部欠損			
290-6 145	須恵器 坏	①12.4 ②3.7 ③6.3	①細 黒色粒子を含む ②還元焰 ③灰白色	右回転口クロ整形。 底面は回転糸切り。	南西隅	完形			
290-7 145	須恵器 坏	①12.5 ②3.7 ③6.0	①細 褐色粒子を含む ②還元焰 ③黄灰色	右回転口クロ整形。 底面は回転糸切り。	北西部	完形			
290-8 145	須恵器 埴	①13.7 ②6.5 ③8.0	①細 白色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転口クロ整形。 高台貼付。	東壁付近	口縁一部欠損			
290-9 145	土師器 甗	①32.6 ②24.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド内	1/3残存 口縁部に 輪痕み痕が残る			
290-10 145	土師器 小型甗	①11.0 ②15.2 ③3.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へラ削り、口縁部 横ナデ。	東部寄り	ほぼ完形			
290-11 145	土師器 甗	①21.0 ②14.5	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面丁寧なナデ。	中央部	口縁部1/4			
290-12 145	土師器 甗	①21.0 ②9.4	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド内	口縁部1/2			
290-13 145	土師器 甗	②6.1 ③2.2	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へラ削り。内面ナ デ、へらの工具痕。	西壁付近	底部			
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況	
290-14 145	礫石	完形	砂岩	20.5	8.9	6.0	1,119	使用面は2面。	覆土
290-15 145	礫石	2/3	砂岩	(19.5)	13.0	8.0	(2,729)	使用面は3面。2面に糸痕が認められる。 大型の置石として使用。	覆土

H-14号住居跡 (第281・292図、PL.91・145)

位置 Ca-24・25、Cb-24・25グリッドにかけて検出された。H-13号住居跡と重複している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺5.3m、短辺5mの方形を呈していると考えられる。

方位 N-18°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は8層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約12～32cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床でやや凹凸がある。現状での面積は約22.2㎡。

掘り方 床面中央部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

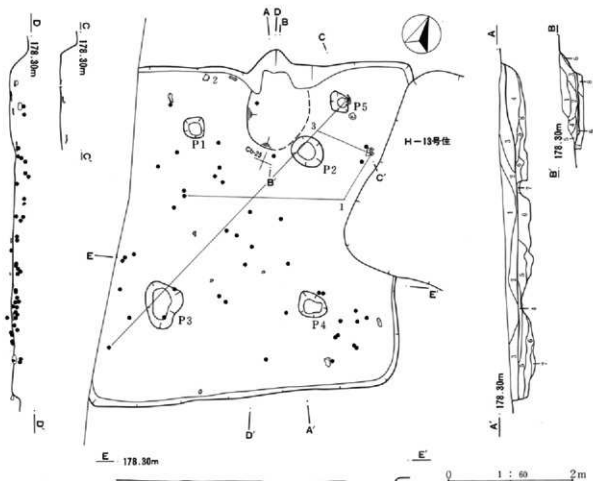
竈 北壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁面から床面にかけて構築されている。規模は煙道方向160cm、両袖方向80cmである。

柱穴 4個の柱穴が検出された。P1深さ30cm、P2深さ43cm、P3深さ44cm、P4深さ45cmである。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P5は長径40cm、短径28cm、深さ47cmである。

遺物 覆土から土師器片338点、須恵器片39点、この他に縄文中期土器片18点、弥生中期2点、後期18点、礫・剥片等が出土している。

時期 6世紀後半。

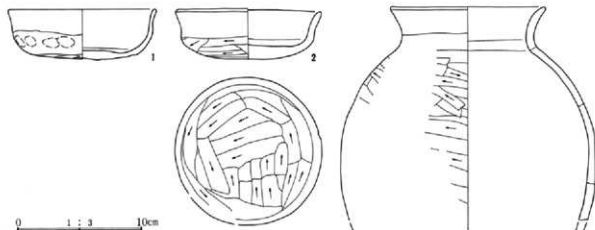


〔A-A'〕

- 1 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ローム粒子を多量に含む。
- 3 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を含む。
- 4 暗褐色土層 深部に固く締まり、粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 5 黒色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を少量含む。
- 6 暗褐色土層 固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を少量含む。
- 7 黒色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を少量含む。
- 8 黄褐色土層 やわらかくて粘性あり。ローム主体の層。

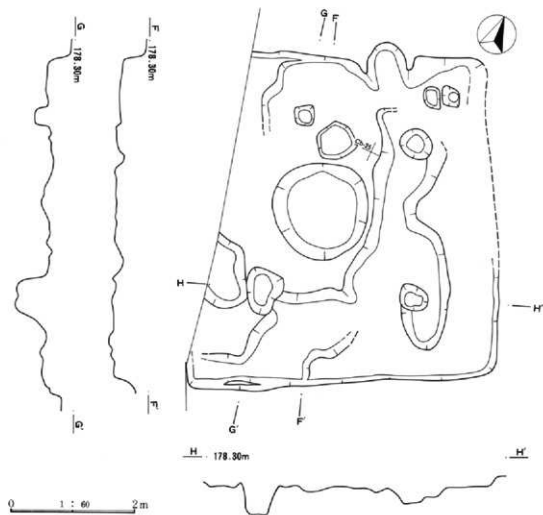
カマド (B-B')

- 1 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームを多量に、焼土粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子・焼土粒子を多量に含む。
- 3 暗褐色土層 やわらかくて粘性あり。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4 暗褐色土層 固く締まり粘性強い。ローム主体の層。
- 5 黄褐色土層 固く締まり粘性強い。ローム主体の層。
- 6 赤褐色土層 焼土層。
- 7 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ロームと黒色土の混土。
- 8 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ロームブロック・粒子、焼土粒子・炭化物粒子を含む。



3(1/4)

第291図 H-14号住居跡と出土遺物



第292図 H-14号住居跡掘り方

H-14号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③直径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・製形技法の特徴	出土状況	残存状況
291-1 145	土師器 坏	①11.6 ②3.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焼 ③にぶい褐色	底面へう削り、体部下平ナデ。 口縁部横ナデ。内面ナデ。	カマド前	ほぼ完形
291-2 145	土師器 坏	①11.5 ②4.0	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焼 ③にぶい褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	北壁付近	完形
291-3 145	土師器 壺	①16.0 ②22.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焼 ③にぶい褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	北東部	口縁部1/3

H-15号住居跡 (第293図, PL. 92・145)

位置 Ca-23・24グリッドにかけて検出された。H-16号住居跡と重複している。

形状 長辺4.2m、短辺3.9mの方形を呈していると考えられる。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築さ

れ、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約6~12cmで床面に達する。遺存状況は悪い。

床面 貼床でやや凹凸がある。推定面積は約14.4㎡。

掘り方 床面中央部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

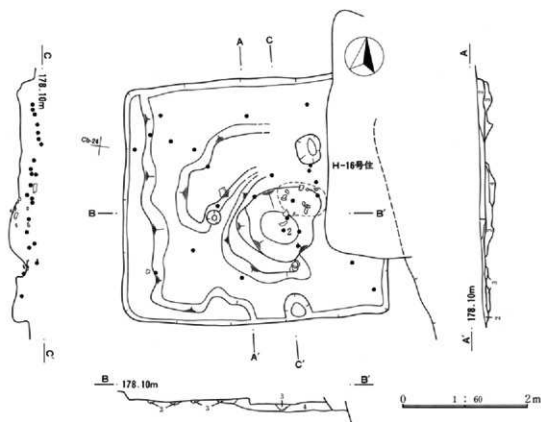
竪穴 H-16号住居跡によって壊されている。焼土の痕跡が検出された。

柱穴 明瞭な柱穴は検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片229点、須恵器片8点、この他に縄文中期土器片14点、弥生後期土器片7点、鏃・剣片10点が出土している。

時期 8世紀前半。



- 1 増褐色土層 固く締まり粘性すこしあり。ローム粒子を少量含む。
- 2 増褐色土層 固く締まり粘性すこしあり。ロームブロック・粒子を含む。
- 3 黒褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を含む。
- 4 増褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームを主体とし、焼土粒子を含む。



0 1 : 3 10cm

第293図 H-15号住居跡と出土遺物

H-15号住居跡遺物観察表 (①口徑 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
293-1 145	土師器 坏	①13.4 ②9.8	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焙 ③明赤褐色	底面・体部へら削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	覆土	1/3残存
293-2 145	須恵器 埴	②0.0 ③6.0	①細 ②還元焙 ③灰色	回転ロクロ整形。 高台貼付。	中央部	口縁部欠損

H-16号住居跡(第294・295・300図、PL.92・146)

位置 Bt-23・24、Ca-23・24グリッドにかけて検出された。H-15号住居跡、H-17号住居跡と重複している。

形状 長辺3.8m、短辺3.7mの方形を呈している。

方位 N-89°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

盤高 住居跡確認面より約18~20cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床でやや凹凸がある。面積は約12.4㎡。

掘り方 床面中央部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

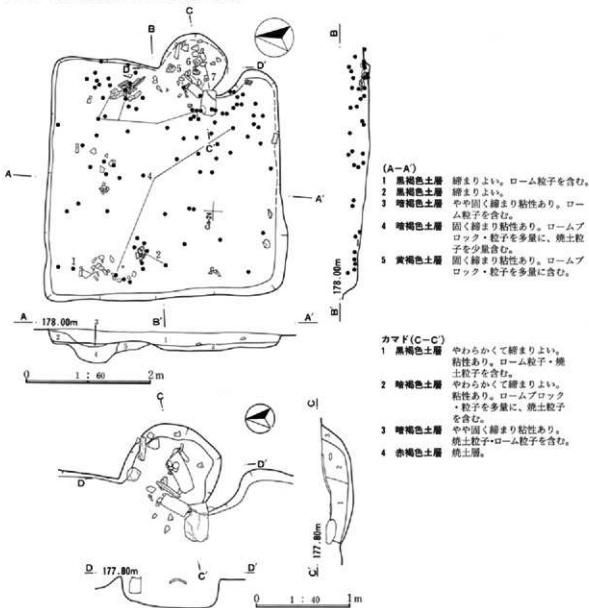
竈 東壁中央やや南よりに位置し、燃焼部の大部分は壁面部から外側に構築されている。また瓦が使用されている。袖部は約50cm残存している。規模は煙道方向100cm、両袖方向100cmである。

柱穴 検出できなかった。

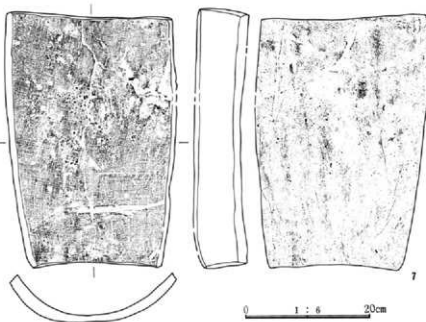
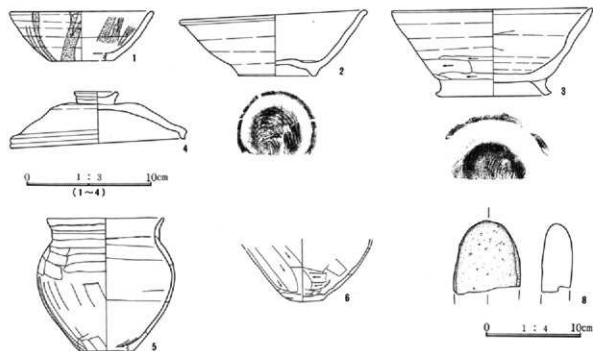
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片571点、須恵器片20点等が出土し、この他に縄文中期土器片27点、弥生土器片13点、鏃・剣片等37点が出土している。

時期 9世紀前半。



第294図 H-16号住居跡



第295図 H-16号住居跡出土遺物

H-16号住居跡遺物観察例 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
295-1 146	須恵器 坏	①11.3 ②3.9 ③5.0	①細 黒色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転未切り。	北西隅	1/4残存 内外面に火跡状の痕跡
295-2 146	須恵器 埴	①14.6 ②4.8 ③6.2	①粗 白色・片岩粒を含む ②還元焰 ③黄灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	西壁寄り	1/2残存
295-3 146	須恵器 埴	①16.0 ②6.8 ③9.2	①細 白色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	覆土	1/2残存
295-4 146	須恵器 蓋	①3.0 ②4.1 ③13.6	①粗 白色粒子を含む ②還元焰 ③黄灰色	回転ロクロ整形。 天井部回転ヘラ削り。	覆土	完形

H-16号住居跡物検査表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況		
295-5 146	土師器 小型壺	①12.4 ②14.0 ③5.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焼 ③によい赤褐色	底面・胴部外面へつ割り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	カマド内	1/2残存		
295-6 146	土師器 壺	①5.5 ③3.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焼 ③明赤褐色	底面・胴部外面へつ割り。内面ナ デ。	カマド内	底部片		
295-7 146	平瓦	長41.4 幅27.4 厚2.0~1.1	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焼 ③褐色	カマド構築材として使用されている。 。	カマド内	完形		
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)		特徴	出土状況	
295-8 146	磨石	2/3	安山岩	全長 (7.5)	幅 (7.1)	厚 (3.1) (253)	全面に磨耗痕が認められる。	覆土

H-17号住居跡 (第296~308図, PL. 93・146)

位置 Bt-23・24、Ca-23・24グリッドにかけて検出された。H-16号住居跡と重複している。

形状 長辺4.7m、短辺4.5mの方形を量している。

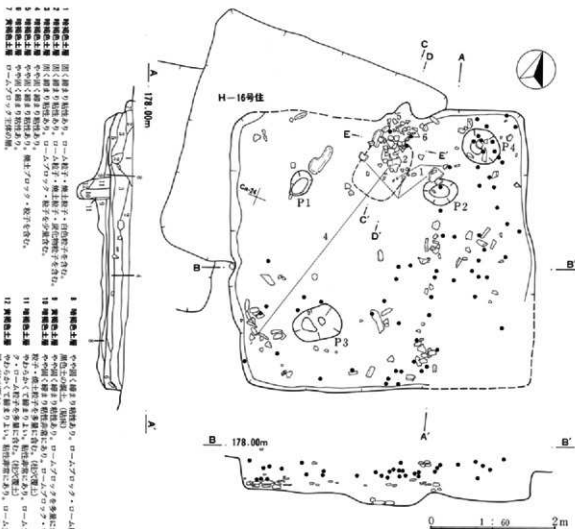
方位 N-22'-W。

覆土 ローム層を掘り込んで堅く住居は構築され、そこに堆積した覆土は9層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約30cmで床面に達する。

床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床で凹凸がある。面積は約18.5m²。



第296図 H-17号住居跡

掘り方 床面中央部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 北壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁面部分から床面にかけて構築されている。推定規模は煙道方向100cm、両袖方向60cmである。

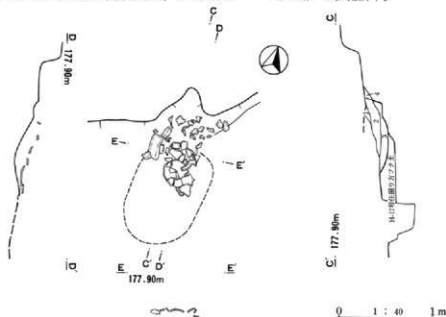
柱穴 3個の柱穴が検出された。床面南東には電柱が埋設されているために不明である。P1は深さ

43cm、P2深さ24cm、P3深さ56cmである。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P4は長径60cm、短径55cm、深さ47cmである。

遺物 覆土から土師器片250点、須恵器片9点等が出土し、この他に縄文中期土器片38点、弥生土器片8点、鏝・剥片等2点が出土している。

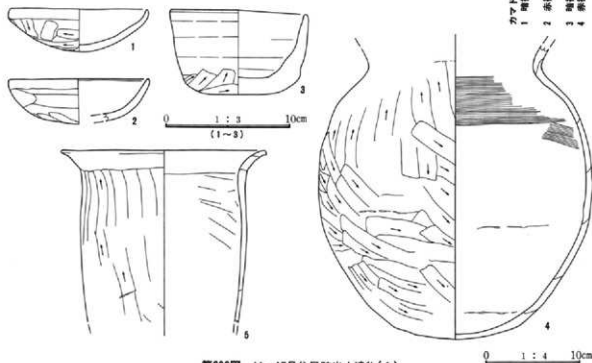
時期 8世紀前半。



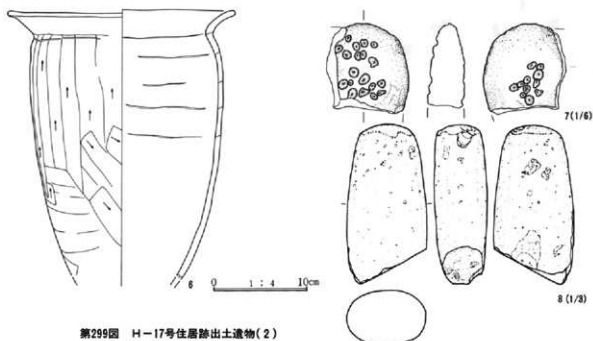
第297図 H-17号住居跡カマド

カマド
 1 焼成色土器
 2 赤褐色土器
 3 焼成色土器
 4 赤褐色土器

やわらかく、縁まりよい。粘性あり。ローム粒子・焼成土器・炭化物粒子を含む。
 やや固く、縁まり粘性非常にあり。焼土・ブロッック・粒子、ローム粒子を多量に含む。
 やや固く、縁まり粘性非常にあり。ローム・ブロッック・粒子を多量に含む。
 焼土層。



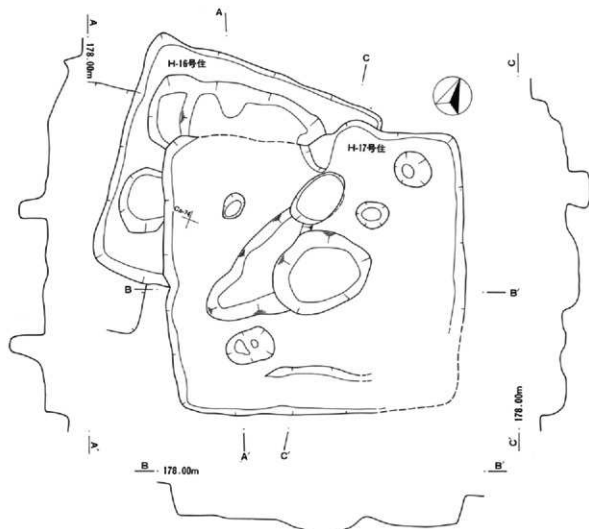
第298図 H-17号住居跡出土遺物(1)



第299図 H-17号住居跡出土遺物(2)

H-17号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況			
298-1 146	土師器 坏	①11.0 ②3.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	覆土	完形			
298-2 146	土師器 坏	①11.0 ②3.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド内	ほぼ完形			
298-3 146	須恵器 鉢	①19.8 ②6.6 ③6.0	①粗 片岩粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転口クロ整形。 底面へラ削り。	覆土	ほぼ完形			
298-4 146	土師器 壺	①31.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にょい赤褐色	底面・胴部外面へラ削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	カマド内	3/4残存			
298-5 146	土師器 壺	①21.8 ②18.0	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③橙色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド内	口縁1/2			
298-6 146	土師器 壺	①24.0 ②28.7	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にょい赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。輪積み痕が残る。	カマド内	底部欠損			
図番 P.L.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況	
299-7 146	多孔石 (織文)	1/3	砂岩	全長	幅	厚	重量	両面に計27個の凹み穴が認められる。	覆土
299-8 146	磨製石斧	刃部欠損	角閃岩	(12.4)	6.3	4.2	(554)		覆土



第300図 H-16・17号住居跡掘り方

0 1 : 60 2m

H-18号住居跡 (第301~303図、PL.94・148)

位置 Bt-28・29グリッドにかけて検出された。H-19号住居跡と重複している。

形状 長辺3.2m、短辺2.9mの方形を呈している。
方位 N-89°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約26~40cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床でやや凹凸がある。面積は約7.6㎡。

掘り方 床面西部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

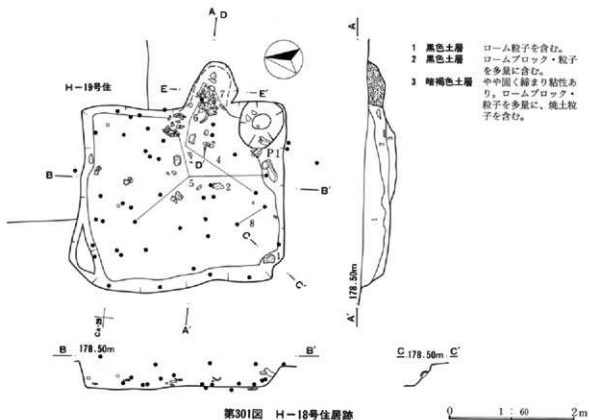
竈 東壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁面部から外側にかけて構築されている。規模は煙道方向120cm、両袖方向60cmである。

柱穴 検出できなかった。

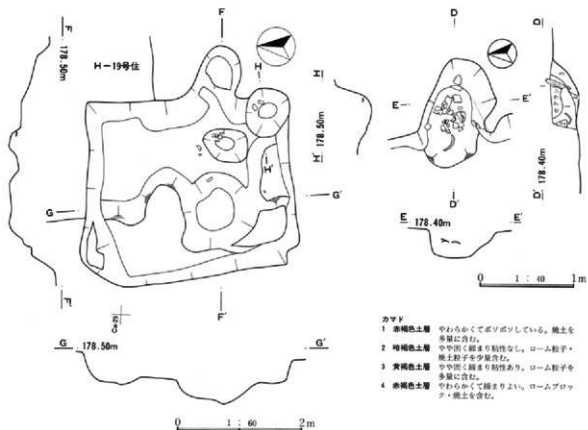
貯蔵穴 床面南東隅から検出された。長径80cm、短径70cm、深さ20cmである。

遺物 覆土から土師器片243点、須恵器片36点等が出土し、この他に縄文中期土器片37点、弥生土器片24点、礫・剥片等13点が出土している。

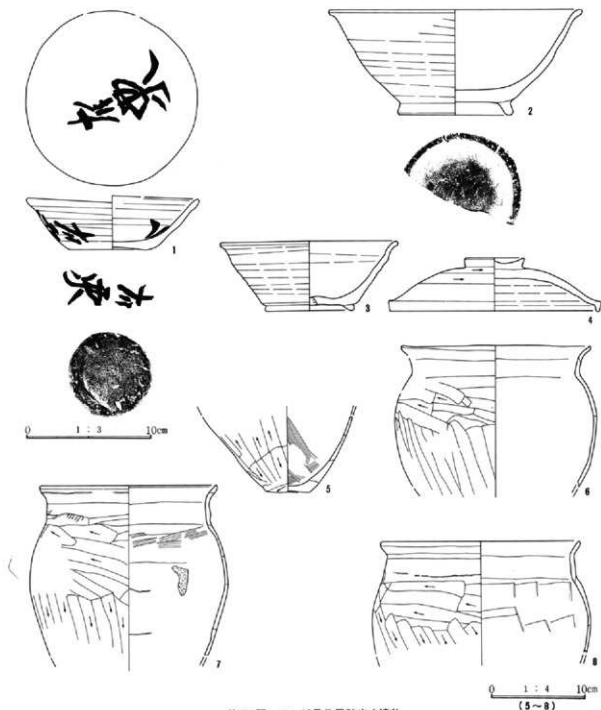
時期 9世紀前半。



第301図 H-18号住居跡



第302図 H-19号住居跡カマド・掘り方



第303図 H-18号住居跡出土遺物

H-18号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

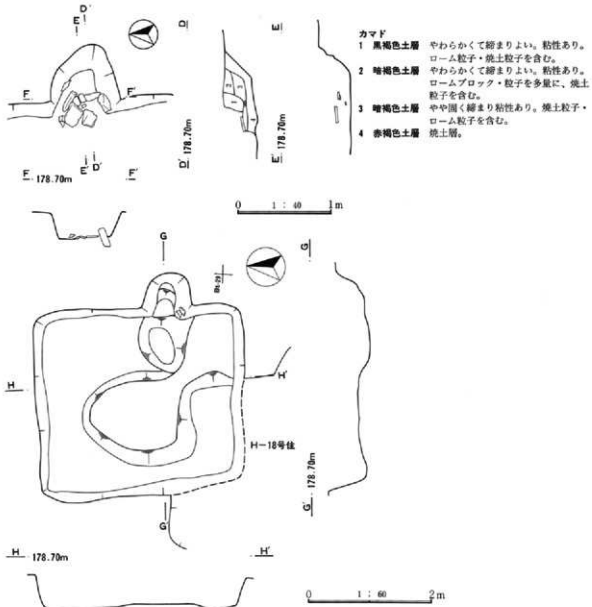
図番 P.L.	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
303-1	須恵器 環	①13.6	①細 黒色鉱物粒を含む	右回転ロクロ整形。	南西隅	完形
146	須恵器 環	②4.2 ③6.5	②還元焰 ③灰色	底面回転糸切り。		断片
303-2	須恵器	①19.8	①細 片岩粒を含む	右回転ロクロ整形, 回転糸切り後,	カマド内	1/2残存
146	埴	②8.3 ③8.8	②還元焰 ③灰黄褐色	高台部貼付、周辺ナデ。		

径52cm、深さ15cmである。

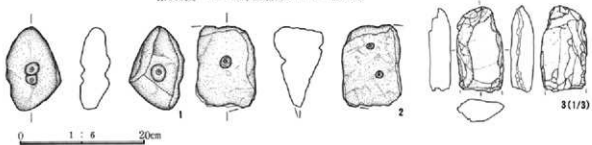
遺物 覆土から土師器片77点、須恵器片5点等が出土し、この他に縄文早期土器片1点、前期土器片

2点、中期土器片37点、弥生土器片23点、礫・剝片等5点が出土している。

時期 不明。



第305図 H-19号住居跡カマド・掘り方



第306図 H-19号住居跡出土遺物

H-19号住居跡遺物検査表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
306-1 146	凹石	完形	砂岩	13.6	8.2	4.2	532	両面に計3個の凹みが認められる。	覆土
306-2 146	多孔石 (織文)	1/2	砂岩	(12.9)	9.4	9.0	(1,052)	両面に計4個の凹みが認められる。	覆土
306-3 146	打製石斧	刃部欠損	熱変成岩	(6.7)	3.7	1.8	(53)	短冊型。	覆土

H-20号住居跡 (第307~311図, PL. 95・146・147)

位置 Bq-26・27、Br-26・27グリッドにかけて検出された。H-49号住居跡と重複している。

形状 長辺6.1m、短辺5.5mの方形を呈している。

方位 N-11°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は7層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約25~75cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。面積は約28.8㎡。

掘り方 床面南部分で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

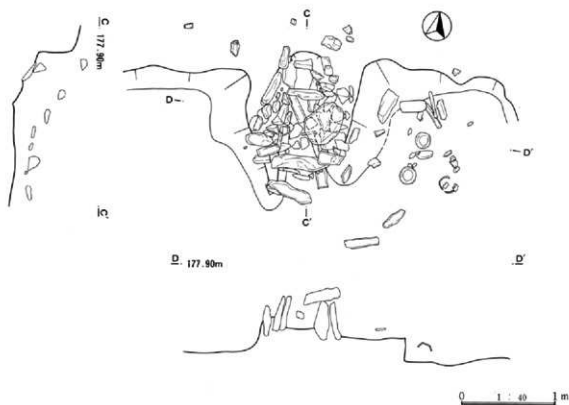
竈 北壁中央に位置し石組みで、燃焼部の大部分は壁面部から床面にかけて構築されている。袖部は150cm残存している。規模は煙道方向160cm、両袖方向50cmである。

柱穴 検出できなかった。

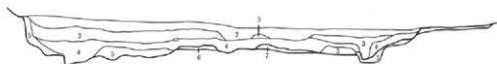
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片3,944点、須恵器片303点等が出土し、この他に縄文前期土器片5点、中期土器片178点、弥生土器片14点、礫・剥片等66点が出土している。

時期 8世紀後半。



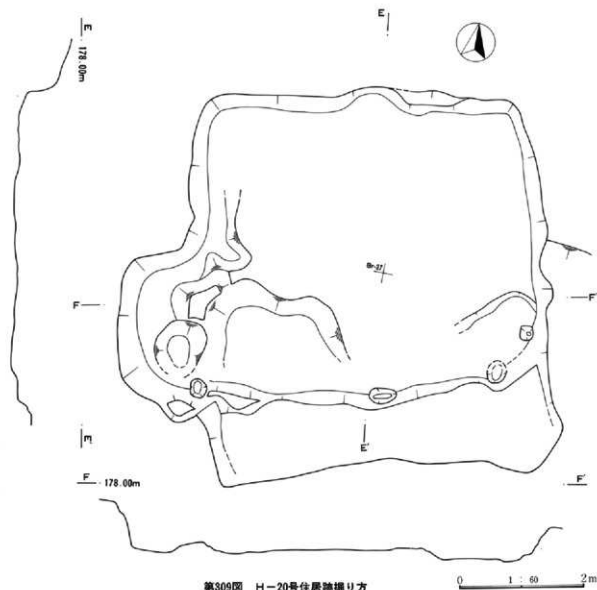
第307図 H-20号住居跡カメラ



- 1 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。炭土粒子・炭化物粒子・白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。1層よりも炭土粒子を多く含む。
- 3 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子を少量含む。
- 4 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子を多量に含む。
- 5 茶褐色土層 やわらかくて粘性あり。ロームブロックを含む。
- 6 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 7 黄褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を含む。



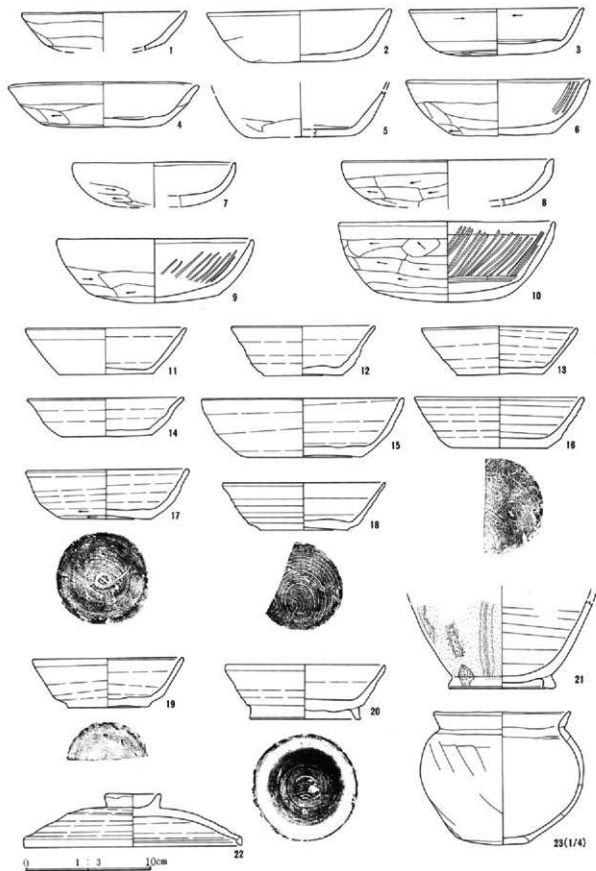
第308図 H-20号住居跡



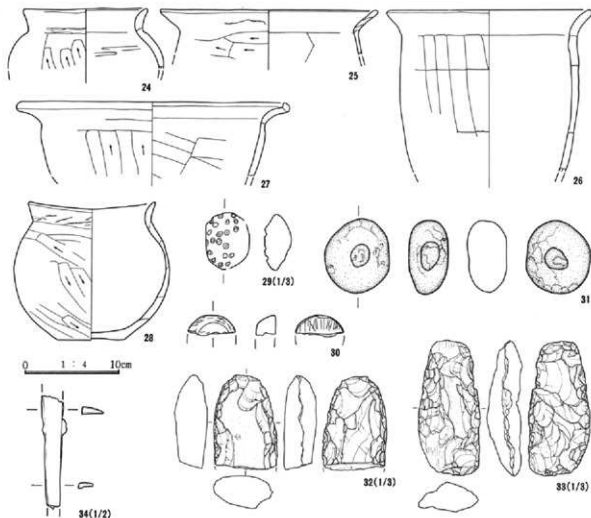
第309図 H-20号住居跡掘り方

H-20号住居跡遺物調査表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
310-1 146	土師器 坏	①13.0 ②3.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・体部下平へら削り、口縁部横ナダ。内面ナダ。	カマド内	1/3残存
310-2 146	土師器 坏	①14.5 ②4.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面・体部下平へら削り、口縁部横ナダ。内面ナダ。	北壁寄り	3/4残存
310-3 146	須恵器 坏	①13.8 ②3.6 ③9.5	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形、底部回転へら削り。	南西部	3/4残存
310-4 146	土師器 坏	①15.0 ②3.5 ③8.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面・体部下平へら削り、口縁部横ナダ。内面ナダ。	北東部	3/4残存
310-5 146	土師器 坏	②3.4 ③8.4	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・体部下平へら削り。 内面ナダ。	中央部	1/3残存 口縁部 部分的欠損
310-6 146	土師器 坏	①14.3 ②4.4 ③8.0	①細粒の砂と褐色粒子を含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面・体部下平へら削り、口縁部横ナダ。内面ナダ。放射状の増文。	南東部	3/4残存
310-7 146	土師器 坏	①12.8 ②3.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・体部下平へら削り、口縁部横ナダ。内面ナダ。	南西隅	1/4残存
310-8 146	土師器 坏	①16.8 ②3.6	①粗粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面・体部下平へら削り、口縁部横ナダ。内面ナダ。	覆土	1/3残存



第310図 H-20号住居跡出土遺物(1)



第311図 H-20号住居跡出土遺物(2)

H-20号住居跡遺物観覧表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
310-9 146	土師器 坏	①15.5 ②5.1	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面・体部下平へ削り、口縁部横ナズ。内面ナズ、放射状の暗文。	北東部	完形
310-10 146	土師器 坏	①17.0 ②6.3 ③10.4	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③褐色	底面・体部下平へ削り、口縁部横ナズ。内面ナズ、放射状の暗文。	北東部	ほぼ完形
310-11 146	須恵器 坏	①12.3 ②3.6 ③7.6	①細 黒色磁物粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転へ削り。	北西部	口縁部欠損
310-12 146	須恵器 坏	①11.4 ②3.9 ③6.2	①粗 黒色粒 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転へ削り。	覆土	口縁部欠損
310-13 146	須恵器 坏	①12.2 ②3.8 ③6.8	①粗 黒色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転へ削り。	西壁寄り	完形
310-14 146	須恵器 坏	①12.2 ②3.0 ③7.2	①細 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転へ削り。	中央部	1/2残存
310-15 146	須恵器 坏	①16.0 ②4.6 ③9.0	①粗 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転へ削り。	カマド前	1/3残存
310-16 146	須恵器 坏	①13.3 ②4.0 ③7.6	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形、底面回転糸切り。	中央部	1/2残存
310-17 146	須恵器 坏	①12.7 ②3.8 ③7.0	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形、底面回転糸切り、周辺回転へ削り。	北西部	完形 体部下端 回転へ削り

H-20号住居跡遺物取組表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況			
310-18 146	須恵器 坏	①13.0 ②3.7 ③7.0	①細 黒色粒 ②還元焰 ③黄灰色	右回転ロクロ整形。 底部回転未切り後無調整。	西壁寄り	1/3残存			
310-19 146	須恵器 坏	①11.8 ②3.9 ③6.5	①細 ②還元焰 ③黄灰色	右回転ロクロ整形。 底部回転未切り後無調整。	北西部	1/2残存			
310-20 146	須恵器 埴	①12.6 ②4.3 ③3.6	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 右回転未切り後無調整。 高台貼付後周縁ナデ。	西壁寄り	1/2残存			
310-21 146	須恵器 埴	①7.0 ②3.5	①細 白色紙粉粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	カマド周 辺	1/2残存			
310-22 146	須恵器 蓋	①4.5 ②4.1 ③17.2	①細 白色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形。 天井部右回転ヘラ削り。	南東部	1/2残存			
310-23 146	土師器 小笠	①14.4 ②14.1 ③6.0	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③暗赤褐色	底面・胴部外面へ削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	北東部	ほぼ完形			
311-24 146	土師器 小笠	①13.0 ②6.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部外面へ削り、口縁部横ナデ。 内面丁寧ナデ。	覆土	口縁部片			
311-25 146	土師器 蓋	①23.1 ②4.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面へ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	北西部	口縁部片			
311-26 146	土師器 蓋	①24.1 ②17.1	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部外面へ削り、口縁部横ナデ。 内面粗いナデ。	北壁付近	口縁部片			
311-27 147	土師器 蓋	①28.0 ②7.7	①中粒の砂を混入 ②酸化焰 ③灰黄褐色	胴部外面へ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド前	口縁部1/4			
311-28 147	土師器 小笠	①13.2 ②13.8 ③7.2	①中粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へ削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	北東部	口縁部欠損			
311-29 147		長4.5 幅3.5 厚2.1	①細粒の砂と片岩粒を含む ②良 ③にぶい褐色	円形竹管による刺突が施されている	北東部	破片			
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特 徴	出土状況	
311-30 147	紡錘車	1/3	磨石	(5.0)	(2.1)	2.1	(27)	表面に目の細かい削り痕が残る。	覆土
311-31 147	磨石	完形	安山岩	7.8	6.9	4.0	340	両面に磨粒痕が認められる。	覆土
311-32 147	打製石斧	刃部欠損	熱変成岩	(7.4)	5.0	2.5	(110.7)	短冊型。	覆土
311-33 147	打製石斧	完形	熱変成岩	10.5	4.8	2.7	129	撥型。	覆土
311-34	刀子	一部欠損		(6.0)	1.2	0.4	(4.3)		覆土

H-21号住居跡 (第312回、PL-147)

位置 Bo-11・12グリッドにかけて検出された。

形状 住居跡が路線外に延びているために不明である。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。

盤高 住居跡確認面より約20～28cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約3.2㎡。

周溝 検出できなかった。

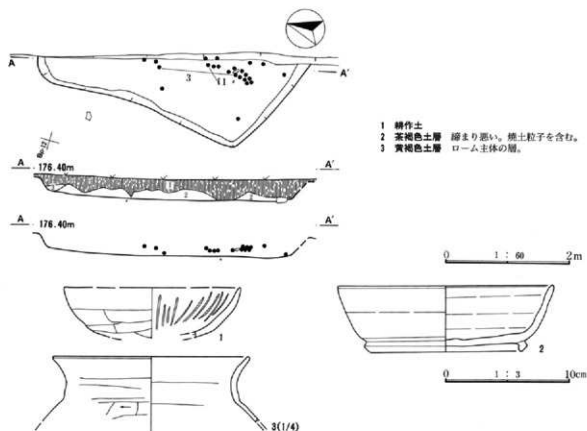
竈 発掘区域外に存在しているものと考えられる。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片38点が出土し、この他に縄文中期土器片1点、弥生後期土器片6点が出土している。

時期 8世紀前半。



第312図 H-21号住居跡と出土遺物

H-21号住居跡遺物類表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
312-1 147	土師器 坏	①13.9 ②3.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい黄棕色	体部へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状の磨き。	中央部	1/3残存
312-2 147	須恵器 埴	①16.9 ②5.2 ③12.0	①細粒の砂と黒色鉱物粒を含む ②還元焰 ③灰白色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	覆土	3/4残存
312-3 147	土師器 壺	①20.8 ②6.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい棕色	胴部へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	中央部	口縁部1/4

H-22号住居跡(第313図)

位置 Bo-8・9グリッドにかけて検出された。

形状 住居跡が路線外に延びているため不明である。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は2層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約40cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約1.1㎡。

周溝 検出できなかった。

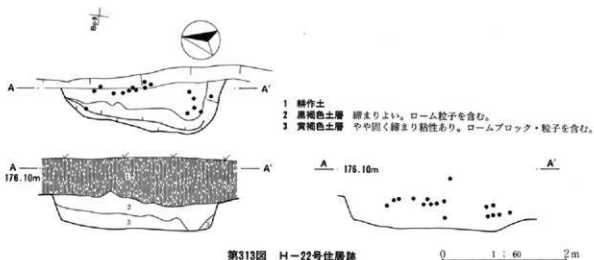
竈 発掘区域外に存在しているものと考えられる。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片122点、須恵器片9点が出土し、この他に縄文中期土器片8点、礫3点が出土している。

時期 不明。



H-23号住居跡 (第314図, PL.147)

位置 Bn・Bo-7グリッドにかけて検出された。

形状 住居跡が路線外に延びているために不明である。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約75cmで床面に達する。

床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約0.8㎡。

周溝 検出できなかった。

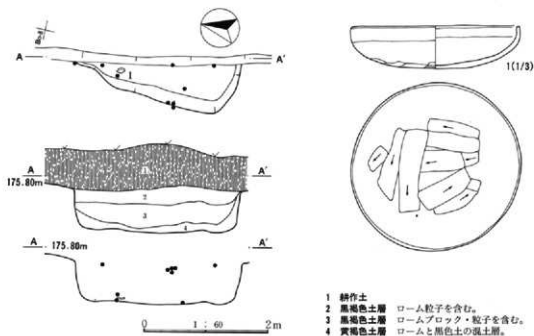
竈 発掘区域外に存在しているものと考えられる。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

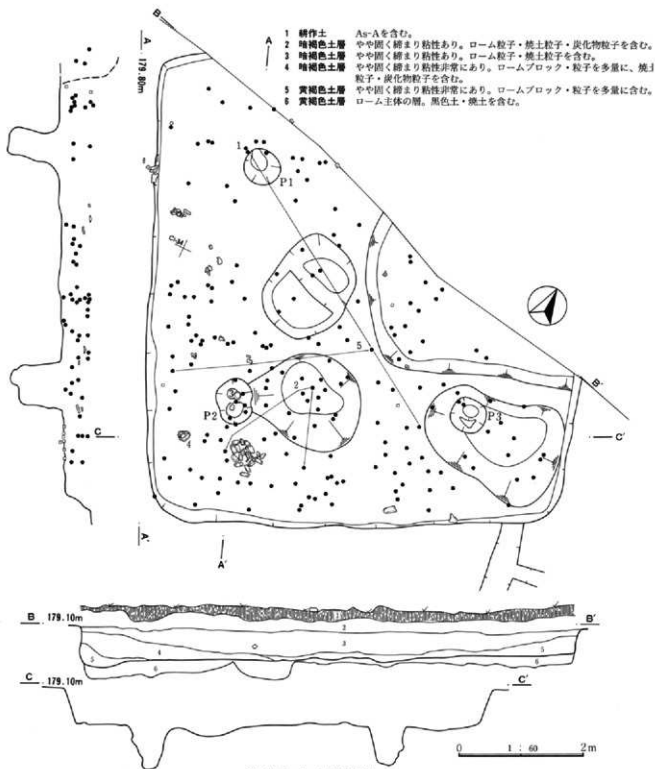
遺物 覆土から土師器片12点が出土し、この他に縄文前期土器片1点、中期土器片5点、弥生後期土器片9点が出土している。

時期 8世紀後半。



H-23号住居跡遺物類表 (①口徑 ②器高 ③底徑)

図番 P.L	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
314-1 147	土師器 杯	①13.3 ②3.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	西壁付近	完形



H-24号住居跡 (第315・316図、PL. 98・147)

位置 Cg-33・34、Ch-33・34、Ci-33・34グリッドにかけて検出された。1号屋外埋設土器を壊している。

形状 住居跡が路線外に延びているために不明であるが、現状では長辺7.5m、短辺6.7mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約40～60cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約32.7㎡。

掘り方 床面東部の凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

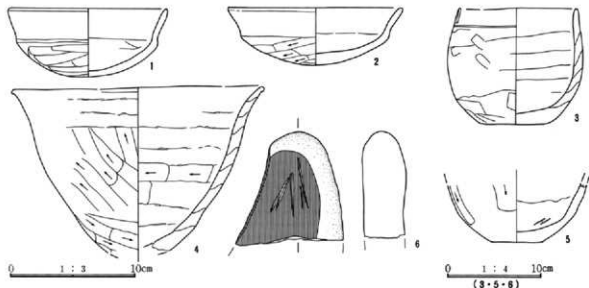
竈 発掘区域外の北壁に存在しているものと考えられる。

柱穴 3個検出された。P1は長径60cm、短径55cm、深さ80cm。P2長径70cm、短径57cm、深さ80cm。P3は長径55cm、短径52cm、深さ65cmである。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片325点、須恵器片2点が出土し、この他に縄文前期土器片2点、中期土器片123点、弥生後期土器片141点、礫・剥片14点が出土している。P2の南床面から磨礫み石が出土している。

時期 6世紀後半。



第316図 H-24号住居跡出土遺物

H-24号住居跡遺物観測表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
			胎土	焼成	色調			
316-1 147	土師器 杯	①12.4 ②6.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。		P1付近	ほぼ完形	
316-2 147	土師器 杯	①13.8 ②4.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③灰褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。		南西部	1/3残存 底面は荒れている	
316-3 147	土師器 小型壺	①12.4 ②12.3 ③6.8	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面・胴部外面へう削り。 口縁部横ナデ、内面ナデ。		覆土	完形 内外面に輪積み痕顕著	
316-4 147	土師器 瓶	①20.0 ②13.0 ③6.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面・胴部外面へう削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。		南西隅	3/4残存 内外面に輪積み痕残る	
316-5 147	土師器 壺	①6.3 ②5.5	①粗砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③暗赤褐色	底面・胴部外面へう削り。内面ナデ、へらの工具痕。		覆土	底部片	
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)		特 徴	出土状況	
				全長	幅 厚 重量			
316-6 147	礫石	1/2	砂岩	(12.1) (11.5)	4.6 (636)	2面使用。片面に条痕が認められる。	覆土	

H-25号住居跡(第317~322図, PL. 98・99・147)

位置 Ci-31・32, Cj-31・32グリッドにかけて検出された。Y-5号住居跡を壊している。

形状 一辺7.2mの正方形である。

方位 N-72°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約40~50cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約48.5㎡。

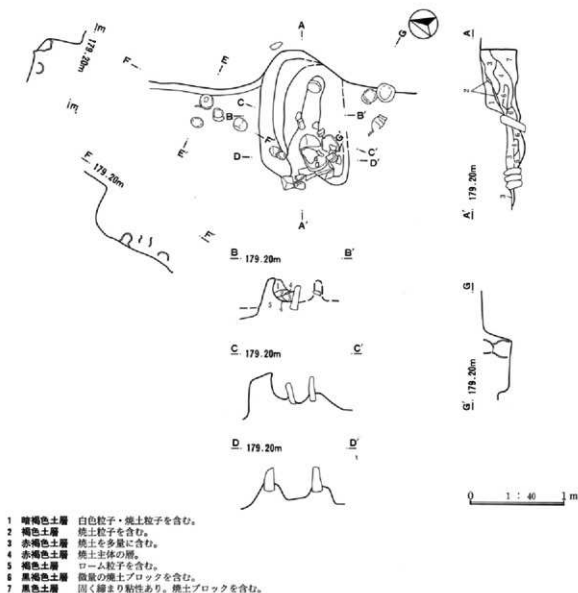
掘り方 床面東部の凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 東壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。左右の袖石2個と支石2個が検出された。また長甕2個体も出土している。規模は煙道方向150cm、両袖方向100cmである。

柱穴 ビットは総計6個検出された。このうちP1~P4は主柱穴になる。P1の規模は長径43cm、短径38cm、深さ51cm、P2は長径48cm、短径45cm、深さ72cm、P3は長径38cm、短径36cm、深さ36cm、P4は長径50cm、短径40cm、深さ55cmである。

貯蔵穴 床面東南隅から検出された。P5は長径60



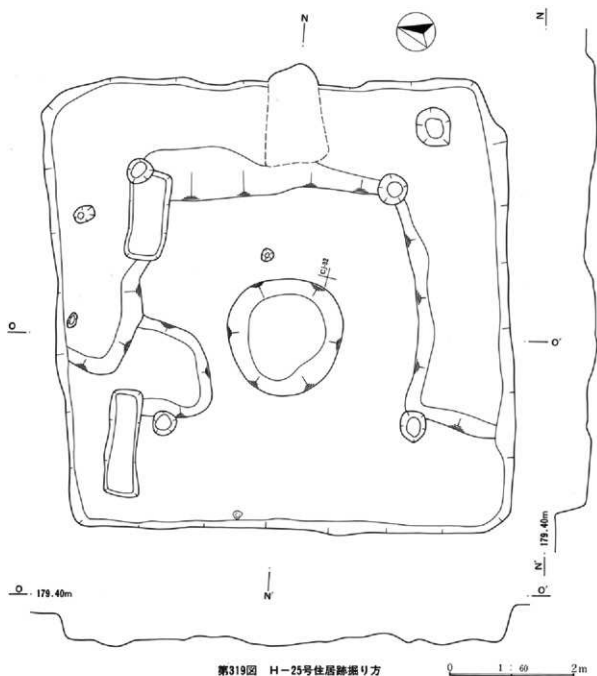
第317図 H-25号住居跡カマド



- 1 黒褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ローム粒子を多量に含む。
- 2 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 4 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に含む。

0 1 : 60 2m

第318図 H-25号住居跡



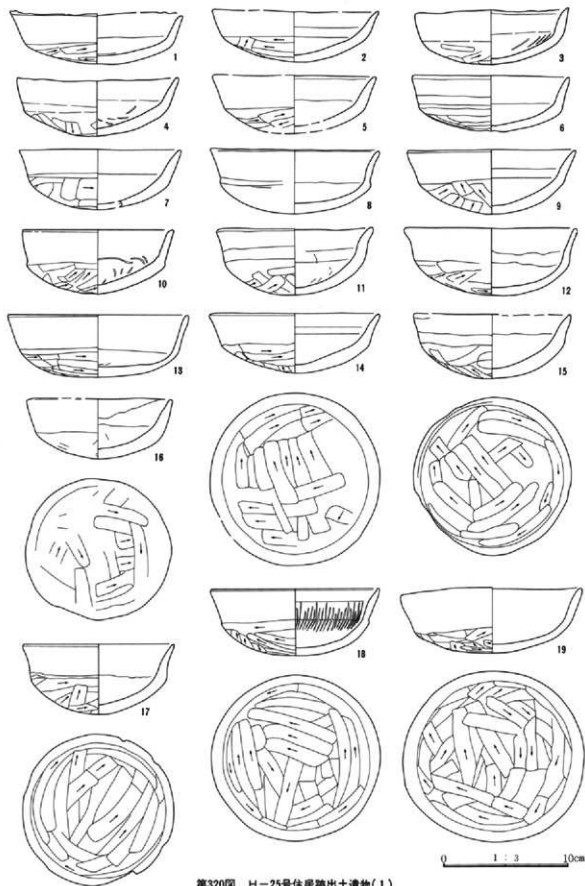
第319図 H-25号住居跡掘り方

cm、短径54cm、深さ76cmである。

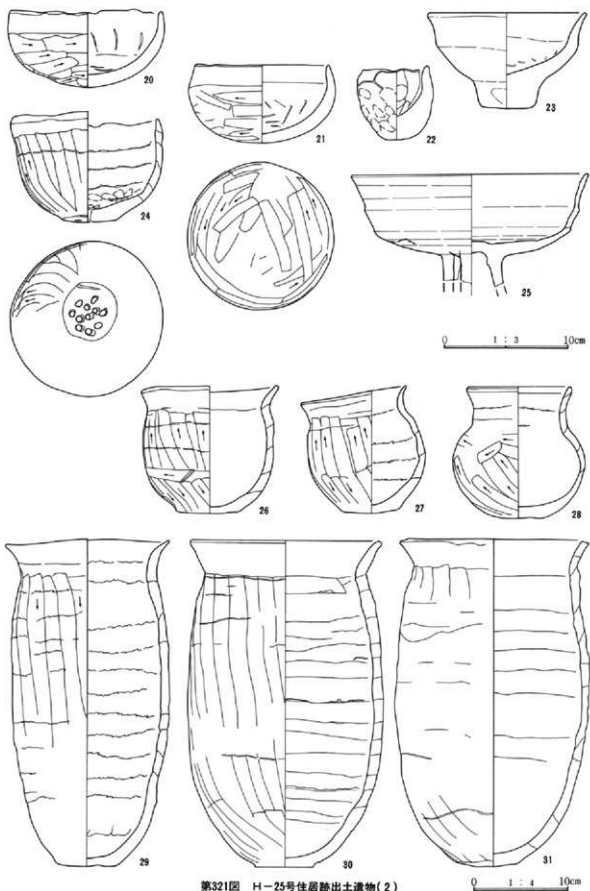
遺物 覆土や床面から土師器片454点、須恵器片7点が出土し、この他に縄文前期土器片1点、中期土器片102点、弥生後期土器片315点、礫・剝片14点が

出土している。竈周辺や貯蔵穴周辺から完形土器が多数出土している。

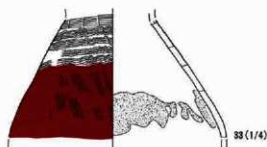
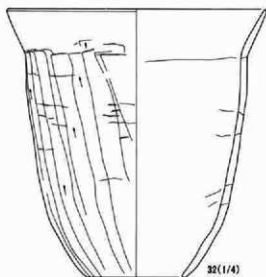
時期 6世紀後半。



第320図 H-25号住居跡出土遺物(1)



第321図 H-25号住居跡出土遺物(2)



新322図 H-25号住居跡出土遺物(3)

H-25号住居跡遺物観察表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
320-1 147	土師器 坏	①13.5 ②0.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	カマド前	ほぼ完形
320-2 147	土師器 坏	①13.2 ②4.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面浅いへつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	南壁寄り	完形
320-3 147	土師器 坏	①12.2 ②4.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	カマド前	完形
320-4 147	土師器 坏	①12.7 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	南壁寄り	完形 底面荒れている
320-5 147	土師器 坏	①12.8 ②4.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面浅いへつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	中央部	口縁一部欠損 器厚は厚い
320-6 147	土師器 坏	①12.4 ②4.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、痕。	中央部	3/4残存
320-7 147	土師器 坏	①12.7 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面浅いへつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、痕。	南壁寄り	ほぼ完形 器厚は厚い
320-8 147	土師器 坏	①13.5 ②5.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面浅いへつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁寄り	ほぼ完形
320-9 147	土師器 坏	①13.0 ②5.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	覆土	口縁一部欠損 器厚は厚い
320-10 147	土師器 坏	①11.9 ②5.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	P 5付近	口縁一部欠損
320-11 147	土師器 坏	①12.2 ②5.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	カマド付 近	ほぼ完形 器厚は厚い
320-12 147	土師器 坏	①13.5 ②5.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁寄り	口縁一部欠損
320-13 147	土師器 坏	①14.2 ②4.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	P 5付近	完形
320-14 147	土師器 坏	①13.2 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。内 面ナデ、ヘラの工具痕。	P 5付近	完形 器厚は厚い
320-15 147	土師器 坏	①12.3 ②5.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。内 面ナデ。	南壁寄り	ほぼ完形 器厚は厚い
320-16 147	土師器 坏	①11.7 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面浅いへつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	カマド付 近	ほぼ完形 器厚は厚い
320-17 147	土師器 坏	①12.0 ②5.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	南壁寄り	完形 器厚は厚い
320-18 147	土師器 坏	①13.4 ②5.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のへつ削り。	南壁寄り	完形

H-25号住居跡遺物観察表 (①口縁 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器類別 器種	法量 (mm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
320-19 147	土師器 坏	①14.4 ②5.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁寄り	完形
321-20 147	土師器 坏	①12.3 ②5.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	カマド付 近	底部一部欠損 器厚は厚い
321-21 147	土師器 坏	①10.6 ②6.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	東壁寄り	完形 器厚は厚い
321-22 147	土師器 手捏	①5.2 ②5.5	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③におい黄褐色	外面ナデ。 内面ナデ。	カマド内	完形
321-23 147	土師器 坏	①12.5 ②7.6 ③4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面・体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	南壁寄り	完形
321-24 147	土師器 小型壺	①15.4 ②11.9 ③5.6	①中粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	胴部外部へう削り、口縁部横ナデ。 内面に輪積み痕。	カマド付 近	完形 底面へう削り 欠11箇の小穴
321-25 147	須恵器 高坏	①18.7 ②9.0	①黒色鉱物粒を含む ②還元焰	右回転クロ整形。 脚部に3箇の透し。	P 5付近	脚部欠損
321-26 147	土師器 小型壺	①14.6 ②13.5 ③6.8	①中粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③におい赤褐色	底面・胴部外部へう削り、口縁部 横ナデ。内面丁寧ナデ。	カマド付 近	口縁一部欠損 内面に煤が付着
321-27 147	土師器 小型壺	①11.1 ②13.5 ③6.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、 口縁部横ナデ。内面ナデ。	東壁寄り	完形 内面に輪 積み痕が残る
321-28 147	土師器 小型壺	①11.2 ②13.9	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③におい赤褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部 横ナデ。内面丁寧ナデ。	カマド付 近	胴部一部欠損
321-29 147	土師器 壺	①17.4 ②34.8 ③6.3	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③におい黄褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ、輪積み痕。	カマド付 近	完形 外面に煤が付着
321-30 147	土師器 壺	①19.8 ②34.6 ③6.1	①粗砂と3-5mmの片岩粒を含む ②酸化焰 ③におい橙色	底面・胴部外面へう削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ、輪積み痕。	東壁寄り	口縁へ底面1/2 内面に煤が付着
321-31 147	土師器 壺	①18.4 ②34.9	①粗砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③灰褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ、輪積み痕。	カマド内	口縁一部欠損
322-32 147	土師器 瓶	①27.4 ②28.5 ③10.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	P 5付近	口縁へ底1/2残
322-33 147	甍 (弥生)	①12.5	①細粒の砂を混入 ②良 ③赤色	頸部は等間隔止め・瘤状文、波状 文、ミガキ、赤色塗彩。	北西部	頸部-胴上半 内面 に炭化物が付着
322-34 147	台付甍 (弥生)	②2.0	①細粒の砂を混入 ②良 ③赤色	横位の沈線が施されている。	覆土	胴部部分

H-26号住居跡 (第323遺、PL.100・147)

位置 Cd-25・26グリッドにかけて検出された。H

8号住居跡の南約1mの所に位置している。

形状 完掘できなかったために不明であるが、一
辺4.7mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築さ
れ、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約34~50cmで床面に達す
る。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。中央部から焼土が検出さ

れた。現状での面積は約9.6m²。

掘り方 床面全体に凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

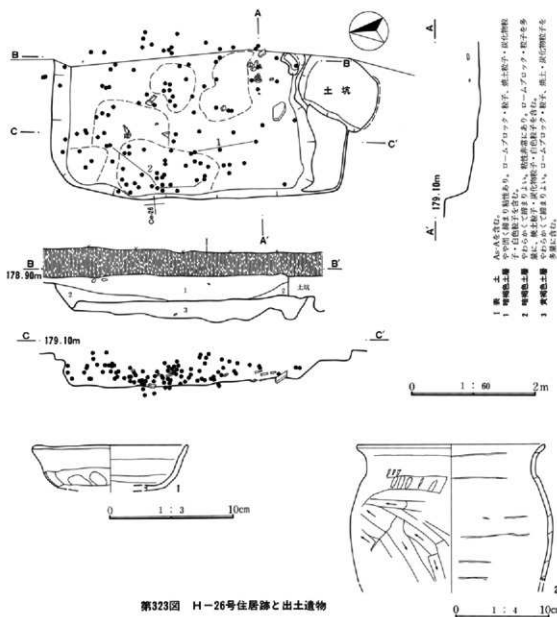
柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土や床面から土師器片371点、須恵器片8
点が出土し、この他に縄文中期土器片24点、弥生後
期土器片29点、鏃・剣片14点が出土している。

備考 南部分を土坑によって壊されている。

時期 9世紀前半。



第323図 H-26号住居跡と出土遺物

H-26号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
323-1	土師器	①12.2	①細粒の砂を混入	底面・体部へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	西壁寄り	1/2残存
147	坏	②3.7 ③8.5	②酸化焰 ③にぶい褐色			
323-2	土師器	①20.0	①細粒の砂を混入	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧ナデ。	北西部	口縁部片
147	斐	②14.5	②酸化焰 ③にぶい褐色			

H-27号住居跡 (第324・325図、PL.100・101・147・148)

位置 Ct-26・27、Da-26・27グリッドにかけて検出された。H-41号住居跡の南西約1.5mの所に位置している。

形状 一辺3.4mの正方形である。

方位 N-103°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築さ

れ、そこに堆積した覆土は6層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約40~48cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約9.9m²。

掘り方 床面北西部で凹凸が顕著である。

周溝 全周している。幅10~25cm、深さは床面とほとんど変わりなかった。

竈 東壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。左右の袖石2個と支石1個が検出された。袖部分の残存は80cmである。また長壺2個体が竈南から出土している。規模は竈道方向90cm、両袖方向50cmである。

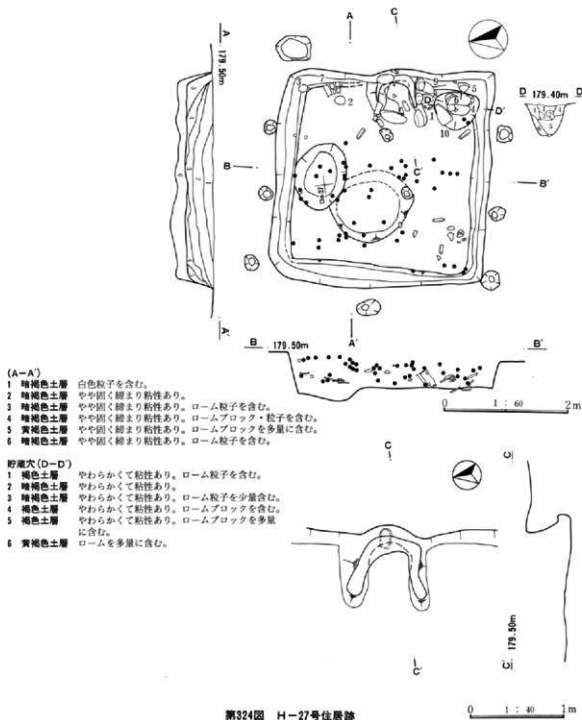
柱穴 壁外柱穴。

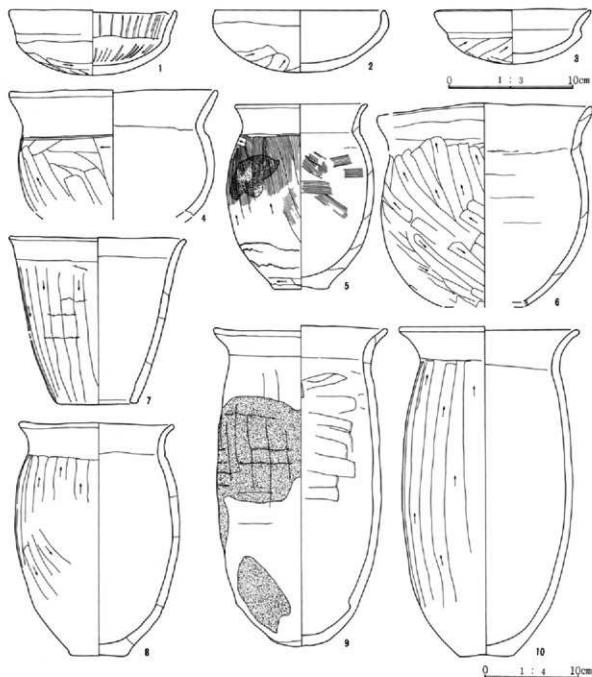
貯蔵穴 床面東南隅から検出された。長径60cm、短

径55cm、深さ50cmである。

遺物 覆土や床面から土師器片75点が出土し、他に縄文前期土器片1点、中期土器片17点、弥生後期土器片70点、礫・剥片9点が出土している。竈周辺や貯蔵穴周辺から完形土器が多数出土している。

時期 6世紀後半。





第325図 H-27号住居跡出土土物

H-27号住居跡土物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
325-1 147	土師器 坏	①13.2 ②5.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状の磨き。	カマド付近	1/3残存
325-2 147	土師器 坏	①13.6 ②4.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、吸灰。	北東部	完形
325-3 147	土師器 坏	①12.2 ②4.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にょい橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、稜が明確。	北東隅	ほぼ完形
325-4 147	土師器 壺	①22.0 ②12.2	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	貯蔵穴内	口縁～胴上半
325-5 147	土師器 小型壺	①13.9 ②19.6 ③5.8	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にょい橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ、内面ナデ。	東壁寄り	口縁一部欠 外面 に煤が付着している

H-27号住居跡遺物観察表 (①口徑 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器類別 群	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
325-6	土師器	①23.0	①細粒の砂と片岩粒を少量含む	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。	貯蔵穴内	胴部一部欠損
147	小型壺	②8.2 ③8.5	②酸化焰 ③明赤褐色	内面はナデで器表面密。		
325-7	土師器	①18.7	①中粒の砂と片岩粒を多量に含む	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。	東壁寄り	完形 外面に煤が付着している
148	小型壺	②17.6 ③8.3	②酸化焰 ③にぶい橙色	内面ナデ。		
325-8	土師器	①16.0	①細粒の砂と片岩粒を少量含む	胴部外面へラ削り弱い、口縁部横ナデ。	カマド付近	完形
148	小型壺	②24.7 ③6.0	②酸化焰 ③橙色	内面ナデで器表面密。		
325-9	土師器	①18.2	①中粒の砂と片岩粒を含む	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。	カマド付近	完形 胴部外面に煤が付着している
148	壺	②33.8 ③5.0	②酸化焰 ③橙色	内面ナデで器表面密。		
325-10	土師器	①18.8	①細粒の砂と3~5mmの片岩粒を多量に含む	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。	貯蔵穴内	完形
148	壺	②35.0 ③5.5	②酸化焰 ③橙色	内面ナデで器表面密。		

H-28号住居跡 (第326~328図、PL.102・148)

位置 Dg-33・34、Dh-33・34グリッドにかけて検出された。Y-12号住居跡と接している。

形状 長辺5.2m、短辺3.3mの長方形である。

方位 N-109°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約20cmで床面に達する。

床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約16.7㎡。

掘り方 なし。

周溝 検出できなかった。

竈 東壁南に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。左袖石と天井石3個が検出された。袖部分の残存は約50cmである。規模は煙道方向110cm、両袖方向70cmである。

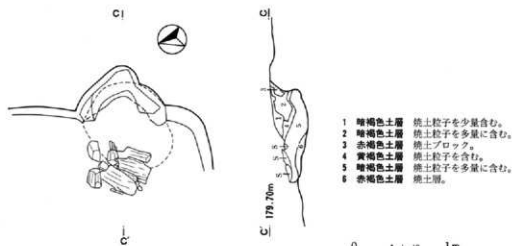
柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

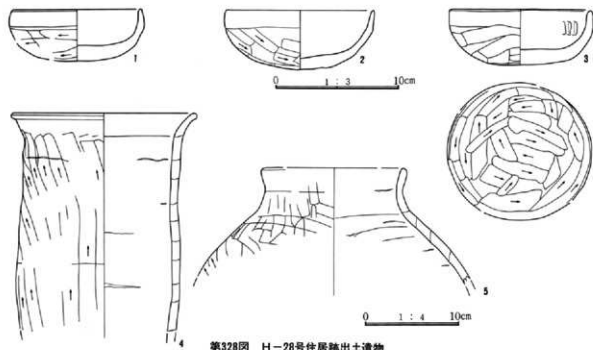
遺物 覆土や床面から土師器片188点、須恵器片3



第326図 H-28号住居跡



第327図 H-28号住居跡カマド



第328図 H-28号住居跡出土遺物

点が出土し、この他に縄文前期土器片1点、中期土器片17点、弥生後期土器片27点、礫・剥片15点が出土している。竈南から多数出土している。
時期 7世紀前半。

H-28号住居跡遺物観察表 (①口径 ②高さ ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
328-1 148	土師器 坏	①10.2 ②4.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド付 近	1/2残存 器厚は厚い
328-2 148	土師器 坏	①11.9 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へラ削り、ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へラの工具痕。	東壁寄り	3/4残存
328-3 148	土師器 坏	①11.2 ②4.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へラの工具痕。	中央部	ほぼ完形 器厚は厚い
328-4 148	土師器 壺	①19.2 ②23.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。輪轆み痕残る。	南東部	底部欠損 外面 荒れている
328-5 148	土師器 壺	①14.8 ②11.6	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	覆土	口縁部1/4 内面 に輪轆み痕が残る

H-29号住居跡 (第329・330図, PL.103・148)

位置 Cs-24・25、Ct-24・25グリッドにかけて検出された。H-41号住居跡の南約7.5mの所に位置している。

形状 長辺4.5m、短辺4.1mの方形。

方位 N-9°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

壁高 住居跡確認より約30~40cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約15.8㎡。

掘り方 床面中央部の凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 北壁中央やや東に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。左右の袖

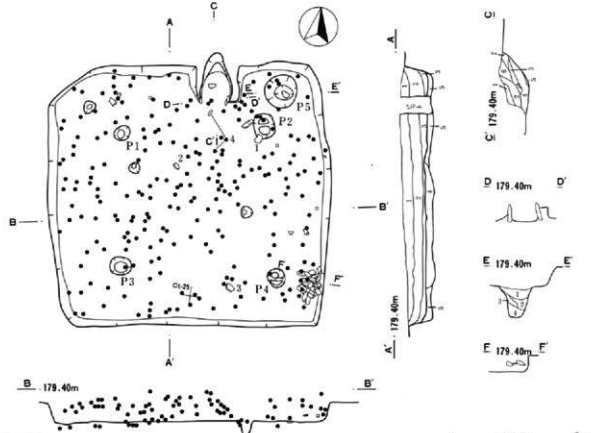
石2個と支石1個が検出された。袖部分の残存は約60cmである。規模は煙道方向80cm、両袖方向40cm。

柱穴 ビットは総計5個検出された。このうちP1~P4は主柱穴になる。P1の規模は長径36cm、短径32cm、深さ34cm。P2は長径40cm、短径32cm、深さ53cm。P3は長径34cm、短径30cm、深さ37cm。P4は長径30cm、短径28cm、深さ42cmである。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P5は長径54cm、短径50cm、深さ38cmである。

遺物 覆土や床面から土師器片289点、須恵器片1点が出土し、この他に縄文中期土器片49点、弥生土器片159点、鏝・剝片10点が出土している。こも編み石19点が床面南東隅から出土している。

時期 6世紀後半。



(A-A')

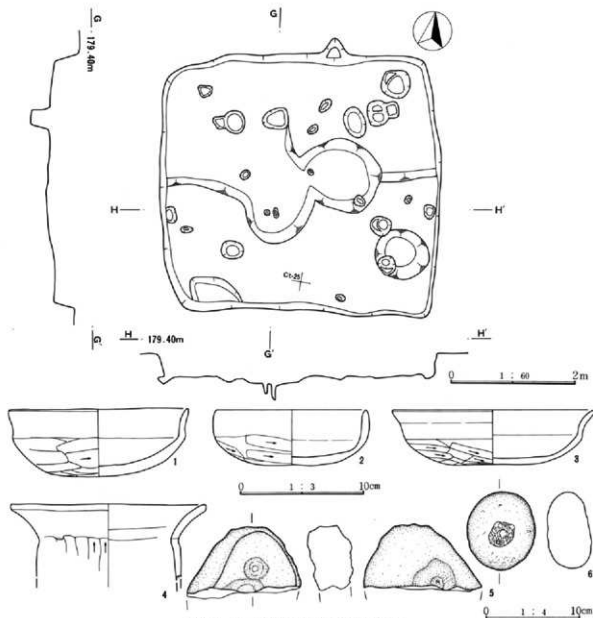
- 1 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 2 黒褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームブロックを少量、炭化物粒子・焼土粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 4 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 5 黄褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームと黒色土の混生層。

カマド(C-C')

- 1 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 2 黒褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 3 赤褐色土層 焼土ブロック・粒子を多量に含む。

貯蔵穴(E-E')

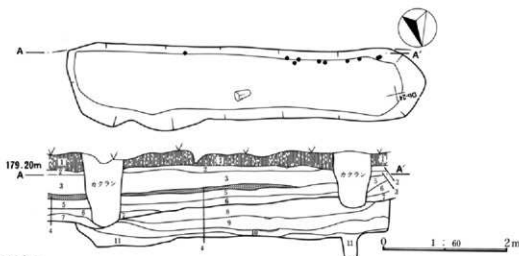
- 1 黒褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多量に含む。
- 2 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3 黄褐色土層 やわらかくて粘性非常にあり。ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 やわらかくて粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を多量に含む。



第330図 H-29号住居跡掘り方と出土遺物

H-29号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	戒・整形技法の特徴	出土状況	残存状況	
330-1 148	土師器 杯	①14.2 ②5.3	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焙 ③におい褐色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	P 2付近	3/4残存	
330-2 148	土師器 杯	①12.0 ②4.4	①中粒の砂を混入 ②酸化焙 ③褐色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	中央部	1/4残存	
330-3 148	土師器 杯	①16.0 ②4.3	①細粒の砂と褐色粒子を含む ②酸化焙 ③褐色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南東部	1/3残存	
330-4 148	土師器 罍	①20.8 ②8.0	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焙 ③灰褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド前	口縁部片	
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)		特 徴	出土状況
330-5 148	凹石	1/2	砂岩	全長 (7.0)	幅 厚 (11.8 3.5)	凹面に計3個の凹みが認められる。	覆土
330-6 148	礫石	完形	安山岩	8.2	7.2 4.5	352 片面に敲打痕が認められる。	覆土



- 1 耕作土 As-Aを含む。
- 2 暗褐色土層 締まりよく粘性あり。As-Aを少量含む。
- 3 黄褐色土層 やわらかくて粘性ない。As-Bを含む。
- 4 A層一部 中程度締まり粘性帯層にあり。ローム粒子を少量含む。
- 5 黄褐色土層 中程度締まり粘性帯層にあり。ローム粒子を含む。
- 6 暗褐色土層 やわらかくて粘性帯層にあり。ロームを多量に含む。
- 7 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性帯層にあり。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。
- 8 暗褐色土層 中程度締まり粘性帯層にあり。ローム粒子を多量に。炭化物粒子を含む。
- 9 黄褐色土層 やわらかくて粘性あり。多量のロームと炭化物粒子・黄土粒子を含む。
- 11 黄褐色土層 やわらかくて締まり悪い。ローム主体の層。

第331図 H-30号住居跡

H-30号住居跡 (第331図)

位置 Da-23・24、Db-23・24グリッドにかけて検出された。4号墳周堀下から検出された。

形状 完掘できなかったために不明であるが、一边5.7mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約30~50cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約4.3㎡。

掘り方 なし。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から少量の土器器片が出土しているだけである。

時期 不明。

H-31号住居跡 (第332~335図、PL-104・140)

位置 Cb-32・33、Cc-32・33グリッドにかけて検出された。H-32号住居跡の西約1.5mの所に位置している。8号掘立柱建物跡と重複している。

形状 長辺4.8m、短辺4.2mの長方形である。

方位 N-87°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約44~50cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。面積は約16.3㎡。

掘り方 壁隙で顕著であり、床面中央部に浅い落ち込みがある。

周溝 検出できなかった。

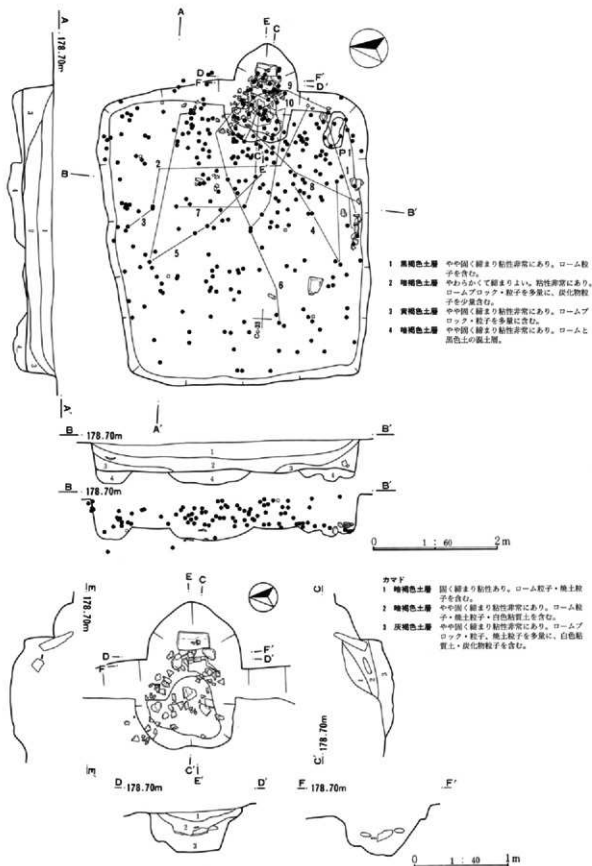
竈 東壁中央やや南に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。壁寄りに石が立てかけてある。規模は煙道方向150cm、両袖方向100cmである。

柱穴 検出できなかった。

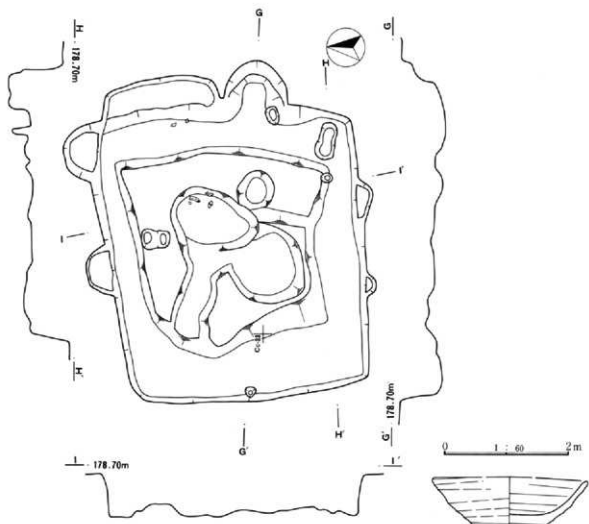
貯蔵穴 床面東南隅から検出された。長径60cm、短径26cm、深さ32cmである。

遺物 覆土や床面から土器器片1,421点が出土し、この他に縄文早期土器片1点、前期土器片1点、中期土器片85点、弥生土器片49点、鏝・剝片27点が出土している。

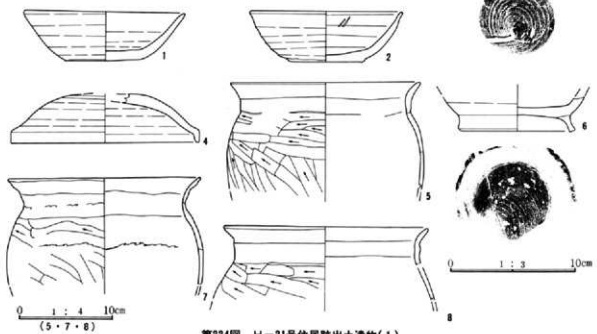
時期 9世紀前半。



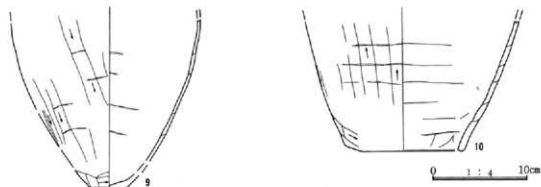
第332図 H-31号住居跡



第333図 H-31号住居跡掘り方



第334図 H-31号住居跡出土遺物(1)



第335図 H-31号住居跡出土遺物(2)

H-31号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種類 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
334-1 148	須恵器 坏	①12.7 ②4.0 ③6.0	①細 片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③褐色	右回転クロコ整形。 底面不明。	南東壁寄り	完形
334-2 148	須恵器 坏	①12.0 ②4.0 ③5.8	①細 片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③褐色	回転クロコ整形。 底面未切りと思われるが不明。	南東壁寄り	3/4残存
334-3 148	須恵器 坏	①12.2 ②3.7 ③6.0	①粗 黒色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。 底面回転未切り。	北壁寄り	3/4残存
334-4 148	須恵器 蓋	②3.8 ③14.8	①白色・黒色鉱物粒を混入 ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形。 天井部平坦。	南壁寄り	1/2残存
334-5 148	土師器 甕	①20.0 ②11.3	①細粒の砂と褐色粒子を含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	中央部	口縁部1/2
334-6 148	須恵器 埴	②2.7 ③9.2	①粗 片岩粒を少量含む ②還元焰 ③灰色	回転クロコ整形。 高台付。	覆土	1/2残存
334-7 148	土師器 甕	①20.4 ②11.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド付近	胴下半欠損 内面に煤が付着
334-8 148	土師器 甕	①21.5 ②7.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁寄り	口縁ほぼ全周 内外に炭化物が付着
335-9 148	土師器 甕	①17.8 ③3.8	①細粒の砂と褐色粒を含む ②酸化焰 ③赤褐色	底面・胴部外面へラ削り。 内面ナデ。	カマド内	胴下半部 外面に煤が付着
335-10 148	土師器 瓶	②13.0 ③13.0	①細粒の砂と褐色粒を含む ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へラ削り。 内面ナデ。	カマド内	破片

H-32号住居跡 (第338～339図、PL.105・148)

位置 Ca-32・33グリッドにかけて検出された。H

-33号住居跡によって壊されている。

形状 完照できなかったために不明であるが、現状では長辺5.5m、短辺4.5mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

竪高 住居跡確認面より約55cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約15.7m²。

掘り方 床面の凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竪 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土上層から一括して遺物が出土している。この他に土師器片266点、須恵器片23点、縄文前期土師片1点、中期土師片46点、弥生土師片11点、礫・剥片13点が出土している。

時期 6世紀後半。

H-33号住居跡 (第336~339図, PL. 105 - 148)

位置 Ca・Cb-33グリッドにかけて検出された。

H-32号住居跡を壊している。

形状 完掘できなかったために不明であるが、現状では長辺5.7m、短辺3.7mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約28~36cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約13m²。

掘り方 床面の凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

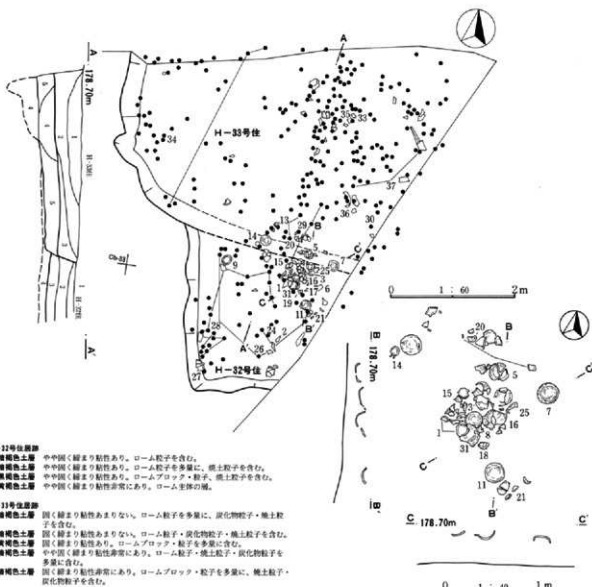
竈 北西部から検出された。石組みの竈である。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土上層から遺物が出土している。土師器片747点、縄文前期土器片3点、中期土器片36点、弥生土器片18点、礫・剥片23点が出土している。

時期 8世紀前半。



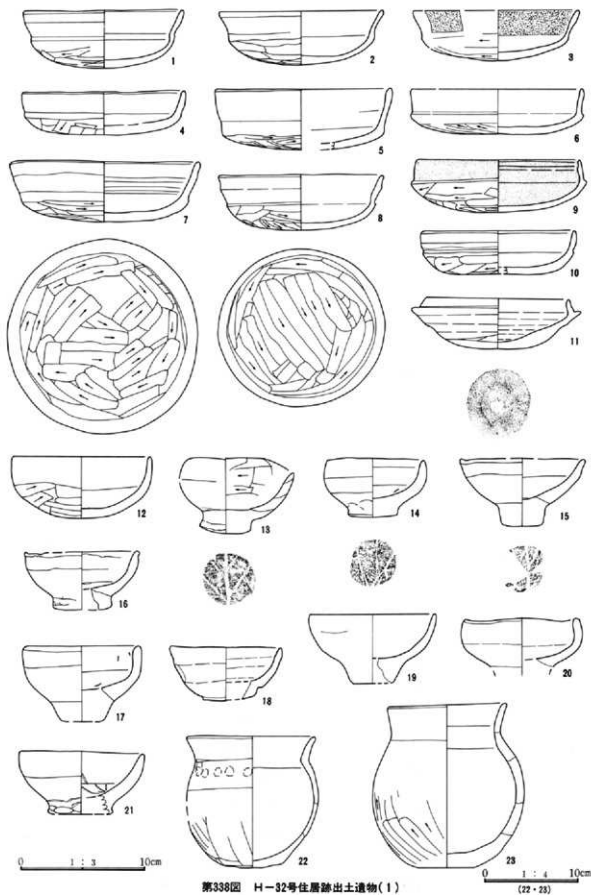
H-32号住居跡

- 1 暗褐色土層 中や固く締まり粘性あり。ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 中や固く締まり粘性あり。ローム粒子を多量に、焼土粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 中や固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子、焼土粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 中や固く締まり粘性非常にあり。ローム全体の層。

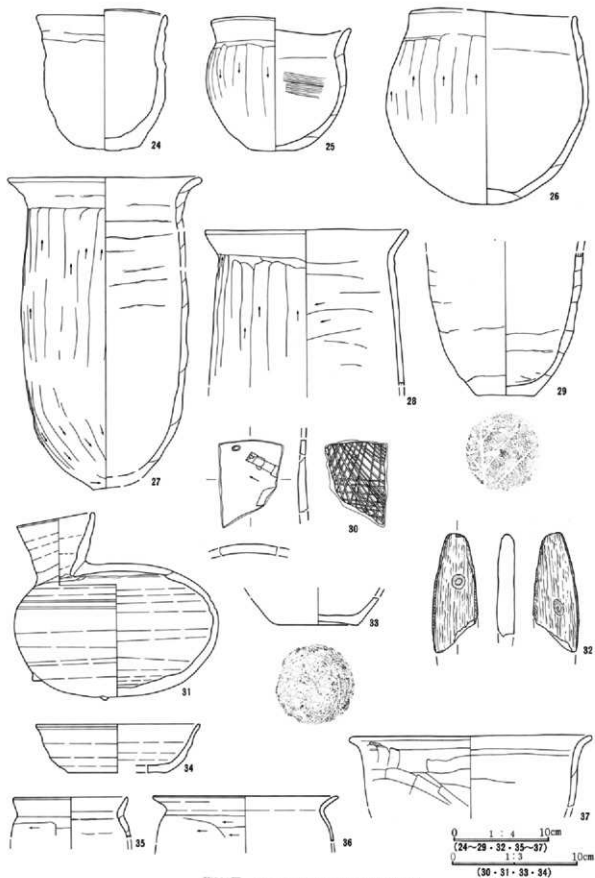
H-33号住居跡

- 1 暗褐色土層 固く締まり粘性あまりない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子・焼土粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 固く締まり粘性あまりない。ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。
- 3 黄褐色土層 固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 4 暗褐色土層 中や固く締まり粘性非常にあり。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多量に含む。
- 5 暗褐色土層 固く締まり粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を多量に、焼土粒子・炭化物粒子を含む。

第336図 H-32・33号住居跡遺物分布



第338図 H-32号住居跡出土遺物(1)



第339回 H-32・33号住居跡出土遺物(2)

H-32号住居跡遺物整理表 (①口縁 ②器高 ③底径)

図番 P.L	土器種類 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況	
			胎土	焼成	色調				
338-6 148	土師器 環	①13.2 ②3.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	南西部	3/4残存		
338-7 148	土師器 環	①15.0 ②4.8	①細粒の砂と褐色粒を含む ②酸化焙焼	③にぶい褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土上層	完形		
338-8 148	土師器 環	①13.0 ②4.3	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焙焼	③にぶい褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ、へらの工具痕。	覆土上層	完形		
338-9 148	土師器 環	①12.8 ②4.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③明褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ、内面黒漆か。	南西部	ほぼ完形		
338-10 148	土師器 環	①12.0 ②3.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土	1/2残存		
338-11 148	須恵器 環	①11.3 ②3.9 ③5.2	①細 白色粒子を含む ②還元焙焼	③灰色	右回転ロクロ整形、 底面右回転へう削り。	覆土上層	完形		
338-12 148	土師器 環	①11.0 ②4.8	①粗粒の砂と褐色鉱物粒を含む ②酸化焙焼	③明褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土上層	1/2残存		
338-13 148	土師器 環	①4.7 ②4.0	①中粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焙焼	③にぶい赤褐色	体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面丁寧ナデ。	南西部	3/4残存 底部木葉直		
338-14 148	土師器 環	①7.6 ②4.7 ③3.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい赤褐色	底面・体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面ナデ、へらの工具痕。	覆土上層	3/4残存 底部木葉直		
338-15 148	土師器 環	①9.8 ②5.2 ③3.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい褐色	底面・体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面ナデ、へらの工具痕。	覆土上層	3/4残存 底部木葉直		
338-16 148	土師器 環	①8.9 ②4.6 ③4.5	①中粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい褐色	体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土上層	底部欠損		
338-17 148	土師器 環	①8.9 ②6.0 ③3.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい黄褐色	底面・体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	南西部	1/2残存		
338-18 148	土師器 環	①9.7 ②4.2 ③4.2	①中粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい褐色	底面・体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土上層	2/3残存		
338-19 148	土師器 環	①10.0 ②5.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい褐色	体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土	2/3残存		
338-20 148	土師器 環	①8.9 ②3.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③褐色灰色	体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土上層	1/2残存		
338-21 148	土師器 環	①9.8 ②5.0 ③4.2	①中粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焙焼	③にぶい褐色	底面・体部外面ナデ、口縁部横ナデ、 内面ナデ、へらの工具痕。	覆土上層	1/2残存		
338-22 148	土師器 小型壺	①13.6 ②13.8	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焙焼	③にぶい黄褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	南西部	口縁一部欠 外面荒れている		
338-23 148	土師器 小型壺	①12.4 ②17.3 ③6.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焙焼	③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土	口縁一部欠損 内外面とも荒れている		
339-24 148	土師器 小型壺	①13.8 ②14.8 ③7.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焙焼	③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	北西部	ほぼ完形 外面荒れている		
339-25 148	土師器 小型壺	①15.0 ②14.1 ③6.0	①中粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	覆土上層	ほぼ完形		
339-26 148	土師器 小型壺	①17.8 ②20.7 ③5.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焙焼	③明赤褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	北西部	ほぼ完形		
339-27 148	土師器 壺	①20.5 ②33.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焙焼	③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	西壁寄り	胴部一部欠損 内面に輪模み痕が残る		
339-28 148	土師器 壺	①23.6 ②16.5	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焙焼	③にぶい赤褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	西壁寄り	口縁へ胴上層		
339-29 148	土師器 壺	②15.0 ③6.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焙焼	③にぶい褐色	胴部外面へう削り、内面ナデ、 内外面に輪模み痕残る。	南西部	底部 底部木葉直 外面荒れている		
339-30 148	土師器 瓶	径6.7 幅5.1 厚0.4~0.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焙焼	③にぶい褐色	外面へう削り、 内面 格子状のミガキ。	南西部	破片 穿孔		
339-31 148	須恵器 平底	①6.0 ②14.6	①粗 褐色鉱物粒を含む ②還元焙焼	③灰白色	右回転ロクロ整形、体部下回転へう削り。肩部に2条の沈線。	覆土上層	体部欠損		
図番 P.L	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特徴	出土状況	
339-32 148	円石 (縄文)	3/4	緑黒緑泥片岩	(12.0)	5.8	1.9	(178)	両面に計2個の凹みが認められる。	覆土

H-33号住居跡遺物調査表 (①口径 ②高さ ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①軸土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
339-33 148	須恵器 環	②2.1 ③6.4	①細片岩粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ形。 底面回転糸切り。	南西部	口縁部欠損
339-34 148	須恵器 環	①13.0 ②3.8 ③8.0	①白色鉱物粒を含む ②還元焰 ③灰色	口縁から体部クロコ整形。 底面右回転糸切り。	西壁寄り	1/4残存
339-35 148	土師器 小型甕	①12.0 ②4.1	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③におい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南西部	口縁部片
339-36 148	土師器 甕	①19.6 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③暗赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁寄り	口縁部片
339-37 148	土師器 甕	①25.6 ②7.2	①中粒の砂を混入 ②酸化焰 ③におい褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南壁寄り	口縁部1/4

H-34号住居跡 (第340~343図、PL.106~148)

位置 Bm-26・27、Bn-26・27グリッドにかけて検出された。H-43号住居跡の東約3mの所に位置している。

形状 長辺4.7m、短辺4.5mの方形である。

方位 N-11°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約7~20cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存状況は悪い。

床面 ほぼ平坦である。面積は約19.9m²。

掘り方 床面全体に凹凸が顕著である。

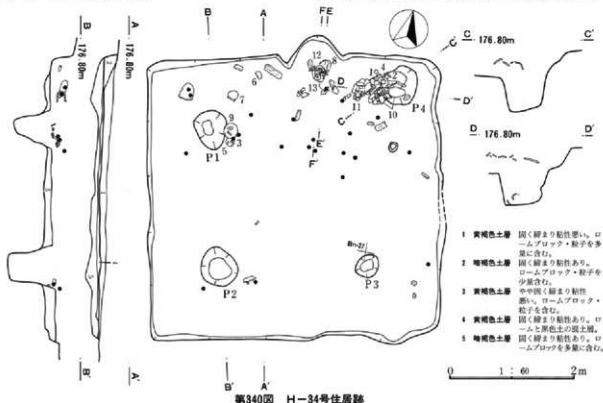
周溝 検出できなかった。

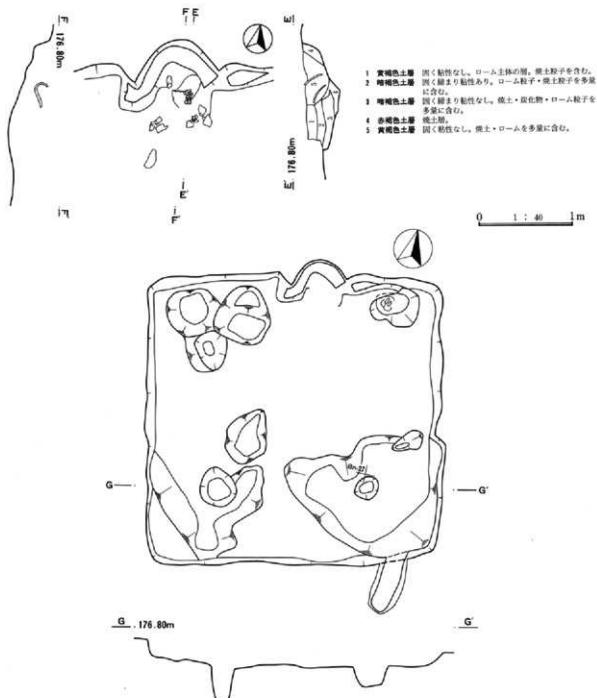
竈 北壁中央やや東に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。袖部分の残存は約30cmである。規模は煙道方向90cm、両袖方向60cmである。甕が出土している。

柱穴 ピットは総計4個検出された。このうちP1~P3は主柱穴になる。P1の規模は長径62cm、短径50cm、深さ56cm。P2は長径62cm、短径56cm、深さ63cm。P3は長径40cm、短径34cm、深さ39cmである。もう1箇所は検出することができなかった。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P4は長径80cm、短径60cm、深さ50cmである。底面から土器が出土している。

遺物 覆土や床面から土師器片90点、須恵器片6



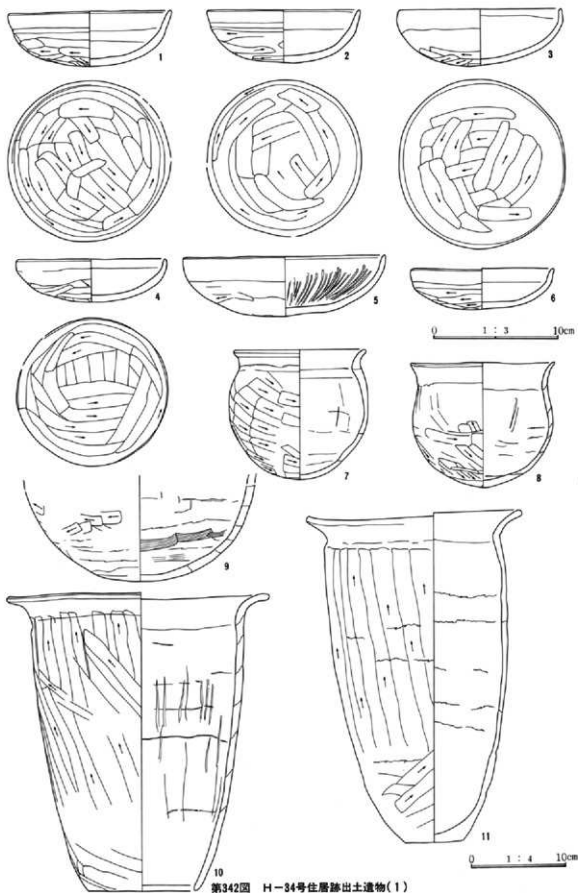


第341図 H-34号住居跡カマド・掘り方

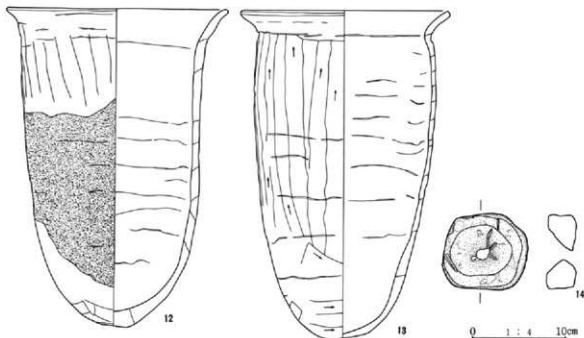
点が出土し、この他に縄文中期土器片12点、弥生土 辺に集中している。
 器片6点、礫・剥片2点が出土している。貯蔵穴周 時期 7世紀後半。

H-34号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
342-1 149	土師器 杯	①12.8 ②4.3	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③によい橙色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	貯蔵穴付 近	完形
342-2 149	土師器 杯	①12.4 ②4.1	①細粒の砂と赤色粒子を含む ②酸化焰 ③によい橙色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	貯蔵穴内	完形



第342图 H-34号住居跡出土遺物(1)



第343図 H-34号住居跡出土遺物(2)

H-34号住居跡遺物観察表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	容量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況		
342-3 149	土師器 環	①12.7 ②14.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	P1付近	完形		
342-4 149	土師器 環	①11.8 ②3.4	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	貯蔵穴付 近	完形		
342-5 149	土師器 環	①16.2 ②4.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へう割り後ナデ、口縁部横ナ デ。内面ナデ、放射状の筋文。	P1付近	ほぼ完形		
342-6 149	土師器 環	①11.0 ②3.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド付近	3/4残存		
342-7 149	土師器 小型壺	①13.8 ②13.7 ③3.0	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へう割り、口縁部 横ナデ。内面ナデ、へらの工具痕。	北西部	完形 外面に煤 が付着している		
342-8 149	土師器 小型壺	①15.3 ②13.2 ③3.5	①中粒の砂と褐色粒子を含む ②酸化焰 ③暗赤褐色	底面・胴部外面へう割り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	カマド内	3/4残存 内面に 輪積み痕が残る		
342-9 149	土師器 壺	②9.5 ③5.0	①細粒の砂と赤色粒子を含む ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴部外面へう割り。 内面ナデ、へらの工具痕。	P1付近	底部		
342-10 149	土師器 瓶	①28.0 ②31.8 ③11.5	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ後縁方向のミガキ。	貯蔵穴内	完形 内外面とも 磨表面磨		
342-11 149	土師器 壺	①22.5 ②35.3 ③6.2	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面へう割り、口縁部横ナデ。 内面は丁寧なナデ。	貯蔵穴付 近	完形 内面に輪 積み痕が残る		
343-12 149	土師器 壺	①23.0 ②33.7	①中粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へう割り、口縁部 横ナデ。内面ナデ、輪積み痕残る。	カマド内	口縁一部欠損 外面に煤が付着		
343-13 149	土師器 壺	①22.0 ②34.8 ③4.3	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③赤褐色	底面・胴部外面へう割り、口縁部 横ナデ。内面丁寧なナデ。	カマド内	口縁一部欠損		
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)		特 徴	出土状況	
343-14 149	凹石	完形	砂岩	9.0	8.1 3.0	277	穴が貫通している。	覆土

H-35号住居跡(第344~347図, PL.107・149)

位置 Bo-24・25, Bp-24・25グリッドにかけて検出された。H-36号住居跡と重複し、新しい土坑によって壊されている。

形状 長辺4.6m、短辺3.9mの方形である。

方位 N-82°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約16~30cmで床面に達する。床面から緩やかに立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。面積は約15.8㎡。

掘り方 床面全体に凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

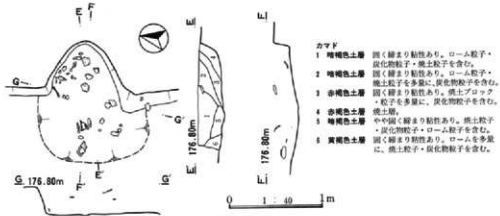
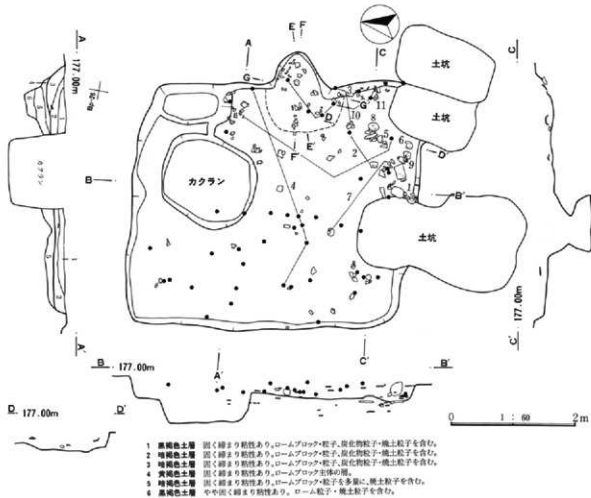
竈 東壁中央やや東に位置し、燃焼部は壁部の外側から床面にかけて構築されている。規模は煙道方向130cm、両袖方向90cmである。

柱穴 検出できなかった。

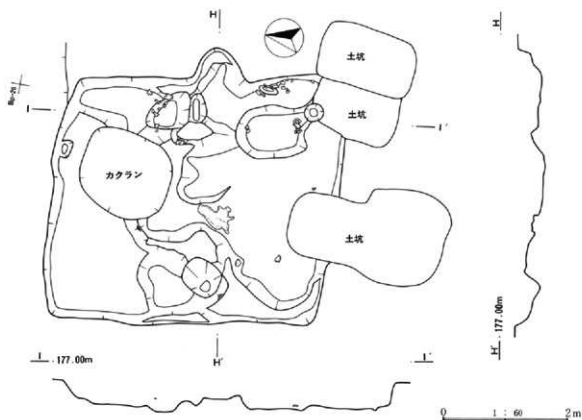
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土や床面から土師器片664点、須恵器片123点が出土し、この他に縄文中期土器片21点、弥生土器片2点、礫・剥片20点が出土している。竈から南壁周辺に集中している。

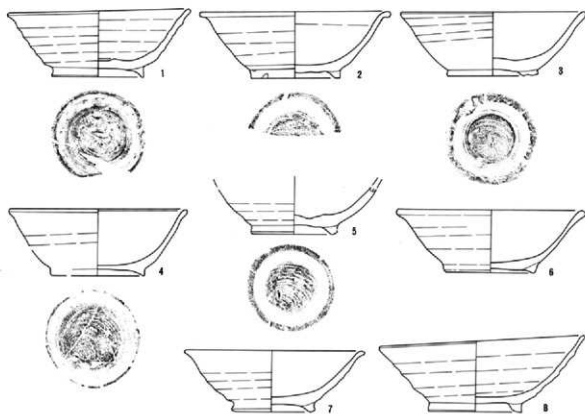
時期 9世紀後半。



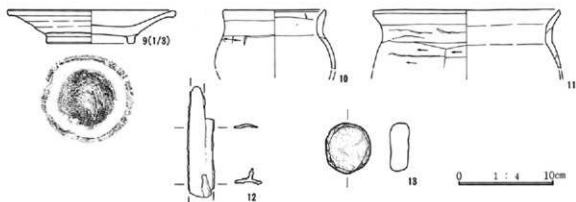
第344図 H-35号住居跡



第345図 H-35号住居跡掘り方



第346図 H-35号住居跡出土遺物(1)



第347図 H-35号住居跡出土遺物(2)

H-35号住居跡遺物観察表 (①口径 ②高さ ③底径)

図番 P.L.	土器種類	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況			
							④口径 ⑤高さ ⑥底径		
346-1 149	須恵器 埴	①14.4 ②5.2 ③7.2	①粗 褐色粒子 ②還元焰 ③褐色	右回転ロクロ整形。 高台貼付後周辺ナデ。	南壁寄り	完形			
346-2 149	須恵器 埴	①14.8 ②5.2 ③7.0	①粗 褐色粒子 ②還元焰 ③灰黄色	右回転ロクロ整形。 高台貼付後周辺ナデ。	南東部	1/3残存			
346-3 149	須恵器 埴	①14.5 ②5.1 ③7.2	①細 黒色粒子 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付後周辺ナデ。	カマド付 近	3/4残存			
346-4 149	須恵器 埴	①14.0 ②5.2 ③7.3	①粗 褐色粒子 ②還元焰 ③にぶい黄褐色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	中央部	3/4残存			
346-5 149	須恵器 埴	①14.0 ②5.9	①細 ②還元焰 ③にぶい褐色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	南東部	2/3残存			
346-6 149	須恵器 埴	①14.7 ②4.9 ③6.9	①細 ②還元焰 ③黒色	ロクロ整形。底面右回転糸切り。 高台貼付後周辺ナデ, 内外面戦成。	南壁寄り	3/4残存			
346-7 149	須恵器 埴	①14.0 ②4.8 ③5.8	①粗 黒色粒子 ②還元焰 ③褐色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	南壁寄り	一部欠損			
346-8 149	須恵器 埴	①16.0 ②5.7 ③7.4	①粗 片岩粒を含む ②還元焰 ③褐色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	覆土	ほぼ完形			
347-9 149	須恵器 皿	①13.2 ②2.7 ③7.0	①粗 片岩粒を含む ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	南壁付近	完形			
347-10 149	土師器 小型壺	①10.8 ②6.4	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③にぶい褐色	胴部外面へフ削り, 口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド内	口縁3/4残存 外面に煤が付着			
347-11 149	土師器 壺	①20.0 ②6.2	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面へフ削り, 口縁部横ナデ。 内面ナデ。	東壁寄り	口縁部1/4 胴部外面に輪痕が残り			
347-12 149	鉢	径11.8 厚0.1~0.5	重量 32.8g		覆土	部分			
図番 P.L.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)			特 徴	出土状況	
				全長	幅	重量			
347-13 149	紡錘車	完形	砂岩	5.3	4.8	2.0	64	未成品。	覆土

H-36号住居跡 (第348~351図, PL.108~148)

位置 Bp-25・26, Bq-25・26, Br-26グリッドにかけて検出された。H-35号住居跡と重複している。

形状 長辺7.5m, 短辺6.9mの方形である。

方位 N-15°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約15~35cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。東壁の残存状

況は悪い。

床面 ほぼ平坦である。面積は約45.5m²。

掘り方 床面全体に凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 北壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。袖部分の残存は約100cmである。規模は煙道方向100cm、両袖方向80cmである。

柱穴 ピットは総計5個検出された。このうちP1

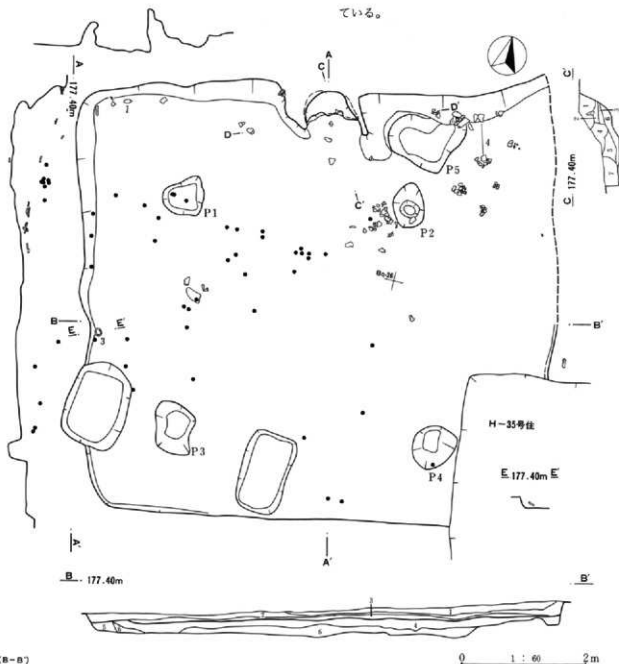
～P4は主柱穴になる。P1の規模は長径66cm、短径60cm、深さ48cm。P2は長径55cm、短径50cm、深さ53cm。P3は長径80cm、短径60cm、深さ63cmである。P4は長径70cm、短径60cm、深さ51cmである。

D 177.40m

D'

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P5は長径120cm、短径80cm、深さ55cmである。

遺物 覆土や床面から土師器片581点、須恵器片28点が出土し、その他に縄文前期土器片1点、中期土器片27点、弥生土器片8点、礫・剥片18点が出土している。



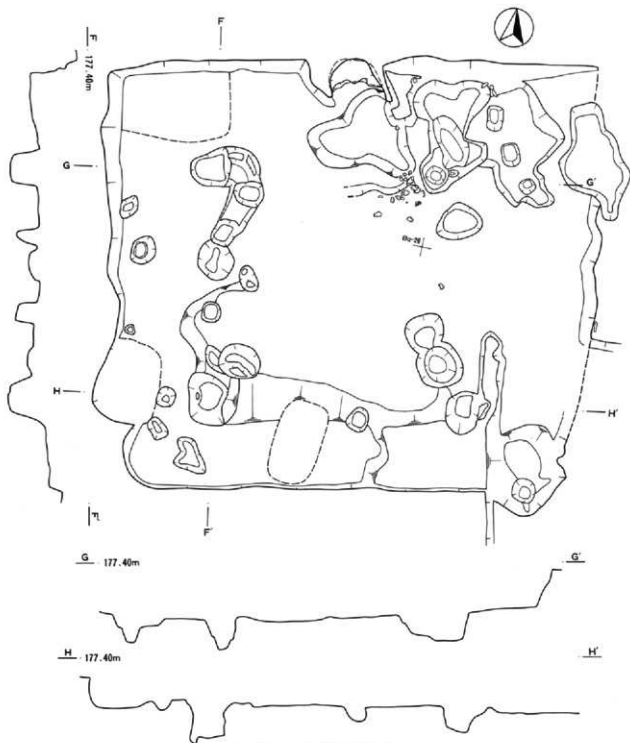
(B-B')

- 1 黒褐色土層 やや固く締まり粘性なし。ロームブロック・粒子を含む。
 2 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子、炭化物粒子を含む。
 3 黄褐色土層 固く締まり粘性なし。ロームブロックを主体にローム粒子を多量に含む。
 4 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロックを少量、ローム粒子を多量に含む。
 5 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ローム粒子を含む。
 6 黄褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に含む。

カマフ(C-C')

- 1 暗褐色土層 固く締まり悪い。ロームブロック・粒子、焼土粒子を含む。
 2 赤褐色土層 固く締まり粘性あり。焼土・ロームブロックを多量に含む。
 3 暗褐色土層 やや固く締まり粘性なし。焼土・ロームブロックを含む。
 4 暗褐色土層 固く締まり粘性あり。ローム粒子を多量に、焼土粒子を含む。
 5 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
 6 赤褐色土層 やや固く締まり粘性あり。焼土主体の層。
 7 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームブロック・焼土粒子を含む。

第348図 H-36号住居跡

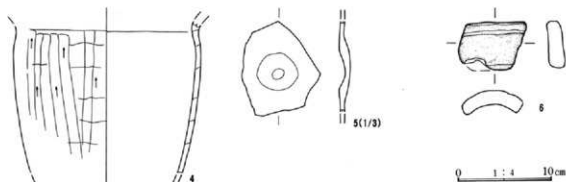


第349図 H-36号住居跡掘り方

0 1 2m



第350図 H-36号住居跡出土遺物(1)



第351図 H-36号住居跡出土遺物(2)

時期 掲載した遺物は、8世紀前半であるが、住居跡は6世紀後半に属するものと考えられる。

H-36号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
350-1 149	土器器 杯	①15.8 ②4.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③棕色	唇面・体部下半へラ削り、へらの 工具痕、口縁部横ナデ。	北西隅	2/3残存 内面ナ デ 放射状の塩文
350-2 149	土器器 杯	①11.6 ②3.8	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面へラ削り、口縁部ナデ。 内面ナデ。	覆土	1/2残存
350-3 149	須恵器 蓋	口径1.3 ②2.7 ③10.2	①面 白色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	口縁部へラ削り。 天井部同様に削り。	西壁寄り	完形
351-4 149	土器器 壺	②16.1	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面へラ削り。 内面丁寧なナデ。	貯蔵穴付 近	胴上半1/3
351-5 149	土器器 壺		①細粒の砂を含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	楕円形の凹みが認められる。	覆土	破片
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
351-6 149	石製品	部分	軽石	(5.0) (6.5) 1.5 (35.0)	容器の可能性が考えられる。	覆土

H-37号住居跡 (第352・353図, PL. 149)

位置 Cb-26グリッドで検出された。H-11号住居跡に接している。

形状 完掘できなかったために不明である。現状では長辺2.2m、短辺1.6mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで窪穴住居は構築されている。

壁 高 住居跡確認面より約25cmで床面に達する。

床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約1.6㎡。

掘り方 検出できなかった。

周溝 検出できなかった。

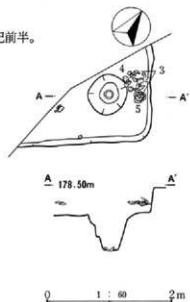
竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

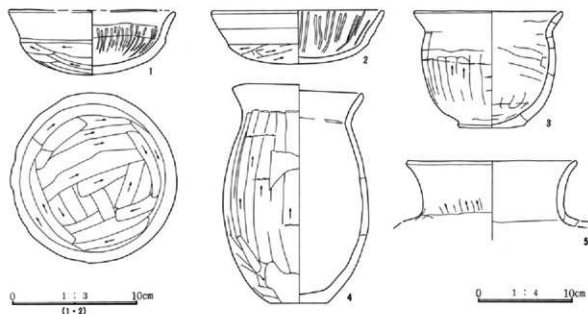
貯蔵穴 長径60cm、短径58cm、深さ58cmである。

遺物 床面や貯蔵穴底面から土器器片25点が出土している。

時期 6世紀前半。



第352図 H-37号住居跡



第359図 H-37号住居跡出土遺物

H-37号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・製形技法の特徴	出土状況	残存状況
353-1 149	土師器 坏	①13.3 ②5.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	覆土	完形
353-2 149	土師器 坏	①13.6 ②4.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	南東隅	1/2残存
353-3 149	土師器 小型甕	①16.4 ②12.5 ③6.9	①細粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③灰褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	南東隅	3/4残存 内面に煤が付着
353-4 149	土師器 小型甕	①14.0 ②23.4 ③6.0	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③よい黄褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、口 縁部横ナデ。内面ナデ。	南東隅	3/4残存 内面に煤が付着
353-5 149	土師器 甕	①18.0 ②7.0	①細粒の砂と褐色粒を含む ②酸化焰 ③褐色	口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南東隅	口縁部

H-38号住居跡 (第354～356図、PL.100・140)

位置 Bl-24・25、Bm-24・25グリッドにかけて検出された。H-45号住居跡の北西約2mの所に位置している。

形状 長辺4m、短辺3.2mの方形である。

方位 N-80°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約5～25cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほほ平坦である。面積は約11.5㎡。

掘り方 床面中央部で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

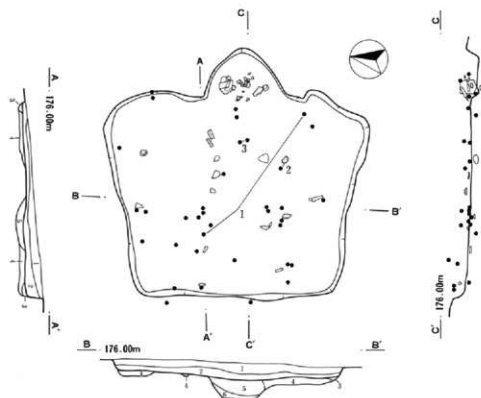
竈 東壁中央に位置し、燃焼部は壁部の外側から床面にかけて構築されている。規模は標高方向100cm、両袖方向110cmである。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

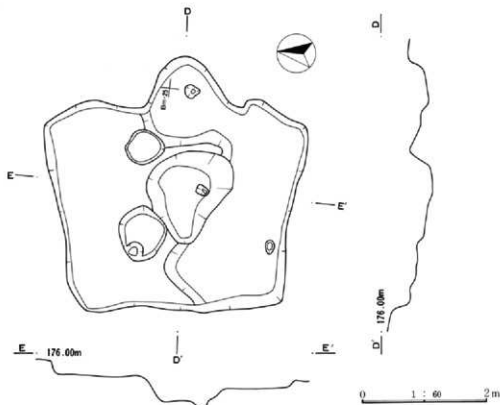
遺物 覆土や床面から土師器片269点、須恵器片31点が出土し、この他に縄文早期土器片1点、中期土器片11点、弥生土器片1点、礫・剥片3点が出土している。

時期 9世紀後半。

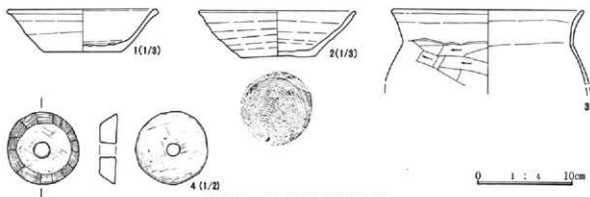


- 1 暗褐色土層 細く細まり粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子・白色粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 細く細まり粘性あり。ロームブロック・炭化物粒子・白色粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 細く細まり粘性あり。ロームブロック・粒子を含む。(均減)
- 4 黄褐色土層 やや固く細まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 5 暗褐色土層 細く細まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に含む。塊上粒子を含む。
- 6 黄褐色土層 細く細まり粘性非常にあり。ローム主体の層。

第354図 H-38号住居跡



第355図 H-38号住居跡掘り方



第356図 H-38号住居跡出土遺物

H-38号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
356-1 149	須恵器 坏	①11.8 ②3.4 ③6.0	①細粒の砂を混入 ②還元焼 ③灰色	ロクロ整形、底面は右回転糸切り。	覆土	1/3残存
356-2 149	須恵器 坏	①12.4 ②3.5 ③5.8	①細 白色・黒色粒子を含む ②還元焼 ③灰色	ロクロ整形。 底面は回転糸切り。	南東部	口縁一部欠損
356-3 149	土師器 罍	①20.2 ②7.9	①細粒の砂を混入 ②還元焼 ③による赤褐色	胴部ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド前	口縁部1/3
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)	特徴	出土状況
356-4 149	紡錘車	完形	蛇紋岩	短径 2.7 長径 3.8 孔径 0.7 厚 0.9 重量23.6	表面全体に目の細かい削り痕が残る。	覆土

H-38号住居跡 (第357図、PL.109・149)

位置 Bi-26、Bj-26グリッドにかけて検出された。H-40号住居跡の西約6mの所に位置している。

形状 長辺3.7m、短辺3.1mの方形である。

方位 N-93°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約5~12cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。遺存状況は悪い。

床面 ほぼ平坦である。面積は約10.9㎡。

掘り方 壁周辺部で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

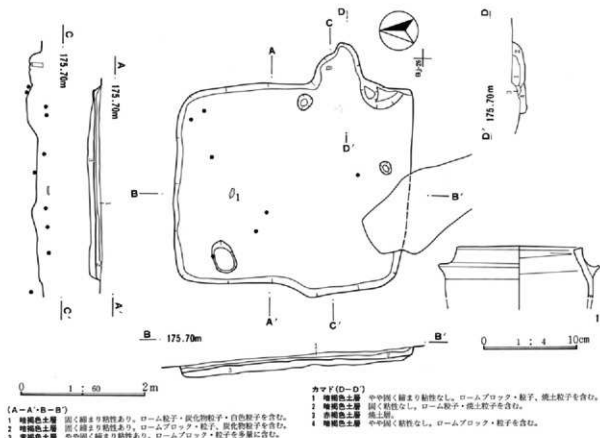
竈 東壁中央やや南寄りに位置し、燃焼部は壁部の外側から床面にかけて構築されている。規模は煙道方向90cm、両袖方向60cmである。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土や床面から土師器片27点、須恵器片5点が出土している。

時期 10世紀前半。



第357図 H-39号住居跡と出土遺物

H-39号住居跡遺物整理表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種類 器種	法量 (cm)	①胎土 ②構成 ③色調	産・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
357-1	須恵器	①13.4	①細 褐色粒子を含む	ロクロ整形。	北西部	口縁部1/3
149	羽釜	②6.4	②還元焰 ③灰黄褐色			

H-40号住居跡 (第358・359図、PL.110・149)

位置 Bg-25・26、Bh-25・26、グリッドにかけて検出された。調査区の東端に位置している。

形状 長辺4.5m、短辺4.4mの方形である。

方位 N-28°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約20~55cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。面積は約16m²。

掘り方 なし。

周溝 検出できなかった。

炉 北壁寄りに位置し地床炉である。規模は長

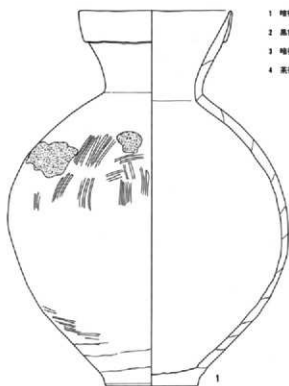
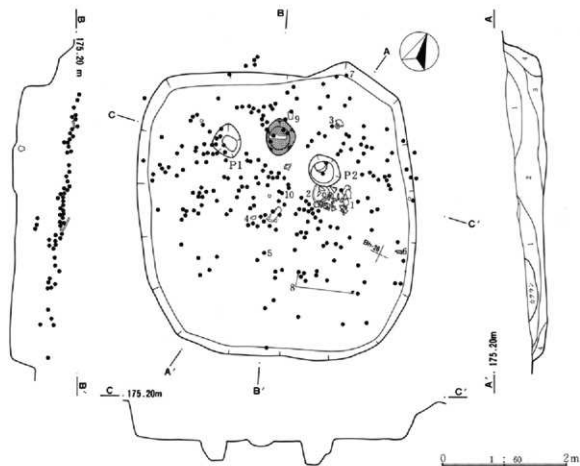
径58cm、短径46cm、深さ5cmである。中央に石1個を配置している。

柱穴 ビットは2個検出された。P1の規模は長径54cm、短径44cm、深さ36cm。P2は長径54cm、短径46cm、深さ36cmである。

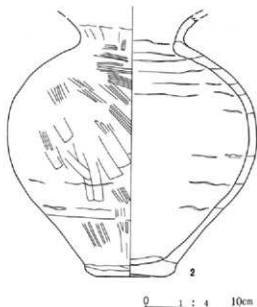
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土最上層(第359図4~10)と床面(第358図1・2、第359図3)から土師器片1,113点、須恵器片30点が出土し、この他に縄文前期土器片2点、中期土器片20点、弥生土器片2点、礫・剥片14点が出土している。

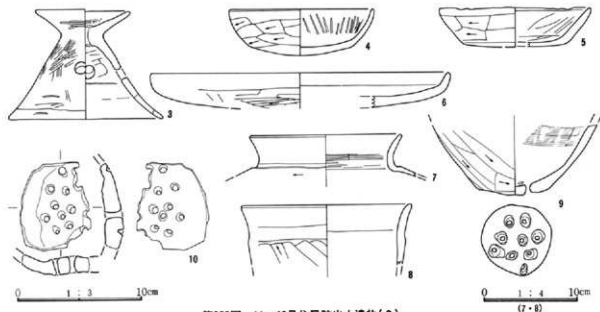
時期 4世紀。



- 1 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子・焼土粒子・白色砂子を含む。土器片多量に出土。
- 2 黒色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子も少量含む。
- 3 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・砂子を多量に、炭化物粒子を少量含む。
- 4 黒褐色土層 固く締まり粘性あり。ロームを多量に含む。



第358図 H-40号住居跡と出土遺物(1)



第359図 H-40号住居跡出土遺物(2)

H-40号住居跡遺物観察表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
358-1 149	土師器 壺	①16.0 ②40.0 ③9.8	①中粒の砂を混入 ②酸化焰 ③におい褐色	胴部外面磨き、口縁部折り返し口縁。内面に輪積み痕が残る。	P 2付近	胴下半欠割 外面に僅かが付着
358-2 149	土師器 壺	②27.8 ③9.5	①中粒の砂を混入 ②酸化焰 ③におい褐色	胴部外面磨き、底面ナデ。内面荒れている。輪積み痕残る。	P 2付近	1/2残存
359-3 149	土師器 盥台	①7.4 ②8.7 ③12.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	胴部外面磨き、内面ナデ。輪積み痕残る。受け部ミガキ。	北東部	ほぼ完形
359-4 149	土師器 杯	①11.4 ②3.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面・体部ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ、暗文。	中央部	1/2残存
359-5 149	土師器 杯	①12.0 ②3.0 ③8.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③におい黄褐色	底面・体部ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	南西部	1/4残存
359-6 149	土師器 皿	①23.0 ②2.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明黄褐色	底面ヘラ削り、口縁部ナデ。内面ナデ。	南壁寄り	1/3残存
359-7 149	土師器 壺	①18.0 ②4.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③におい黄褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	北壁寄り	口縁部1/4
359-8 149	土師器 壺	①18.0 ②6.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③におい褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	南東部	口縁部片
359-9 149	土師器 瓶	②5.1 ③5.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。内面丁寧なナデ。	覆土	底部 底面に9個の小穴
359-10 149	土師器 瓶	①6.9 ②5.7 ③0.7~1.5	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③灰褐色	底面ナデ。内面ナデ。	覆土	底部片 底面に14個の小穴

H-41号住居跡(第360・361図、PL.111-119)

位置 Cs-27・28、Ct-27・28グリッドにかけて検出された。H-50号住居跡の南西約1.5mの所に位置している。

形状 一辺約4mの方形である。

方位 N-19°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は7層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約20~25cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。面積は約14.7㎡。

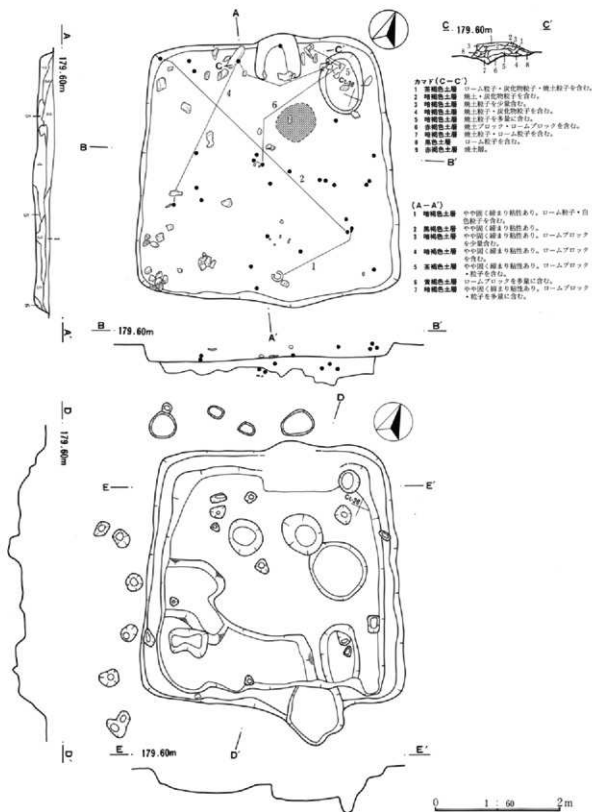
掘り方 床面全体に凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

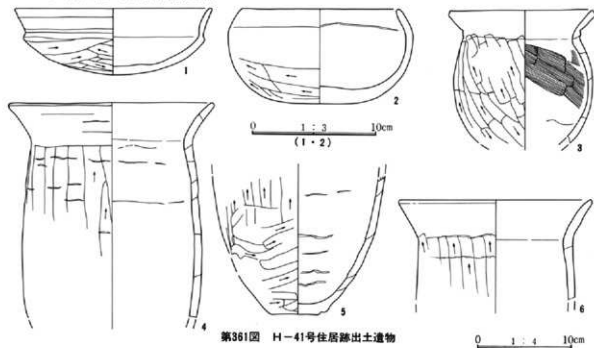
竈 北壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。袖部分の残存は約60cmである。袖石2個が残存している。規模は煙道方向80cm、両袖方向50cmである。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。長径95cm、短径70cm、深さ30cmである。



第360図 H-41号住居跡と掘り方



第361図 H-41号住居跡出土遺物

遺物 覆土や床面から土師器片59点が出土し、この他に縄文中期土器片12点、弥生土器片24点、礫・剥片6点が出土している。

時期 6世紀後半。

H-41号住居跡遺物観察表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
361-1 150	土師器 杯	①15.4 ②5.2	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ、明瞭な線を付す。内面ナデ。	南東部	口縁一部欠損
361-2 150	土師器 杯	①12.5 ②7.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面・胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	覆土	1/3残存
361-3 150	土師器 小型壺	①14.4 ②14.4	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③褐色	胴部外面深いへう削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	覆土	2/3残存
361-4 150	土師器 壺	①11.6 ②23.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	カマド付近	口縁部3/4 内面に縁が付着
361-5 150	土師器 壺	①14.5 ③6.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③褐色	底面・胴部外面へう削り。内面ナデ。輪積み痕が残る。	北東壁寄り	底部
361-6 150	土師器 壺	①20.3 ②10.6	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北東部	口縁部1/2 胴部外面輪積み痕残る

H-42号住居跡(第362~365図、PL.112・150)

位置 Bp-27・28、Bq-27・28グリッドにかけて検出された。H-20号住居跡の北東約1.5mの所に位置している。

形状 長辺4.6m、短辺4.3mの方形である。

方位 N-68°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約30~45cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。面積は約18.2m²。

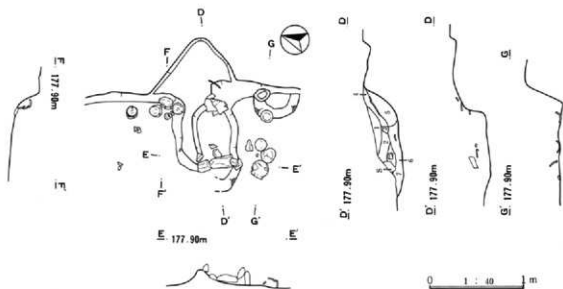
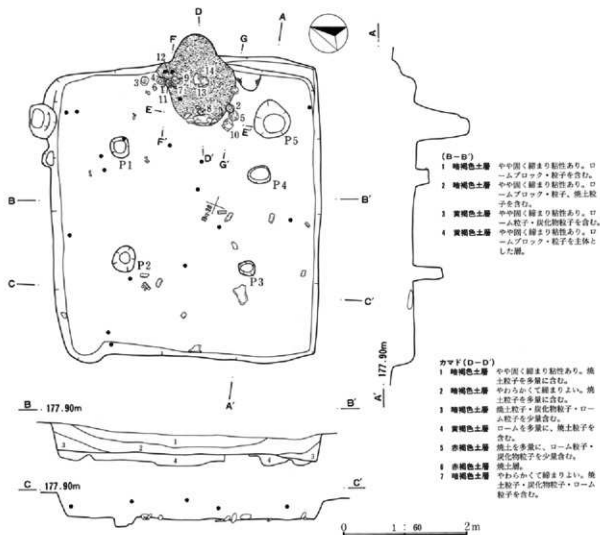
掘り方 床面全体に凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

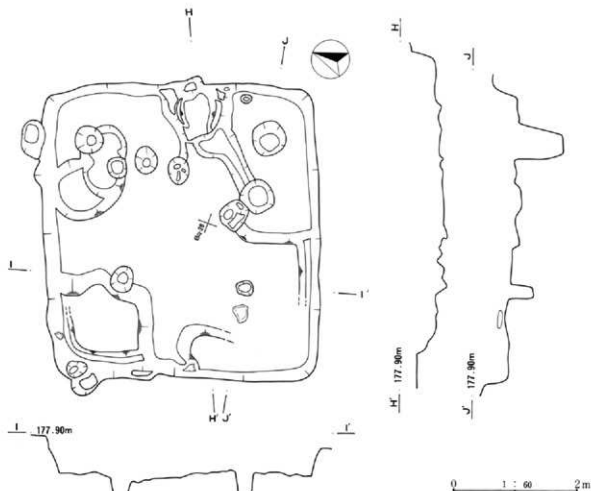
竈 東壁中央に位置し、燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。袖部分の残存は約80cmである。袖石2個が残存している。規模は煙道方向90cm、両袖方向30cmである。

柱穴 ビットは総計5個検出された。このうちP1~P4は主柱穴になる。P1の規模は長径42cm、短径32cm、深さ51cm。P2は長径36cm、短径28cm、深さ30cm。P3は長径35cm、短径33cm、深さ48cm。P4は長径30cm、短径25cm、深さ38cmである。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P5は長径60cm、短径58cm、深さ75cmである。



第362図 H-42号住居跡



第363図 H-42号住居跡掘り方

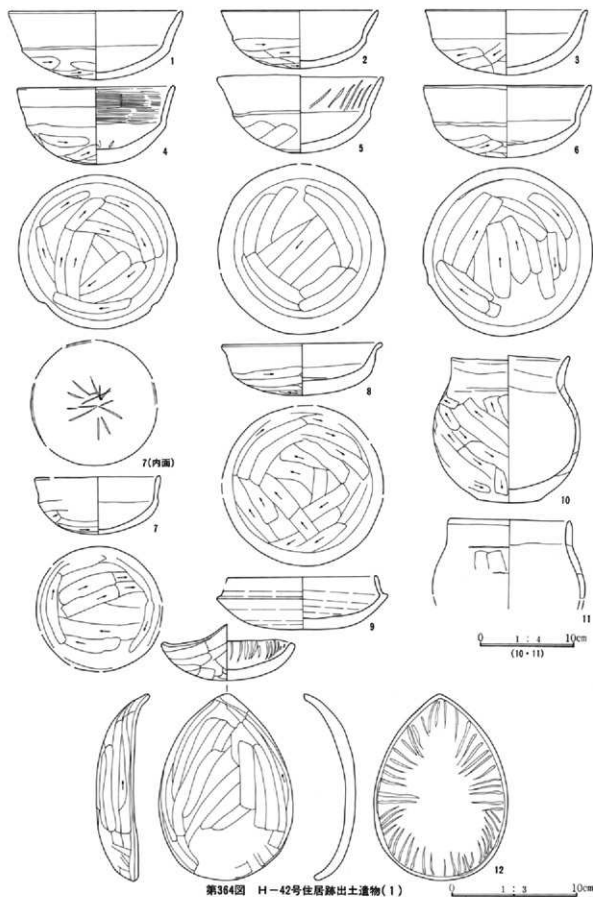
遺物 覆土や床面から土師器片88点、須恵器片4点が出土し、この他に縄文早期土器片1点、前期土器片2点、中期土器片75点、弥生土器片16点、鏝・

剥片10点が出土している。竈周辺から完形品が出土している。

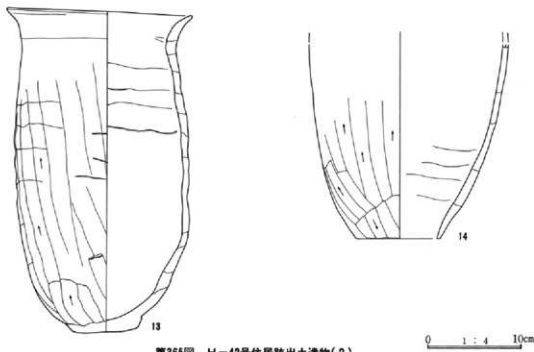
時期 6世紀前半。

H-42号住居跡遺物観察表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器類別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
364-1 150	土師器 坏	①13.8 ②5.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド内	3/4残存
364-2 150	土師器 坏	①12.6 ②4.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド付 近	完形
364-3 150	土師器 坏	①13.0 ②5.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド付 近	完形 器厚は厚い。
364-4 150	土師器 坏	①12.5 ②6.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド内	完形
364-5 150	土師器 坏	①13.3 ②6.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	カマド付 近	ほぼ完形
364-6 150	土師器 坏	①13.2 ②5.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド付 近	完形
364-7 150	土師器 坏	①10.9 ②4.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド内	口縁一部欠損
364-8 150	土師器 坏	①12.6 ②4.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド内	口縁一部欠損
364-9 150	須恵器 坏	①11.8 ②4.1	①粗 白色粒子を含む ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形。 底面回転へら削り。	カマド内	完形



第364図 H-42号住居跡出土遺物(1)



第365図 H-42号住居跡出土遺物(2)

H-42号住居跡遺物観察表(①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②地成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
364-10 150	土師器 小型甕	①12.6 ②15.5 ③6.5	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ナデ、胴部外面へラ削り。 口縁部横ナデ、内面ナデ。	カマド付 近	3/4残存 内面器表面密
364-11 150	土師器 小型甕	①12.8 ②8.1	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面浅いへラ削り、口縁部横 ナデ、内面ナデ。	カマド内	口縁へ胴上平3/4
364-12 150	土師器 環	長14.8 幅10.6 厚0.5~1.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面は丁寧なへラ削り。内面丁寧 なナデ、放射状のミガキ。	カマド内	完形 木の蓋型
365-13 150	土師器 甕	①19.4 ②34.2 ③7.0	①中粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面ナデ、胴部外面へラ削り。 口縁部横ナデ。	カマド内	ほぼ完形 内外面に 輪痕が残る
365-14 150	土師器 甕	②20.5 ③8.9	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へラ削り。内面ナデ、輪 横み痕が残る。	カマド内	胴下半部

H-43号住居跡(第366・367図、PL.113・150)

位置 Bo-25~27、Bp-25~27グリッドにかけて
検出された。H-35号住居跡と重複している。

形状 長辺6.8m、短辺6mの方形である。

方位 N-10°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約10cm程で床面に達する。残存状況は悪い。

床面 ほぼ平坦である。面積は約36m²。

掘り方 床面中央から東部にかけて凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかったが、北壁中央周辺の床面

から焼土の堆積が確認されたことから、北壁に存在していたものであろう。

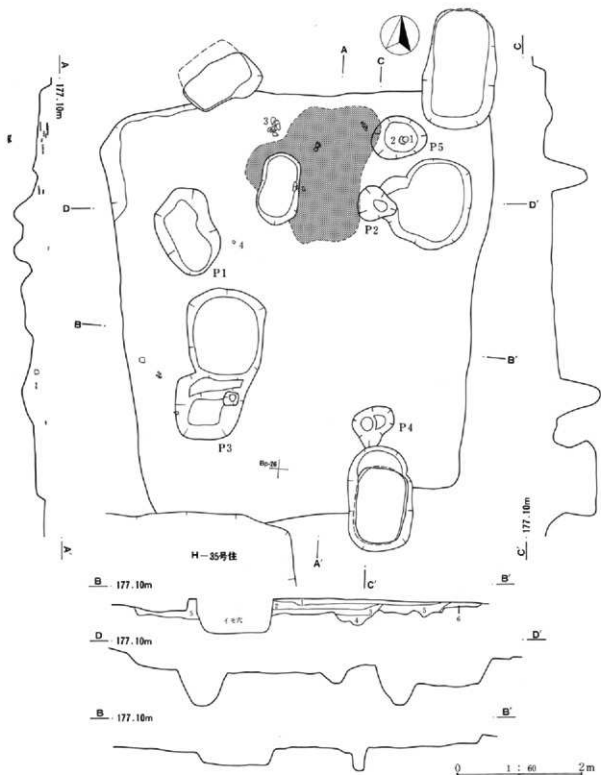
柱穴 ビットは総計5個検出された。このうちP1~P4は主柱穴になる。P1の規模は長径90cm、短径85cm、深さ60cm。P2は長径65cm、短径55cm、深さ78cm。P3は長径110cm、短径100cm、深さ84cm。

P4は長径70cm、短径68cm、深さ75cmである。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P5は長径90cm、短径68cm、深さ73cmである。完形の環2個体が出土している。

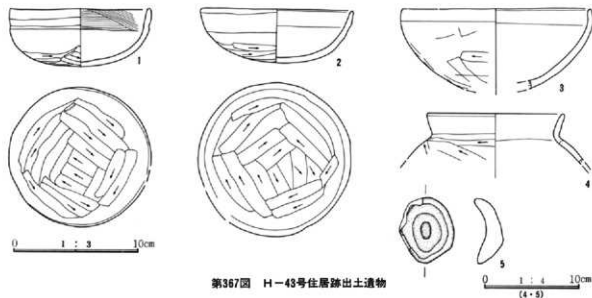
遺物 覆土や床面から土師器片99点、須恵器片5点が出土し、この他に縄文中期土器片6点、弥生土器片4点、鏃・刺片3点が出土している。

時期 7世紀前半。



- 1 黄褐色土層 固く締まり粘性あり。ルームブロック・粒子を多量に、炭化物粒子を含む。(断面面)
- 2 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ルームブロック・粒子を多量に含む。
- 3 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。ルームブロック・粒子、炭土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ルーム主体の層。
- 5 暗褐色土層 固く締まり粘性あり。ルームブロック・粒子を多量に、炭土粒子・炭化物粒子を含む。
- 6 黄褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。ルームを多量に含む。

第366図 H-43号住居跡



第367図 H-43号住居跡出土遺物

H-43号住居跡遺物観覧表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
367-1 150	土師器 杯	①11.3 ②4.6	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③におい褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	P 5内	完形
367-2 150	土師器 杯	①12.0 ②4.2	①細粒の砂と褐色粒子を含む ②酸化焰 ③におい褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	P 5内	完形
367-3 150	土師器 杯	①14.8 ②6.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面・体部下平へう削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	北壁寄り	1/2残存
367-4 150	土師器 壺	①14.5 ②5.3	①中粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	P 1付近	口縁部1/2
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g) 全長 幅 厚 重量	特 徴	出土状況
367-5 150	凹石	完形	砂岩	7.0 5.9 2.0 87	大きな凹みが認められる。	ピット覆土

H-45号住居跡 (第368図, PL.113・150)

位置 BI-23・24グリッドにかけて検出された。H-46号住居跡と接している。

形状 長辺(推定)4m、短辺3.1mの長方形である。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで壁穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約25cm程で床面に達する。残存状況は悪く、南壁は検出できなかった。

床面 ほぼ平坦である。推定面積は約10.5㎡。

掘り方 床面全体に凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

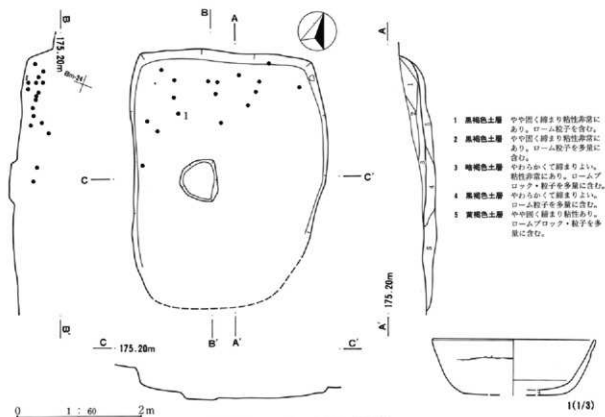
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土や床面から土師器片84点が出土し、この他に縄文中期土器片5点、弥生土器片1点、礫・剝片2点が出土している。

時期 9世紀前半。

H-45号住居跡遺物観覧表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
368-1 150	土師器 杯	①13.0 ②3.4 ③8.4	①粗粒の砂を混入 ②酸化焰 ③におい赤褐色	底面・体部下平へう削り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	北西部	1/4残存



第368図 H-45号住居跡と出土遺物

H-46号住居跡 (第369図, PL. 113)

位置 Bl-23・24, Bm-23・24グリッドにかけて検出された。H-45号住居跡と接している。

形状 現状では長辺2.9m、短辺2.1mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は1層である。

壁高 住居跡確認面より約10cm程で床面に達する。残存状況は悪く、南壁は検出できなかった。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約4.9㎡。

掘り方 確認できなかった。

周溝 検出できなかった。

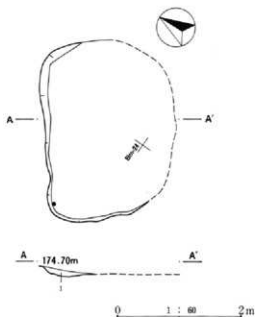
竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

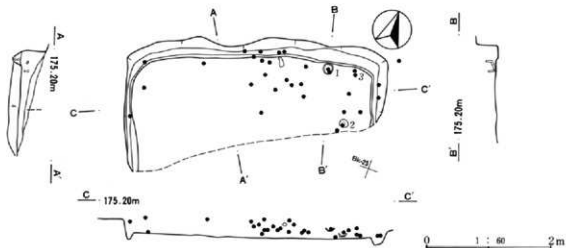
遺物 覆土から土師器片8点、須恵器片1点が出土し、この他に縄文中期土器片1点、鏝・剝片1点が出土している。

時期 不明。

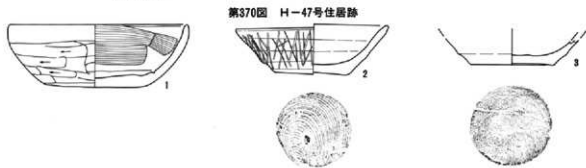


1 黒褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子を少量含む。

第369図 H-46号住居跡



- 1 暗褐色土層 やや固く締まり粘性なし。ローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土層 やや固く締まり粘性なし。ローム粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。



第371図 H-47号住居跡出土遺物

H-47号住居跡 (第370・371図、PL.114・150)

位置 Bk-24・25グリッドにかけて検出された。H-46号住居跡の北東約1.5mの所に位置している。

形状 現状では長辺4.2m、短辺1.9mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約10～35cm程で床面に達する。残存状況は悪く、南壁は検出できなかった。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約6.2㎡。

掘り方 北壁から南にかけて確認された。

周溝 幅3～20cmで全周しているものと考えられる。

竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から床面にかけて土師器片219点、須恵器片6点が出土し、この他に縄文中期土器片7点、弥生土器片4点、鏝・剝片5点が出土している。

時期 9世紀前半。

H-47号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
371-1 150	土師器 杯	①14.0 ②4.9 ③8.0	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③明赤褐色	底面・体部へつ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北壁寄り	完形
371-2 150	須恵器 杯	①12.0 ②4.0 ③6.0	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③灰色	口縁から体部口縁整形。 底部右回転糸切り。	北東部	完形 内外面に 火焼状の痕跡
371-3 150	須恵器 杯	②1.9 ③6.6	①細粒の砂を混入 ②還元焰 ③灰色	口縁整形。 底面回転糸切り。	北東隅	底部

H-49号住居跡 (第372図、PL.114・150)

位置 Bq-25・26・27、Br-25・26グリッドにかけて検出された。H-20号住居跡・H-36号住居跡と重複している。

形状 現状では長辺6.6m、短辺6.5mのほぼ正方形。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は2層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約15~48cmで床面に達す

る。残存状況は悪い。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約13.6㎡。

掘り方 確認できなかった。

周溝 検出できなかった。

竪 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

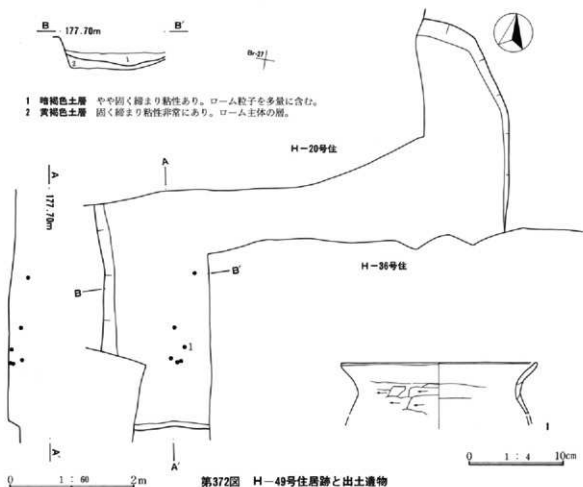
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片25点が出土している。

時期 不明。(8世紀後半?)

H-49号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
372-1 150	土師器 甕	①20.5 ②5.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③暗赤褐色	胴部外部へつ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南西部	口縁部片



第372図 H-49号住居跡と出土遺物

H-50号住居跡 (第373・374図, PL.115・150)

位置 Cr-28、Cs-27・28グリッドにかけて検出された。H-41号住居跡の北東約1.5mの所に位置している。

形状 長辺3.9m、短辺3.5mの方形。

方位 N-83°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は8層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約16~33cmで床面に達する。

床面 貼床でほぼ平坦である。面積は約11.6㎡。

掘り方 凹凸が非常にある。中央部に大きな窪地がある。

周溝 検出できなかった。

電 東壁中央やや南に位置している。燃焼部の

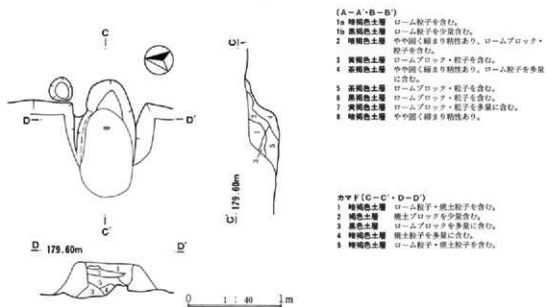
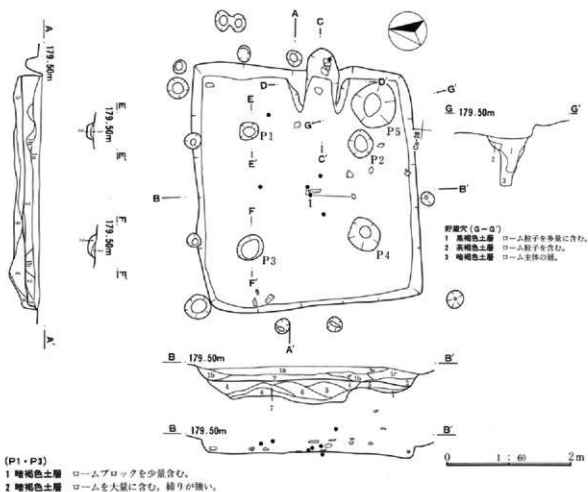
大部分は壁部から床面にかけて構築されている。袖部は約50cm残存している。規模は煙道方向124cm、両袖方向50cmである。

柱穴 ピットは総計5個検出された。このうちP1~P4は主柱穴になる。P1は長径29cm、短径28cm、深さ12cm。P2は長径44cm、短径40cm、深さ59cm。P3は長径45cm、短径40cm、深さ18cm。P4は長径56cm、短径46cm、深さ43cmである。

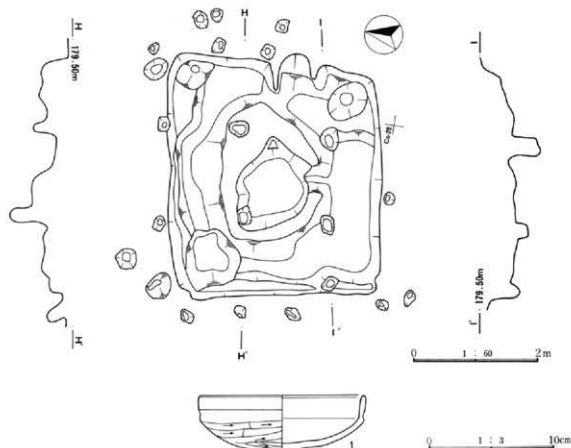
貯蔵穴 床面東南隅から検出された。P5は長径74cm、短径70cm、深さ83cmである。

遺物 覆土や床面から土器器片45点が出土し、この他に縄文中期土器片3点、弥生土器片6点が出土している。

時期 6世紀後半。



第373図 H-50号住居跡



第374図 H-50号住居跡と出土遺物

H-50号住居跡遺物類聚表 (①口縁 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器類別 器種	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
374-1 150	土師器 杯	①12.8 ②4.4	①細粒の砂と褐色粒子を含む ②酸化焰 ③にょい褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	中央部	3/4残存

H-51号住居跡 (第375~379図、PL.116・150)

位置 Co-31・32、Cp-31・32、Cq-31・32グリッドにかけて検出された。H-25号住居跡の西約24mの所に位置している。

形状 一辺6.9mの正方形。

方位 N-84°E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約20~40cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。面積は約44.8㎡。

掘り方 全体に凹凸がある。

周溝 検出できなかった。

竈 東壁中央やや南に位置している。燃焼部の大部分は壁部から床面にかけて構築されている。袖部は約50cm残存している。規模は煙道方向80cm、両袖方向50cmである。

柱穴 ビットは総計5個検出された。このうちP1~P4は主柱穴になる。P1は長径70cm、短径64cm、深さ30cm。P2は長径76cm、短径62cm、深さ30cm。P3は長径58cm、短径52cm、深さ13cm。P4は長径80cm、短径62cm、深さ63cmである。

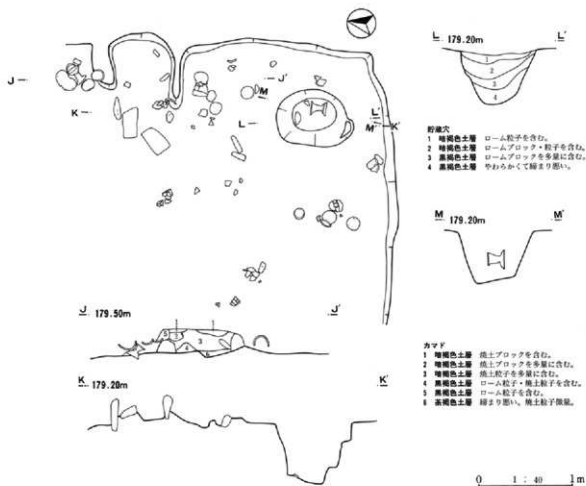
貯蔵穴 床面東南隅から検出された。P5は長径82cm、短径62cm、深さ55cmである。高杯の完形品(第



- 1 黒色土層 ロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土層 ロームブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土層 やや固く締まり粘土あり。
- 4 暗褐色土層 ロームブロック・瓦子を多量に含む。
- 5 茶褐色土層 ローム主体の層。

0 1 : 60 2m

第375図 H-51号住居跡



第376図 H-51号住居跡カマド・貯蔵穴

378図21) が出土している。

遺物 竈周辺から完形品が多量に出土している。

また覆土や床面から土師器片144点、須恵器片3点が

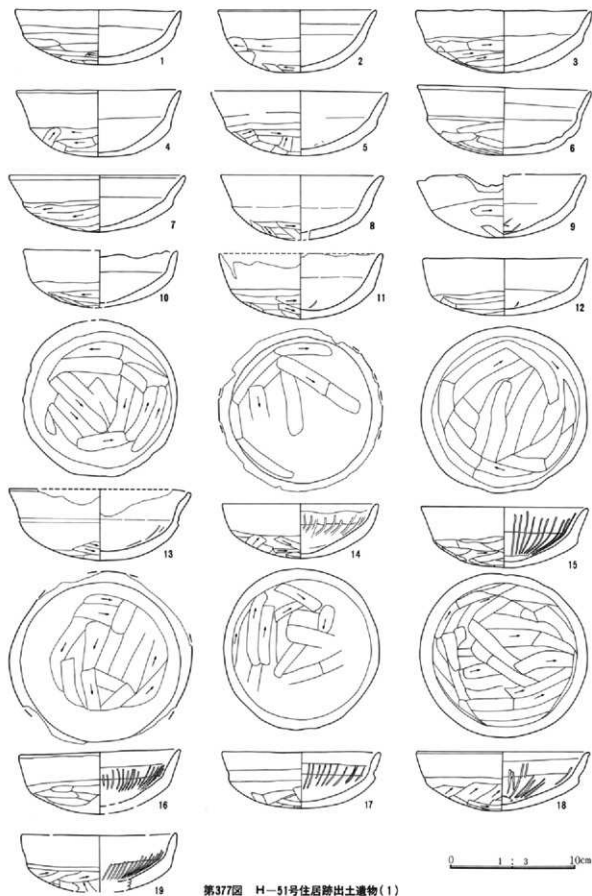
出土し、この他に細文中期土器片33点、弥生土器片

31点、漆・剥片15点が出土している。

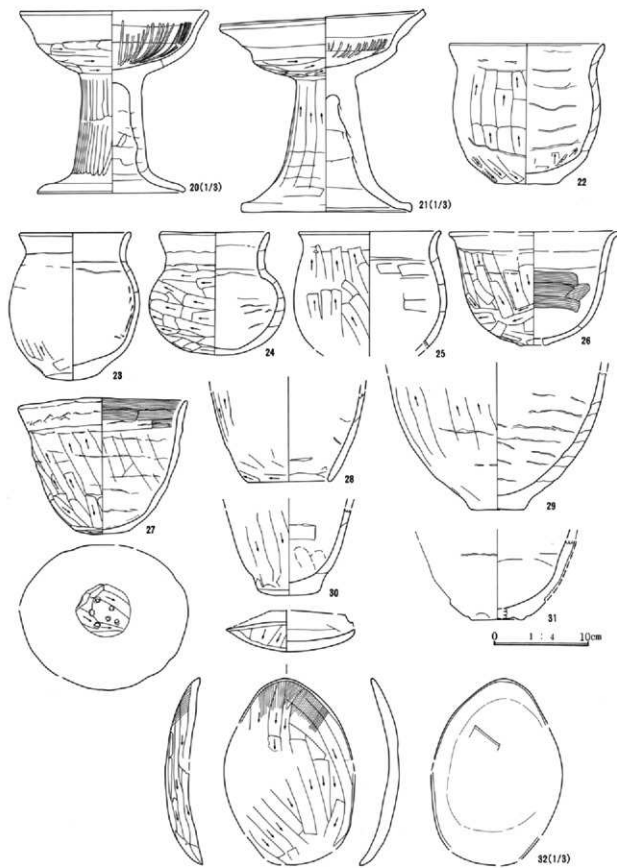
時期 6世紀前半。

H-51号住居跡遺物観察表(①口径 ②器高 ③底径)

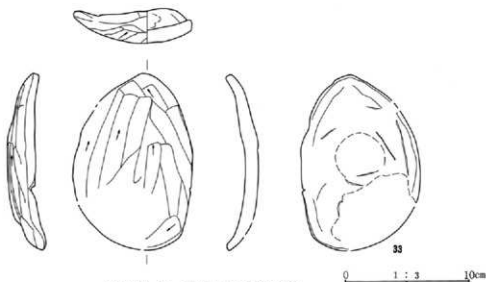
図番 P L	土器種別 器種	法量 (cm)	①軸長 ②底径 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
377-1 150	土師器 環	①13.2 ②4.3	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、器内は厚い。	カマド付 近	完形 口唇部意 図的欠損
377-2 150	土師器 環	①12.5 ②4.9	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド付 近	完形 口唇部意 図的欠損
377-3 150	土師器 環	①14.0 ②4.9	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	南壁寄り 近	完形 口唇部意 図的欠損
377-4 150	土師器 環	①13.0 ②5.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド付 近	完形
377-5 150	土師器 環	①14.2 ②5.1	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	南壁寄り 近	ほぼ完形
377-6 150	土師器 環	①13.8 ②5.3	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、外部吸炭。	貯蔵穴付 近	完形 口唇部意 図的欠損
377-7 150	土師器 環	①14.1 ②4.5	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南西部 近	ほぼ完形
377-8 150	土師器 環	①12.9 ②5.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南東部 近	1/2残存



第377図 H—51号住居跡出土遺物(1)



第378図 H-51号住居跡出土遺物(2)



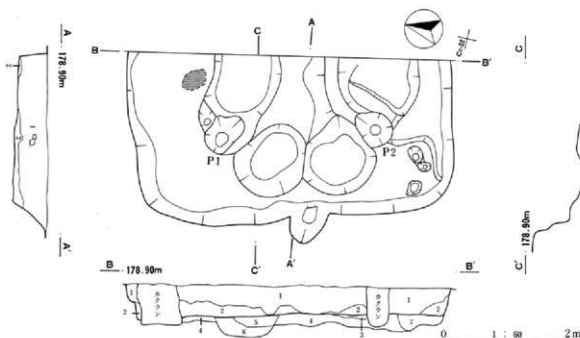
第379回 H-51号住居跡出土遺物(3)

H-51号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L.	土器種別 器種	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
377-9 150	土師器 環	①13.3 ②4.9	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド付 近	ほぼ完形
377-10 150	土師器 環	①12.3 ②4.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南東部	完形 口唇部意 図的欠損
377-11 150	土師器 環	①13.0 ②6.1	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面浅いへう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	南東部	完形 器内が厚い
377-12 150	土師器 環	①13.0 ②4.5	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド付 近	完形 口唇部意 図的欠損
377-13 150	土師器 環	①14.3 ②6.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、へらの工具痕。	カマド付 近	ほぼ完形
377-14 150	土師器 環	①12.5 ②4.3	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	カマド付 近	完形 口唇部意 図的欠損
377-15 150	土師器 環	①13.2 ②4.8	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	カマド付 近	完形
377-16 150	土師器 環	①12.8 ②4.9	①細粒の砂と片岩粒を少量含む ②酸化焰 ③褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	南東部	ほぼ完形 口唇 部意図的欠損
377-17 150	土師器 環	①12.6 ②4.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	南東寄り	1/2残存
377-18 150	土師器 環	①13.5 ②4.6	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	南東寄り	ほぼ完形 口唇 部意図的欠損
377-19 150	土師器 環	①12.2 ②4.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	貯蔵穴内	1/3残存
378-20 150	土師器 高環	①14.7 ②14.3 ③11.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部へう割り、内面輪積み痕。 坪部内面ナデ、放射状のミガキ。	カマド付 近	ほぼ完形
378-21 150	土師器 高環	①18.5 ②15.5 ③13.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部へう割り、内面輪積み痕。 坪部内面ナデ、放射状のミガキ。	貯蔵穴内	完形
378-22 150	土師器 小型壺	①16.4 ②14.8 ③6.5	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面・胴部外面へう割り、口縁部 横ナデ。内面ナデ、輪積み痕。	カマド付 近	2/3残存 内面に煤が付着
378-23 150	土師器 小型壺	①11.6 ②15.5 ③5.5	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面・胴部外面へう割り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	南東部	完形 外面荒れ 内面に煤が付着
378-24 150	土師器 小型壺	①11.3 ②12.8	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面・胴部外面へう割り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	貯蔵穴付 近	完形 内面に輪積 み痕明顯に残る
378-25 150	土師器 小型壺	①15.0 ②12.4	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部外面へう割り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	南西部	1/3残存
378-26 150	土師器 小型壺	①17.7 ②12.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面・胴部外面へう割り、口縁部 横ナデ。内面ナデ。	南東部	口縁～底面1/3

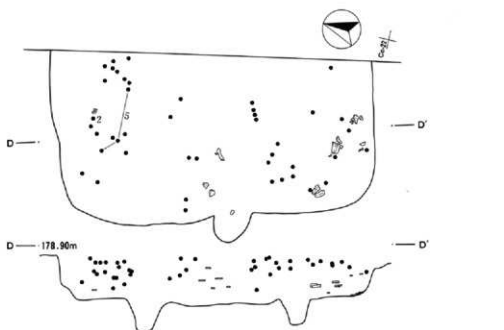
H-51号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 P.L	土器種別 器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況
378-27 150	土師器 小型甕	①18.0 ②14.4 ③5.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面・胴部外面へラ削り。口縁部 横ナデ。内面ナデ。	カマド付 近	完形 内外面に輪痕み 重 意洞小孔6個
378-28 150	土師器 甕	②9.5 ③8.8	①中粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面へラ削り。 内面ナデ。	南西部	胴下半1/3
378-29 150	土師器 甕	②14.5 ③5.6	①粗粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面・胴部外面へラ削り。内面ナ デ。輪痕み痕が残る。	南東部	底部片
378-30 150	土師器 甕	②10.0 ③6.8	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面・胴部外面へラ削り。 内面ナデ。	中央部	底部片 外面荒 れている
378-31 150	土師器 甕	②8.0 ③6.0	①粗粒の砂と片岩粒を多量に含む ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面・胴部外面へラ削り。 内面ナデ。	中央部	底部片 外面荒 れている
378-32 150	土師器 環	長14.9 幅8.0 厚0.5~1.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へラ削り。 内面丁寧なナデ。	カマド付 近	3/4残存 木の葉型
379-33 150	土師器 環	長14.0 幅9.4 厚0.6~1.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③褐色	底面へラ削り。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	南東部	一部欠損 木の葉型

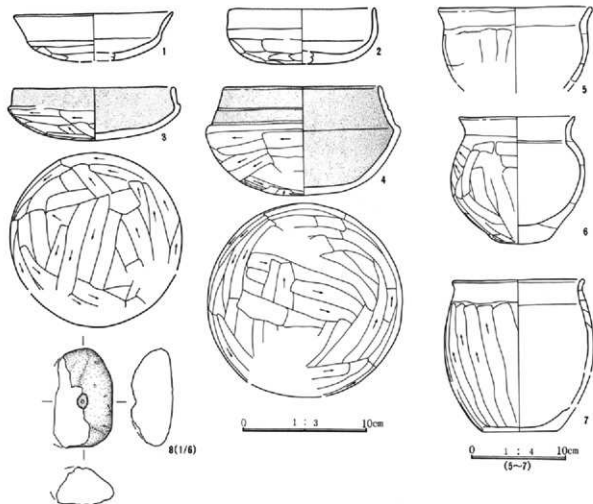


- 1 黒褐色土層 やわらかくて粘性はあまりない。
- 2 暗褐色土層 やや固く細まり粘性あり。ロームブロックを含む。
- 3 黄褐色土層 粘土。ロームと黒色土の混合土。
- 4 黄褐色土層 固く細まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 5 暗褐色土層 やや固く細まり粘性あり。ローム粒子・粘性粒子を多量に含む。炭化物粒子も含む。
- 6 暗褐色土層 やや固く細まり粘性あり。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 7 黒褐色土層 やや固く細まり粘性非常にあり。ロームブロック・粒子を多量に含む。

第380図 H-48号住居跡



第381図 H-48号住居跡遺物分布



第382図 H-48号住居跡出土遺物

H-48号住居跡 (第380~382回, PL.23・150)

位置 Cc-21・22グリッドにかけて検出された。H

9号住居跡の東約3mの所に位置している。

形状 現状では長辺5.1m、短辺2.7mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は7層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約43~55cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約10.9㎡。

掘り方 凹凸が激しい。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 ビットは2個検出された。柱穴になる。P1の規模は長径70cm、短径43cm、深さ50cm、P2は長径64cm、短径51cm、深さ40cmである。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土から土師器片258点、須恵器片8点が出土し、この他に縄文中期土器片50点、弥生土器片74点、礎・剥片5点が出土している。

時期 6世紀後半。

H-48号住居跡遺物観察表 (①口径 ②器高 ③底径)

図番 PL	土器種別 器種	流量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状況	残存状況	
382-1 150	土師器 坏	①12.7 ②3.7	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③灰褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	覆土	1/4残存	
382-2 150	土師器 坏	①11.8 ②4.3	①細粒の砂と褐色粒を含む ②酸化焰 ③ぶい橙色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	北西部	1/4残存	
382-3 150	土師器 坏	①12.8 ②4.2	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③暗赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ。 内面丁寧なナデ、内面黒漆か。	覆土	3/4残存	
382-4 150	土師器 坏	①12.4 ②8.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③暗赤褐色	底面へう削り、口縁部横ナデ、口 縁部中央に一条の沈線。	覆土	ほぼ完全 内面丁寧なナデ 内面黒漆か	
382-5 150	土師器 小型甕	①15.9 ②8.0	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③ぶい赤褐色	胴部へう削り、口縁部横ナデ、輪 積み底残る。内面丁寧なナデ。	北西部	口縁部1/3	
382-6 150	土師器 小型甕	①12.1 ②13.4③5.5	①細粒の砂を混入 ②酸化焰 ③ぶい赤褐色	底面ナデ、胴部外面へう削り、口 縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	覆土	口縁一部欠損	
382-7 150	土師器 小型甕	①13.8 ②16.0 ③7.4	①細粒の砂と片岩粒を含む ②酸化焰 ③赤褐色	胴部外面へう削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	覆土	3/4残存	
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm, g)		特徴	出土状況
382-8 150	多孔石	1/2	砂岩	全長	幅 厚 重量	片面に1個の凹み穴が認められる。	覆土
				15.6	(9.2) 6.6 (1,149)		

〔4〕

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第303図、PL.117)

位置 Dd-24・25、De-24・25グリッドにかけて検出された。路線外に遺構が延びているために完掘することはできなかった。

形状 不明。

規模 発掘された範囲内では南北2間、東西2間で、柱間は1.7～2.1mである。柱穴の径は約40～50cm、深さ約15cmである。

所見 調査区南端から検出された。完掘できなかったために詳細は不明である。柱穴覆土は3層に分かれたが、出土遺物はなく時期は不明である。

2号掘立柱建物跡 (第305図、PL.117)

位置 Db-26・27、Dc-26・27、Dd-26グリッドにかけて検出された。1号掘立柱建物跡の北東約5.5mの所に位置している。Y-8・20号住居跡と18号土坑を被している。

形状 長方形。

規模 3間×4間の長方形を呈する。柱間は北側と南側のビット列で約1.6m、東側と西側のビット列で約1.8mである。柱穴の径は30～60cm、深さは約18～35cmである。

所見 柱穴覆土は4層に分かれた。構築時期は弥生時代後期以降であり、7号墳構築以前の建物跡である。

3号掘立柱建物跡 (第304図、PL.117)

位置 De-25・26、Df-25・26グリッドにかけて検出された。1号掘立柱建物跡の北西約4.5mの所、7号墳周堀の内側に位置している。

形状 長方形。

規模 3間×2間の長方形を呈する。柱間は1.2～1.4mである。柱穴の径は約30～55cm、深さ約30～50cmである。

所見 柱穴覆土は3層に分かれたが、出土遺物はない。7号墳構築以前の建物跡である。

4号掘立柱建物跡 (第306図、PL.118)

位置 Cf-25・26、Cg-25・26グリッドにかけて検出された。1号方形周溝墓に接している。

形状 方形。

規模 3間×3間の方形を呈する。柱間は約1mである。柱穴の径は約30～47cm、深さ約25～50cmである。

所見 柱穴覆土は1層である。出土遺物は縄文前期中葉の土器片1点、弥生後期の土器片2点、土師器片1点であった。構築時期は不明である。

5号掘立柱建物跡 (第307図、PL.118)

位置 Cg-24、Ch-23・24グリッドにかけて検出された。6号掘立柱建物跡と重複し、H-3号住居跡と接している。

形状 方形。

規模 3間×3間の方形を呈する。柱間は約1.2mである。柱穴の径は約27～50cm、深さは浅いビットで約15cm、深いビットで約50cmである。

所見 柱穴覆土は1層である。出土遺物はなかった。構築時期は不明である。

6号掘立柱建物跡 (第308図、PL.118)

位置 Cg-24、Ch-24グリッドにかけて検出された。5・7号掘立柱建物跡と重複している。

形状 長方形。

規模 不明なビットがあるが、2間×2間の長方形を呈すると考えられる。柱間は西側のビット列で約1.8mである。柱穴の径は約27～40cm、深さ約25～50cmである。

所見 出土遺物はなかった。構築時期は不明である。

が、7号掘立柱建物跡よりも古い。

7号掘立柱建物跡 (第389図、PL.118)

位置 Cf-22・23、Cg-23・24グリッドにかけて検出された。6号掘立柱建物跡、H-5号住居跡と重複している。

形状 長方形。

規模 2間×3間の長方形を呈する。柱間は北側と南側のピット列で約2m、東側と西側のピット列で約1.5~1.8mである。柱穴の径は約65~80cm、深さ約40~55cmである。

所見 柱穴覆土は2層である。出土遺物はなかった。構築時期は不明であるが、6世紀後半のH-5号住居跡を壊している。

8号掘立柱建物跡 (第390図、PL.118)

位置 Cb-32・33、Cc-32・33グリッドにかけて検出された。H-31号住居跡と重複している。

形状 長方形。

規模 不明ピットがあるものの2間×3間の長方形を呈すると考えられる。柱間は北側と南側のピット列で約1.8~2m、東側と西側のピット列は確認できるところで約2mである。柱穴の径は約45~90cmであるが、北側の柱穴は大きい。深さは約35~55cmである。

所見 出土遺物はなかった。構築時期は不明であるが、9世紀前半のH-31号住居跡によって壊されている。

9号掘立柱建物跡 (第391図、PL.118)

位置 Ch-21・22、Ci-21・22グリッドにかけて検出された。6号掘立柱建物跡の南西約9mの所に位置している。

形状 長方形。

規模 柱間は北側と西側のピット列で約2m、西側で約3.2mである。柱穴の径は約45~55cm、深さは約40~70cmである。

所見 柱穴の覆土は3層に分かれた。縄文中期前半

の土器片2点が出土している。構築時期は不明である。

10号掘立柱建物跡 (第392図、PL.120)

位置 Bs-30・31、Bt-30・31グリッドにかけて検出された。

形状 方形。

規模 2間×2間の方形を呈する。柱間は約1.5mである。柱穴の径は約65~85cm、深さは約65~85cmである。

所見 柱穴の覆土からは、縄文中期前半の土器片9点、土師器片8点、礫1点が出土している。構築時期は不明である。

11号掘立柱建物跡 (第393図、PL.120)

位置 Ci-30・31グリッドにかけて検出された。Y-32号住居跡、8号墳周堀と重複している。

形状 長方形。

規模 2間×3間と考えられる掘立柱建物跡2棟が検出されたが、調査時では1棟として把握していた。北側の掘立柱建物跡は北側と南側のピット列の柱間は約1.8m、西側のピット列では約1.5mである。柱穴の径は約30~50cmで、深さ約10~40cmである。南側の掘立柱建物跡の柱間は不規則である。

所見 出土遺物はなかった。構築時期は不明であるが、Y-32号住居跡構築以降、8号墳構築以前に求められる。2棟は立て替えの可能性が考えられる。

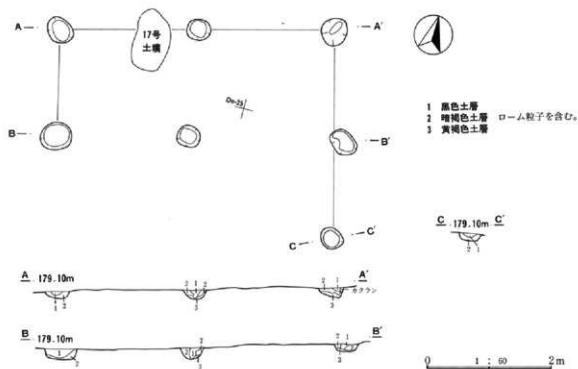
12号掘立柱建物跡 (第394図、PL.120)

位置 Cm-33・34、Cn-33・34グリッドにかけて検出された。13号掘立柱建物跡の南約1.5m、Y-25号住居跡と8号墳周堀に接している。

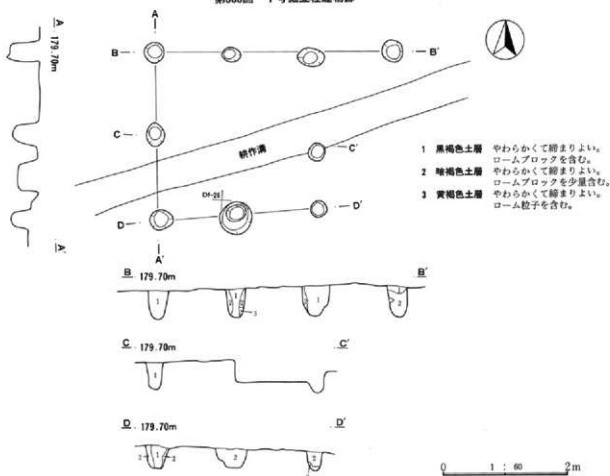
形状 方形。

規模 2間×3間の方形を呈する。北側と南側のピット列の柱間は約1~1.5m、東側と西側のピット列では約1.5~2.2mである。柱穴の径は約25~55cmで、深さ約15~40cmである。

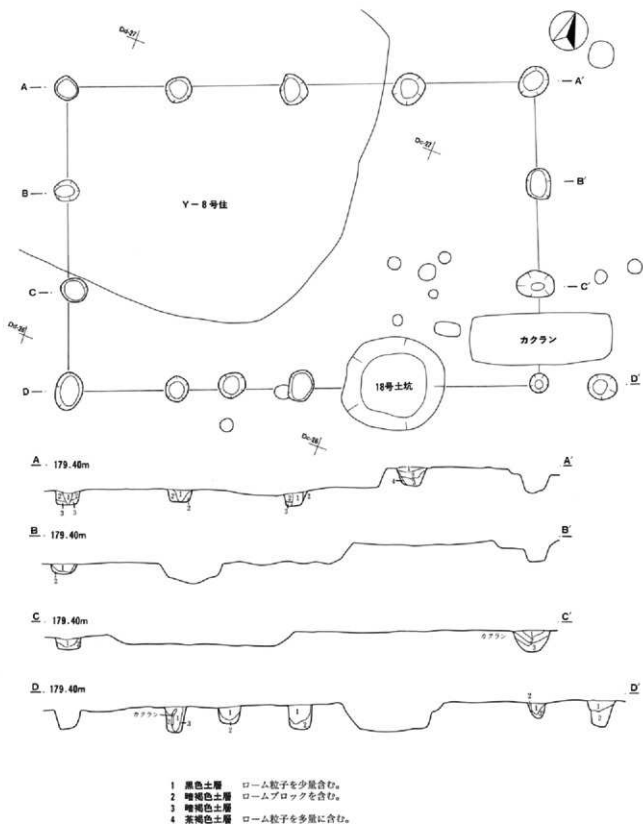
所見 出土遺物はなかった。構築時期は不明である。



第383図 1号掘立柱建物跡

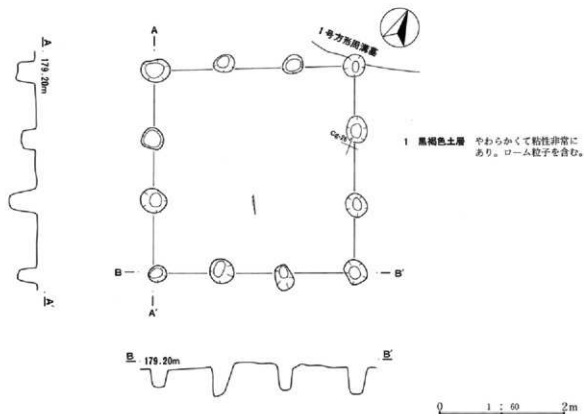


第384図 3号掘立柱建物跡

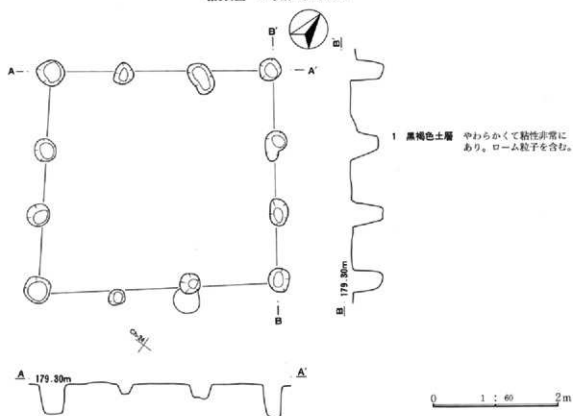


0 1 : 60 2m

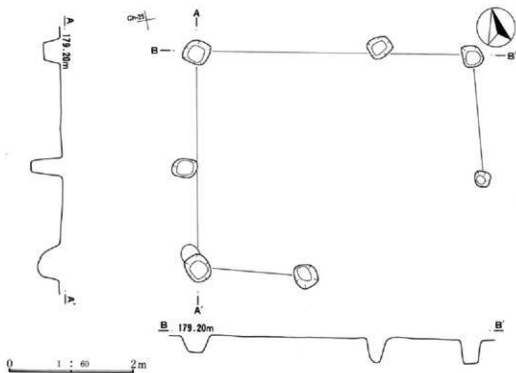
第385図 2号掘立柱建物跡



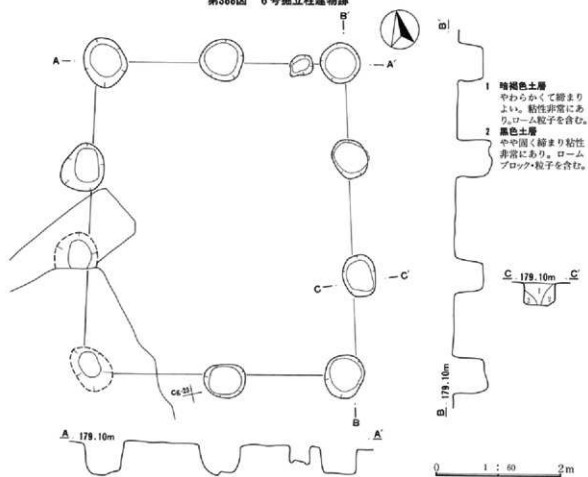
第386図 4号掘立柱建物跡



第387図 5号掘立柱建物跡



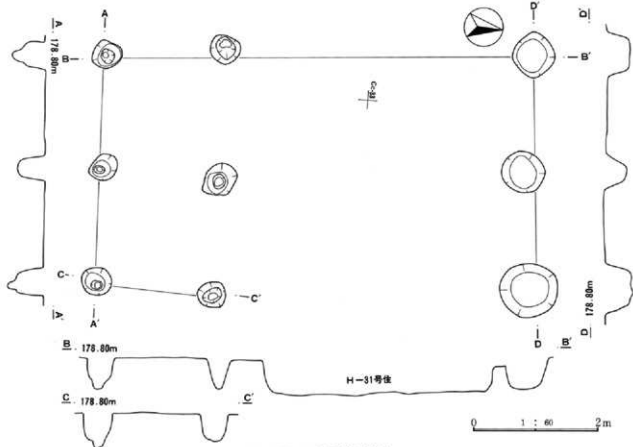
第388図 6号掘立柱建物跡



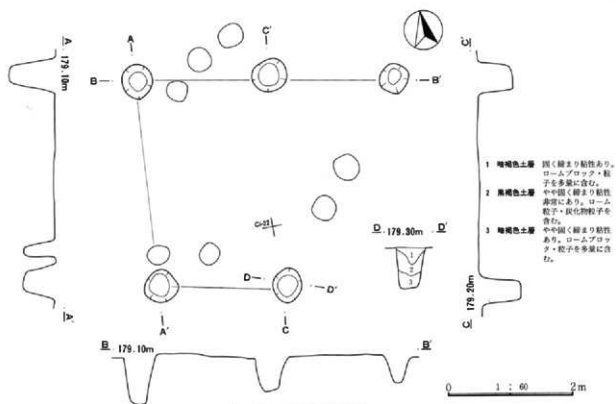
第389図 7号掘立柱建物跡

- 1 暗褐色土層
やわらかくて締まり
よい。粘性非常に
あり。ローム粒子を含む。
- 2 黒色土層
やや固く締まり粘性
非常にあり。ローム
ブロック・粒子を含む。

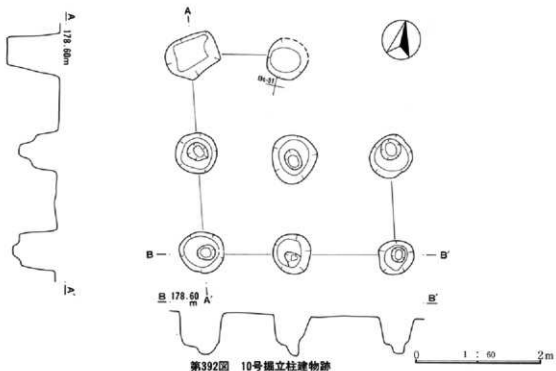
(4) 堀立柱建物跡



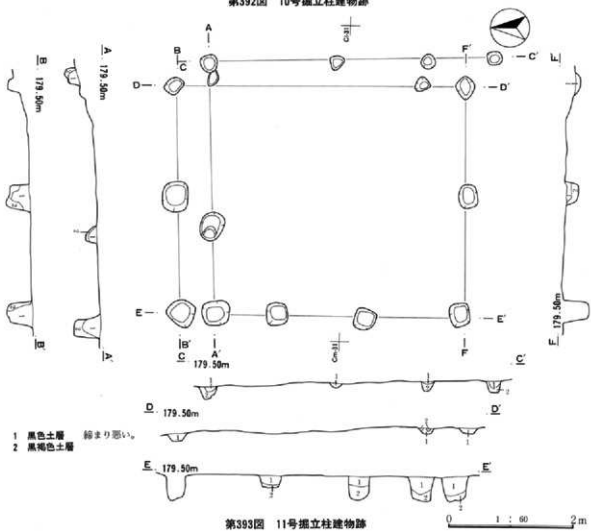
第390図 8号掘立柱建物跡



第391図 9号掘立柱建物跡

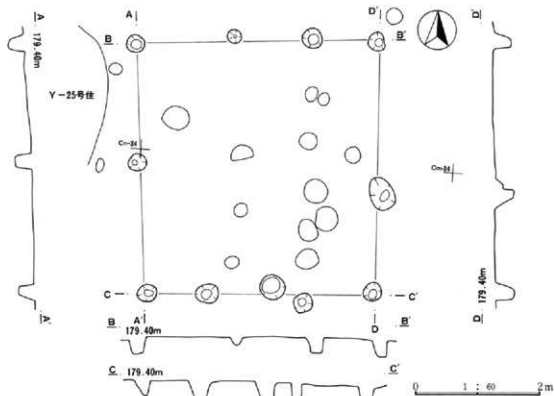


第392図 10号掘立柱建物跡

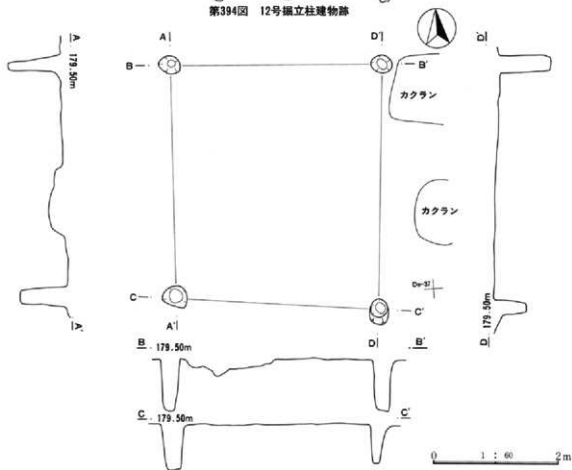


第393図 11号掘立柱建物跡

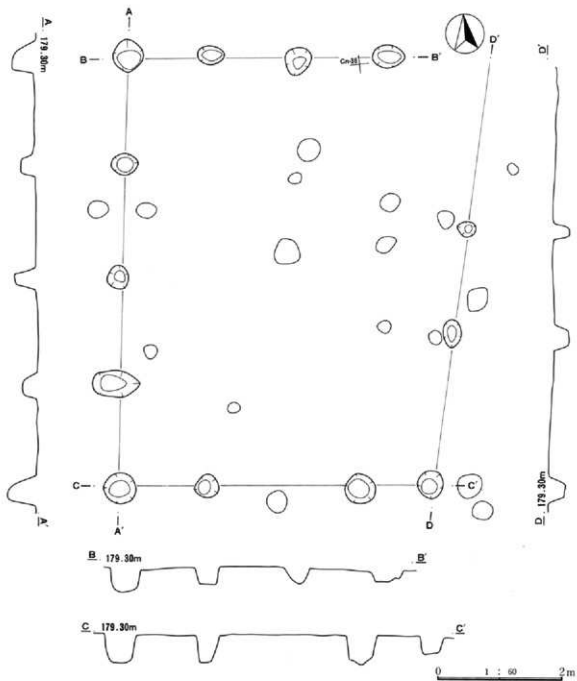
- 1 黒色土層 締まり悪い。
- 2 黒褐色土層



第394図 12号掘立柱建物跡



第395図 14号掘立柱建物跡



第396図 13号掘立柱建物跡

13号堀立柱建物跡 (第398図、PL-120)

位置 Cm-34・35・36、Cn-34・35・36グリッドにかけて検出された。12号堀立柱建物跡の北約1.5m、Y-25号住居跡と接している。

形状 長方形。

規模 3間×4間の長方形を呈する。西側ピット列の柱間は約1.7m、北側のピット列は約1.3mである。柱穴の径は約40～75cmで、深さ約20～45cmである。

所見 出土遺物はなかった。構築時期は不明である。

14号堀立柱建物跡 (第399図)

位置 De-36・37グリッドにかけて検出された。12号墳周堀の内側に位置している。

形状 方形。

規模 北側と南側のピットの柱間は約3.3m、東側と西側では約3.8mである。柱穴の径は約35～40cmで、深さ約50～85cmである。

所見 出土遺物はなかった。構築時期は不明であるが、12号墳構築以前であろう。

5章 中・近世と
時期不明の
遺構と遺物



C区の調査

〔1〕

土 坑

17号土坑 (第397図、PL.121)

De-25グリッドにおいて検出された。1号掘立柱建物跡と重複しているが、土壌が新しい。上面の規模は98×56cm、底面の規模は90×46cm、深さ20cmの楕円形を呈する。底面は凹凸がある。覆土は4層に分かれた。土壌内からは30～40歳代の人骨が検出されている。

25号土坑 (第397図、PL.121)

Co-26グリッドにおいて検出された。J-4号住居跡を壊して構築されている。上面の規模は230×150cm、底面の規模は112×55cm、深さ73cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。覆土は4層に分かれた。覆土全体に炭化物和焼土が伴い、また壁面が焼けていた。覆土の中層からは礫と手捏土器が出土し、また縄文中期の土器片6点、弥生後期の土器片8点、土師器片32点が出土している。手捏土器がその後不明になってしまったために時期を確定できない。

28号土坑 (第397図)

Dh-28グリッドにおいて検出された。7号方形周溝墓の南東約1mの所に位置している。上面の規模は216×123cm、底面の規模は168×50～80cm、深さ61cmの楕円形を呈する。底面は扇型を呈し、ほぼ平坦である。覆土は9層に分かれた。構築時期は不明である。

34号土坑 (第397図)

Dk-31・32グリッドにおいて検出された。5号方形周溝墓の東約2mのところの所に位置している。上面の規模は307×162cm、底面の規模は245×103cm、深さ65cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。覆土中層から上層にかけて縄文中期前半の土器片3

点、中期後半の土器片3点、弥生中期の土器片2点、後期の土器片17点、土師器片2点、礫・剝片2点が出土している。構築時期は不明である。

35号土坑 (第398図、PL.121)

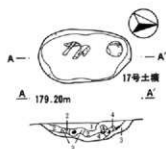
Dk-32・33、Dl-32・33グリッドにかけて検出された。6号方形周溝墓の西約1.5mの所に位置している。上面の規模は256×144cm、底面の規模は228×78cm、深さ73cmの楕円形を呈する。底面は長方形で凹凸がある。覆土は6層に分かれた。覆土中層から上層にかけて縄文中期前半の土器片1点、中期後半の土器片4点、弥生後期の土器片9点が出土している。構築時期は不明である。

102号土坑 (第398図、PL.121)

Dn-35、Do-35グリッドにかけて検出された。10号方形周溝墓の西約1.5mの所に位置している。上面の規模は285×199cm、底面の規模は185×87cm、深さ73cmの楕円形を呈する。2段に掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。覆土は8層に分かれた。覆土からは縄文中期前半の土器片4点、中期後半の土器片12点、弥生中期の土器片20点、後期の土器片8点が出土している。構築時期は不明である。

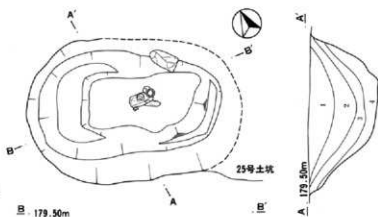
129号土坑 (第398図、PL.121)

Dc-31グリッドにおいて検出された。Y-35号住居跡と接している。上面の規模は227×150cm、底面の規模は187×120cm、深さ45cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。覆土は5層に分かれた。覆土からは縄文中期前半の土器片1点、中期後半の土器片2点、弥生中期の土器片1点、後期の土器片17点、須恵器片9点が出土している。構築時期は不明である。



17号土坑

- 1 暗褐色土層 締まり悪い。ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 締まり悪い。ローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 ローム粒子を含む。
- 4 黄褐色土層

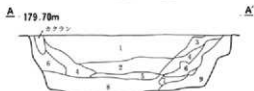


25号土坑

- 1 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。炭化物粒子・ローム粒子を含む。
- 2 黒褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。炭化物粒子を多量に、ローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性非常にあり。炭化物粒子・焼土粒子・ローム粒子を含む。
- 4 黄褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性非常にあり。炭化物粒子・焼土ブロック・粒子、ロームブロック・粒子を多量に含む。

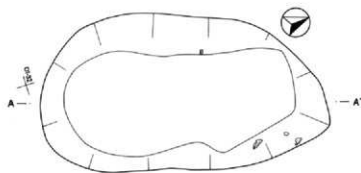


26号土坑



26号土坑

- 1 黒褐色土層 締まり悪い。炭化物を含む。
- 2 黒褐色土層 締まりやや悪い。
- 3 暗褐色土層 締まりやや悪い。
- 4 暗褐色土層 締まりやや悪い。
- 5 暗褐色土層 ローム粒子と炭化物粒子を多量に含む。
- 6 暗褐色土層 焼土粒子とローム粒子を多量に含む。
- 7 黄褐色土層 炭化物を多く含む。
- 8 黄褐色土層 ローム粒子、焼土、炭化物を多量に含む。
- 9 暗褐色土層 ローム粒子、焼土、炭化物を多量に含む。

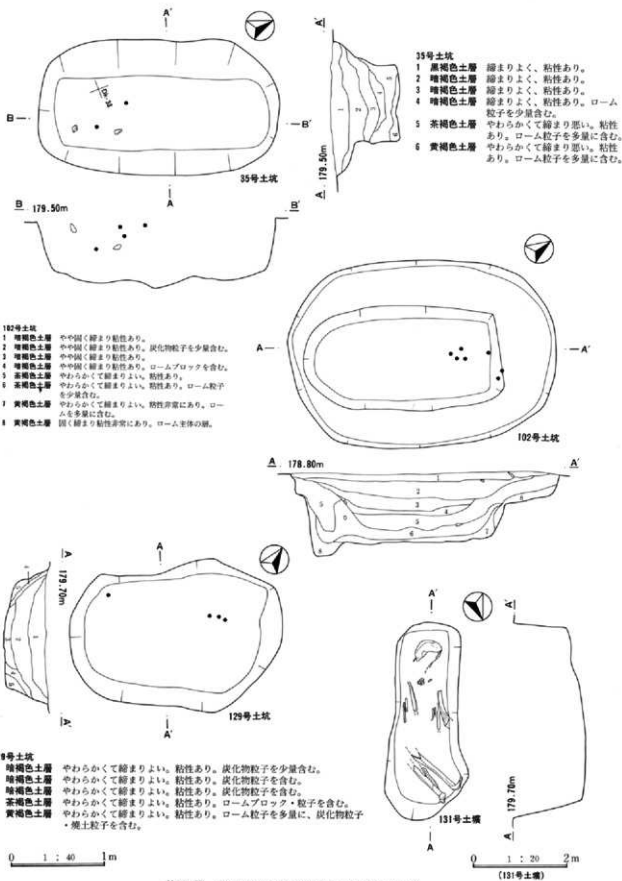


34号土坑

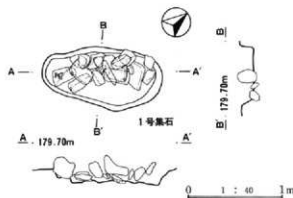


0 1 : 40 1 m

第397図 その他の時代の土坑(17・25・28・34号)



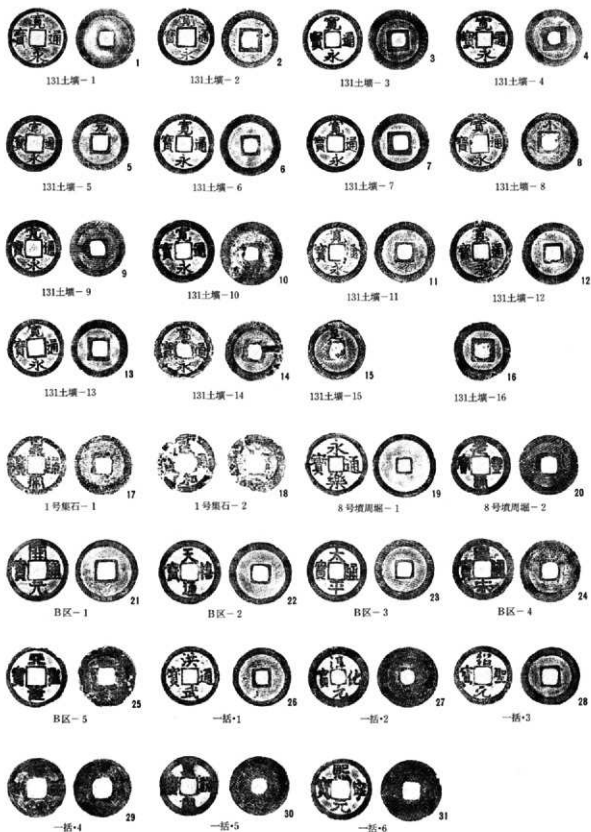
第398図 その他の時期の土坑(35・102・129・131号)



第399図 その他の時期の土坑(1号集石)

出土銭貨

図番	器種	遺存状況	計測値 (g・cm)				種類・年代	出土状況
			重量	径長 (タテ・ヨコ)	縁厚			
400-1	古銭	完形	2.77	2.42	2.40	0.9~1.1	寛永通寶	131号土坑
400-2	古銭	完形	2.82	2.30	2.29	0.9~1.2	寛永通寶	131号土坑
400-3	古銭	完形	3.04	2.43	2.42	0.8~1.2	寛永通寶	131号土坑
400-4	古銭	完形	3.26	2.32	2.22	0.8~1.2	寛永通寶	131号土坑
400-5	古銭	完形	2.02	2.27	2.27	0.7~1.0	新寛永通寶 寛保元年 西暦1741年	131号土坑
400-6	古銭	完形	4.50	2.47	2.47	1.0~1.7	寛永通寶	131号土坑
400-7	古銭	完形	2.83	2.30	2.31	0.9~1.2	寛永通寶	131号土坑
400-8	古銭	完形	2.88	2.36	2.34	1.0~1.2	新寛永通寶 元文2年 西暦1738年	131号土坑
400-9	古銭	完形	1.95	2.25	2.25	0.5~0.9	寛永通寶	131号土坑
400-10	古銭	完形	3.49	2.54	2.53	0.5~1.3	寛永通寶	131号土坑
400-11	古銭	完形	2.68	2.50	2.45	0.8~1.1	寛永通寶	131号土坑
400-12	古銭	完形	3.41	2.51	2.51	0.8~1.3	寛永通寶	131号土坑
400-13	古銭	完形	2.78	2.31	2.31	0.9~1.1	寛永通寶	131号土坑
400-14	古銭	完形	3.17	2.35	2.36	1.0~1.3	寛永通寶	131号土坑
400-15	古銭	完形		2.42	2.36		新寛永通寶 寛保元年 西暦1741年	131号土坑
400-16	古銭	完形		2.33	2.32		寛永通寶	131号土坑
400-17	古銭	完形	2.71	2.38	2.41	0.8~1.3	皇宋通寶 寶元2年 西暦1039年	1号集石
400-18	古銭	一部欠損	(1.89)	2.36	2.40	1.0~1.3	至和通寶 北宋至和元年 西暦1064年	1号集石
400-19	古銭	完形	2.99	2.53	2.53	0.5~1.5	永樂通寶 明永樂6年 西暦1368年	8号墳周堀
400-20	古銭	完形	2.86	2.40	2.40	0.9~1.2	元豐通寶 北宋元豐元年 西暦1078年	8号墳周堀
400-21	古銭	完形	2.74	2.53	2.51	0.7~1.3	開元通寶 唐武德4年 西暦621年	B区
400-22	古銭	完形	3.40	2.56	2.55	0.6~1.3	天禧通寶 北宋天禧2年 西暦1018年	B区
400-23	古銭	完形	3.00	2.44	2.44	0.6~1.2	太平通寶 北宋太平興國2年 西暦977年	B区
400-24	古銭	完形	2.22	2.49	2.49	0.5~0.9	皇宋通寶 寶元2年 西暦1039年	B区
400-25	古銭	一部欠損	(2.76)	2.35	2.46	0.6~1.2	天聖元寶 北宋天聖元年 西暦1023年	B区
400-26	古銭	完形	4.04	2.37	2.36	0.7~1.7	洪武通寶 明洪武元年 西暦1368年	一括
400-27	古銭	完形	3.53	2.46	2.46	0.7~1.2	淳化元寶 北宋淳化元年 西暦990年	一括
400-28	古銭	完形	3.32	2.37	2.36	0.7~1.4	紹聖元寶 北宋紹聖元年 西暦1094年	一括
400-29	古銭	完形	2.59	2.39	2.40	0.8~1.1	皇宋通寶 寶元2年 西暦1039年	一括
400-30	古銭	完形	3.22	2.41	2.36	0.6~1.2	皇宋通寶 寶元2年 西暦1039年	一括
400-31	古銭	完形	2.36	2.46	2.46	0.7~1.1	熙寧元寶 北宋熙寧元年 西暦1068年	一括



第400図 出土銭貨(1/3)

131号土壇 (第399図、PL. 121)

Cc-27・28、Cd-27・28グリッドにかけて検出された。上面の規模は105×33cm、底面の規模は92×26cm、深さ38cmの長楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。

埋葬人骨は顔を西に向け、膝を折るようにならされている。胸の辺りから寛永通宝が出土した。寛永通宝のまわりには布の断片が出土していることから、埋葬に伴い布袋に入れられて納められていたものと考えられる。

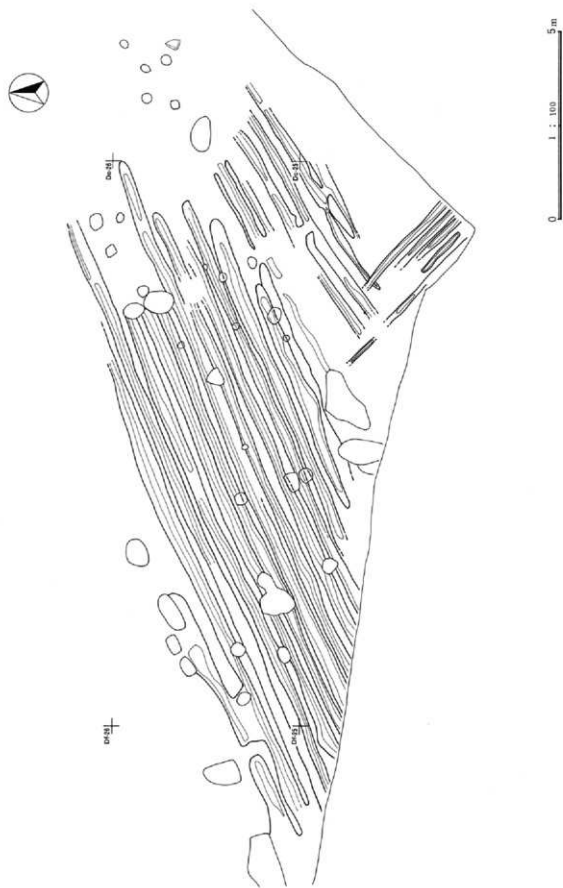
1号集石 (第399図、PL. 121)

Cp-29グリッドにおいて検出された。上面の規模は128×62cm、底面の規模は116×50cm、深さ18cmの長楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。底面から上面にかけて礫の配置が認められる。当初、礫の配置から集石遺構として調査を進めたが、後に墓墳であることが判明した。構築時期は中世(11世紀)と考えられる。

出土人骨については、宮崎先生の鑑定で壮年期後半から熟年期前半の女性と考えられている。

近世墓 (第401図、PL. 121)

Db-24~Df-24、Db-25~Df-25、Dc-26グリッドにかけて検出された。柵は北東から南西方向と、北西から南東方向の2種類が検出された。



第401図 近世遺

6章 自然科学的
分析

7章 まとめ



調査風景

〔1〕長根安坪遺跡試料重鉍物分析・ 軽鉍物分析及び屈折率測定報告

パリオ・サーヴェイ株式会社

1. 分析の目的

長根安坪遺跡は、銅川右岸の高位段丘面上に位置している。これまでの地形的な調査では、この段丘面は最終間氷期に形成された南関東の下末吉面に対比されている。段丘を構成する厚い礫層の上位には重粘土の堆積が認められ、さらにその上位には火山灰土が堆積している。この火山灰土の中には、大規模な噴火に由来する多くの降下テフラ層が認められることから、火山灰層位学による編年学的な研究が可能である。

ここでは、長根安坪遺跡で認められた降下テフラ層のうち、とくに更新世に堆積した褐色火山灰土中の降下テフラ層（5枚、5点）について重鉍物分析および屈折率測定により特徴を記載し、すでに年代が明らかになっている示標テフラとの対比をおこなう。また火山灰土の比較的下部に認められた数枚のテフラ層は、その層相から、浅間板鼻一褐色軽石（As-BP）に対比されることが予想された。As-BPの直下には通常野外において肉眼では確認できないものの、日本列島の代表的な示標テフラである始良Tn火山灰（AT）の層位があることが知られている（町田・新井, 1976）。そこでATの降灰層準にあたと予想された層準について5cmごとに連続的に試料（5点）を採取して軽鉍物分析を行い、ATに特徴的に含まれる透明のバブル型火山ガラスの濃集層準から、その降灰層準を求める。またその火山ガラスの屈折率を測定した。分析試料を採取した地層断面の柱状図を、図1に示す。

文献

町田 洋・新井 朋夫「広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—」『科学』46 pp339-347 1976

2. 分析の方法

- (1) 試料40gを秤量。
- (2) 超音波洗浄により、泥分を除去。
- (3) 80°Cで、恒温乾燥。
- (4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- (5) テトラブプロモエタン（比重2.96）を用いて比重分離を行い、重鉍物と軽鉍物に分ける。
- (6) 降下軽石層については重鉍物を、ATの検出を目的とする試料については軽鉍物を対象として偏光顕微鏡下で同定し、重鉍物組成あるいは軽鉍物組成を明かにする。
- (7) より詳細な同定を行うため、降下軽石については斜方輝石を、またATの降灰層準にあたとと思われる試料については火山ガラスを対象に屈折率を測定する。なお屈折率の測定は、新井(1972)の方法に従った。

新井朋夫「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究—」『第四紀研究』11 pp254-269 1972

3. 分析結果

3-1 降下軽石層について

純層として認められた降下軽石層の重鉱物組成を図2および表1に示す。また屈折率の測定結果を表2に示す。野外での特徴を含め、分析結果を上位のテフラから順に記載していく。

・試料番号1

パッチ状に認められる黄色降下軽石層(層厚15cm)である。斜長石などからなる遊離結晶に富む降下軽石層であるが、下部に比較的粗粒(最大粒径14mm)な軽石が多く、全体として正の級化構造が認められる。含まれる重鉱物は、斜方輝石>単斜輝石>不透明鉱物(おもに磁鉄鉱)である。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.707-1.711である。

・試料番号2

パッチ状に認められる比較的淘汰の良い(粒径が揃った)橙色の降下軽石(層厚6cm)である。軽石の最大径は、7mmである。含まれる重鉱物は、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱)である。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.702-1.707である。

・試料番号3

パッチ状に認められる黒色火山灰に富む橙色軽石層(層厚7cm)である。軽石の最大径は、4mmである。含まれる重鉱物は斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱)である。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.702-1.706である。

・試料番号4

黄灰色の淘汰の良い粗粒火山灰層(層厚3cm)である。通常、上位の橙色軽石層(試料番号3)との間には土壌が認められないが、厚さ2cm程度の土壌が認められることもある。含まれる重鉱物は、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱)である。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.700-1.706である。

・試料番号5

数フォールユニットから構成される降下テフラ層(層厚39cm)の一部である。上部は赤味がかかった橙色に、また下部は乳白色に風化している。この色調の境界は、フォールユニットの境界と一致しないことからこの色調は単に風化条件の違いに基づいているもので、ユニットごとの粒径や化学組成などの違い由来するものではない。含まれる重鉱物は、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物(おもに磁鉄鉱)で、わずかながら角閃石が認められる。上位の軽石に含まれる斜方輝石と比較すると、試料番号5に含まれる斜方輝石には晶癖が明瞭なものが

多い。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.700-1.704である。またごく少量であるが、1.720前後の非常に高い屈折率をもつ斜方輝石が含まれる。

3-2 ATの降灰層準について

ATの降灰層準を求めるために、試料番号5の下位の層準の灰色重粘土について連続的に軽鉱物分析を行った。分析結果を図3および表3に示す。

全体として岩片やひどく風化した鉱物が多く、斜長石や石英が少量含まれる。試料番号7には透明の平板状(いわゆるバブル型)火山ガラスの出現ピークが認められる。この火山ガラスの屈折率(γ)は、1.498-1.501である。この火山ガラスは形態や屈折率などから約2.1-2.2万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976)に対比される。従って、試料番号7をおおよそATの降灰層準と考えてよい。

町田 洋・新井房夫「広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-」[科学] 46 pp339-347 1976

4. 考察-降下テフラ層と示標テフラ層との対比

試料番号1の降下軽石層は、層相や斜方輝石の屈折率から約1.3-1.4万年前に浅間山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石(As-YP; 新井, 1962, 町田ほか, 1984)に対比される。また試料番号2から試料番号5までの降下テフラは層相から、約1.6-2.1万年前に浅間山から噴出した浅間一板鼻褐色軽石(As-BP; 新井, 1962, 町田ほか, 1984)に対比される。なおAs-BPについては、従来のAs-BPのうち野外における色調が非常に特徴的な最下位の軽石層を「浅間一室田(むろだ)軽石(As-MP)」とよび、上位の軽石と区別する考え方が森山, 1971, 早田, 1986)である。そして早田(1986)は、As-MPより上位の間に褐色火山灰土を挟む複数の軽石層を、1回の噴火に由来する軽石と区別することから、「浅間一板鼻褐色軽石群(As-BP group)」とよんでいる。なおAs-MPの噴出年代はAs-BPの基底にあることからおおよそ2.0-2.1万年前、As-BP groupはおおよそ1.6-2.0万年前と推定される。

新井房夫「関東盆地北西部地域の第四紀編年」[群馬大学紀要自然科学編] 10 pp1-79 1962

町田 洋・新井房夫・小田勝夫・遠藤邦彦・杉原重夫「テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ-」[古文化財に関する保存科学と人文・自然科学] pp865-928 1984 古文化財編年委員会編

森山 周雄「徳名山東・南麓の地形-とくに軽石流の地形について」[愛知県教育大学地理学報告] 36/37 pp107-116 1971

早田 勉「古城遺跡のテフラ分析および重鉱物分析」[古城遺跡-安中古城遺跡住宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書] pp111-118 1986 安中市教育委員会編

ここでも、早田(1986)の記載にない対比を行う。

試料番号2から4の降下テフラ層は、層相からAs-BP groupに対比される。また試料番号5は、層相からAs-MPに対比されると考えてよい。なおAs-MPにはごく少量の角閃石がふくまれているが、これが噴火の際のマグマに由来する本質物質か否かについては、軽石のみの分析が必要である。

5. おわりに

分析の結果、次の層準に示標テフラの降灰層準が認められた。

試料番号1……浅間一板鼻黄色軽石(As-YP; 約1.3-1.4万年前)

試料番号2、試料番号3、試料番号4

……浅間一板鼻褐色軽石群(As-BP group; 約1.6-2.0万年前)

試料番号5……浅間-室田軽石 (As-MP；約2.0-2.1万年前)

試料番号7……始良Tn火山灰 (AT；約2.1-2.2万年前)

早田 勉「古城遺跡のテフラ分析
および重鉱物分析」〔古城遺跡-安
中古城遺跡住居団地造成事業に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告書〕
pp.111-118. 1986 安中市教育委
員会編

今回、早田(1986)にならってAs-BPをAs-MPとAs-BP groupに区分した。As-MPと上位のAs-BP groupの間には、長根安坪遺跡でも認められたように暗色の土壌(いわゆる暗色帯)が認められ、そこに安定した土壌の形成が行われたことが推定される。このような層準には、今後遺物が発見される可能性もあり、その層準を明確に把握し記載するためにもAs-BPの細分は必要と考えられる。将来的には、As-BP groupのテフラ層ごとの層序の確立が必要である。

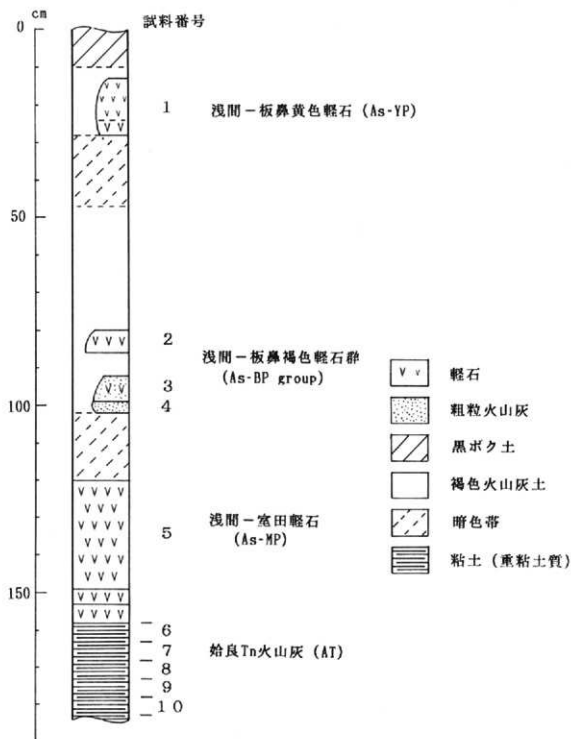


図1 長根安坪遺跡のテフラ分析試料の層位

表1 試料番号1-5の重鉱物組成

試料番号	重 鉱 物 組 成					同定鉱物粒数	
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物 その他		
1	1	132	56		52	9	250
2	2	149	61		30	8	250
3	1	122	60		35	32	250
4	2	131	49		58	10	250
5		147	81	2	17	3	250

表2 長根安坪遺跡のテフラの屈折率

試料番号	測定対象鉱物	屈折率
1	斜方輝石 (γ)	1.707-1.711
2	斜方輝石 (γ)	1.702-1.707
3	斜方輝石 (γ)	1.702-1.706
4	斜方輝石 (γ)	1.700-1.706
5	斜方輝石 (γ)	1.700-1.704
7	火山ガラス (n)	1.498-1.501

表3 試料番号6-10の軽鉱物組成

試料番号	軽 鉱 物 組 成					同定鉱物粒数	
	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石 その他		
6	38	2		23	43	144	250
7	79		2	8	32	129	250
8	14	2	1	23	43	167	250
9	9	1	1	35	38	166	250
10	5	1		32	62	150	250

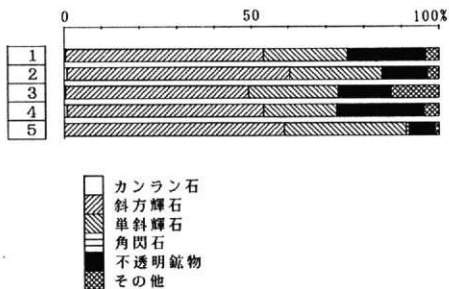


図2 試料番号1-5の重鉱物組成ダイヤグラム

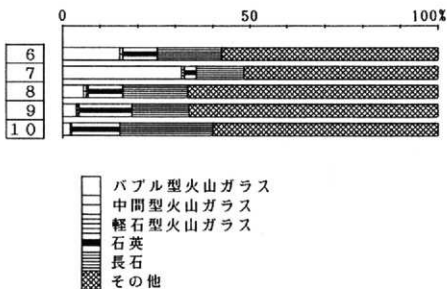


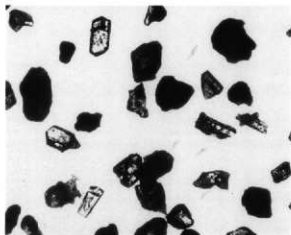
図3 試料番号6-10の軽鉱物組成ダイヤグラム



試料番号 1 の重鉱物(As-YP)



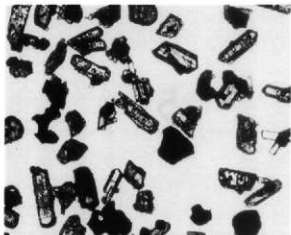
試料番号 2 の重鉱物(As-BP group)



試料番号 3 の重鉱物(As-BP group)



試料番号 4 の重鉱物(As-BP group)



試料番号 5 の重鉱物(As-MP)



試料番号 7 の軽鉱物(AT)

Opx: 斜方輝石 Cpx: 单斜輝石 Opa: 不透明鉱物
Ho: 角閃石 Bw: バブル型火山ガラス

〔2〕長根安坪遺跡の土壌に残存する 脂肪について

(株)北海道測量図工社総合科学研究所 中野寛子・福島道広・長田正宏
帯広畜産大学畜産環境学科 中野益男

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質(炭水化物)および脂質(脂肪・油脂)がある。これらの生体成分は環境条件の変化に対しては不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解していく。これまで生体成分を構成している有機物が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、生体成分の一部、とくに脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年と云う長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁽¹⁾。すべての動植物は体内に脂肪を持っており、これらを構成する脂肪酸およびステロールの組成は動植物の種によって異なる。この化学組成と考古学資料に遺存する脂肪の化学組成とを照合させることで“脂肪の持主”を特定しようとするのが残存脂肪分析である。この「残存脂肪分析法」を用いて、安坪遺跡の環状列石下の土壌の性格を解明しようとした。

文献

- (1)中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6)pp124-128

1. 土壌試料

土壌試料は長根安坪遺跡の遺構内から採取した。4つの土壌から各々同じ様に、土壌上面から南側、中央、北側の3ヵ所、土壌底面から南側、中央、北側の3ヵ所、土壌底面直下の中央部から1ヵ所の計7ヵ所から採取した。各土壌配置図と各土壌内での土壌試料採取地点を図1-1~1-3に示す。すなわち、環状列石下土壌①から土壌試料No1-1~1-7、土壌②から土壌試料No2-1~2-7、土壌⑤から土壌試料No5-1~5-7を採取した。しかし、土壌⑥に限り採取箇所の方角が異なり、土壌上面で西側、中央、東側の3ヵ所、土壌底面で西側、中央、東側の3ヵ所、それに土壌底面直下の中央部の計7ヵ所から土壌試料No6-1~6-7を採取した。

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料848~1088gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理する。処理液をろ過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作を更に2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶液に1%塩化バリウムを全抽出溶液の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。残存脂肪抽出率は0.0002~0.0026%、平均

- (2) 中野益男・福島道広・中野寛子・長田正宏「美沢3遺跡の土壌に残存する脂肪の分析」『美沢川流域の遺跡群Ⅱ—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』北海道埋蔵文化財センター調査報告第58集 pp237-1988
- (3) 中野益男・中野寛子・福島道広・長田正宏「宮後遺跡の土壌に残存する脂肪の分析」『未発表』『福島県郡山市埋蔵文化財発掘調査事業誌』
- (4) 中野益男・福島道広・中野寛子・長田正宏「納内3遺跡の遺跡群に残存する脂肪の分析」『納内3遺跡—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』北海道埋蔵文化財センター調査報告第60集 pp141-1987-1988
- (5) 中野益男・伊賀 晋・根岸 孝・安本敬博・畑 宏明・矢吹俊男・佐原 真・田中 稔「古代遺跡に残存する脂肪の分析」『脂質生化学研究』第26巻pp40-1984
- (6) M. Nakano and W. Fischer「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」『Hoppe-Seyler Z. Physiol. Chem.』358巻 pp1439-1977

0.0008%であった。この値は、北海道美沢3遺跡の土壌から採取した土壌試料の平均抽出率⁽²⁾0.0016%、福島県宮後遺跡の0.0025%⁽³⁾、北海道納内3遺跡の0.0032%⁽⁴⁾と比べると幾分低い値であった。また全国各地の遺跡土壌から抽出された残存脂肪の平均抽出率0.02%⁽⁵⁾と比べるとかなり低いものではあったが、分析には十分量であった。

残存脂肪をヘキサナーエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪種は遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリド、ステロールおよび炭化水素の順に検出された。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

試料の残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間メタノール分解し、生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサナーエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁽⁶⁾。

試料の残存脂肪の脂肪酸組成を図2-1~2-4に示す。残存脂肪から16種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸(C16:0)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ペヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)など11種の脂肪酸をガスクロマトグラフィー—質量分析で同定した。

土壌①では主要な脂肪酸としてパルミチン酸、パルミトレイン酸、オレイン酸の3つがあり、これらが全体の約49~77%を占めた。一般に植物腐植土壌に残存する脂肪酸はパルミチン酸、パルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸の順に多い。しかし土壌①の試料ではステアリン酸よりもオレイン酸の含量の方が高い。このような脂肪酸パターンを持った試料には高等動物の体脂肪、骨油が混入した可能性がある。しかし7試料中、試料Na1-3とNa1-6はパルミトレイン酸含量が最も多く、他の5試料とは異なるパターンを示した。パルミトレイン酸を持つ動物はまれにしか存在しないことから、この脂肪酸は高等動物由来のステアリン酸、オレイン酸の分解物から来たものと推定される。また高等動物の臓器、脳、神経組織、血液などに特徴的にみられるペヘン酸、リグノセリン酸などの高飽和脂肪酸は試料Na1-1、Na1-2、Na1-5で22%近く分布していたが、Na1-3、Na1-4、Na1-6、Na1-7で8~12%と少なく、分布にかたよりがみられた。

土壌②では7試料すべてが殆ど同一脂肪酸パターンを示した。即ち主要な脂肪酸はパルミチン酸、パルミトレイン酸、オレイン酸、ステアリン酸の順に多く、それら4つの脂肪酸の合計は約67~78%であった。またペヘン酸、リグノセリン酸の合計は試料No2-6、No2-7を除く試料で16%近くあったが、前の

2 試料では11%前後と分布にかたよりがみられた。

土壌⑤では試料№5-1と№5-2を除き主要な脂肪酸は土壌①とほぼ同じであり、ペヘン酸、リグノセリン酸の合計も約6~25%と似かよった分布を示していた。試料№5-7のペヘン酸、リグノセリン酸は約6%と極端に少なかった。試料№5-1と№5-2はパルミチン酸が最も多いのは同じであるが、パルミトレイン酸が他の試料よりは若干少なく、主要な脂肪酸とはいえなかった。しかしステアリン酸、オレイン酸の含量からすれば他の試料同様高等動物の体脂肪、骨油の混入が推定されるものである。土壌⑤には縄文土器片が出土している。しかし動物遺体の存在を示す脂肪酸は土壌内全体に広がっていた。

土壌⑥では試料№6-2と№6-6を除き主要な脂肪酸は他の土壌と同じであった。試料№6-2と№6-6は土壌①の試料№1-3、№1-6と同様パルミトレイン酸が最も多いパターンであった。しかし試料№6-4にはペヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸が全く含まれていなかった。これは採取した試料がその遺体の位置していた所からずれていたとも推測される。しかし土壌⑥には多量の縄文式土器片が出土していること、遺体全部を埋葬した場合に必ず検出されるペヘン酸、リグノセリン酸といった高級脂肪酸が検出されないことから、骨だけを土器内に埋納した再葬墓の可能性もある。

以上各土壌ごとみにみてきたが、土壌⑥を除きいずれの土壌においても底面直下以外の土壌内の上部、下部、底面といった採取地点による脂肪酸組成に大きな差異はなかった。このことは土壌全体が植物腐植土の多い土壌で、動物遺体が痕跡程度しか分布していないことを示唆している。脂肪酸組成の成績をみる限り、少なくとも土壌①、土壌②および土壌⑤についてはヒトを含む高等動物の遺体が存在していた可能性が推測される。土壌⑥は再葬墓の可能性もある。

4. 残存脂肪のステロール組成

試料に残存する脂肪からステロールをヘキサノン-エーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーにより分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

試料の残存ステロール組成を図3-1~3-4に示す。残存脂肪から6~19種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析で固定した。

その結果動物由来のコレステロールは土壌①で約2~4%、土壌②で約2~14%、土壌⑤で約1~8%、土壌⑥で約2~7%含まれていた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールが4~8%前後含まれているので、資料№2-7の値がそれよりも高かった。また植物由来のシトステロールは土壌①で約33~58%、土壌②で約31~60%、土壌⑤で約32~64%、土壌⑥で約28~59%含まれ

- (5) 中野益男・伊賀 啓・根岸 孝・安本敦徳・福 宏明・矢吹俊男・佐原 真・田中 琢「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』第26巻 pp40-1984

- (7) 中野益男「真脇遺跡出土土壌に残存する動物油脂」『真脇遺跡—農村基盤総合整備事業能楽地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』pp401-1986 能楽町教育委員会・真脇遺跡発掘調査班

ていた。これらのコレステロールとシトステロールとの分布比を表したのが表2である。一般に土壌を土壌墓と認定する際の分布比の指標値は0.6以上である⁽³⁾。表2の結果土壌①では全試料でその値が0.1以下であった。土壌②では値が0.1~0.3のものが4試料、0.1以下のものが3試料であり、0.1以下のものはすべて土壌内上層部の土壌試料であった。土壌⑤では値が0.1~0.2のものが2試料、他の5試料は0.1以下であった。土壌⑥も土壌⑤同様値が0.1~0.2のものが2試料、他の5試料は0.1以下であった。これらの数値は植物腐植が多いことを示すもので、残存脂肪酸の結果とは完全に一致しなかった。コレステロールの分布が少ないのは、土壌の様な遺跡遺構内土壌が長い年月を経るうちに植物遺体が不分解して植物腐植土となり、それらに含まれる脂肪の混入による影響を強く受けたとも考えられる⁽⁷⁾。

この成績と先の脂肪酸の結果を考え合わせると土壌①、土壌②および土壌⑤は土壌全体にヒトを含む高等動物の遺体が位置していたのに対し、土壌⑥は遺体を埋葬したのではなく、遺体の一部の骨等を埋葬した再葬墓の可能性が推測される。

5. 脂肪酸組成からの数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成を重回帰分析にかけ、相関行列距離を基にした群平均によるクラスター分析の結果を図4に示す。樹状構造図に見られるように土壌①内の試料Na1-1、Na1-2およびNa1-5と土壌⑤内の試料Na5-1およびNa5-2がA群に属した。土壌⑤内外の試料Na5-3、Na5-4およびNa5-7と土壌①外の試料Na1-7、土壌②内の試料Na2-3および土壌⑥外の試料Na6-7がB群に属した。土壌⑤内の試料Na5-5およびNa5-6と土壌⑥内の試料Na6-1がD群に属し、他の試料はすべてC群に属した。従って各土壌ごとに類似度が高いというような結果にはならなかったが、土壌内の上層は上層、下層は下層で同一群内に属することが多かった。特に土壌底面試料は4土壌中8試料が同じC群に属した。また土壌底面直下の試料は4土壌中3試料が同じB群に属した。これは採取試料が同一土壌層内もしくは同一土壌内で類似していることを示している。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために中級脂肪酸(炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸の比をY軸にとり、種特異性相関を求めた。この比例配分により、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等に由来する脂肪が分布し、第2象限から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪が分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離

れた位置に海産動物が分布する。

各遺構内外の試料の残存脂肪から求めた相関図を図5に示す。A群を形成する試料は第1象限内に分布した。この分布位置は高等動物の血液、脳、神経組織等に由来する脂肪の存在を示すものであり、土壌①上面と土壌⑤上面の土壌がこのA群に属している。B群を形成する試料は主として第2象限に分布した。この分布位置は高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪の存在を示すものであり、土壌②を除く他の3土壌の底面直下土壌と土壌②上面と土壌⑤上面の土壌の一部がこのB群に属している。土壌底面直下土壌もこのB群に属したのは、土壌内の遺物の脂肪が底面下にも浸み出たか、あるいは底面が試料採取したこの部分にあるのかもしれない。C群を形成する試料は第2象限から第3象限にかけて分布した。この分布位置は植物と微生物、植物腐植等、植物に由来する脂肪の存在を示すものであり、土壌⑤を除くいずれの土壌中の試料にもC群に属するものがみられた。D群形成する試料は主として第1象限の原点付近に分布した。この分布位置は第2象限同様高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪の存在を示すものであり、土壌⑤と⑥内の土壌がこのD群に属している。以上のことから土壌⑤を除き、いずれの土壌内外の試料にも植物性の腐植土を含みつつも、高等動物の脂肪が残存していたことが推測される。土壌⑤については土壌内外のすべての試料が第1象限、第2象限内に分布し、他の土壌よりも動物遺体の存在が明確に現れている。

7. 総括

長根安坪遺跡の4つの土壌内外から採取した土壌試料の残存脂肪を分析した。ステロール分析を除く脂肪酸分析およびその数理解析の結果は、土壌⑥を除くいずれの土壌も高等動物の遺体の存在を示唆する数値を示していた。特に土壌⑤は土壌墓と判定できる明瞭な脂肪酸分布を示した。しかし、土壌⑥は全遺体を埋葬した場合に検出される高級脂肪酸が土壌上面にしか検出されないことから、土壌から出土した土器に骨だけを埋納した再葬墓の可能性も推測される。土壌内から出土した土器片についても分析すれば、より詳細な結果が得られたかもしれない。

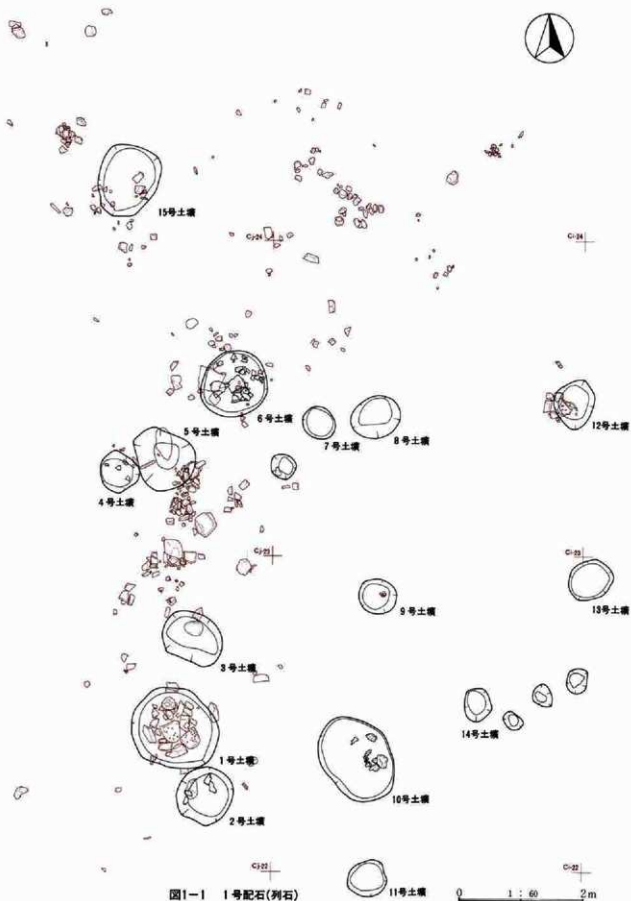


图1-1 1号配石(列石)

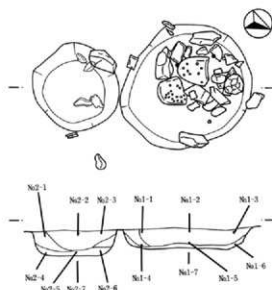


図1-2 土溝①および②内外からの土壌試料採取地点

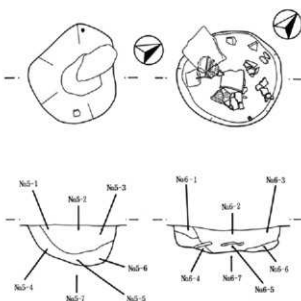


図1-3 土溝⑤および⑥内外からの土壌試料採取地点

0 1:40 1m

表1 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料 No.	採取地点	重量(g)	全脂肪(mg)	抽出率(%)
1-1	環状列石下土溝① 上面 南側土壌	907.10	9.6	0.0011
1-2	環状列石下土溝① 上面 中央部土壌	930.22	14.8	0.0016
1-3	環状列石下土溝① 上面 北側土壌	963.89	12.5	0.0013
1-4	環状列石下土溝① 底面 南側土壌	873.81	3.5	0.0004
1-5	環状列石下土溝① 底面 中央部土壌	914.70	7.1	0.0008
1-6	環状列石下土溝① 底面 北側土壌	912.51	7.2	0.0008
1-7	環状列石下土溝① 底面 中中央部土壌	892.80	4.1	0.0004
2-1	環状列石下土溝② 上面 南側土壌	914.23	7.8	0.0009
2-2	環状列石下土溝② 上面 中央部土壌	930.78	6.4	0.0010
2-3	環状列石下土溝② 上面 北側土壌	960.13	7.3	0.0008
2-4	環状列石下土溝② 底面 南側土壌	847.39	5.0	0.0006
2-5	環状列石下土溝② 底面 中央部土壌	1018.91	4.5	0.0004
2-6	環状列石下土溝② 底面 北側土壌	947.39	3.0	0.0003
2-7	環状列石下土溝② 底面 中中央部土壌	936.36	2.3	0.0003
5-1	環状列石下土溝⑤ 上面 南側土壌	927.85	8.2	0.0009
5-2	環状列石下土溝⑤ 上面 中央部土壌	996.66	9.0	0.0009
5-3	環状列石下土溝⑤ 上面 北側土壌	1036.22	5.5	0.0005
5-4	環状列石下土溝⑤ 底面 南側土壌	871.71	4.9	0.0005
5-5	環状列石下土溝⑤ 底面 中央部土壌	958.16	11.5	0.0012
5-6	環状列石下土溝⑤ 底面 北側土壌	975.28	16.0	0.0016
5-7	環状列石下土溝⑤ 底面 中中央部土壌	1088.37	4.3	0.0004
6-1	環状列石下土溝⑥ 上面 西側土壌	938.70	24.1	0.0026
6-2	環状列石下土溝⑥ 上面 中央部土壌	944.04	11.8	0.0013
6-3	環状列石下土溝⑥ 上面 東側土壌	998.03	8.5	0.0009
6-4	環状列石下土溝⑥ 底面 西側土壌	1081.80	6.3	0.0006
6-5	環状列石下土溝⑥ 底面 中央部土壌	971.58	2.1	0.0002
6-6	環状列石下土溝⑥ 底面 東側土壌	917.20	6.6	0.0007
6-7	環状列石下土溝⑥ 底面 中中央部土壌	898.27	1.9	0.0002

表2 土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料 No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1-1	4.05	41.68	0.10
1-2	3.04	37.91	0.08
1-3	2.32	33.13	0.07
1-4	3.75	42.03	0.09
1-5	3.10	50.64	0.06
1-6	3.80	49.45	0.08
1-7	4.00	57.98	0.07
2-1	2.02	37.54	0.06
2-2	1.70	80.44	0.03
2-3	2.74	35.70	0.06
2-4	6.35	56.27	0.11
2-5	7.72	42.18	0.23
2-6	7.07	31.49	0.23
2-7	14.28	56.31	0.25
5-1	4.21	44.13	0.10
5-2	1.49	63.88	0.02
5-3	7.55	32.10	0.24
5-4	3.04	58.15	0.05
5-5	1.90	53.45	0.03
5-6	0.50	58.30	0.01
5-7	5.43	44.06	0.12
6-1	2.49	52.37	0.05
6-2	2.85	58.19	0.05
6-3	3.59	52.90	0.07
6-4	4.09	49.82	0.08
6-5	6.26	27.73	0.23
6-6	5.28	50.39	0.10
6-7	7.46	58.95	0.13

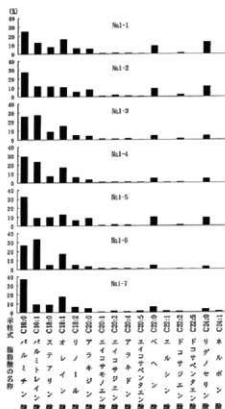


図2-1 土壌①の土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

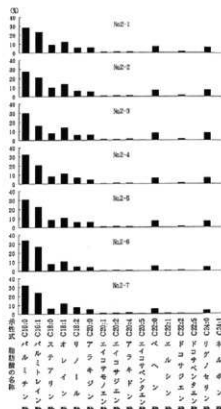


図2-2 土壌②の土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

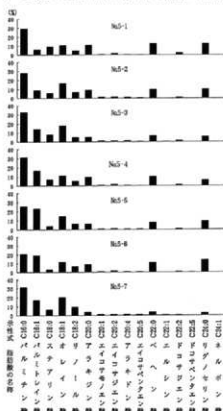


図2-3 土壌⑤の土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

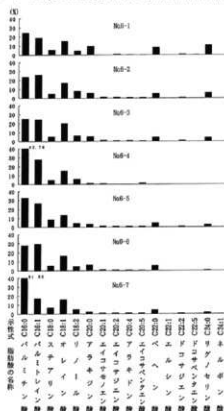


図2-4 土壌⑥の土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

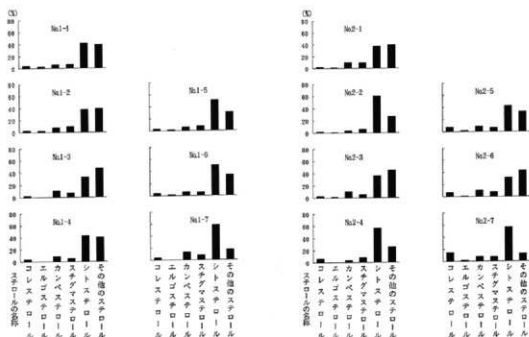


図3-1 土壌①の土壌試料に残存する脂肪のステロール組成 図3-2 土壌②の土壌試料に残存する脂肪のステロール組成

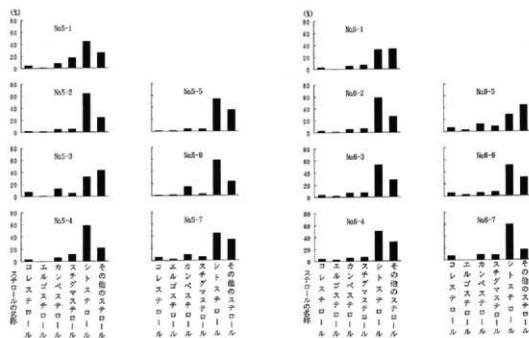


図3-3 土壌⑤の土壌試料に残存する脂肪のステロール組成 図3-4 土壌⑧の土壌試料に残存する脂肪のステロール組成

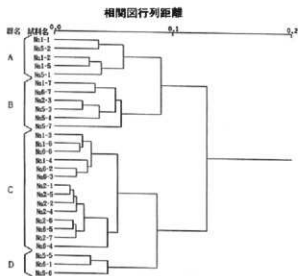


図4 土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

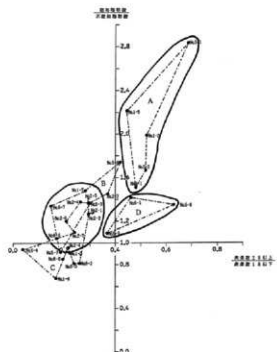


図5 土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

〔3〕長根安坪遺跡出土弥生赤彩土器 および須恵器の科学分析

菱田 量・藤根 久(パレオ・ラボ)

1. はじめに

長根安坪遺跡は、多野郡吉井町大字長根安坪・安坪谷・西場脇地内に所在する縄文時代から平安時代にかけての遺構・遺物からなる複合遺跡である。この遺跡は、鍋川右岸の上位段丘面上に位置し、縄文・弥生・古墳・平安の各時代の住居跡が検出されている。

ここでは、弥生後期赤彩土器について顔料分析と胎土分析を行い、須恵器についてその胎土分析を行った。

表1 弥生土器および須恵器

No.	遺構番号 図版番号	器種	分析内容	赤色顔料	No.	遺構番号 図版番号	種類	器種	分析 内容
1	Y1住-第79図2	壺	顔料・胎土	酸化鉄 (ベンガラ)	11	2号墳-第220図6	須恵器	平瓶	胎土
2	Y5住-第90図8	〃	〃	〃	12	2号墳-第220図3	〃	提瓶	〃
3	Y9住-第105図6	高坏	〃	〃	13	3号墳-第228図1	〃	高坏	〃
4	Y9住-第105図2	壺	〃	〃	14	6号墳-第231図2	〃	長頸壺	〃
5	Y9住-第105図7	高坏	〃	〃	15	6号墳-第232図4	〃	提瓶	〃
6	Y10住-第107図6	〃	〃	〃	16	6号墳-第231図1	〃	短頸壺	〃
7	Y32住-第163図27	〃	〃	〃	17	6号墳-フク土	〃	〃	〃
8	Y33住-フク土	〃	〃	〃	18	8号墳-第237図6	〃	長頸壺	〃
9	Y33住-第166図12	鉢	〃	〃	19	8号墳-第237図7	〃	〃	〃
10	一括	高坏	〃	〃	20	8号墳-第237図2	〃	壺	〃
					21	9号墳-第240図2	〃	平瓶	〃
					22	11号墳-第244図1	〃	長頸壺	〃
					23	11号墳-第245図4	〃	〃	〃
					24	12号墳-第248図2	〃	壺	〃
					25	12号墳-第248図5	〃	〃	〃
					26	11号墳-第245図3	〃	〃	〃

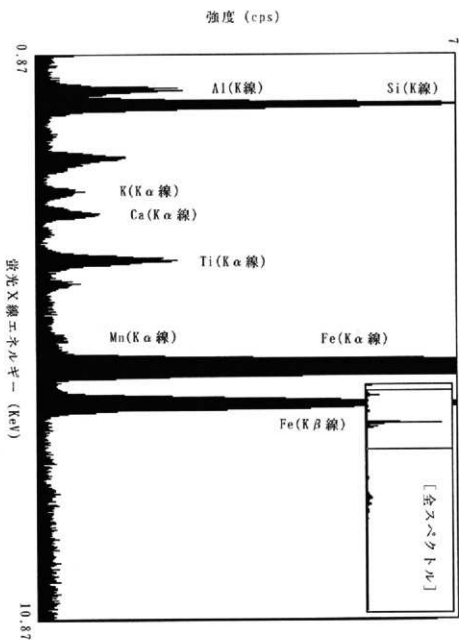


図1 赤土質赤色顔料の蛍光X線スペクトル (試料No. 1)

2. 弥生後期赤彩土器の顔料分析

試料は、6件の住居跡から出土した弥生時代後期の壺・高坏・鉢からなる10点である。これらの土器表面には明瞭な赤色顔料が見られたため、赤鉄鉱からなるベンガラなのか、水銀からなる朱であるかを検討した。

試料は、赤色顔料の鮮明な部分を選び、この平坦面を測定面とした。測定は、エネルギー分散型蛍光X線分析計(SEA-2001L:セイコー電子工業(株)製)、Be薄型-X線管球(Rh)を用いて特性X線を計測した(図1)。測定条件は、測定時間:500sec、照射径:10mm、電流:5 μ A、電圧:50kV、試料室:真空雰囲気である。

測定の結果、いずれの試料も鉄(Fe)やケイ素(Si)あるいはアルミニウム(Al)などが検出されるが、水銀(Hg)は全く検出されない。このことから、赤色顔料の成分は、鉄の酸化物(赤鉄鉱)からなるベンガラである。

3. 弥生後期赤彩土器および須恵器の胎土分析

a). 試料と方法

試料は、赤色顔料分析に用いた試料10点と7件の古墳から出土した須恵器16点である。これらの試料は、以下の手順に従って、偏光顕微鏡用の薄片(プレパラート)を作製した。

- (1) 土器試料は、採取された試料を岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させ、平面を作成した後、エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行なう。
- (2) これらの試料は、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着する。その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製する。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。
- (3) 各薄片試料は、偏光顕微鏡下で各分類群ごとに同定・計数する。なお、同定・計数は、任意の直線を設定し、この直線下にある約40 μ m(0.04mm)以上の粒子すべてを対象とし、石英・長石類以外の粒子が約200個以上になるように同定・計数した。ただし、須恵器については、分類群数が少ないため全体で200個程度を計数した。

b). 分類群の記載

細粒～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは、砂岩や泥岩を除いては岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類する。なお、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子(珪藻や植物珪酸体など)も同時に計数した(菱田ほか、1993)。

文献

菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久「岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—」日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集 pp34-35 1993

ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

[骨針]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質、角質の骨片。細い管状から針状を呈する。

[珪藻]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは0.01~1mm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。

[植物珪酸体]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なるが、主に約0.05~0.01mmである。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草木、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがある。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的特徴をもたないものは石英と区別できないため一括して扱う。なお、石英のうち波動消光するものは、石英(波動消光)として区別した。

[長石類]

長石は大きく、斜長石とカリ長石に分類される。さらに、斜長石は双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。また、カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO₂%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。ミルメカイトは火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。なお、石英・長石類(雲母)は、黄色などの細粒雲母が含まれる長石あるいは石英である。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状に見える場合が多い。その他、白雲母などもある。カコウ岩などのSiO₂%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO₂%が少ない深成岩、SiO₂%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO₂%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO₂%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

〔角閃石〕

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO₂%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

〔ガラス〕

透明の非結晶の物質で、電球のガラスの破片のような薄くて湾曲したもの(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつもの(軽石型)などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。

〔濁ガラス質〕

非結晶の粒子で、偏光顕微鏡の下方ポーラーのみで観察した場合に粒子が濁って見えるものである。これらは主として凝灰岩などの火山砕屑岩や流紋岩やデイサイトなどの火山岩類の石基(基質の非結晶質ガラスの部分)を起源とするものや堆積岩類を起源とする可能性もある。なお、高温焼成による生成物の可能性もある。

〔リング・ガラス〕

光学的に消光する鉱物類のうち、周辺にガラス質を伴うもので、須恵器胎土のように高温に焼成された土器類などで見られる。

〔発泡ガラス〕

全体的にはガラス質であるが、高温で焼成された際に出来る発泡した穴を伴うものである。

〔斑晶質、完晶質〕

斑晶質は斑晶(鉱物の結晶)状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分がみられないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

〔複合鉱物類〕

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類(含雲母類)、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類(含輝石類)とした。

〔複合石英類、濁複合石英類〕

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微

細とし、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、複合石英類のうち、下方ポーラーのみで観察した場合、粒子が濁ってみるものを濁複合石英類とする。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類(等粒)として分類した。この粒子は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[片理複合石英類]

複合石英類で、個々の石英あるいは長石類が一定方向に伸びたように平行に配列しているものをいう。なお、これら石英などの粒子のすきまに黄色などの二次的な鉱物(主に雲母類)が見られるものは片理複合石英類(含雲母類)とする。

[砂岩・泥岩]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩とし、約0.06mm未満のものを泥岩とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して同定不能な粒子およびその他の粒子を不明とする。

c). 計数の結果

各胎土中の粒子組成は、表2および図2に示す。

弥生時代後期赤彩土器では、微化石類として、主にイネ科植物に由来するファン型や棒状の植物珪酸体が多く検出されるものが多い。また、*Pinnularia*属や*Eumotia*属など淡水域に生育する珪藻種が検出される胎土が見られ、材料としての粘土の起源を推定するのに重要である。

鉱物類では、No.4あるいはNo.7などのように雲母類が極端に多い胎土がある。複合鉱物類では、この地域の岩石を特徴づける変成岩に由来すると思われる複合鉱物類(含雲母類)がいずれの胎土においても検出される。また、同様に、火山岩類(テフラも含む)に由来すると思われるガラスや濁ガラスなども検出される。

一方、須恵器胎土では、高温焼成により形成されたと考えるリング・ガラスや発泡ガラスが多くの胎土で見られる。ただし、これら粒子が全く見られない胎土もある。また、弥生土器に含まれている輝石類や複合鉱物類(含雲母類)などは非常に少ないか全く見られない。

以下に、各胎土中の大型粒子の特徴とその他の特徴について述べる。なお、須恵器胎土については、粒子の保存が良いNo.12とNo.17についてのみ述べる。

弥生時代後期赤彩土器

No.1：大型粒子では、複合鉱物類(含雲母類)が多く、次いで複合石英類なども多い。その他では、砂岩や石英・長石類あるいは斜長石が見られる。珪藻化石

は、淡水種の *Pinnularia* 属が検出される。

No2：大型粒子では、斑晶質が最も多く、次いで完晶質、複合雲母類が多い。その他では砂岩や複合石英類(微細)も見られる。珪藻化石は、不明以外は淡水種の *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Caloneis* 属が検出される。

No3：大型粒子では、複合鉱物類(含雲母類)が最も多く、石英・長石類や複合雲母類が多い。その他では、単斜輝石、濁ガラス、複合石英類(微細)、石英・長石類(含雲母類)が見られる。植物珪酸体は、大型のファン型が多い。また、不明種珪藻化石が検出される。

No4：大型粒子では、複合鉱物類(含雲母類)や石英・長石類(含雲母類)が多い。その他では単斜輝石、斑晶質、複合雲母類が見られる。珪藻化石は、淡水種の *Pinnularia* 属が検出される。

No5：大型粒子では、複合鉱物類(含雲母類)が多く、次いで石英・長石類(含雲母類)および複合雲母類である。珪藻化石は淡水種の *Pinnularia* 属が検出される。

No6：大型粒子では、複合鉱物類(含雲母類)が多く、次いで石英・長石類や単斜輝石が多い。珪藻化石は、不明種以外は淡水種の *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Diploneis* 属が検出される。

No7：大型粒子では、複合鉱物類(含雲母類)が多く、次いで複合石英類や複合石英類(小型)である。珪藻化石は、淡水種の *Pinnularia* 属が検出される。

No8：大型粒子では、複合鉱物類(含雲母類)が多く、次いで複合鉱物類や石英・長石類あるいは斑晶質である。珪藻化石は、淡水種の *Cymbella* 属が検出される。

No9：大型粒子では、石英・長石類が多く、次いで複合鉱物類や複合鉱物類(含雲母類)である。珪藻化石は、淡水種の *Pinnularia* 属が検出される。

No10：大型粒子では、複合鉱物類(含雲母類)が多く、次いで複合石英類である。その他では、微斜長石や石英・長石類がみられる。また、不明種珪藻化石が検出される。

須恵器

No12：大型粒子は、複合石英類が多く、次いで複合鉱物類(含雲母類)や石英・長石類である。珪藻化石は、不明種以外は淡水種の *Eunotia* 属や *Pinnularia* 属あるいは *Cymbella* 属が検出される。

No17：大型粒子では、石英・長石類が多く、次いで複合石英類である。その他では斜方輝石も見られる。

d). 主成分分析による胎土の特徴

ここで設定した分類群のうち、50 μ m以上の岩石片類は構成する鉱物や構造的特徴から設定した分類群であるが、源岩となる岩石とは直接対比できない(ある程度は推定できる)。これは、対象とする岩石片が細粒で、岩石名を決定するのに必要な大きさがいないことが原因である。このため、示される土器胎土中の鉱物、岩石片の岩石学的特徴は、地質学的状況(遺跡周辺の地質など)に一義的

田中 豊・垂水共之・脇本和昌「8. 主成分分析」[パソコン統計新ハンドブック II 多変量解析編] pp160-175 1984 共立出版

に対応しない。ここでは土器胎土の材料となる組成をできる限り復元する目的で主成分分析を試みた。主成分分析とは、多くの変量の値をできるだけ情報の損失なしで、1個または総合的指標(主成分、ここでは、例えば堆積岩類などの源岩組成)で代表させる方法である(田中ほか、1984)。

ここでは、田中ほか(1984)による主成分分析プログラム“PCA”を使用する。なお、プログラムは、主成分散布図の出力の一部を変更して使用した。個体数は弥生土器および須恵器の合計26点である。また、変数数は、具体的な組成上の特徴を見出すために、骨針や植物珪酸体などを含め38分類群である。なお、計算データは、百分率で小数1桁で求めた数値を用いた。

主成分分析の結果、第7主成分までの累積寄与率は約68.9%に達する。そのうち第1、第2および第3主成分の寄与率はそれぞれ約22.0%、11.4%、10.2%であり、第4主成分以下では寄与率は低くなる(表3)。このことから、ここで扱った胎土に対しては、概ね3主成分で説明される。

第1主成分は、複合鉱物類(含雲母類)、石英・長石類(含雲母類)、斜長石(双晶)、雲母類あるいは珪藻(淡水)などにおいて正の相関が高く、複合石英類(小型)や濁ガラスなどにおいて負の相関が高い。このことから、変成岩や珪藻化石などが特徴的で、ある種の火山岩(?)などに乏しい成分と解釈される。一方、第2主成分は、完晶質、砂岩、濁複合石英類(微細)、カリ長石(パーサイト)などにおいて正の相関が高く、複合鉱物類(含輝石類)などにおいて負の相関が高い。このことから、火山岩類(完晶質の構造を持つ)と堆積岩からなる複合組成が特徴的で変成岩類(?)に乏しい成分と解釈される。第3主成分は、同様に変成岩類が特徴的で植物珪酸体に乏しい成分と解釈される。

こうした主成分を用いてその散布図を描いてみると、第1-第2主成分散布図において、大きく3つのグループが識別される(図3)。第1のグループは、弥生後期赤彩土器のうち№2の胎土を除くすべてと須恵器胎土№12からなるグループである。第2のグループは、№12の須恵器胎土を除く全ての須恵器からなる。他は、独立する弥生後期赤彩土器№2である。なお、グループを示す曲線は、各点を含むように結んだスプライン曲線で描いてある。

e) 土器胎土についての考察

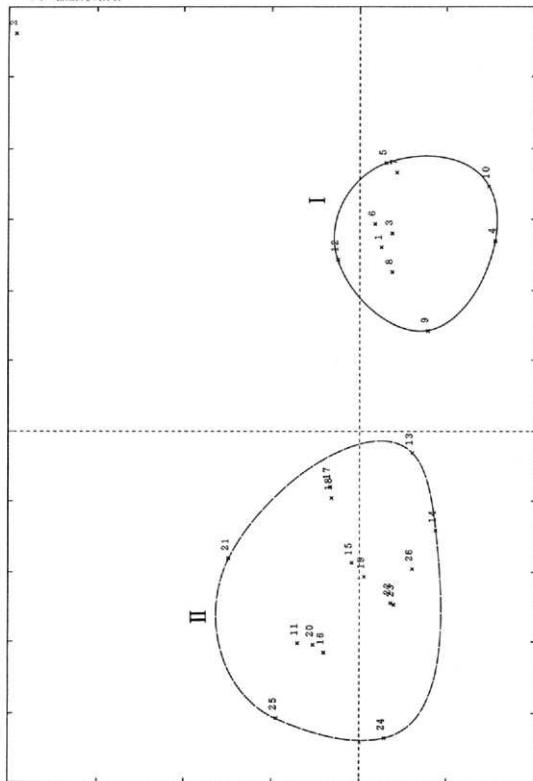
ここでは、焼成温度の異なる須恵器と弥生後期土器について、その胎土に含まれるすべての粒子を調べた。その結果、1)弥生後期土器中と須恵器の一部胎土において、淡水域に生育する珪藻化石が含まれていることが分かった。これは、胎土の材料である粘土の特徴と考えられ、粘土の起源を推定する際の重要な指標となる。この地域の基盤は、第三紀の海成の砂層・粘土層などからなるが(大森ほか、1986)、第四紀の段丘堆積物や完新世の沼沢地堆積物などにその粘土を求めることになろう。この点については、周辺域に分布する粘土層と比較する必要がある。

大森昌衛・嶋山好和・堀口万吉「関東地方」[日本の地質3] pp335-1986

表3 胎土中粒子に関する相関行列の固有値・固有ベクトルおよび寄与率・累計寄与率

分類群	主成分	1	2	3	4	5	6	7
	骨 針	0.03686	0.19580	0.15785	0.03871	-0.06926	-0.02119	0.47039
	珪藻 (淡水)	0.20079	0.24964	-0.07397	-0.11269	0.12466	0.25825	-0.10219
	珪藻 (?)	0.15063	0.16462	-0.21358	-0.01155	0.14142	0.39809	-0.04073
	植物珪酸体	0.18015	-0.09605	-0.30907	0.14314	0.08080	-0.12764	0.13995
	石英・長石類	-0.26316	0.09726	0.10616	0.19098	-0.01472	0.06456	-0.01098
	石英 (波動消光)	0.10582	-0.19818	0.15795	0.02401	-0.05684	0.12217	-0.03662
	石英・長石類 (含雲母類)	0.21977	-0.11262	0.10127	0.10098	-0.04406	0.06624	-0.21978
	石英・長石類 (含輝石類)	0.16100	-0.18077	0.07331	0.29606	-0.02443	-0.08976	-0.13142
	斜長石 (双晶)	0.21898	0.09791	-0.20617	0.14288	0.04967	0.01468	0.08176
	斜長石 (累帯)	0.08932	-0.03990	0.25676	-0.21928	-0.04449	-0.02795	0.27852
	カリ長石 (パーサイト)	0.03334	0.27262	0.09513	0.12437	-0.05927	-0.10367	0.25818
	カリ長石 (微斜長石)	0.06346	-0.02316	-0.09949	0.15622	0.07741	-0.31703	0.18617
	雲母類	0.21066	-0.03127	0.31338	-0.22512	-0.05945	0.04765	0.04695
	単斜輝石	0.18710	-0.18363	0.24889	-0.10361	-0.05598	0.15246	0.05166
	斜方輝石	0.20712	0.22133	0.07052	-0.07485	0.02672	-0.19710	-0.25400
	角閃石	0.17399	0.17746	-0.11683	0.14698	0.13663	-0.28265	0.05154
	ガラス	0.14206	-0.03156	-0.28966	0.01348	-0.02036	0.20828	-0.04363
	濁ガラス	-0.20339	-0.05769	-0.12997	-0.22887	-0.02585	-0.13984	0.02547
	リング・ガラス	-0.16502	-0.04189	-0.15059	-0.23968	-0.02236	-0.06286	-0.07258
	発泡ガラス	-0.17275	-0.08942	-0.17987	-0.32713	-0.04244	-0.18441	-0.06912
	珪晶質	0.13524	0.07510	-0.22303	0.09789	0.14045	0.27060	0.12505
	完晶質	0.13658	0.36515	0.00872	-0.12258	0.08643	-0.12831	-0.18289
	複合鉱物類 (含雲母類)	0.28818	-0.03933	0.18465	-0.03666	-0.01512	-0.00248	-0.06983
	複合鉱物類 (含輝石類)	0.15858	-0.19552	0.07681	0.21501	-0.07245	-0.16692	-0.18071
	複合石英類 (大型)	0.07612	-0.12424	-0.04692	-0.14492	-0.00801	0.22480	-0.12503
	複合石英類 (中型)	-0.17395	-0.06476	0.00127	-0.12875	0.15414	0.07666	-0.24319
	複合石英類 (小型)	-0.23485	0.15104	0.13876	0.15181	0.01946	0.17716	-0.07950
	複合石英類 (微細)	-0.14483	0.21408	0.04372	0.02954	-0.25218	0.18860	-0.05286
	片理複合石英類	-0.10599	-0.02739	0.15541	0.02129	0.49381	-0.00738	-0.04509
	片理複合石英類 (含雲母類)	0.18308	0.13934	0.24166	-0.27507	-0.02746	-0.07377	-0.01507
	濁複合石英類 (中型)	-0.16442	0.04333	0.18721	0.12796	0.40694	0.01483	0.01576
	濁複合石英類 (小型)	-0.18077	0.14820	0.11883	0.21002	-0.09011	0.01273	-0.00919
	濁複合石英類 (微細)	-0.13443	0.26545	0.14093	0.15775	-0.20346	0.12113	-0.18616
	濁複合石英類 (等粒)	0.06028	-0.11380	0.08139	0.25825	-0.07898	-0.12726	-0.34742
	砂 岩	0.14221	0.36000	0.00674	-0.10827	0.08298	-0.13627	-0.19552
	泥 岩	-0.02643	0.04004	-0.09223	-0.20258	0.01497	-0.19371	-0.15558
	不透明	-0.06745	-0.04841	0.17779	-0.00999	0.51089	-0.05008	-0.03284
	不明	-0.08548	0.17568	-0.05564	0.03952	-0.21911	-0.18134	-0.13356
	固有値	8.39260	4.36274	3.90474	2.93345	2.89932	1.92945	1.76286
	寄与率	0.22086	0.11481	0.10276	0.07720	0.07630	0.05077	0.04639
	累積寄与率	0.22086	0.33567	0.43842	0.51562	0.59192	0.64269	0.68908

8
 完晶質、砂岩
 濁流合石英類 (微細)
 カリ長石 (パーサイト)



第2主成分

複合鉱物類 (含輝石類)

-4-

複合鉱物類 (含雲母類)
 石英・長石類 (含雲母類)
 斜長石 (双晶) 雲母類、珪藻 (汽水)

第1主成分

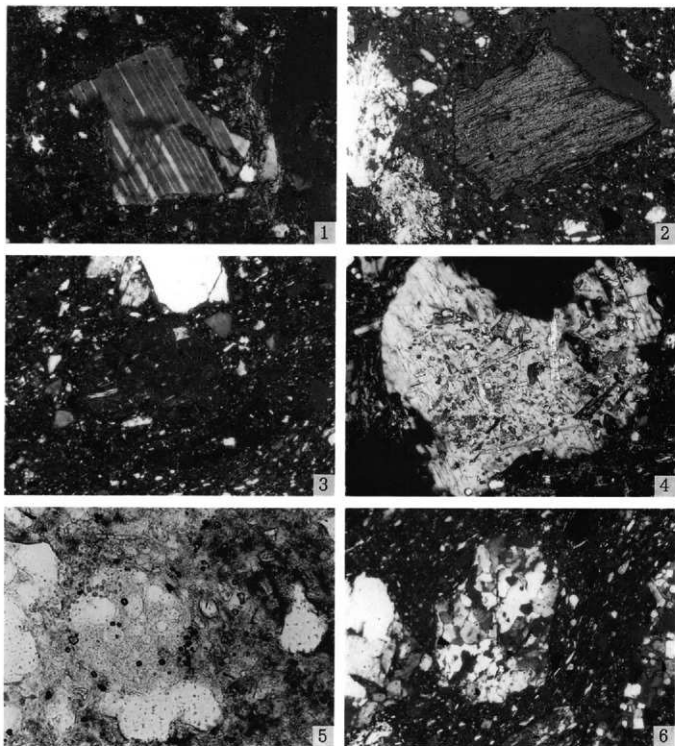
-5 複合石英類 (小型)、濁ガラス

図3 弥生後期赤砂土層および須恵部緑土の第1-第2主成分散布図

また、2) 当地域の地質(変成岩類や火山岩類など)を反映した砂粒として、複合鉱物類(含雲母類)や斑晶質あるいは石英・長石類(含雲母類)が検出され、対象とした土器が在地土器である可能性を示唆している。ただし、弥生後期土器 No.2 は、完晶質や濁複合石英類(小型・微細)などが特徴的に含まれることから、主成分分析において他の胎土と区別される。この組成は、遺跡周辺域の組成と思われるが、明らかではない。

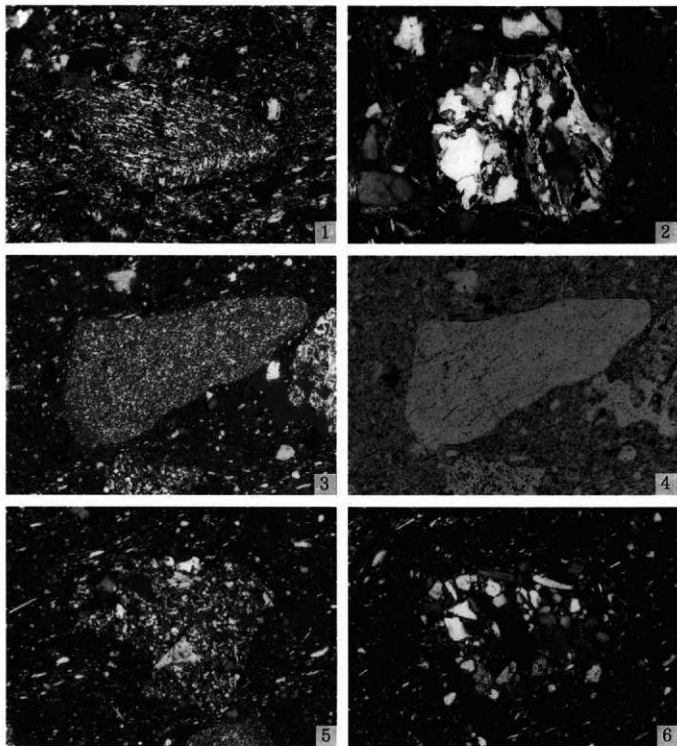
一般的に土器製作時に混和材として砂粒分を混入するとされるが、それが当時の河川の砂なのか、粘土層と同様に砂層の砂となるかなどにより、混和材の組成は異なる。この点についても、旧河川砂や周辺域に分布する砂層など比較・検討する必要があるだろう。

なお、須恵器については、一部を除いては、焼成温度が高いためにこれらの特徴的な分類群からなる砂粒が発泡ガラスなどのようにガラス化し、胎土の特徴が明瞭ではない。この点については、例えば元素分析などの方法と組み合わせで検討するなど今後検討する必要がある。



図版1. 土器胎土中の粒子顕微鏡写真(スケール:100 μ m)

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1. 斜長石(双晶), 直交ニコル No11 | 2. 斜方輝石, 直交ニコル No3 |
| 3. 珪晶質, 直交ニコル No2 | 4. 石英・長石類(含輝石類), 直交ニコル No8 |
| 5. 非晶ガラス, 解放ニコル No14 | 6. 複合鉱物類(含雲母類), 直交ニコル No2 |



図版 2. 土器胎土中の粒子顕微鏡写真 (スケール:100 μ m)

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1. 片理複合石英類 (含雲母類), 直交ニコル No.7 | 2. 複合鉱物類 (含雲母類), 直交ニコル No.2 |
| 3. 濁性複合石英類 (微細) 直交ニコル No.2 | 4. 濁性複合石英類 (微細) 斜交ニコル No.2 |
| 5. 完晶質, 直交ニコル No.2 | 6. 砂岩質, 直交ニコル No.2 |

〔4〕 長根安坪遺跡出土の主に人歯について

宮崎 重雄

I. はじめに

長根安坪遺跡は多野郡吉井町にあり、15基の古墳と土坑などが発掘されている。人骨や人歯が出土したのは、このうちの2号墳と3号墳の玄室内と、1号集石、131号土壇である。

本稿では歯の計測法は藤田(1949)を採用し、年齢の区分法は片山(1990)に従った。人歯の記録項目は主に上条(1994)によった。

II. 2号墳

2号墳は6世紀に築造されたもので、その玄室内床面からは顎蓋片、上腕骨片、桃骨片、尺骨片、大腿骨片、脛骨片などの人骨片と86本の歯が出土している。人骨や歯にはある程度のまとまりを持って分布しているものもあるが、攪乱を受けており、原位置を保っているものはほとんどない。

A. 個体数

人骨片にはほぼ完存する下顎骨と、これと別個体の左下顎骨片が1片あり、顎蓋骨岩様部も3個あって、最少個体数2を示している。

一方、歯は86本も出土していて、歯冠部の保存も概して良好であり、多くの情報を提供している。しかし、歯根部を欠くものがほとんどで、歯種判定には困難を伴った。最も数多く出土した歯は右上顎大白歯の16本である。1個体の保有する右上顎大白歯は3本以内だから、最も少なく見積もってもこの古墳には6個体分が埋葬されていたことになる。これに咬耗度を考慮に入れると、もう1個体分増えて7個体となり、さらに、この7個体には含まれていない幼年期の歯が左上顎にあることから、2号墳の最少個体数は8となる。

出土した人骨片や歯の多くはこの8個体のいずれかに属するものと思われるが、各部位と8個体それぞれとの所属関係は部分的にしか明らかにできない。

B. 年齢

出土人骨から年齢を推定する場合は、骨端部の癒合状況、脳頭蓋縫合線、上顎骨の口蓋縫合の癒合度などを調べる。しかし、2号墳では人骨からわかる最少個体数が2と少ない上に、保存がきわめて不良で、年齢推定の有力な手がかりとはなり得ない。それに引き替え、歯の保存は良好で多くの情報をもたらしている。

文献

- 藤田恒太郎(1949) 歯の計測基準について、人類学雑誌, 61: 27-32.
片山一造(1990) 「古人骨は語る—骨考古学とはじめ」、岡田出版、東京。
上条雅彦(1994)「日本人永久歯解剖学」、アナトーム社、東京。

2号墳№26下顎骨計測値

計測番号	計測部位名	計測値
65(1)	下顎部突起幅	99.0
66	下顎角幅	99.5
67	前下顎幅	51.0
68A	下顎長	101.6e
68B	下顎長	93.0e
69	オトガイ高	27.6
69(1)	下顎体高	31.3
69(2)	下顎体高(M2)	28.9
69(3)	下顎体厚	14.7
69(0)	下顎体厚(M2)	17.1
70(1)	下顎枝高	68.7
70(2)	最小枝高	54.3
71	下顎枝幅	40.6

計測法は馬場(1991)によった。

単位: mm

e: 推定値

歯の咬耗度は食物内容とその調理法によって差が生ずることは当然である。同じ年齢の人でも、生きた時代や階層が異なっていれば、食事内容も違っていたはずで、咬耗度の差となって現れる。したがって、これらの要素を考慮に要れない歯の咬耗度による推定年齢には信頼度の点で問題がある。

安坪古墳の場合、被葬者の食事内容について、出土資料などから直接知ることはできず、食事内容がどの程度歯の咬耗を促進していたかを知ることはできない。

そこで、本調査では、前記のほぼ完存する下顎骨から得られた情報を基準にして、年齢推定を試みることにした。

この下顎骨では第3大臼歯が萌出直前にあり、咬頭がわずかに顔をのぞかせている。第3大臼歯の萌出は平均的には18～20才（北村，1942）であり、この下顎骨もこの程度の年齢のものと思われる。この下顎骨には3本の大臼歯が残存していて、右第1大臼歯では頰側2咬頭に象牙質がやや大きめの点状露出し、右第2大臼歯・左第2大臼歯頰側の2咬頭は象牙質が点状に露出している。

遊離歯のなかには、この他、色調や出土地点からして、この下顎歯とペアとなることが確実な上顎臼歯が左右3本づつ検出されている。咬耗度は第1大臼歯が遠心頰側咬頭以外の咬頭に象牙質を点状に露出させ、第2大臼歯がエナメル質のみの咬耗で、第3大臼歯は咬耗が全くなく、萌出直前が開始直後といった様相である。注目されるのは、上顎臼歯・下顎臼歯とも現代人の青年期の個体に比べて、咬耗の進行がかなり早いということである。

そこで、一つ懸念されるのは、この個体は、第3大臼歯が萌出せず、埋伏したまま成人に至っている可能性はないかということである。第3大臼歯の埋伏率については、現代日本人を対象にした研究（河西，1969）があり、調査顎総数の8%と非常に低い。その上、この個体のように検出された3本の第3大臼歯のいずれもが埋伏しているとなると、その割合は一層低くなると思われる。また、他遺跡の例（未公表資料）では、頭蓋の縫合線の癒合度から青年期後半と判断された個体の歯がこれに近い咬耗度を示していることもあって、下顎骨に残存していた歯は、当時の古墳被葬者層の青年期の個体の咬耗度と見て差し支えないであろう。

ここで、咬耗度と年齢との相関関係が最も高いとされる第1大臼歯を主として用い、2号墳から出土した歯の咬耗度の検討を行って、得られた年齢区分と最少個体数、その判断の根拠となった材料を下に記す。

- ①幼年期—1個体：咬合面に小咬頭をたくさん持つ未萌出・未咬耗の左下顎第1大臼歯。
- ②少年期—1個体：エナメル質だけの咬耗された右第1大臼歯や左第1大臼歯。
- ③青年期—4個体：上記下顎骨に残存する歯を含め、各咬頭に象牙質が点状に露出しているか、それに近い咬耗度を示す右上顎第1大臼

北村宗一(1942) 歯牙萌出の時期及び
順序に関する研究。歯科学報。47:274
-287, 352-368。

河西秀智(1969) 日本人における智歯
の統計的観察(智歯の出現、発育、萌出
の時期と程度について)。口腔病理学雜
誌。26, 463-478。

歯4本と左第1大臼歯3本。

④壮年期-2個体：帯状に広がった象牙質の露出する右上顎第2大臼歯が2本。

その他の歯も上記の年齢層とその個体数の範囲におさまり、それに矛盾するものはない。

C. 性別

性差の顕著に現れるのは骨盤、頭蓋骨、下肢の長骨などである。2号墳ではこの部位の保存がきわめて不良で、求められる個体数も少ない。

そのため、ここでは男女間に有意差が認められるという犬歯と第1大臼歯(植原・小泉, 1979)の計測値を(Matsumura, 1990)の古墳時代人の歯の計測値と比較検討することによって性別を判断してみる。

犬歯は上顎左が3本、右が1本検出されており、それぞれ近遠心径8.4mm、8.5mm、7.4mm、7.3mmを計測する。この値は前2者が男性で2個体、後2者は女性で最少数で1個体を示している。一方、上顎第1大臼歯の計測値をもとに検討すると、その性別と最少個体数は男性が幼年期1個体、少年期1個体、青年期3個体、女性が青年期1個体、壮年期1個体となる。

2号墳の他のすべての歯も、ここに区分された性別・年齢個体数の範囲の中におさまり、矛盾をきたすものはない。

D. 齧歯

2号墳から出土した歯の総数は86本である。そのうち齧歯が26本あり、30.2%にも及ぶ。齧歯の内76.9%の20本は齧頸部を齧蝕されていて、残り6本は齧冠部の齧蝕である。

植原和郎・小泉清隆(1979) 歯近遠心径に基づく性別の判定-判別関数法による-。人類学雑誌, 87:445-456。
Matsumura Hirofumi(1990) Geographical Variation of Dental Characteristics in the Japanese of the Protohistoric Kofun Period. Jour. Anthrop. Soc. Nippon, 98(4):439-449.

安坪2号墳人骨記録

歯種		近遠心径	唇舌径	歯冠長	齧突部の隆起	舌側歯茎の分類	舌側隆起	舌側溝	舌側歯頸溝	齧頸溝	齧頸隆起	エナメル形成不全症?	齧 歯	歯 石	咬痕部位・咬料度	
上顎	右	中	8.6	8.0	11.9	2	2	弱1	弱2	なし	弱2	弱1	5.0	近心歯頸部C3・遠心歯頸部C2	なし	切縁象牙質露出
	左	中	9.1		12.4	?	?	?	?	?	?	?	なし	なし	なし	なし・切縁結節あり
		側	6.5	7.2	8.5	なし	?	?	近心	なし	なし	?	なし	なし	なし	なし
		中	5.5	6.2	7.8			?	?	?	?	?	なし	唇 面	切縁象牙質露出	
下顎	右	中	5.1	5.8		なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	唇側歯頸部	切縁象牙質露出		
	左	側	5.9	6.8	8.2							なし	なし	舌 面	切縁象牙質露出	
		側	6.1	6.7	8.0			なし	なし	なし	なし	なし	なし	唇側歯頸部	切縁象牙質露出	
		側	6.5	6.6	10.6	?	?	?	?	?	なし	なし	なし	なし	切縁結節あり	

犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	齧突部	中央舌面隆起	舌側溝	舌側歯頸溝	舌側隆起	遠心溝	齧頸溝	齧頸隆起	エナメル形成不全症?	齧 歯	歯 石	咬痕部位・咬料度	
上顎	右	7.3	8.2	6.9	?	1	2		?	?		唇側のみ	近心歯頸部C2	なし	尖頭象牙質点状露出	
	左	7.4	8.3	8.3	なし	1	2	微弱	なし	?	微弱2		遠心歯頸部C1	なし	尖頭象牙質点状露出	
		8.4	9.2	11.0	あり	2	3	発達	遠心	明瞭	?	明瞭2	なし	?	なし	エナメルのみ僅少
		8.5	9.2	11.7	あり	1	弱2			あり	?			?	なし	尖頭象牙質露出
下顎	右	6.8	7.7	7.1	なし	弱1	弱2	弱	なし	?	?	なし	?	なし	尖頭象牙質点状露出	

下顎	右	7.3	8.3	10.2	なし	前1	前2	なし	なし	あり	?			前2	なし	なし	尖頭象牙質面状露出	
		6.9	8.1	10.3	なし	前1	前2	なし	なし	?	遠心1					なし	なし	尖頭象牙質面状露出
		6.8	7.9	8.1	なし	1	2	弱	なし	弱	?	前2	前1			なし	なし	尖頭象牙質面状露出
	左	7.9	7.6	11.6	なし	前1	2	弱	なし	なし	なし	なし	前2	前1	なし	なし	?	未咬耗
		7.9	8.0	9.2	なし	前1	弱2	なし	なし	?				1		遠心歯頸部C2	なし	尖頭象牙質面状露出
		7.3	8.1	10.2	なし	1	2						前2	前1	なし	なし	なし	尖頭象牙質面状露出

上顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	脛側面傾斜	咬合窩中央軸距	咬合面傾斜	舌側咬合位置	近遠心溝	介在縁	精満溝	脛側縁	エナメル形成不全症?	齧齧	歯石	咬耗部位・咬耗度	
右	2	7.5	9.7	6.8	なし	なし	?	近心	近遠心	なし	弱	弱	なし	遠心歯頸部C2	なし	脛側咬合象牙質面状露出
	2	7.1	9.6	5.1	近心	近心寄り	?	近心	近心	なし	なし	なし	なし	なし	なし	脛側咬合エナメルのみ
	2	6.8	9.8	5.7	?	?	?	近心	?	?	前	弱	1.0	なし	なし	脛側咬合象牙質面状露出
左	1	8.3	10.4	8.3	近遠心	なし	?	近心	近心	近心	弱	弱	なし	なし	なし	脛側咬合エナメルのみ僅少
	1	8.1	10.8	8.6	近遠心	なし	?	近心	近心	近心	弱	弱	なし	なし	なし	脛側咬合エナメルのみ
	1	7.7	9.6	8.8	近遠心	なし	?	近心	近心	近遠心	弱	弱	なし	なし	なし	未咬耗
	2	7.4	7.5	7.6	あり	なし	?	近心	近遠心	なし			?	なし	なし	未咬耗
	2	6.2	9.0	6.6	?	?	?	近心	?	?	前	弱	2.4	なし	なし	脛側咬合象牙質点-面状露出
	2	7.0	10.0	7.0	なし	あり	?	近心	なし	なし	弱	弱	なし	なし	なし	脛側咬合エナメルのみ
	2	7.2	9.6	7.4	?	なし	?	近心	近遠心	なし	なし	なし	なし	なし	なし	脛側咬合象牙質面状露出
	2	7.6	9.2	8.0	なし	なし	?	近心	近遠心	なし	弱	弱	なし	なし	なし	未咬耗

下顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	舌側咬合位置	遠心傾斜	精満溝	脛側縁傾斜	辺縁結節	咬合窩の溝の形	舌側溝	舌側溝・舌側溝	Blockの分類	エナメル形成不全症?	齧齧	歯石	咬耗部位・咬耗度	
右	1	7.6	7.9	8.4	近心	a	前	?	なし	2	?	遠心	なし	?	?	遠心辺縁エナメルのみ	
	1	7.2	8.2	6.9	近心	a	前	?	2	?	近心前		0.5	あり	あり	脛側咬合象牙質点状露出	
	1	7.5	7.9	9.3	近心	a	前	弱		a	f		なし	なし	なし	未咬耗	
左	1	7.5	8.0	8.9	近心	a	前	弱		a	f		なし	なし	なし	未咬耗	
	1	7.2	8.1	7.0	近心	a	なし		なし	1 or 2	あり	なし	脛側のみ	なし	遠心歯頸部露出	脛側咬合象牙質露出	
	2	8.2	8.5	6.2	近心		なし	?	近心				H	なし	?	なし	近遠心辺縁脛側エナメル
	2	7.5	8.0	7.4	近心		前	遠心	なし				U	不明	?	?	未咬耗
	2	7.3	8.2	4.2			?	?	?				?	なし	?	?	脛側・近舌側咬合象牙質露出

上顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	遠心舌側咬合位置	カラベリ-傾斜	辺縁結節	辺縁溝	外形の類型	エナメル形成不全症?	齧齧	齧齧	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	1	9.0	12.0	7.7	脛側	なし	なし	あり	C3	なし	なし	なし	未咬耗
	1	9.6	12.6	5.7	なし	なし	なし	あり	C3	なし	なし	なし	エナメル質のみ
	1	7.6	12.4	5.6	脛側	なし	なし	あり	C3	なし	脛側歯頸部C3		脛側咬合エナメルのみ
	1	9.8	11.7	6.7	小咬面	なし	なし	なし	B3	なし	なし	なし	未咬耗
	3or2	10.0	12.0	5.1	なし	なし	なし	あり	B2	なし	なし	なし	近心舌側咬合エナメル僅少
	2	10.1	12.9	7.1	小咬面	なし	なし	なし	C2	3.4	遠心脛側歯頸部		近心舌側咬合象牙質点状露出
	2	10.2	12.1	6.5	咬面	?	?	?	C2	なし	近心咬面		1咬面のみ象牙質点状露出
	2	10.0	12.8	6.6	小咬面	なし	あり	あり	B2	4.0	なし	なし	各咬面エナメルのみ
	1	9.9	12.8	5.9	なし	なし	なし	なし	C2	3.5	近心歯頸部C1		近心脛側咬合以外象牙質面状露出
	1	10.5	11.4	5.8	?	?	?		B2	なし	近遠心歯頸部		脛側咬合象牙質等状・遠心脛側咬合点状象牙質露出
	左	1	10.5	12.4	5.7	咬面	なし	なし	なし	B1	2.9	近心脛側咬合3	
1		10.9	11.9	6.5	咬面	なし	あり	あり	B2	なし	なし	なし	エナメルのみ
1		9.8	12.6	4.8	小咬面	なし	?	?	C2	なし	近心歯頸部C2	脛側多	遠心脛側咬合以外象牙質面状露出
1		10.8	12.7	6.9	なし	なし	?	?	A1	2.0	なし	なし	遠心脛側咬合以外象牙質面状露出
1		10.6	12.5	6.7	咬面	なし	なし	なし	A1	3.8	近脛側咬合C3	遠心歯頸部	各咬面象牙質点状露出
1		10.9	12.2	6.8	脛側	なし	?	?	A1	なし	遠心歯頸部1		脛側咬合象牙質面状露出
1		12.0	12.8	8.0	-	なし	?	?					未咬耗・未磨出
1		10.9	12.3	11.2	咬面	なし	?	?	A1	なし	遠心脛側咬合C1		遠心脛側咬合以外象牙質点-面状露出
1		10.8	12.7	6.3	小咬面	なし	?	なし	B2	3.3	なし	なし	各咬面象牙質点状露出
1		11.1	11.8	5.1	なし	なし	あり	あり	A1	なし	なし	なし	エナメルのみ

左	1	10.5	12.5	5.7	咬頭	なし	?	B 1	3.6	近心咬合面	なし	遠心側咬頭以外各咬頭象牙質点状露出	
	1or2	10.8	11.7	7.2	小咬頭	なし	あり	あり	B 2	なし	なし	エナメルのみ	
	1or2	9.7	11.7	7.3	咬頭	なし	?	?	A 2	2.3	遠心側咬頭象牙質点状露出		
	2	10.2	12.6	7.3	小咬頭	なし	あり	あり	A 2	3.7	咬頭	なし	エナメルのみ
	2	10.4	11.3	5.2	小咬頭	なし	なし	あり	B 2	なし	なし	未咬耗	
	2	10.0	13.0	12.4		なし	?	?	C 2	4.2	なし	なし	エナメルのみ
右	3	9.6	11.6	6.6	隣接	なし	あり	あり	B 3	なし	なし	エナメルのみ	
	3	9.8	11.4	6.7	小咬頭	なし	なし	あり	C 2	なし	なし	未咬耗	
	3	9.3	10.8	7.3	隣接	なし	あり	あり	E 3	なし	なし	未咬耗	

下顎大臼歯

歯 種	遠心径	唇舌径	歯冠長	遠心咬頭の退化	第4咬頭	第7咬頭	遠心咬頭の型	咬頭型	咬頭傾	エナメル形成不全位?	齧 齧	齧 石	咬耗部位・咬耗度	
左	1	10.4	9.6	5.6		なし	なし		Y 4		遠心齧齧部 C 1	なし	遠心咬頭エナメルのみ	
	1	9.4	8.7	6.3						なし	なし	なし	エナメルのみ	
	2	12.0	10.7	7.6	5	なし	なし		X 5	なし	なし	未咬耗		
	2	11.0	11.3	11.0	4	なし	なし	a	. 4	あり	なし	近心齧齧部 C 2・遠心齧齧部 C 3	なし	明瞭2咬頭象牙質点状露出
	1	11.6	11.7	5.6	?	なし	?	?	. 5	?	なし	明瞭2咬頭象牙質点状露出		
	1	11.8	10.7	6.8	5	あり	なし		. 5	あり	2.0	なし	エナメルのみ	
	1	11.1	11.2	4.5	5				?	?	1.9	近心齧齧部 C 2	僅少	近心咬頭以外各咬頭象牙質点状露出
	1	13.9	11.2	6.7	?						なし	なし	未咬耗・未露出	
	1	12.2	11.3	7.0	5	なし	なし		Y 5	あり	なし	なし	遠心咬頭以外各咬頭象牙質点状露出	
	1	11.6	11.2	4.9	5	なし	なし	?	X 5	?	なし	なし	近心咬頭象牙質点状露出、近舌・遠心咬頭点状露出	
右	1or2	11.7	11.0	7.2	5	なし	なし		Y 5	なし	なし	なし	エナメルのみ	
	2	10.8	9.5	5.2	5	あり	あり		?	?	なし	僅少	遠心・遠心咬頭象牙質点状露出	
	2	11.7	10.7	6.3	5	あり	なし		. 5	あり	なし	なし	エナメルのみ	
	2	11.1	10.3	7.3	5	なし	なし	なし	. 5	?	なし	なし	未咬耗	
	2	10.8	10.8	11.2	4	なし	なし	a			なし	近心齧齧部 C 2	明瞭2咬頭象牙質点状露出	
	2or1	10.6	10.1	4.4	?	?	?		?	?	なし	近心齧齧部 C 2	なし	各咬頭象牙質点状露出

計測値の単位はmm

III. 3号墳

3号墳は6世紀に築造されたもので、2号墳同様にその玄室内床面からは頭蓋、上腕骨片、橈骨片、尺骨片などの人骨片と33本の歯が出土している。人骨片の保存状況はきわめて不良である上に、ある程度のまとまりを持って分布している人骨や歯はあるものの、攪乱を受けていて、原位置を保っているものはほとんどない。

A. 個体数

33本の歯のうち、最も数が多いのは左下顎第1大臼歯の3本である。これら左第1大臼歯とは咬耗度の点で対応しない右第1大臼歯が1本あることで、最少個体数は4となる。

出土した人骨や歯の多くはこの4個体のいずれかのものであろう。その具体的な所属関係については明らかでない。

B. 年齢

3号墳の人骨も、保存がきわめて不良で、情報量がきわめて少なく、有力な手がかりとはならない。ここでも出土数が多く、保存良好な歯を材料にする。

3号墳の場合でも主として第1大臼歯の咬耗度を検討し、そこから得られた年齢区分とその最少個体数を下に記してみた。

- ①幼年期-1個体：咬合面に小咬頭をたくさん持ち、未萌出・未咬耗の左下顎第1大臼歯。
- ②少年期-2個体：エナメル質だけの咬耗された2本の右第1大臼歯や1本の左第1大臼歯。
- ③青年期-1個体：頬側2咬頭に象牙質が点状に露出している左下顎第1大臼歯、それよりわずかに咬耗の進んだ右第2大臼歯。
- その他の歯もこの年齢区分とその個体数の範囲からはずれるものはない。

C. 性別

3号墳でも、性別判定の素材となる保存良好な部位は存在せず、ここでも歯が有力な手がかりである。

犬歯は上顎歯の左右が1本づつと左右不明が1本検出されており、それぞれ近遠心径8.4mm、7.9mm、8.1mmで、男女1個体づつある可能性を示している。本数の多い下顎第1大臼歯を近遠心径でみると、最少個体数とされる4個体すべてが男性である。

すなわち、3号墳では幼年期1個体、少年期2個体、青年期1個体すべてが男性ということであり、近遠心径7.9mmの右上顎犬歯を女性とみれば、もう一個体女性がこれに加わることになる。

D. 齧歯

3号墳から出土した歯の総数は33本である。そのうち齧歯と認定されるものは1本もない。しかし、すべての歯がエナメルキャップしか残存してなく、歯頸部齧歯を検出するのは困難があり、全く齧歯がなかったとはいいがたい。それにしても、2号墳との著しい差があることは確かで、それが何に起因しているかは注目されるところである。

安坪3号墳人歯記録簿

切歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	齧歯	齧歯痕	エナメル形成不全症?	齧歯	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎	右 中	8.8		9.9	弱2	弱	なし	なし	未咬耗、切縁結節あり
	左 中	9.0							

犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	齧歯痕	中央舌面齧痕	舌面齧痕	舌面齧痕	舌面齧痕	遠心溝	副隆起	齧歯	齧歯	エナメル形成不全症?	齧歯	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎	右	8.4	8.4	9.0	なし	弱	弱	あり	あり	なし	弱	弱	なし	なし	なし	尖頭部象牙質点状露出
	左	7.9	8.3	9.9	?	弱	2	隆起状	なし	?	?	弱	なし	?	?	角質
下顎	?	8.1														

上顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	齧歯痕	咬合面中央齧痕	咬合面溝の位置	舌側咬痕の位置	近遠心溝	介在齧痕	頰面溝	頰面齧痕	エナメル形成不全症?	齧歯	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	1	8.0	10.4	7.1	あり	なし	6	近心	あり	なし	弱2	弱	なし	なし	舌側エナメル僅少

〔4〕長根安坪遺跡出土の主に人歯について

右	1	8.1	9.8	8.4.	あり	なし	5	近心	あり	近心	近心1	磨	なし	なし	なし	エナメルのみ
	1	6.3	9.8	7.2	あり	なし	6	近心	あり	近遠心	磨	磨	なし	なし	なし	エナメルのみ僅少
	2	7.6	8.8	6.9.	あり	なし	7	近心	近心	なし	近心	中程度	なし	なし	なし	磨削咬痕象牙点状露出
左	2	7.0	8.3.	5.1.	あり	なし	2	近心	あり	近心			?	?	?	エナメルのみ僅少

下顎小白歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	舌側咬頭の変位	遠心咬頭の変位	歯冠傾斜	傾斜角	近遠心径	咬合面の位置	舌側付加	舌側溝	Blackの分類	エナメル形成不全症?	齧歯	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	2	6.7.	8.4	7.1	近心							H	なし	なし	なし	全面エナメルのみ
	1	7.8	7.8	8.9	側咬頭と同位置	a	なし	あり	なし	2	b	近心	なし	なし	なし	磨削咬痕エナメルのみ
左	1	7.7	8.0	9.3	近心	a	磨	あり	なし	2	a	近心	なし	なし	なし	舌側咬痕エナメルのみ
	2	7.7	9.1	7.0.	近心		なし	なし				U	なし	なし	なし	磨削咬痕エナメルのみ

上顎大白歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	遠心咬頭の変位	カラベリ-線	近遠心径	近遠心径	近遠心径	外形の類型	エナメル形成不全症?	齧歯	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	1	8.9	11.3	6.3	なし	近遠心	あり	あり	C 2	なし	なし	なし	未咬耗
	2	10.5	12.1	5.6.	小咬頭	なし	遠心	遠心	B 2	なし	なし	なし	未咬耗
左	1	11.1	11.8	4.6.	咬頭	なし	遠心	遠心	A 1	なし	なし	なし	エナメルのみ
		10.4.	12.0	6.9	咬頭	なし	?	?	A 1	なし	なし	なし	エナメルのみ
		10.8	7.6.				あり	あり	?	?	?	?	咬痕エナメルのみ
		10.7	11.7	4.3.	咬頭	なし	?	なし	A 1	なし	なし	なし	エナメルのみ
	1	9.4.	11.4.	4.4.	咬頭	なし	なし	あり	?	?	?	?	咬痕エナメル僅少
	2	10.9		5.2.		なし	あり	あり	?	?	?	?	未咬耗
	3	10.0	11.4	5.1	小咬頭	なし	なし	あり	B 2	なし	なし	なし	咬痕エナメル僅少

下顎大白歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	遠心咬頭の変位	第4咬頭	第7咬頭	近遠心径の型	齧歯型	近遠心径	エナメル形成不全症?	齧歯	歯石	咬耗部位・咬耗度	
右	2or3	11.5	11.6	7.8	小咬頭	磨削	なし	小齧歯	X 4	なし	なし	なし	咬痕エナメル僅少	
	2	11.4	10.7	6.0	咬痕	なし	なし	?	.5	?	なし	なし	エナメルのみ	
	2	11.4	11.0	4.3.	咬痕	磨削	あり	小齧歯	Y 5	遠心	なし	?	?	磨削2咬痕象牙点状露出
	2	11.3.	9.4.	5.9.	咬痕	なし	なし	明瞭	Y 5	なし	なし	?	?	磨削2咬痕象牙点状露出
	1	12.2	11.2	5.7	咬痕	なし	なし	欠如	Y 5	遠心	2.4	なし	なし	エナメルのみ
左	1	12.1	11.4	6.1	咬痕	小齧歯	なし	小齧歯	.5	遠心	なし	なし	エナメルのみ	
	1	12.9	11.7	6.3	咬痕	なし	なし	咬痕	遠心	なし	なし	なし	未咬耗・未露出	
	1	12.0	11.1	7.1	咬痕	なし	なし	欠如	Y 5	遠心	なし	なし	磨削2咬痕象牙点状露出	
	1	12.2	11.5	5.7	咬痕	なし	なし	明瞭	Y 5	近心	なし	なし	エナメルのみ	
2or3	11.5	11.0.	4.6.	咬痕	あり	なし	咬痕	あり	なし	なし	なし	なし	エナメルのみ	

計測値の単位は mm

IV. 1号集石の人骨

この遺構からは中世の1個体分の頭蓋骨片多数と歯が15本出土している。頭蓋骨は細片化して情報量は限られている。歯は保存が良好でほとんどが完形し、歯根も保存されている。

ここでも歯を材料にして年齢・性別・疾病について検討する。

A. 年齢

上顎第1大白歯の咬耗状況は、近心2咬頭が帯状につながって象牙質を露出させ、遠心側咬頭が点状に露出している。上顎の第3大白歯はエナメル質のみの咬耗であるが下顎第3大白歯は近心舌側咬頭象牙質が点状に露出している。

この咬耗度から、年齢は壮年期後半から熟年期前半と考えられる。

B. 性別

性差が有意に現れるとされる犬歯は検出されていないため、上顎および下顎第1大白歯の大きさとみると、近遠心径は前者が10.0mm、後者が10.7mm、頬舌径は前者が11.0mm、後者が10.2mmである。この計測値は本個体が女性であることを強く示唆している。

C. 齶歯

1号集石から検出された歯は15本で、そのうち齶歯は8本の53%である。いずれも歯頸部を齶蝕されたものである。

D. 形態的特徴

三谷 光(1939) 邦人歯牙奇形に関する研究. 歯学会, 10:107, 171, 241, 305.

右の上顎第2大白歯には臼旁結節があり歯冠頰側に大きな結節が発達している。上顎第2大白歯に臼旁結節の出現する確率は1.56%(三谷, 1939)で、きわめて稀な例である。

右の下顎第1大白歯には遠心根が2根に分岐し、舌側根の方が大きくなっている。

1号集石人歯記録

切歯

歯種	歯型	近遠心径	唇舌径	歯冠長	舌側歯冠の分岐	舌側結節	舌面溝	舌側歯冠溝	唇面溝	舌側歯冠溝	エナメル形成不全症?	齶歯	歯石	咬耗部位・咬耗度
上顎	左	中	8.1	6.3	11.7	4型	なし	なし	なし	なし	なし	なし	近心歯頸部僅少	切歯象牙質線状露出
	右	側	7.0	5.4			弱	なし	弱	弱	3.5mm	なし	なし	切歯象牙質点状露出
下顎	右	中	5.2	3.3	8.3									切歯象牙質線状露出

上顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	唇側咬痕の位置	咬合面の中央部	咬合面の溝型	舌側咬痕の位置	介在結節	結節溝	結節溝	エナメル形成不全症?	齶歯	歯石	咬耗部位・咬耗度		
右	2	6.9	8.2	8.0	?	なし	3	遠心	あり	あり	遠心平坦	あり	なし	近心歯頸部C1	遠心僅少	唇側咬痕象牙質線状露出
	1	6.8	8.9	7.5	?	なし	8	?	?	?	明瞭	明瞭	なし	舌側歯頸部C2	なし	唇側咬痕象牙質線状露出

下顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	舌側咬痕の位置	咬合面の経過	結節溝	近遠心径	咬合面の溝の形	舌側付加結節	舌側溝	Blackの分類	エナメル形成不全症?	齶歯	歯石	咬耗部位・咬耗度
右	2	7.3	8.8	7.8	?	なし	?	なし			Y型	なし	なし	近心歯	唇側咬痕象牙質線状露出
	1	7.1	7.9	8.3	?	a	2分岐	なし	1	e	あり	?	なし	?	なし

上顎大白歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	遠心歯頸部の退化	カラベリ一結節	近遠心径	近遠心径	外形の傾斜	エナメル形成不全症?	齶歯	歯石	咬耗部位・咬耗度	備考
右	3	8.2	10.8	6.3	結節	なし	なし	C3	なし	歯頸部C1	なし	エナメルのみ	
	2	9.4	10.4		咬痕	なし	?	B2	なし	近心歯頸部C2	なし	白旁結節との間	白旁結節あり露出
	1	10.0	11.0	5.8	咬痕	なし	?	A1	なし	歯頸部両側C1	なし	近心2咬痕帯状に露出、遠心唇側咬痕点状露出	
左	2	9.4	10.8	6.7	咬痕		?	B2	なし	なし	なし	舌側2咬痕象牙質線状に露出	
	3	8.5	11.1	6.4	結節	なし	?	C3	なし	唇側歯頸部C1	なし	エナメルのみ	

下顎大白歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	遠心歯頸部の退化	第4咬痕	第7咬痕	近遠心径の型	傾斜型	近遠心径	エナメル形成不全症?	齶歯	歯石	咬耗部位・咬耗度	備考
右	1	10.6	9.6	6.8	?	?	?	?	?	なし	なし	近心歯頸部C1	なし	近心舌側咬痕象牙質点状露出
	2	10.9	9.6	6.3	咬痕	なし	なし			なし	なし	近心歯頸部C1	なし	近心歯頸部象牙質点状露出
	1	10.7	10.2	5.2	?	なし	なし	?	?	なし	なし	なし	なし	近心2咬痕は面状、遠心2咬痕は帯状に連続、舌側根が大きい

計測値の単位は mm

V. 131号土壌

この土壌からは江戸時代の歯4本が出土している。

左第3大臼歯には1咬頭に点状の象牙質の露出があり、左第2大臼歯にはいくつかの咬頭に象牙質の露出がある。この咬耗度から年齢は青年期後半から壮年期であろう。

左下顎第1大臼歯の近遠心径が11.7mmあり、第2大臼歯のそれが11.4mmあることから、この個体は男性と思われる。

現存している歯でみる限り齶歯はない。

131号土壌人歯記録

上顎小臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	縁歯冠 縁線	咬合面中 央結節	咬合面溝 型	舌側咬頭 の位置	近遠心溝	介在結節	縁歯溝	縁歯隆線	エナメル形 成不全症?	齶 歯	歯 石	咬耗部位・咬耗度
上	2	7.3	9.2	8.1	後も	なし	近心	?	?	密	密	なし	なし	なし	エナメルのみ

上顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	遠心咬頭咬 頭の退化	カラベリー 結節	辺縁結節 の型	辺縁溝	外形の類型	エナメル形 成不全症?	齶 歯	歯 石	咬耗部位・咬耗度	
上	3	7.8	11.3	6.1	前部	なし	あり	?	C3	なし	なし	なし	エナメルのみ

下顎大臼歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	遠心咬頭 の退化	第1咬頭	第2咬頭	辺縁結節 の型	縁溝型	辺縁溝	エナメル形 成不全症?	齶 歯	歯 石	咬耗部位・咬耗度
下	2	11.4	10.9	5.8	咬頭	なし	なし	? .5	?	なし	なし	なし	3咬頭象牙質点状露出
下	3	11.7	10.8	8.3	咬頭	?	なし	?	?	なし	なし	なし	1咬頭象牙質点状露出

計測値の単位は mm

VI. まとめ

本報告では、多野郡吉井町に所在する長根安坪遺跡出土の人歯・人骨を記載した。

- 1) 2号墳からは最も少なく見積もって8個体分の人歯・人骨が出土した。年齢層は幼年期1個体、少年期1個体、青年期4個体、壮年期2個体である。性別は男性が幼年期1個体、少年期1個体、青年期3個体、女性が青年期1個体、壮年期1個体である。出土した86本の歯のうち、26本が齶歯であり、そのほとんどが歯頸部を齶蝕されている。
- 2) 3号墳からは最も少なく見積もって4個体分の人歯・人骨が出土した。年齢層は幼年期1個体、少年期2個体、青年期1個体である。この4個体はすべて男性であるが、1個体女性に加わる可能性もある。出土した33本のうち齶歯と明確には認められるものはない。
- 3) 1号集石には1個体が埋存し、壮年期後半から熟年期前半の女性で、出土した15本の歯のうち8本が齶歯である。右上顎第2大臼歯にはきわめて例の少ない臼傍結節が発達し、右下顎大臼歯の遠心根は2根に分岐している。
- 4) 131号土壌からは青年期後半から壮年期前半の男性の歯が4本出土している。齶歯はない。

〔1〕 縄文時代中期の遺構群について

菊池 実

長根安坪遺跡から検出された縄文時代の遺構は、中期前半勝坂式期と中期後半加曾利E3式期に属している。中期前半では、住居跡9（J-1・2・4・6・7・9・10～12）軒と土坑40基、中期後半加曾利E3式期では住居跡3（J-3・5・8）軒と弧状列石1基（列石下土壇15基を含む）、配石遺構1基、土坑13基等であった。さらに土坑の中には中期に属するものの明確な時期を決定できないものは65基存在している（第7図参照）。

〔1〕 中期前半

中期前半の住居跡とした遺構のなかで、住居の基本的構造である炉と柱穴を伴わない遺構が4軒（J-1・2・4・12）、柱穴があるものの炉が伴わない遺構4軒（J-6・9・10・11）、炉は存在するものの柱穴がない遺構1軒（J-7）となっている。このような検出状況ではあるが、基本的には住居跡とらえている。

遺構配置状況を見ると、東の安坪川に面している遺構3軒（J-2・9・11）は、約34～40mのほぼ等間隔で配置されている。平坦部に占地している遺構4軒（J-1・4・6・12）は、それぞれ10～18mの間隔で構築されている。西の段丘崖に望む遺構2軒（J-7・10）は、中央部の住居群から50m以上の距離を置いて構築されている。そしてこれらの遺構は、ほぼ帯状に約170mの範囲にわたり展開している。この住居跡群分布の北西を中心にして同時期の土坑群が配置されている。土坑40基の概要は次のとおりである。

土坑一覧表

No.	平面形	断面形	上面規模(cm)	覆土	遺物	備考
24	楕円	ほぼ平坦	246×208×36	自然堆積	土器片	
27	楕円	ほぼ平坦	126×108×31	自然堆積	土器片	
49	楕円	平坦	125×100×41		土器片・礫	抱石葬?
72	ほぼ円	ほぼ平坦	113×96×26	炭化物	土器片・多孔石	基礎?
73	楕円	ほぼ平坦	173×63×56	自然堆積	土器片	72号土坑に近接
75	円	平坦	110×105×26	炭化物	土器片・凹石	76号土坑に近接
76	楕円	平坦	130×122×31	炭化物	土器片・凹石	75号土坑に近接
78	楕円	ほぼ平坦	104×90×30	3層に分層	銚鉢	76号土坑に近接
96	円形	ほぼ平坦	100×99×21	自然堆積	土器片	B区検出
97	ほぼ円	やや凹凸	114×108×21	自然堆積	土器片	B区検出
106	楕円	凹凸	135×110×27	4層に分層	鏝鉢	
118	楕円	やや凹凸	208×136×13	炭化物	土器片	D区西端
138	円形	平坦	135×109×30	4層に分層	凹石	

157	円形	平坦	106×89×65	自然堆積	土器片	貯蔵穴?
170	ほぼ円	やや凹凸	112×105×30	4層に分層	配石	配石墓
171	ほぼ円	やや凹凸	123×116×18	炭化物	土器片	170号土坑に近接
179	円形	ほぼ平坦	121×112×29	5層に分層	土器片・多孔石	墓壇
184	ほぼ円	凹凸	119×105×14		配石	配石墓
187	楕円	凹凸	78×61×25	2層に分層	土器片	小規模
188	楕円	ほぼ平坦	107×93×25	炭化物	土器片・多孔石	
193	ほぼ円	平坦	110×94×20	炭化物	完形土器・多孔石	墓壇
199	楕円	やや凹凸	117×104×47	6層に分層	土器片	
202	楕円	平坦	110×99×30	自然堆積	土器片	
205	方形	ほぼ平坦	110×107×31	自然堆積	土器片	
207	円形	ほぼ平坦	110×96×48	4層に分層	土器片・礫	墓壇
208	楕円	ほぼ平坦	150×115×19	自然堆積	土器片	
211	楕円	ほぼ平坦	148×129×35	4層に分層	土器・石皿	墓壇
212	楕円	ほぼ平坦	134×120×25	3層に分層	土器片	
215	円形	平坦	100×96×44	3層に分層	土器片	
217	楕円	ほぼ平坦	121×102×31		礫	墓壇
218	ほぼ円	やや凹凸	97×88×28	3層に分層	土器片	
219	楕円	やや凹凸	103×86×10		土器片	
220	楕円	ほぼ平坦	156×118×33		浅鉢・多孔石	墓壇
221	楕円	ほぼ平坦	105×90×10		深鉢・多孔石	墓壇
232	方形	ほぼ平坦	94×85×20	自然堆積	土器片	
233	楕円	凹凸	110×92×20	2層に分層	深鉢・礫	墓壇
234	円形	平坦	106×94×28	3層に分層	土器片	
235	楕円	ほぼ平坦	119×108×32	2層に分層	浅鉢・礫	墓壇
63	楕円	ほぼ平坦	115×100×40	4層に分層	深鉢・浅鉢	墓壇
194	楕円	ほぼ平坦	115×100×40		深鉢	墓壇

40基の土坑の中で、覆土中に土器片や多孔石等の石器、礫を伴うもの15基は墓壇である可能性が非常に高い。すなわち49・72・170・179・184・193・207・211・217・220・221・233・235・63・194号の各土壇である。49・72号土坑の礫・多孔石の出土状態は、抱石葬を想定できる。179号土坑の大形破片は遺体を覆っていたものと考えられ、さらに押さえとして多孔石が使用されている。多孔石の用途を考える上で重要な出土状態である。233号土坑の礫と土器も遺体を覆っていたと考えられ、これらの事例も抱石葬と把握して良い。193号土坑の底面から出土した完形土器は副葬品として転用されたものであろう。また多孔石の出土も興味深い。多孔石の出土は中期後半を境に急激な増加を見るが、その前段階に墓壇と密接な関係にあることは注意を要する。170・207・217号土坑の上部礫は、ともに墓壇の役割をはたしている。211号土坑の深鉢形土器と石皿の出土、

220号土坑の浅鉢形土器と多孔石の出土は、193号土坑と共通している。221号土坑の深鉢は、その出土状態から判断して遺体を覆っていたものであろう。235号土坑の浅鉢は襖被葬を想定できようか。

上記の土坑は、その在り方から明らかに墓塚と判断される。その分布は中央部に占地した住居跡群の北西、西端住居跡群の北に楕円状に構築されている。その規模は東西方向約30m、南北方向約60mの環状構造である。しかし、その在り方は明瞭ではないが、数基を一単位とする群による環状構造を読み取ることができる。もちろん、この範囲以外にも縄文時代中期の土坑は数多く分布している。その多くは、分布状態から判断して中期前半に属するものが大半と考えられるが、これらすべては墓塚とは考えられない。これらの分布域は、東西方向約80m、南北方向約70mの規模である。

また、J-7号住居跡は施屋墓として利用されている。覆土中から浅鉢形土器が逆位状態で出土し、内部から耳栓2個が出土した。襖被葬と判断できる。

(2) 中期後半

中期後半加曾利E3式の住居跡は3軒検出されているが、重複関係があり同時存在ではない。J-3号住居跡→J-5号住居跡→J-8号住居跡の順に構築されている。該期の遺構はこの他に1号配石(弧状列石と15基の土壇)、2号配石、そして土坑13基である。

1号配石と命名した弧状列石は、推定径約16mの小規模なものである。石の分布には粗密があり、列石下から6基の土壇が検出されている。また、列石内部から8基、列石外から1基の検出があり、総計15基の土壇が検出されているが、これらは明らかに墓塚と考えられる。土壇上面に確実に配石されていたものは6基を数えた。墓標の可能性が考えられるが、使用石器は多孔石・石皿を主体とするものであった。また1号土壇の配石の在り方から、土壇には盛土があった可能性が指摘できる。さらに6・10号土壇の覆土中の土器片や石の出土から、遺体上に置かれていたものと考えられた。こうした事実から当遺跡検出の列石は、墓塚上部の配石が列状に配置されたものであることがわかる。また、1・2・5・6号の各土壇については残存脂肪酸分析を実施している。この分析の結果は、1・2・5号土壇に高等動物の遺体の存在を示唆する脂肪酸が検出されている。6号土壇では、全遺体を埋葬した場合に検出される高級脂肪酸が土壇上面にしか検出されなかった。このことから土壇から出土した土器に骨だけを埋納した再葬墓の可能性を推測している。しかし、土器片の出土は遺体の上を覆っていたものと考えられ検討を要する。

この他に、列石の西から住居跡周辺にかけて中期後半の土坑13基が検出された。その概要は次のとおりである。

土坑一覧表

No.	平面形	断面形	上面規模(cm)	覆土	遺物	備考
18	ほぼ円	やや凹凸	158×148×44	3層に分層	土器片	
19	ほぼ円	やや凹凸	130×113×52	4層に分層	土器片	
21	ほぼ円	ほぼ平坦	130×122×17	炭化物	土器片	
30	円形	平坦	115×106×17	2層に分層	土器片	
31	円形	ほぼ平坦	87×83×26	炭化物	土器片	
39	楕円	ほぼ平坦	180×110×37	3層に分層	土器片	
43	楕円	ほぼ平坦	177×124×37	3層に分層	土器片	
51	方形	平坦	120×110×23		多量の土器片	列石の西側
52	方形	平坦	81×76×51		土器片	列石の西側
53	楕円	ほぼ平坦	130×95×30		多孔石	墓壇
79	長方形	ほぼ平坦	134×70×27		多孔石	配石墓
177	楕円	やや凹凸	120×77×25		配石	配石墓
222	円形	ほぼ平坦	89×87×26		配石	配石墓

上記13基の中で、6基(51・52・79・177・222号)の土坑は、墓壇と考えられる。51・52・53号土坑は、列石下土壇と共通している。53号土坑の多孔石は墓標として使用されている。79・177・222号土坑は、いわゆる配石墓である。覆土から土器片の出土はほとんどなかったが、その構築方法は中期前半の土坑では、検出されていないため中期後半に属するものと判断した。しかし、222号土坑は中期前半の土坑群の中に配置されており、疑問もないわけではない。

18・19・21号土坑は住居跡の北西方向約40mの所にまとまっている。貯蔵穴の可能性も考えられる。31・39・43号土坑の3基は、列石と住居跡のほぼ中間に位置している。土坑形態から墓壇の可能性が指摘できる。

〔2〕 弥生時代中期の土坑群について

菊池 実

(1) 土坑の分布

長根安坪遺跡からは、弥生時代中期前半に属する土坑17基が検出された。これら17基の土坑は、139号土坑を除けばいずれもD区から検出されている。しかしこれは単なるグリッドでの区切りであるから、実際の分布状況(第76図)を観察すると、遺跡の西端、標高179.70~179.00mの東から西へと緩やかに下がる斜面上に分布している。しかもその中心は、南北方向約40m、東西方向約30mの楕円形の分布を呈している。

そして17基の土坑は、14号と127号、140号と141号、20号と74号、125号と126号土坑のように近接して構築されている土坑群と、それ以外の単独で存在する土坑とに分かれる。しかし単独で存在している土坑も10~20mの間隔で構築されている。こうした分布状態は、当遺跡だけではなく神保下條遺跡¹⁾・神保富士塚遺跡²⁾・白倉下原遺跡³⁾でも看取されている。

神保下條遺跡からは弥生中期土坑11基が検出されている。その分布は1個所に密集することなく環状を呈し、10m前後の間隔をおいていること、そして2基の土坑が隣接して構築されているものも3例認められた。神保富士塚遺跡からも30基の土坑が径約30mのほぼ環状に分布しており、白倉下原遺跡では36基の内、B群土坑は、2ないし3基を1単位として、単位相互の間隔をほぼ40m程としている。各遺跡間に共通している土坑分布の在り方は大変に興味深い。

(2) 土坑の形態

17基の土坑の形態は次のとおりである。平面形は円形もしくは楕円形を呈し径100~160cm、断面形はフラスコ状・袋状を呈するものが12基に及び圧倒的に多かった。規模が大きいののはフラスコ状を呈するものである。とりわけ20号・74号の2基は規模が大きい。このフラスコ状・袋状の形態を「当初は垂直に近い壁面の侵食が除々に進み、オーバーハングした結果と推測される⁴⁾」との指摘は、覆土の観察結果から当てはまらない。土坑形態には明らかに二種、断面がフラスコ状・袋状を呈する一群と垂直に掘り込まれた一群があった。深さは、一番浅い125号土坑で23cm、深いのは216号土坑の90cmとなっている。比較的浅い土坑が傾斜部分に位置していることから判断すれば、本来はもっと深いものであつたろう。この場合、数10~100cmほどの深さを想定できる。

参考文献

- 1) 右島和夫編『神保下條遺跡』1992年 群馬県県立文化財調査事業団
- 2) 小野和之編『神保富士塚遺跡』1993年 群馬県県立文化財調査事業団
- 3) 右島和夫編『白倉下原・天引向原遺跡』1994年 群馬県県立文化財調査事業団

- 4) 右島和夫編『白倉下原・天引向原遺跡』1994年 群馬県県立文化財調査事業団

弥生土坑一覧表

No.	平面形	断面形	上面規模(cm)	覆土	遺物	備考
14	楕円	袋状	105×(70)×50	焼土・炭化物	麩・石鉄	127号土坑近接

15	楕円	皿状	180×131×33	黒色土	土器片	単独
20	楕円	フラスコ状	154×111×61	炭化物	甕・壺・磨石	74号と接合関係
74	楕円	フラスコ状	160×135×35	炭化物	甕・石鉄・磨石	20号と接合関係
22	楕円	皿状	125×79×40	黒色土	土器片	単独
62	楕円	平底	105×96×40	暗褐色土	土器片	単独
84	楕円	フラスコ状	140×127×50	炭化物	壺・砥石	単独
103	楕円	平底	107×106×56	炭化物	壺	単独
125	円形	袋状	112×109×23	炭化物	土器片	126号土坑近接
126	円形	袋状	139×137×34	炭化物	土器片・石鉄	125号土坑近接
127	楕円	平底	120×115×43	黄褐色	壺・甕・磨石	14号土坑近接
139	円形	袋状	99×98×55	暗褐色		単独
140	円形	袋状	98×92×61	炭化物・焼土	甕ほぼ完形	141号土坑近接
141	円形	袋状	123×116×50	炭化物・焼土	甕ほぼ完形	140号土坑近接
198	円形	フラスコ状	137×133×53	炭化物	土器片・石鉄	単独
216	円形	袋状	113×99×90	黒色土	小型土器	単独
256	円形	袋状	108×101×30	炭化物	土器片	単独

〔3〕土坑の覆土

土坑覆土の最大の特徴は、炭化物・焼土を混入したものが圧倒的に多いことである。長根安坪遺跡の17基の土坑中、11基の土坑の覆土中に含まれていた。炭化物と焼土が底面に堆積していた土坑は14号土坑だけであるが、他の土坑は覆土中層から上層にかけて認められた。断面形が平底・皿状を呈するものには、炭化物の混入率は低い。この特徴は、他の遺跡の土坑にも普遍的に認められている。たとえば、神保富士塚遺跡の土坑では、遺物の多く包含していた土坑についてはそのほとんどが、量的には少ないながらも炭化物を混入しており、その含まれ方は上層から中位の層において比較的多く見られている。172号土坑では少量ながら焼土が含まれていた。また、白倉B区土坑でも炭化物を含む土坑が9基検出されている。神保下條遺跡検出の土坑11基は、断面形が鍋底・平底形を呈するものが9基を数えたが、覆土中から炭化物や焼土の検出は皆無であった。

中期土坑群の用途を考える場合に、この炭化物や焼土の混入は重要な問題であろう。また、ロームの二次堆積も14号土坑と20号土坑で認められた。これは人為的な埋め戻しと理解できる。遺存状態が良かったために確認されたものであり、他の土坑もロームによる埋め戻しを想定できる可能性がある。壺型土器が出土した84号土坑覆土の2～4層も人為的な埋め戻しを想定できる。この場合は壺を土坑内に埋置したものと考えられる。

〔4〕遺物出土状態

各土坑の覆土からは弥生中期土器片が出土している。14号土坑は甕の胴下半

部と石鏃、15号土坑は土器片10点、20号土坑はほぼ完形にちかい甕と土器片120点・磨石、74号土坑は土器片48点と石鏃・磨石・砥石、22号土坑は土器片2点、62号土坑は土器片10点、84号土坑は壺と土器片57点・砥石、103号土坑は壺と土器片65点、125号土坑は土器片3点、126号土坑は土器片27点と石鏃・磨石、127号土坑は壺・甕と土器片13点・磨石、140号土坑は甕と土器片76点・凹石、141号土坑は甕と土器片135点・磨石、198号土坑は甕の胴下半部と土器片36点・石鏃・砥石、216号土坑は小型土器と土器片74点、256号土坑は土器片36点である。この他に縄文土器片と弥生後期の土器片が極少量混入しているだけであった。

ほぼ完形に近い土器や大型破片の出土は、土坑の底面から約10cm浮いたところに集中して出土している。20号土坑の出土状態を観察すると、底面に約10cmの厚さの暗褐色土が堆積した後に、土器の投棄(?)が認められる。その後、炭化物を混入した層と含まない層が交互に堆積した後に、ロームによる埋戻しが行われ、その後も弥生中期土器片の流入が認められた。140号土坑や141号土坑でも、底面から約10cmほどのところに完形土器を含めた土器片がほぼ水平に分布している。これらの土器は、土坑の中心部に位置することなく壁際から出土しており、意図的な配置を思わせる。141号土坑出土の筒形土器(第184図94)の出土状態は、神保富土塚遺跡の30号土坑出土筒形土器の出土状態と類似している。単なる偶然の一致とは考えられない。

なお、20号土坑出土土器と74号土坑出土土器には接合関係が認められた。この事実は、これらの土坑がほぼ同時期に構築され、使用されていたことを裏付けている。

石器では、石鏃が14号土坑・74号土坑・126号土坑・198号土坑から計5点出土し、磨石・砥石が10点出土している。

(5) 出土土器

壺型土器の出土は非常に少ない。20号土坑出土の壺型土器(第180図8)は、口縁部のみで、口唇部に縄文LRを施文し、刺突が施されている。84号土坑出土の壺型土器(第182図42)は、口縁部から頸部を欠損している。胴部上半から頸部にかけて横位の沈線による区画、波状文、連続三角文が配されている。103号土坑出土壺型土器(第182図58)・127号土坑出土の壺型土器(第183図69)はいずれも大型破片であった。前者は縄文原体LRと横位の沈線内に連続三角文、刺突が施されている。後者は縄文施文はないが横位の沈線と刺突が施されている。

甕形土器は縄文地に平行線、波状文などの沈線を配するものと、櫛状工具による矢羽状の条痕文、縦位の条痕文が施されるものが認められる。

神保富土塚遺跡で出土している磨り消し縄文を持つ一群の甕形土器や鉢形土器は、当遺跡からは出土していない。

（8）土坑の用途

17基の土坑は、その分布や規模・形態、出土土器等から弥生時代中期前半のほぼ同時期に構築され、使用され、そして廃絶されていったものである。そして17基の土坑すべては、同一の目的のために構築されたものであると考えられる。

従来の見解では、その用途を貯蔵穴と考えている。いわゆる再葬墓としての機能は想定し難いというものである。長根安坪遺跡の土坑を検査してみても、覆土中から骨片や歯の出土はなく積極的にこれらを墓塚とするには躊躇する。しかし遺物出土状態や覆土中の炭化物・焼土の存在は、これらを単に貯蔵穴のみの用途と考えることもまた疑問とせざるを得ない。

構築当初は貯蔵の目的をもったものでも、土坑が埋没していく過程のある段階において、貯蔵目的だけではなく弥生中期人の土坑を介在とした何等かの行為を認めざるを得ない。84号土坑の壺型土器の出土は、まさにその行為を具現化したものであり、ほぼ完形に近い土器の出土や大型破片の出土も然りである。フラスコ状・袋状土坑と平底・鍋底状を呈する土坑は、明らかに相違を認めても良いであろう。他遺跡の事例を含め再度検討する必要がある。

ところで、この種の遺構の検出にもかかわらず、周辺から同時期の竪穴住居跡の発見はない。そうした事実もまた、これらの用途を貯蔵穴だけに限定することの危険性をはらんでいる。

〔3〕 弥生時代後期の住居跡について

菊池 実

後期埴式期の住居跡34軒が検出された。出土土器から判断していずれも後期の第2段階に位置づけられるものと考えられる。詳細な分析は紙幅の関係から後に譲り、ここでは簡単にまとめた。

住居の平面形態・規模

隅丸長方形を基本としている。長方形とした住居も、基本的には隅丸長方形の住居の中に包括してもよい。しかし、Y-2・9号住居跡の方形プランと、Y-3号住居跡の楕円形プランは当集落の中ではやや特異な形態である。

床面積で見ると、10㎡以下の住居が2軒（Y-2・9号住）、10㎡以上～20㎡未満の住居は、推定面積の住居を含めて7軒（Y-3・12・13・17・20・37・38号住）、20㎡以上～30㎡未満の住居は、推定面積を含めて10軒（Y-1・5・7・10・11・15・19・21・22・32号住）、30㎡以上～40㎡未満の住居は、推定面積を含めて5軒（Y-8・14・28・30・34号住）、40㎡以上～50㎡未満の住居は、推定面積を含めて6軒（Y-23・24・25・26・31・35号住）、50㎡以上～60㎡未満の住居は1軒（Y-18号住）、60㎡以上の住居は3軒（Y-6・27・33号住）であった。最小規模はY-2号住居跡の5.3㎡、最大規模はY-27号住居跡の62.5㎡である。

床面積が10㎡以下の2軒は、住居形態が方形を呈し、また炉や貯蔵施設等の生活施設が不明である。住居以外の用途の建物であった可能性も考えられる。

重複関係と近接住居跡

34軒検出された住居跡は、すべて同時存在の住居ではない。住居の重複関係が認められたものは、Y-7号住居跡とY-19号住居跡、Y-8号住居跡とY-20号住居跡である。また、極端に近接して構築されている住居も存在している。

たとえば、Y-13号住居跡とY-17号住居跡の距離1.5m、Y-26号住居跡とY-33号住居跡の距離2m、Y-25・37・32号住居跡の3軒、Y-27号住居跡とY-35号住居跡の距離1.5m、Y-11号住居跡とY-28号住居跡の距離1.5mである。いずれも2m以内の間隔で存在している。さらに4m以内の間隔で構築されている住居となると、Y-1号住居跡とY-3号住居跡の3m、Y-5号住居跡とY-10号住居跡の3.5m、Y-17号住居跡とY-33号住居跡の3.7m、Y-8号住居跡とY-14号住居跡の3.5mである。このように9箇所ほどで、住居の近接構築が認められたが、火災延焼の危険分散や家屋の軒先などを考えると同時存在に疑問が生じる。内匠日影周地遺跡A区検出の埴式期住居について、同時存在を疑問とする住居間距離を具体的に明示できないとしながらも、住居間距離を最長4.9mまで合めている。

主軸方向

34軒の住居は、その主軸方向（住居の長軸方向）から検討すると、いくつかのグループに分かれる。まず主軸が北から東に23°～26°振れる一群（Y-2・32号住居跡）、同じく10°～16°振れる一群（Y-1・3・6・33・34号住居跡）、真北方向の中

参考文献

- 飯島克己・若狭 徹「埴式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第9号1988年
木村 収編『内匠日影周地遺跡・内匠日影周地遺跡』1992年 朝野馬場埋蔵文化財調査事業団
右島和夫編『白倉下原・天引向原遺跡』1994年 朝野馬場埋蔵文化財調査事業団
坂井 隆編『中高瀬観音山遺跡』1995年 朝野馬場埋蔵文化財調査事業団